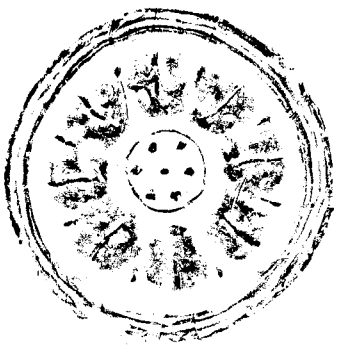
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第365集

那　珂　10

NA　KA

－那珂遺跡群第32次、34次調査報告－



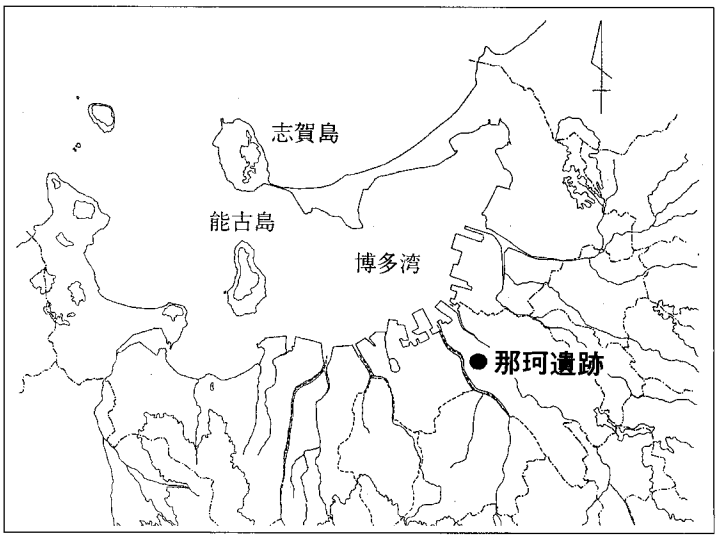
1994

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第365集

NA KA
那　珂　10

－那珂遺跡群第32次、34次調査報告－



9115　NAK－32
9144　NAK－34

1994

福岡市教育委員会

第34次調査地点全景（南から）

序

「活力あるアジアの拠点都市」を目指して都市づくりを進める福岡市は古くから我が国と大陸との主要な窓口でした。その中でも福岡平野は、弥生時代には「漢委奴国王」の金印に記された「奴国」が存在し、その後も対外交渉の拠点として重要な位置にあり、数々の貴重な遺跡が残されています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化により、それらが次第に失われつつあります。福岡市教育委員会ではそれらの開発によって失われていく遺跡については、事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群は「奴国」の重要な拠点集落でもあり、これまで45次をこえる調査が実施され、数多くの貴重な遺構、遺物が発見されました。本書は竹下駅前線建設に先立って行った第32次、34次調査の報告であります。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護への理解と認識の助けになり、また、研究資料としてご活用頂ければ幸いです。

最後に発掘調査から資料整理までご協力を頂いた関係各位には厚くお礼申し上げます。

平成６年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1. 本書は都市計画道路竹下駅前線建設に先立ち、福岡市教育委員会が1991年度に調査を実施した、那珂遺跡群第32次、第34次調査の報告書である。
2. 本書に使用した遺構の実測は菅波正人、榎本義嗣、屋山洋、林田憲三、辛島眞治が、遺物の実測図は林田、英、菅波が行った。製図は林田憲三、英豪之、中暢子、占野典子が行った。
3. 本書に使用した遺構、遺物の写真は菅波、屋山が撮影した。空中写真は（有）空中写真企画が行った。
4. 本報告書の作成にあたっては屋山洋、英豪之、佐々木涼子、藤信子の協力を得た。
5. 遺構番号は検出順に４桁の番号をつけ、報告書では番号の前に遺構の性格を表す略号を付けた。遺構略号は竪穴住居跡→ＳＣ、溝→ＳＤ、井戸→ＳＥ、土坑→ＳＫとした。
6. 本書に使用した方位は磁北である。付図の座標はこれまでの竹下駅前線の調査地点と整合性を持たせるため、工事用に設定された座標を用いた。
7. 本書の執筆、編集は林田の協力を得て、菅波が行った。また、今回の調査に関連して、第５章に那珂八幡古墳の周濠の土壌分析（パリノサーヴェー株式会社）を、第６章に那珂遺跡群第35次調査報告（宮井善朗）を掲載した。
8. 本報告に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

Tab. 1　調査地点一覧表

調査地点	第32次調査地点	第34次調査地点
調査番号	9115	9144
地図番号	037、038　Ａ－１	
調査地地籍	博多区那珂１丁目822外	博多区那珂１丁目824外
開発面積	1500㎡	1230㎡
対象面積	1500㎡	1230㎡
調査面積	1300㎡	1100㎡
調査期間	1991. 07. 05～09. 30	1992. 01. 20～03. 31

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　1. 調査に至る経緯 …… 1
　2. 調査の組織 …… 1
第２章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
　1. 遺跡の立地 …… 2
　2. 周辺の遺跡 …… 2
　3. これまでの調査成果 …… 4
　4. 竹下駅前線道路に係わる調査について …… 7
第３章　第32次調査の記録 …… 9
　1. 調査の概要 …… 9
　2. 竪穴住居跡（SC） …… 11
　3. 井戸（SE） …… 19
　4. 溝（SD） …… 28
　5. 土坑（SK） …… 42
第４章　第34次調査の記録 …… 47
　1. 調査の概要 …… 47
　2. 井戸（SE） …… 49
　3. 溝（SD） …… 83
　4. 周濠 …… 85
第５章　那珂遺跡34次調査（那珂八幡古墳）自然科学分析報告 …… 101
第６章　第35次調査の記録 …… 116
第７章　まとめ …… 122

挿　図　目　次

Fig. 1　那珂遺跡群と周辺の遺跡（1/50000） …… 3
Fig. 2　那珂遺跡群調査地点位置図（1/8000） …… 5
Fig. 3　竹下駅前線調査地点位置図（1/2500） …… 7
Fig. 4　第32次、第34次調査地点遺構配置図（1/800） …… 8
Fig. 5　第32次調査地点遺構配置図（1/300） …… 10
Fig. 6　SC－1006、1008、1019、1013遺構実測図（1/60） …… 12
Fig. 7　SC－1006、1008、1019、1013出土遺物実測図（1/2、1/4） …… 13
Fig. 8　SC－3014遺構実測図（1/60） …… 15
Fig. 9　SC－3014出土遺物実測図（1）（1/4） …… 16
Fig. 10　SC－3014出土遺物実測図（2）（1/4） …… 17
Fig. 11　SC－3014出土遺物実測図（3）（1/4） …… 18
Fig. 12　SE－1002遺構実測図（1/40） …… 20

Fig. 13　SE－1003遺構実測図（1/40）…… 20
Fig. 14　SE－1004遺構実測図（1/40）…… 20
Fig. 15　SE－1002出土遺物実測図（1/4）…… 21
Fig. 16　SE－1003出土遺物実測図（1/4）…… 22
Fig. 17　SE－1004出土遺物実測図（1/4）…… 23
Fig. 18　SE－1011遺構実測図（1/40）…… 24
Fig. 19　SE－1038遺構実測図（1/40）…… 24
Fig. 20　SE－1011出土遺物実測図（1/4）…… 25
Fig. 21　SE－1038出土遺物実測図（1）（1/4）…… 26
Fig. 22　SE－1038出土遺物実測図（2）（1/4）…… 27
Fig. 23　溝（SD）遺構配置図（1/400）…… 28
Fig. 24　SD－1001、2002、3001土層断面図（1/40）…… 29
Fig. 25　SD－2002出土遺物実測図（1）（1/4）…… 31
Fig. 26　SD－2002出土遺物実測図（2）（1/4）…… 32
Fig. 27　SD－2002出土遺物実測図（3）（1/4）…… 33
Fig. 28　SD－2002出土遺物実測図（4）（1/4）…… 34
Fig. 29　SD－2002出土遺物実測図（5）（1/4）…… 35
Fig. 30　SD－2002出土遺物実測図（6）（1/4）…… 36
Fig. 31　SD－2002出土遺物実測図（7）（1/4）…… 37
Fig. 32　溝南北断面図（1/100）…… 39
Fig. 33　溝出土遺物実測図（1/4）…… 40
Fig. 34　SD－1001出土遺物実測図（1/4）…… 41
Fig. 35　SK－1005、1018、2003、3016実測図（1/40）…… 43
Fig. 36　土坑出土遺物実測図（1）（1/4）…… 44
Fig. 37　土坑出土遺物実測図（2）（1/4）…… 45
Fig. 38　第34次調査地点遺構配置図（1/300）…… 48
Fig. 39　SE－0003遺構実測図（1/40）…… 49
Fig. 40　SE－0003出土遺物実測図（1/4）…… 50
Fig. 41　SE－0004遺構実測図（1/40）…… 51
Fig. 42　SE－0004出土遺物実測図（1/4）…… 52
Fig. 43　SE－0005遺構実測図（1/40）…… 53
Fig. 44　SE－0005出土遺物実測図（1）（1/4）…… 54
Fig. 45　SE－0005出土遺物実測図（2）（1/4）…… 56
Fig. 46　SE－0005出土遺物実測図（3）（1/4）…… 57
Fig. 47　SE－0005出土遺物実測図（4）（1/4）…… 58
Fig. 48　SE－0005出土遺物実測図（5）（1/4）…… 59
Fig. 49　SE－0005出土遺物実測図（6）（1/4）…… 60
Fig. 50　SE－0005出土遺物実測図（7）（1/4）…… 61
Fig. 51　SE－0006遺構実測図（1/40）…… 62
Fig. 52　SE－0006出土遺物実測図（1）（1/4）…… 63

Fig. 53　SE－0006出土遺物実測図（2）（1/4）…… 64
Fig. 54　SE－0006出土遺物実測図（3）（1/4）…… 65
Fig. 55　SE－0006出土遺物実測図（4）（1/4）…… 67
Fig. 56　SE－0006出土遺物実測図（5）（1/4）…… 68
Fig. 57　SE－0007遺構実測図（1/40）…… 69
Fig. 58　SE－0007出土遺物実測図（1/4）…… 70
Fig. 59　SE－0008遺構実測図（1/40）…… 71
Fig. 60　SE－0008出土遺物実測図（1/4）…… 72
Fig. 61　SE－0012遺構実測図（1/40）…… 73
Fig. 62　SE－0012出土遺物実測図（1/4）…… 74
Fig. 63　SE－0013遺構実測図（1/40）…… 75
Fig. 64　SE－0013出土遺物実測図（1/4）…… 76
Fig. 65　SE－0014遺構実測図（1/40）…… 77
Fig. 66　SE－0014出土遺物実測図（1）（1/4）…… 79
Fig. 67　SE－0014出土遺物実測図（2）（1/4）…… 80
Fig. 68　SE－0014出土遺物実測図（3）（1/4）…… 81
Fig. 69　SE－0015遺構実測図（1/40）…… 82
Fig. 70　SE－0015出土遺物実測図（1/4）…… 82
Fig. 71　溝南北断面図（1/200）…… 83
Fig. 72　溝出土遺物実測図（1/4）…… 84
Fig. 73　那珂八幡古墳周濠測量図（1/600）…… 85
Fig. 74　周濠土層図（1/80）…… 86
Fig. 75　周濠出土遺物実測図（1）（1/4）…… 88
Fig. 76　周濠出土遺物実測図（2）（1/4）…… 89
Fig. 77　周濠出土遺物実測図（3）（1/4）…… 90
Fig. 78　周濠出土遺物実測図（4）（1/4）…… 92
Fig. 79　周濠出土遺物実測図（5）（1/4、1/2）…… 93
Fig. 80　周濠出土遺物実測図（6）（1/4、1/2）…… 94
Fig. 81　周濠出土遺物実測図（7）（1/4）…… 96
Fig. 82　周濠出土遺物実測図（8）（1/4）…… 97
Fig. 83　周濠出土遺物実測図（9）（1/4）…… 99
Fig. 84　周濠出土遺物実測図（10）（1/4）…… 100

図　版　目　次

扉　　第34次調査地点全景（南から）
ＰＬ.1　1. 第13次調査地点（西から）　2. 第19次調査地点（東から）
ＰＬ.2　1. 第32次調査地点全景（東から）　2. 第32次調査地点Ⅰ区全景（北から）
ＰＬ.3　1. 第32次調査地点Ⅱ、Ⅲ区全景（西から）

2. 第32次調査地点Ⅱ区全景（西から）
ＰＬ.4　1. Ⅰ区 SC－1013完掘（北から）　2. Ⅲ区 SC－3014完掘（西から）
ＰＬ.5　1. Ⅲ区 SC－3014遺物出土状況（西から）
2. Ⅲ区 SC－3014遺物出土状況（南から）
ＰＬ.6　1. Ⅰ区 SD－1001完掘（北から）　2. Ⅰ区 SD－1001完掘（西から）
3. Ⅰ区 SD－1001張り出し部（北から）　4. Ⅰ区 SD－1001土層堆積（西から）
ＰＬ.7　1. Ⅲ区 SD－3001完掘（西から）　2. Ⅲ区 SD－3001土層堆積（西から）
3. Ⅱ、Ⅲ区 SD－2002完掘（南から）　4. Ⅲ区 SD－2002土層堆積（南から）
ＰＬ.8　1. Ⅰ区 SE－1002完掘（西から）　2. Ⅰ区 SE－1004遺物出土状況（南から）
3. Ⅰ区 SE－1004遺物出土状況（南から）
4. Ⅰ区 SE－1003上層遺物出土状況（南から）
ＰＬ.9　1. Ⅰ区 SE－1003下層遺物出土状況（南から）
2. Ⅰ区 SE－1011完掘（東から）
3. Ⅰ区 SK－1005遺物出土状況（西から）
4. Ⅰ区 SE－1018遺物出土状況（東から）
ＰＬ.10　1. 那珂八幡古墳全景（南から）　2. 第34次調査地点全景（南から）
ＰＬ.11　1. 那珂八幡古墳全景（西から）　2. 第34次調査地点全景（西から）
ＰＬ.12　1. SE－0003上層遺物出土状況（西から）
2. SE－0003下層遺物出土状況（東から）
3. SE－0004完掘（南から）　4. SE－0004遺物出土状況（北から）
ＰＬ.13　1. SE－0005上層遺物出土状況（西から）
2. SE－0005中層遺物出土状況（東から）
3. SE－0005下層遺物出土状況（南から）
4. SE－0006上層遺物出土状況（北から）
ＰＬ.14　1. SE－0006下層遺物出土状況（北から）
2. SE－0007完掘（南から）　3. SE－0008遺物出土状況（西から）
4. SE－0012完掘（北から）
ＰＬ.15　1. SE－0013完掘（南から）　2. SE－0014上層遺物出土状況（南から）
3. SE－0014下層遺物出土状況（南から）
4. SE－0015完掘（北から）
ＰＬ.16　1. 那珂八幡古墳周濠完掘（西から）　2. Ⅰ区周濠土層（東から）
ＰＬ.17　1. Ⅰ区周濠土層（東から）　2. Ⅰ区周濠土層（東から）
ＰＬ.18　32次調査出土遺物（1）　ＰＬ.19　32次調査出土遺物（2）
ＰＬ.20　32次調査出土遺物（3）　ＰＬ.21　34次調査出土遺物（1）
ＰＬ.22　34次調査出土遺物（2）　ＰＬ.23　34次調査出土遺物（3）
ＰＬ.24　34次調査出土遺物（4）　ＰＬ.25　34次調査出土遺物（5）
ＰＬ.26　34次調査出土遺物（6）　ＰＬ.27　34次調査出土遺物（7）
ＰＬ.28　34次調査出土遺物（8）　ＰＬ.29　分析
ＰＬ.30　分析　ＰＬ.31　分析
ＰＬ.32　1. 35次調査地点全景（西から）　2. 土壙11完掘（南から）

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

那珂遺跡群は昭和46年、森貞次郎氏によって、最初の調査が行われて以来、1993年度現在、46次に及ぶ調査が行われてきた。その結果、環濠をはじめとする様々な集落遺構、銅剣、銅矛、銅戈等の青銅器鋳型が発見され、弥生時代の代表的集落遺跡として知られることとなった。

今回報告する第32次、34次調査は都市計画道路竹下駅前線建設に伴って、1991年度に実施したものである。都市計画道路竹下駅前線はＪＲ竹下駅から東に延びる幅20mの道路で、那珂遺跡群の中央を東西に横断するものである。これに係わる調査はこれまで1987年（第13次調査)、1989年（第19次調査）に行われ、第32次、34次調査をもって完了したことになる。これらの調査は第13次調査地点と第19次調査地点の間に位置する。調査は1991年７月５日～９月30日、1992年１月20日～３月31日にかけて行った。

２．調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査にあたって、土木局街路課の関係各位には条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、円滑に調査を行うことができた。ここに記して謝意を表する。

調査委託　福岡市土木局

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　井口雄哉（前任)、尾花剛
埋蔵文化財課長　折尾学
埋蔵文化財第二係長　塩屋勝利（前任)、山崎純男

調査庶務　埋蔵文化財第一係　松延好文（前任)、入江幸男

調査担当　菅波正人　調査協力　榎本義嗣、屋山洋

調査作業　上野龍夫　内野弘行　太田寿和　岡崇　逢坂洋史　小川勝彦　熊本交伸
後藤和武　大長正弘　高山義克　徳永静夫　中川敏男　広田熊雄　藤野保夫
別府俊美　松井一美　柳沢竜広　吉住作美　森井啓次　松藤暘邦　吉住作美
石川洋子　岩瀬恵美子　川崎道子　武田潤子　中村ふみ子　永松伊都子
西本スミ　野口ミヨ　日比野典子　森山キヨ子　脇山喜代子　澄川アキヨ

整理補助　林田憲三　黒田和生　英豪之

整理作業　岩崎加奈子　佐々木涼子　田中ヤス子　中願寺希　藤信子　中暢子

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地

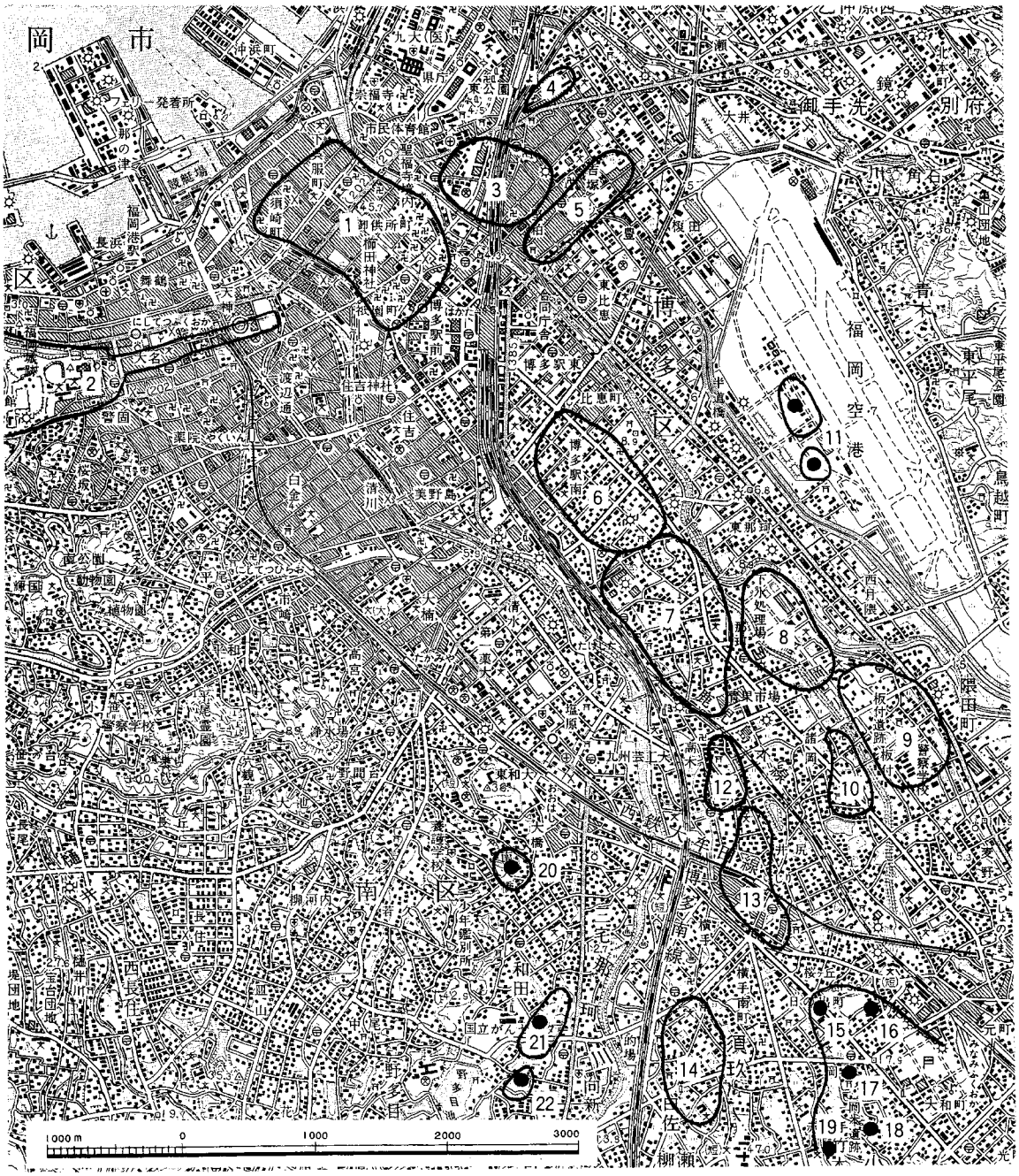
福岡市の大半を占める福岡平野は南北に延びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室見川が貫流し、それぞれの河川に開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。狭義の福岡平野はその小平野の一つで、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡を指している。那珂遺跡群は両河川に挟まれた平野内に位置し、春日丘陵から那珂川の蛇行に沿って延びてくる洪積丘陵北端に立地する。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火砕流による八女粘土、鳥栖ローム層が最上部に形成される。２km先の博多遺跡群が立地する砂丘との間は後背湿地となっている。遺跡の範囲は南北約1.6km、東西約0.8kmが予想され、現在の標高７～９ｍを測る。

２．周辺の遺跡

福岡平野では数多くの遺跡が知られているが、特に春日丘陵とそこから北に延びてくる丘陵上には弥生時代遺跡がほぼ全域に分布する。春日丘陵には須玖岡本遺跡をはじめとして、その周辺では須玖永田、須玖坂本、須玖唐梨、岡本バンジャク、赤井手、大谷遺跡等で青銅器工房、埋納遺構が検出されており、質、量ともに他の弥生時代集落を圧倒している。春日丘陵から北側では弥永原、井尻、五十川、比恵遺跡等の遺跡が間断なく、続いていく。又、丘陵の東側では初期水田、環濠集落で知られる板付遺跡、弥生時代後期の環濠、大型建物跡や多量の木製品が検出された雀居遺跡、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪を副葬した甕棺墓が出土した諸岡遺跡等が存在する。一方、丘陵の北側の砂丘上に立地する博多遺跡群でも弥生時代前期には集落の形成が始まっている。

古墳時代においても、丘陵上の集落は継続していく。沖積地部分では那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡等で水田跡、大規模な井堰や水路が検出されている。一方、古墳は那珂川流域に首長墓クラスの前方後円墳が展開する。最古式の那珂八幡古墳にはじまり、安徳寺大塚古墳、老司古墳、博多１号墳、貝徳寺古墳、日拝塚古墳、剣塚古墳という系譜が想定されている。

古代においては福岡平野は那珂、御笠、席田の３郡に分割されるが、大半は那珂郡に属する。ところで、那珂郡衙の所在地はまだ限定しえないが、博多区那珂周辺に設けられた可能性がある。比恵遺跡群は那珂遺跡群の北側に位置し、弥生時代に始まる数多くの遺構、遺物が検出されている。そのなかで第８次、第７・13次、第39次調査地点では、６世紀後半に位置づけられ



1．博多遺跡群
2．福岡城
3．堅粕遺跡群
4．吉塚本町遺跡群
5．吉塚遺跡群
6．比恵遺跡群
7．那珂遺跡群
8．那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡
9．板付遺跡
10．諸岡遺跡
11．雀居遺跡
12．五十川高木遺跡
13．井尻遺跡群
14．日佐遺跡群
15．須玖唐梨遺跡
16．須玖永田遺跡
17．須玖岡本遺跡
18．須玖四丁目遺跡
19．赤井手遺跡
20．三宅廃寺
21．野多目遺跡
22．野多目拾渡遺跡

Fig. 1　那珂遺跡群と周辺の遺跡（1/50000）

る大型の倉庫群、建物、柵が検出されている。これらは宣化元年（536）に、設置された「那津官家」に関連する遺構と考えられている。「那津官家」の所在については福岡市南区三宅に置かれたという説もあるが、現在は前者が有力な推定地である。

3．これまでの調査成果

那珂遺跡群は昭和46年に森貞次郎氏による調査以来、1993年度現在、46次の調査が行われた。その結果、弥生時代の数多くの遺構、遺物が検出され、奴国の重要な拠点集落であることが認識された。また、古墳時代以降も那珂八幡古墳、東光寺剣塚古墳などの首長墓、古代の大型建物等が検出され、弥生時代以降連綿と続く複合遺跡であることが判明した。

遺跡の時期的変遷を簡単に見ていくと、那珂遺跡群で遺構、遺物が確認できるのは旧石器時代まで遡れる。第８次、第９次、第13次調査地点ではナイフ形石器が検出されている。また、第41次調査地点ではナイフ形石器等を含む包含層が検出されている。

続く縄文時代は突帯文土器期以前の出土例はほとんどない。集落は突帯文土器期に開始する。この時期の遺構、遺物は遺跡群の西側の縁辺部でまとまって見られる。アサヒビール工場内で行われた第10次、第21次調査地点では突帯文土器が貯蔵穴、包含層から出土している。また、第37次調査では突帯文土器期の二重環濠が検出されている。

弥生時代以後は遺跡は間断無く継続していく。弥生時代前期は遺跡群の東西の縁辺部で集落は形成される。東側では第４次、31次調査で甕棺墓、木棺墓が検出されている。西側では第21次調査で貯蔵穴が検出されている。中期になると、集落は台地の中央にも拡大する。遺構では環濠、竪穴住居跡、井戸等が多数検出されている。第20次、第23次調査では台地を東西に横断する環濠が検出され、環濠からは多量の祭祀土器が出土している。また、第21次調査では墳丘墓と考えられる区画の溝を伴う甕棺墓群が検出されている。遺物では第１次、第23次調査では銅剣等の鋳型が出土しており、青銅器生産が行われていたことが分かる。後期においても、集落は継続されていく。第18次、第41次調査では環濠が、第８次、第13次等で、竪穴住居跡、井戸も検出されており、拠点的な集落であったことが窺える。

古墳時代初頭では福岡平野の最初の首長墓である那珂八幡古墳が築造される。那珂八幡古墳からは第２主体部から三角縁神獣鏡が検出されている。この時期の集落遺構も外来系土器を伴う竪穴住居跡、井戸等が見られる。しかし、これ以後、６世紀後半まで集落遺構についても、埋葬遺構についてもその数は激減する。

６世紀後半では福岡平野の最後の首長墓と考えられる東光寺剣塚古墳が築造される。それと同時に集落も再び、見られるようになる。７世紀代では第18次、第23次調査で軒を連ねた総柱建物が検出された。また、第22次、第23次調査では神ノ前窯の軒丸瓦が、第13次、第26次調査では百済系単弁軒丸瓦が出土している。比恵遺跡群に所在地が推定される那津官家以後の、官

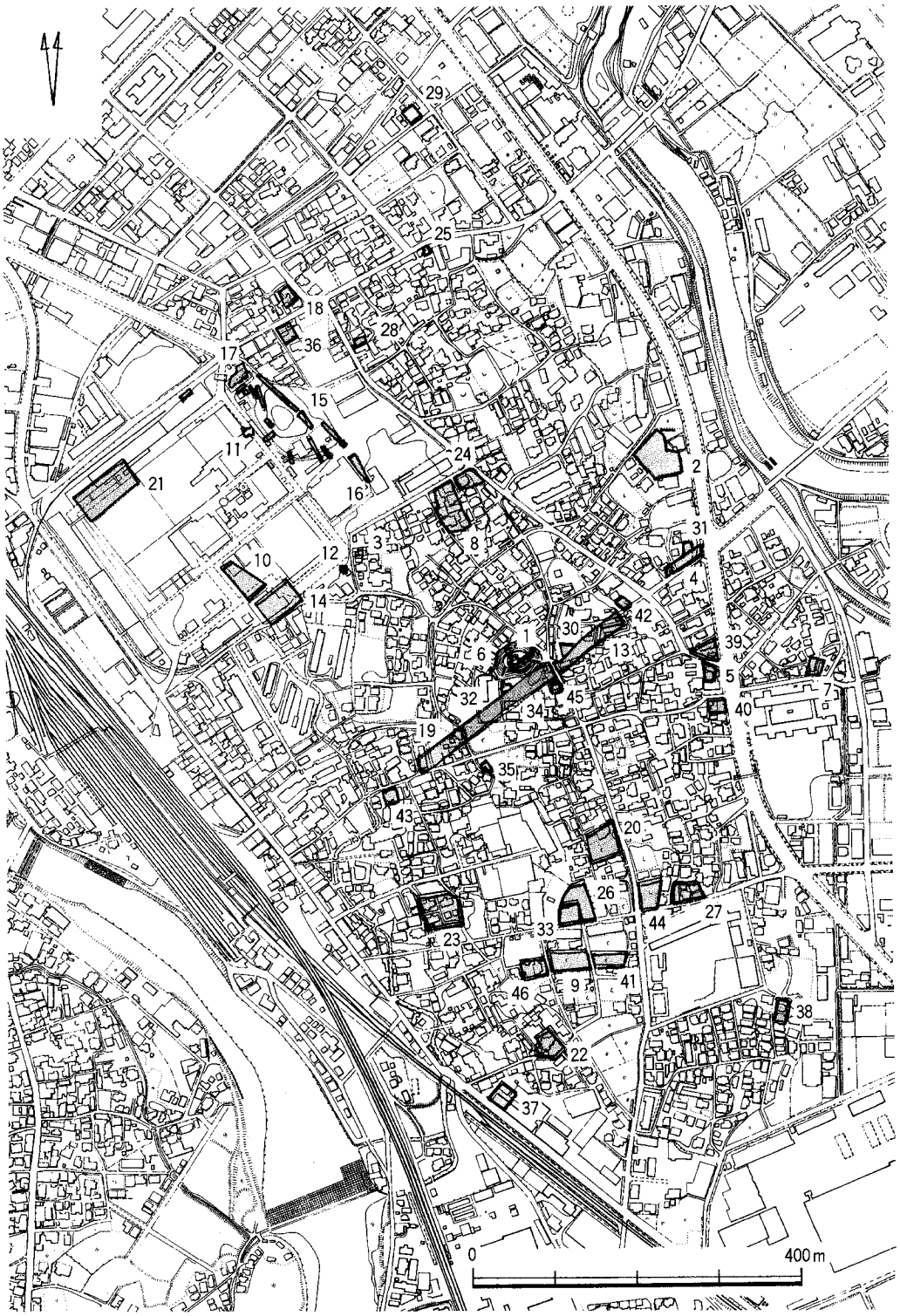


Fig. 2　那珂遺跡群調査地点位置図（1/8000）

衙的施設の存在が予想される。その後の那珂郡衙についても本遺跡群に位置すると考えられるが、確証は得られていない。

以上、時期的変遷を簡単に触れたが、各調査地点の詳細は既刊の報告書を見て頂きたい。

那珂遺跡群調査一覧

次数	番号	所在地（博多区）	面積m²	調査年	調査原因	備　　考
1	7901	那珂１丁目44番	24	1971	学術調査	「九州考古学」53号
2	7414	那珂１丁目237-１外	231	1974	倉庫建設	「福岡市歴史資料館報告」第２集
3	7705	那珂１丁目680番	2	1977	住宅建設	
4	8036	那珂１丁目277番外	300	1980	道路建設	福岡市報告書第82集
5	8328	那珂1丁目377-2, 3	100	1983	ビル建設	
6	8505	那珂１丁目44番	534	1985	重要確認	福岡市報告書第141集
7	8530	那珂１丁目８番	495	1985	公民館建設	福岡市報告書163集
8	8609	那珂１丁目601番外	1350	1986	共同住宅建設	福岡市報告書153集
9	8703	竹下５丁目463番	1030	1987	共同住宅建設	
10	8727	竹下３丁目１－１	862	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
11	8732	竹下３丁目１－１	5	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
12	8733	竹下３丁目１－１	20	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
13	8735	那珂２丁目地内	1536	1987	道路建設	福岡市報告書第222集
14	8832	竹下３丁目１－１	1180	1988	倉庫建設	福岡市報告書第291集
15	8802	竹下３丁目１－１	—	1988	重要確認	福岡市報告書第267集
16	8849	竹下３丁目１－１	240	1989	倉庫建設	福岡市報告書第291集
17	8850	竹下３丁目１－１	177	1989	変電所建設	福岡市報告書第291集
18	8855	東光寺１丁目23－５	415	1989	ビル建設	福岡市報告書第292集
19	8848	竹下５丁目地内	880	1989	道路建設	福岡市報告書第323集
20	8906	那珂２丁目257番外	900	1989	共同住宅建設	福岡市報告書第324集
21	8923	竹下３丁目１－１	2167	1989	工場建設	福岡市報告書第291集
22	8935	竹下５丁目420	776	1989	共同住宅建設	福岡市報告書第253集
23	8936	竹下5丁目270－１外	1428	1989	保育所建設	福岡市報告書第254、290集
24	8982	那珂１丁目35	325	1989	共同住宅建設	
25	8983	東光寺１丁目218	100	1989	共同住宅建設	
26	9002	那珂２丁目249番	436	1990	共同住宅建設	
27	9003	那珂２丁目７－22	756	1990	共同住宅建設	
28	9008	東光寺1丁目321番外	150	1990	共同住宅建設	福岡市報告書第292集
29	9026	東光寺1丁目162番外	313	1990	倉庫建設	1993年度報告予定
30	4046	那珂１丁目462－１	80	1990	倉庫建設	福岡市報告書第292集
31	9053	那珂沼口802－15	123	1991	共同住宅建設	福岡市報告書第292集
32	9115	那珂１丁目地内	1300	1991	道路建設	本報告書
33	9122	那珂２丁目249－１	275	1991	共同住宅建設	1993年度報告予定
34	9144	那珂１丁目地内	1100	1992	道路建設	本報告書
35	9145	那珂２丁目213－２	57	1992	住宅建設	本報告書掲載
36	9217	東光寺1丁目332番外	154	1992	共同住宅建設	
37	9224	那珂６丁目314番外	1215	1992	倉庫建設	1993年度報告予定
38	9225	那珂６丁目80－１	690	1992	共同住宅建設	
39	9228	那珂１丁目362	493	1992	共同住宅建設	
40	9256	那珂２丁目５番	460	1993	共同住宅建設	1993年度報告予定
41	9264	竹下５丁目509番	480	1993	共同住宅建設	
42	9308	那珂１丁目476番	63	1993	削平工事	
43	9315	竹下５丁目112－２	132	1993	倉庫建設	
44	9328	那珂２丁目122，123	821	1993	共同住宅建設	
45	9333	那珂１丁目829	200	1993	住宅建設	
46	9347	竹下５丁目432－２	250	1993	共同住宅建設	

4．竹下駅前線道路に係わる調査について

竹下駅前線道路の調査は今回報告する第32次、第34次調査を含めて、４次の調査が行われ、これに係わる調査は完結した。ここではこれまでの調査を概述する。

竹下駅前線１次調査（那珂遺跡群第13次調査、以下那珂遺跡群は省略）

1987年11月４日～1988年３月30日に行われた。遺跡群の東端に位置する。調査面積1,536m²。遺構は弥生時代中期以降、中世にわたる竪穴住居跡、井戸、溝、掘立柱建物跡等が検出された。遺物は各時期の土器、石器などが出土した。中でも、井戸53からは百済系単弁軒丸瓦が出土しており、その性格が注目される。

竹下駅前線２次調査（第19次調査）

1989年１月26日～３月24日に行われた。遺跡群の西端に位置する。調査面積880m²。全体に削平が著しく、遺構の遺存状況は良くない。遺構は主に古代から中世にかけての溝、井戸等が検出された。遺物は古代から中世の土師器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦等が出土した。弥生、古墳時代の遺構、遺物は少なく、その時期の集落の縁辺に当たるものと考えられる。

竹下駅前線３次調査（第32次調査）

1991年７月５日～９月30日に行われた。遺跡群の中央に位置する。調査面積1300m²。

竹下駅前線４次調査（第34次調査）

1992年１月20日～３月31日に行われた。遺跡群の中央に位置し、那珂八幡古墳の周濠に当たる。調査面積1100㎡。

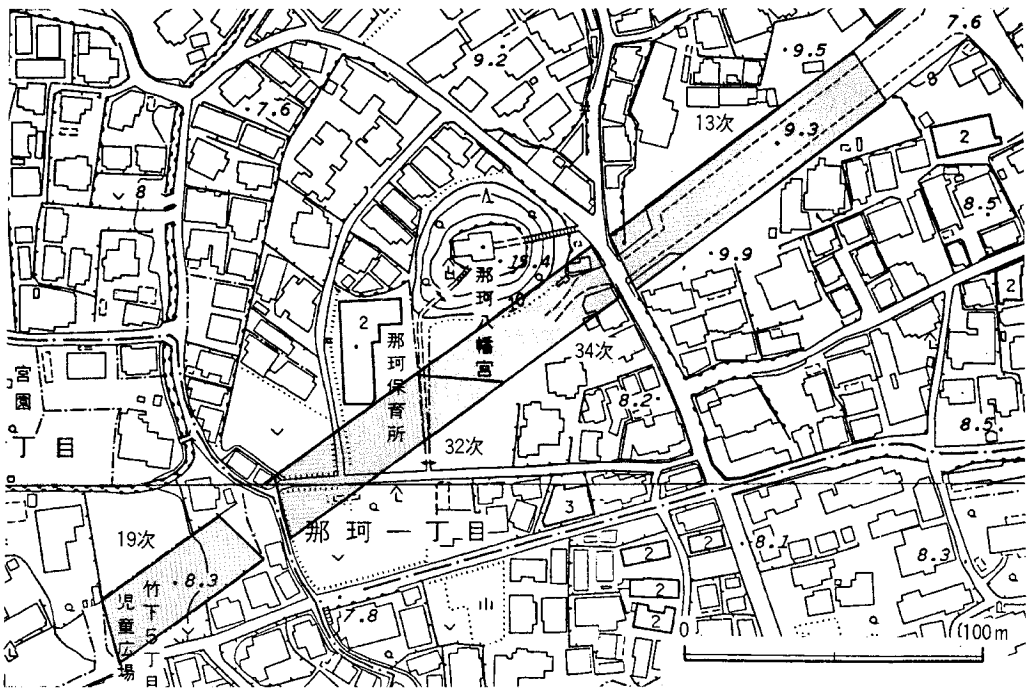


Fig. 3　竹下駅前線調査地点位置図（1/2500）

Fig. 4　第32次、第34次調査地点遺構配置図（1/800）

第３章　第32次調査の記録

１．調査の概要

調査は1991年（平成３年）７月５日から９月30日までの３カ月間にわたって行った。

調査対象地は道路によって３つに分断されていた。道路は周囲より約50cmから１m程低い位置にあるが、それらは生活道路として使用されていることから、それを残した形で調査を行った。そのため、調査区を便宜的にⅠ、Ⅱ、Ⅲの３区に分け、順次調査を行った。調査地点は那珂遺跡群のほぼ中央にあたり、那珂八幡古墳の南側にあたる。標高約９mを測る。

Ⅰ区

Ⅰ区は調査地点の東側に位置する。調査前には那珂保育園と国鉄の官舎があったため、基礎による攪乱が著しい。標高は7.8～8.6mを測る。現地表から40cmで地山の鳥栖ロームとなる。その面で遺構を精査し、弥生時代中期末～後期中頃の井戸５基、竪穴住居跡３軒、土坑、溝、古墳時代後期の竪穴住居跡１軒、土坑、中世末の溝２条を検出した。この地点では那珂八幡古墳の周濠等は検出できなかった。遺物は各遺構から、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器等が出土した。

Ⅱ区

Ⅱ区は調査地点の北西に位置する。現況は畑で、遺構の遺存状態は良い。標高約8.2mを測る。現地表から40cmの表土を除去すると地山の鳥栖ロームとなる。その面で、弥生時代中期の土坑１基、溝１条、奈良時代の溝１条、平安時代の溝１条、中世末の溝１条を検出した。遺物は各遺構から、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、百済系単弁軒丸瓦等が出土した。

Ⅲ区

Ⅲ区は調査地点の南西に位置する。現況は畑で、遺構の遺存状態は良い。標高約8.2mを測る。現地表から40cmの表土を除去すると地山の鳥栖ロームとなる。その面で、弥生時代中期の溝１条、７世紀代の竪穴住居跡１軒、土坑、溝、奈良時代の溝１条、平安時代の溝２条、鎌倉時代～室町時代の溝１条を検出した。遺物は各遺構から、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦等が出土した。

Ⅰ区～Ⅲ区で弥生時代中期後半から中世末にわたる時期の遺構を検出した。遺構の分布状況を見ると、弥生時代の遺構はⅠ区に集中する。特に井戸、竪穴住居跡はⅡ、Ⅲ区では検出できなかった。また、Ⅰ区では那珂八幡古墳の周濠は検出できなかった。弥生時代以降は遺構に断絶があり、７世紀になって再び集落が営まれている。奈良時代の溝は真北方向の溝で官衙等の関連が注目される。

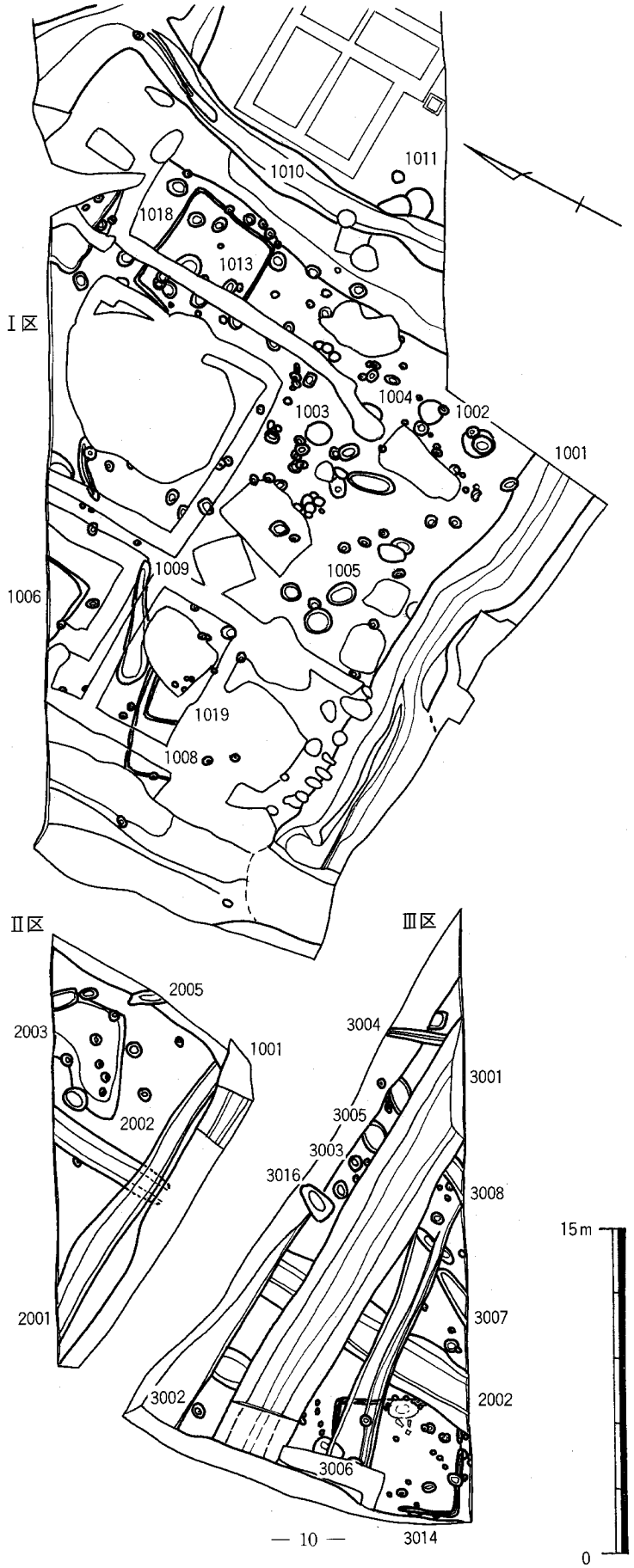


Fig. 5
第32次調査地点遺構
配置図（1/300）

2．竪穴住居跡（SC）

今回の調査ではⅠ区とⅢ区で５基の竪穴住居跡を検出した。Ⅰ区では基礎による攪乱のため、遺存状況は悪く、住居跡の平面形や主柱穴等不明確な所が多い。住居跡は調査区北側に分布する。そのうち、SC－1008と1019は切り合っている。平面形は方形もしくは長方形を呈する。Ⅲ区ではSC－3014の１基を検出した。この住居跡は後世の遺構に切られているが、比較的遺存状況は良い。

SC－1006（Fig. 6）

Ⅰ区北側中央に位置する。遺構は調査区北側に広がるため、南東のコーナー部分を検出したのみで、規模は不明である。深さは約30cmが残存する。東壁と南壁には壁溝が見られる。南壁から約20cmの位置で一段低くなり、ベッド状遺構をもつ長方形の住居と考えられる。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器、鉄製穂摘具、石包丁、磨製石鏃が出土した。時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。

出土遺物（１～６）

１～３は弥生土器である。１はくの字口縁の甕である。２は直口の鉢で、口縁は内湾気味に立ち上がり、底部は丸底気味の平底である。３は有孔の把手である。断面楕円形である。４は鉄製の穂摘具である。一方の折り返し部が残る。残存長3.5cm、幅2.9cmを測る。５は磨製石鏃である。平面形は三角形で、基部は欠損する。残存長2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。６は石包丁で、ほぼ中央で欠損している。平面形は半月形を呈する。残存長5.5cm、幅4.5cm、厚さ0.6cmを測る。

SC－1008（Fig. 6）

Ⅰ区北西側に位置し、SC－1019に切られる。また、東側と南側は攪乱をうけており、北西のコーナー部分を検出したのみで、規模は不明である。深さは10cmが残存する。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器、砥石が出土した。時期は弥生時代終末に位置づけられる。

出土遺物（７～９）

７、８は弥生土器である。７はくの字口縁の甕である。８は尖底の甕である。９は砥石である。

SC－1019（Fig. 6）

Ⅰ区北西側に位置し、SC－1008を切る。南側は攪乱をうけており、北西のコーナー部分を検出したのみで、規模は不明である。深さは10cmを測る。平面形は方形と考えられる。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は古墳時代後半に位置づけられる。

出土遺物（10～12）

10、11は須恵器である。10は高坏の坏部で底部にはカキメが施される。口径8.8cm。11は壺

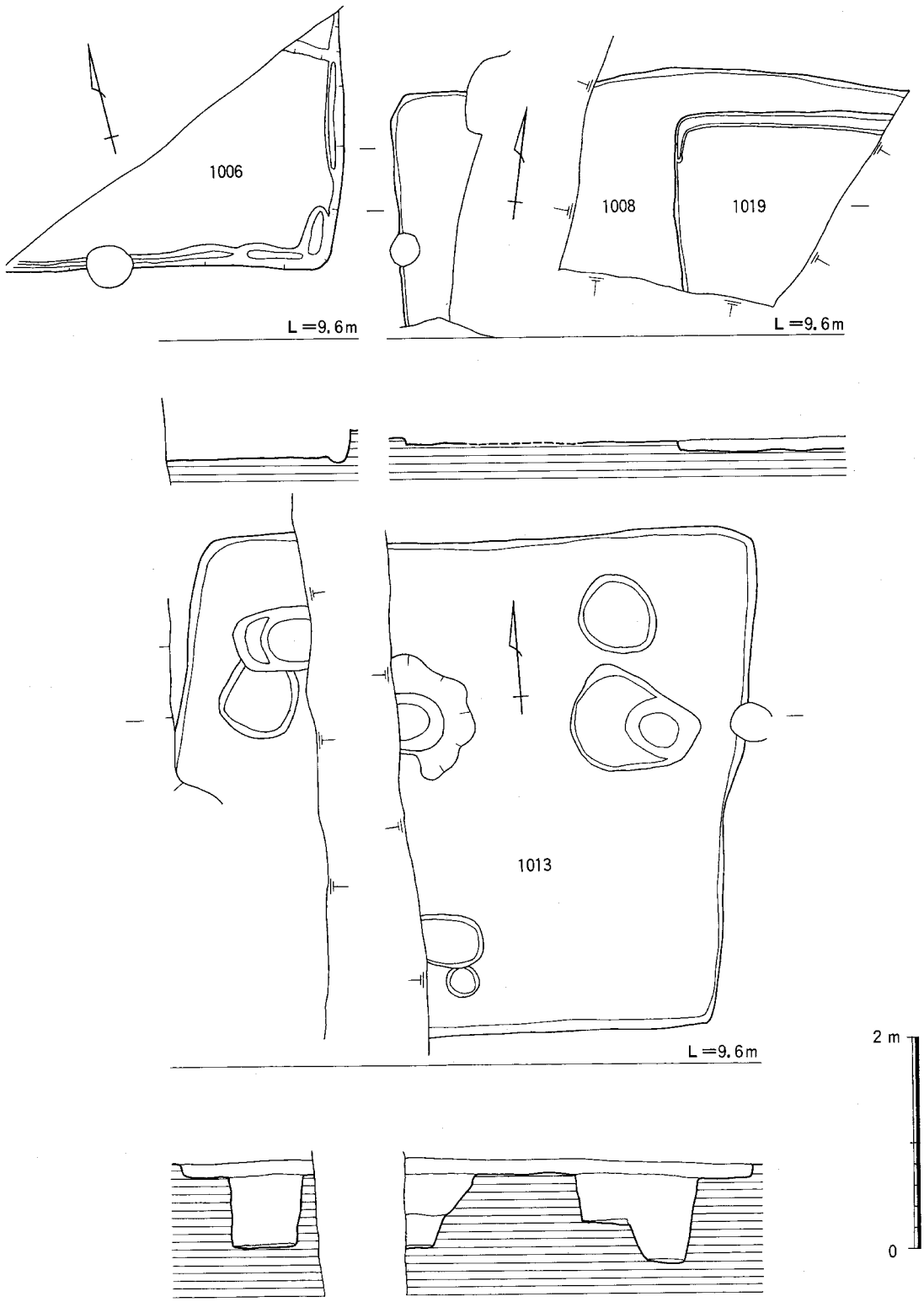


Fig. 6　SC－1006、1008、1019、1013遺構実測図（1/60）

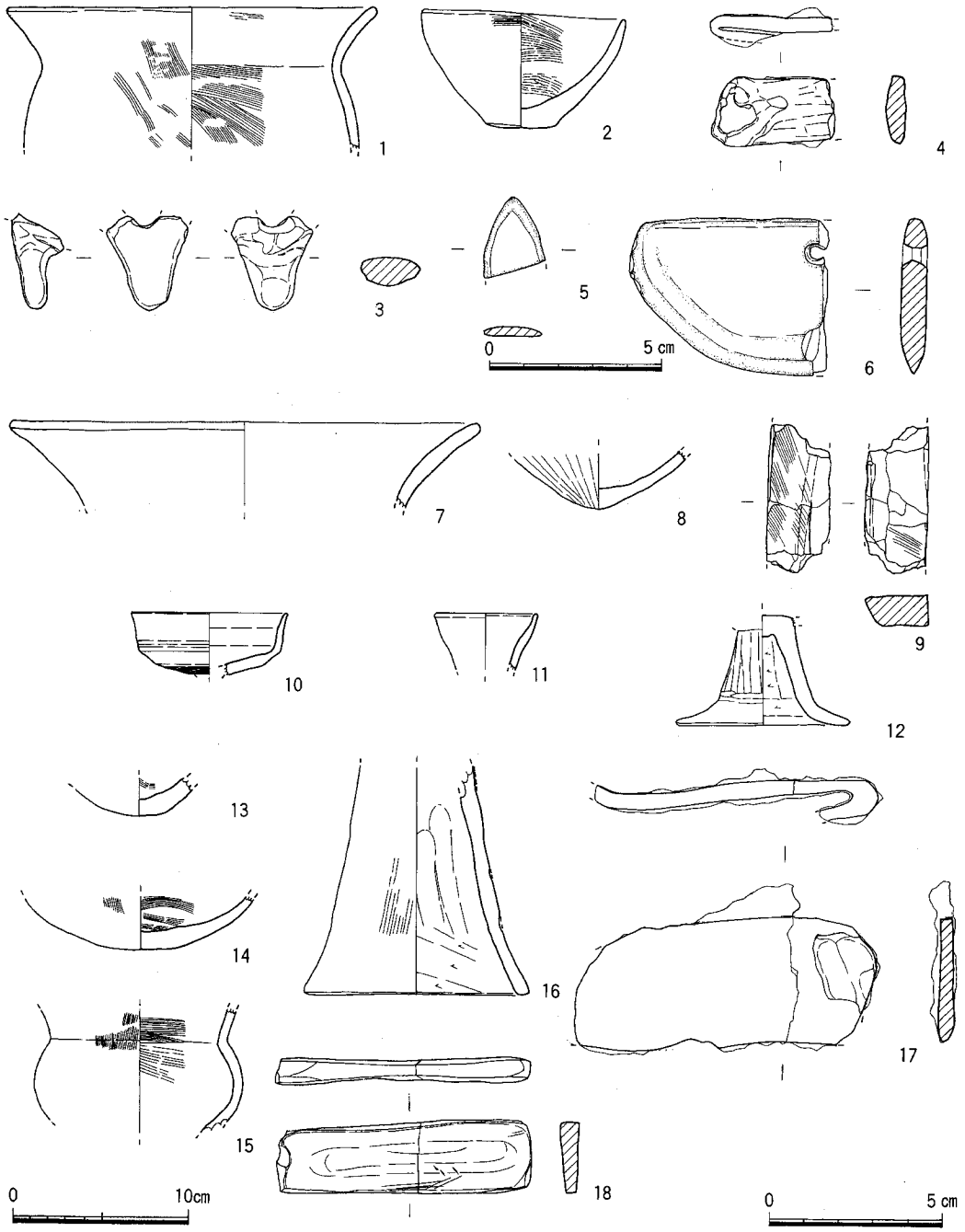


Fig. 7　SC—1006、1008、1019、1013出土遺物実測図（1/2、1/4）

口縁である。12は土師器の高坏の脚部である。脚部はラッパ状に開き、裾部は急に折れる。

SC－1013（Fig. 6）

Ⅰ区東側に位置する。中央は水道管のため、攪乱をうけている。平面形は長方形を呈する。主柱穴は北側に偏った位置に2本あり、その間に土坑がある。中央土坑には焼土、炭等は見られない。柱穴の位置から北側にベッド状遺構をもつ長方形プランの住居で、ベッドの部分は削平されているものと考えられる。東西長5.3m、南北長4.6m、深さ10cmを測る。遺物は埋土から弥生土器、鉄鎌、砥石が出土した。時期は弥生時代終末に位置づけられる。

出土遺物（13～18）

13～16は弥生土器である。13、14は甕の底部で、痕跡的な底をもつ。内面はハケメを施す。15は鉢で、口縁端部と底部は欠損している。体部は球形を呈し、口縁はくの字に折れる。16は甑形土器の裾部と考えられる。外面はハケメをナデ消す。内面は縦方向のナデである。17は鉄鎌である。先端は欠損する。基部は折り返す。18は砥石である。

SC－3014（Fig. 8）

Ⅲ区西端に位置する。遺構の北側はSD－3009に、東側はSD－2002に切られる。平面形は方形を呈し、南北長5.9m、東西長5.2m、深さ10cmを測る。壁際には幅15cmの壁溝が巡る。主柱穴は1カ所攪乱をうけているため、検出できなかったが、4本と考えられる。床の貼り替えは認められない。東壁には竈が取りつく。竈は完全に潰れており、袖部が僅かに残る程度である。袖は白色粘土で構築される。焚口には炭と焼土が見られる。竈の粘土を除去すると、幅120cm、長さ90cm、深さ20cmの浅い窪みがある。竈はこの掘り込みをおこなったのちに白色粘土で壁を構築したものと考えられる。また、住居の中央部の床面に焼土面が2カ所見られる。遺物は須恵器、土師器、軒丸瓦、丸瓦が出土した。そのうち、丸瓦は竈の西側床面で3枚、北側の壁際で1枚検出した。時期は7世紀前半に位置づけられる。

出土遺物（19～28）

19～22は須恵器、23は土師器、24～28は瓦である。23は竈の下、それ以外は床面直上の遺物である。19、20は坏蓋である。19は天井部と体部との境は不明瞭である。天井部のヘラ切りは未調整で、ヘラ記号がある。器高3.3cm、口径10.5cmを測る。20は天井部は丸みを帯びており、体部との境は不明瞭である。天井部の1/2に回転ヘラケズリを施し、ヘラ記号がある。器高3.8cm、口径11.0cmを測る。21は坏身で、受け部は短く、反り気味に立ち上がる。底部は欠損している。口径10.8cmを測る。22は高坏の脚部である。ラッパ状に開き、裾部でおれる。端部は下垂して接地する。内側にはヘラ記号がある。底径8.0cmを測る。23は高坏である。脚部は欠損している。内外面に細かなヘラミガキを施す。口径13.6cmを測る。

24は軒丸瓦である。瓦当部の約1/3は欠損しているが、単弁の蓮華文である。34次調査地点で同様の文様をもつ完形品が出土しており、蓮弁は七弁と考えられる。弁端は丸みをもち、

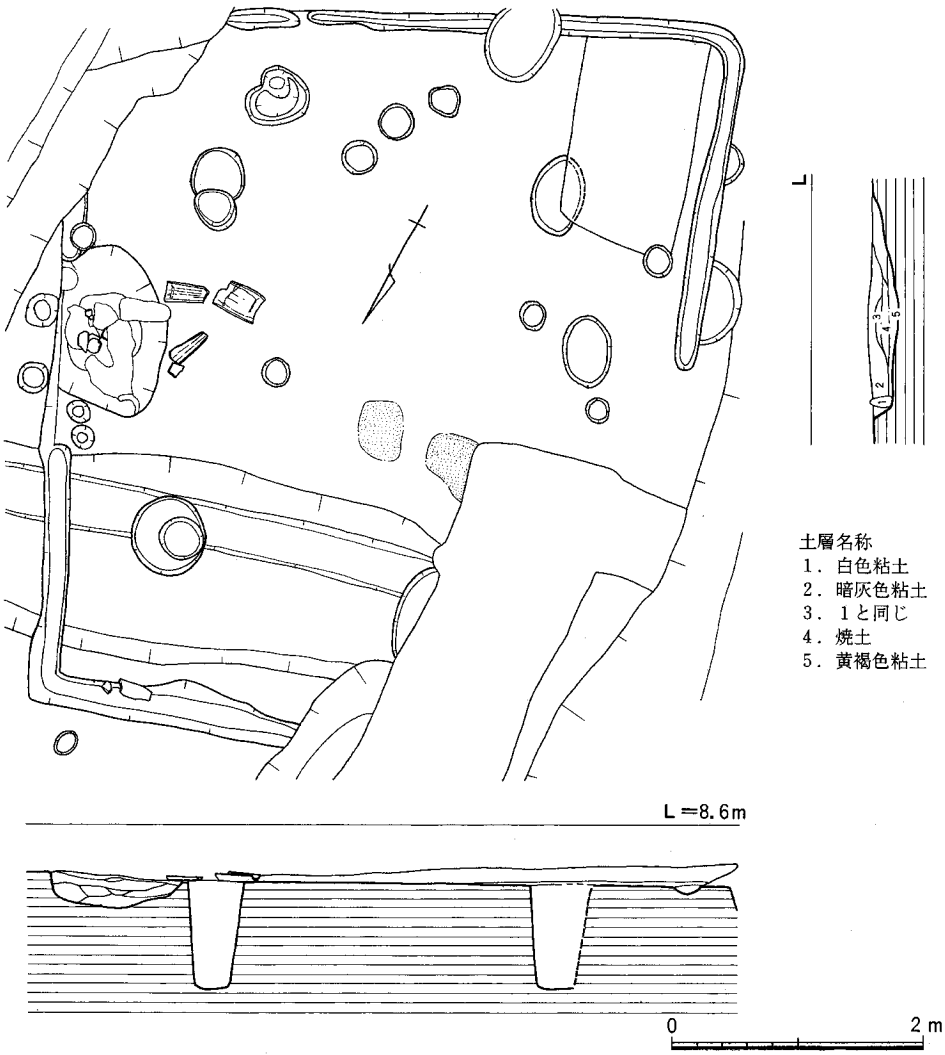


Fig. 8　SC－3014遺構実測図（1/60）

珠点を施す。中房は平坦で蓮弁との境はない。蓮子は1－5の配置である。文様は瓦当の中心からややずれた位置にあり、外区の外縁には笵は当たっていない。瓦当の中央部は凹んでおり、笵が瓦当の内側のみに当たったためと考えられる。内縁は無文である。瓦当径14cm、内区径9.2cm、厚さ0.7cmを測る。丸瓦部分はほとんど欠損している。瓦当の裏面に長さ4cmで丸瓦がつくが、端面はヘラケズリが施されており、この部分が丸瓦の端部ではない。裏面にこのような短い丸瓦部がつくことから「1本作り」による軒丸瓦と考えられる。丸瓦の凹面には竹状の模骨と布目が残る。焼成は硬質で、青灰色を呈する。

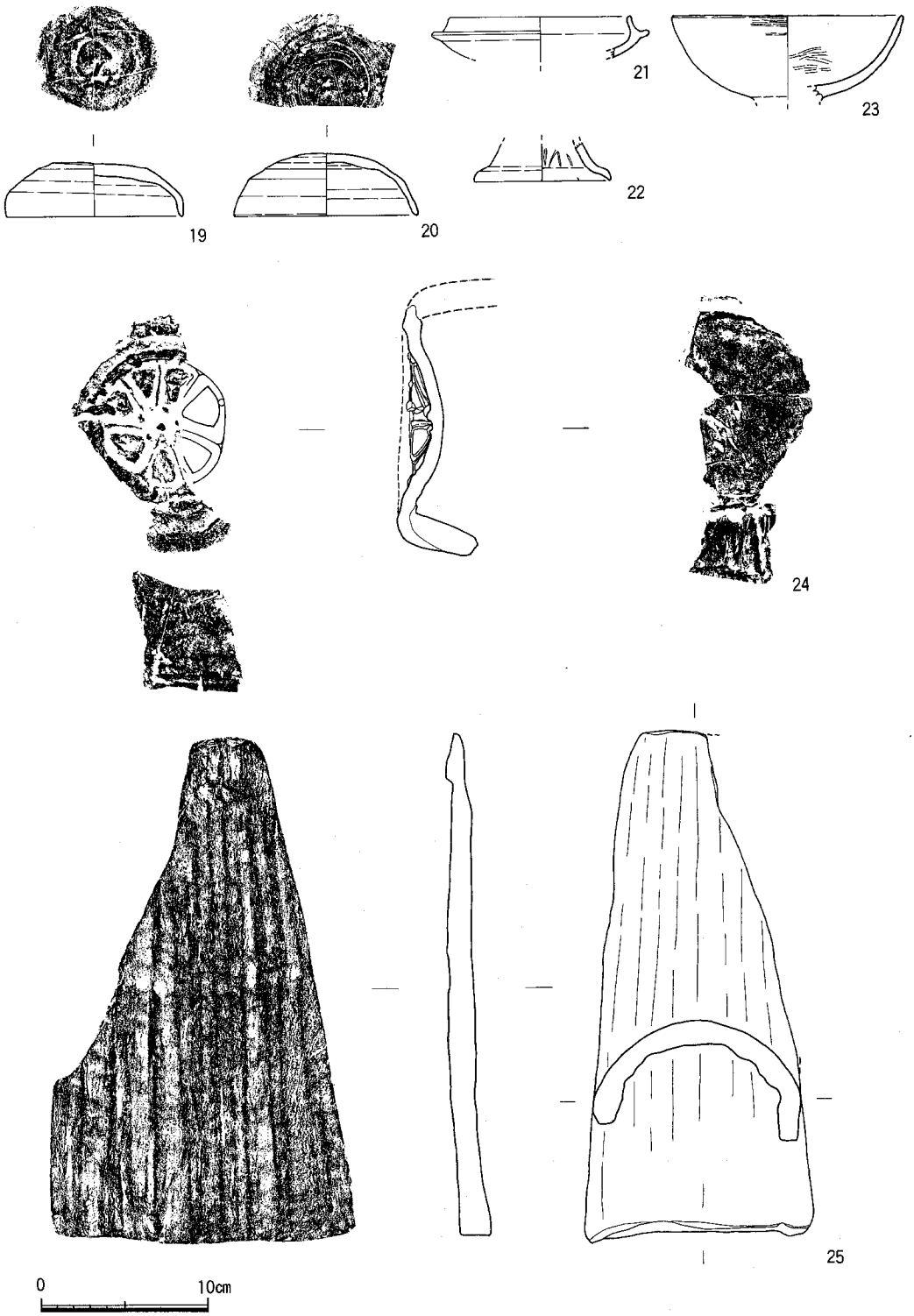


Fig. 9　SC－3014出土遺物実測図（1）（1／4）

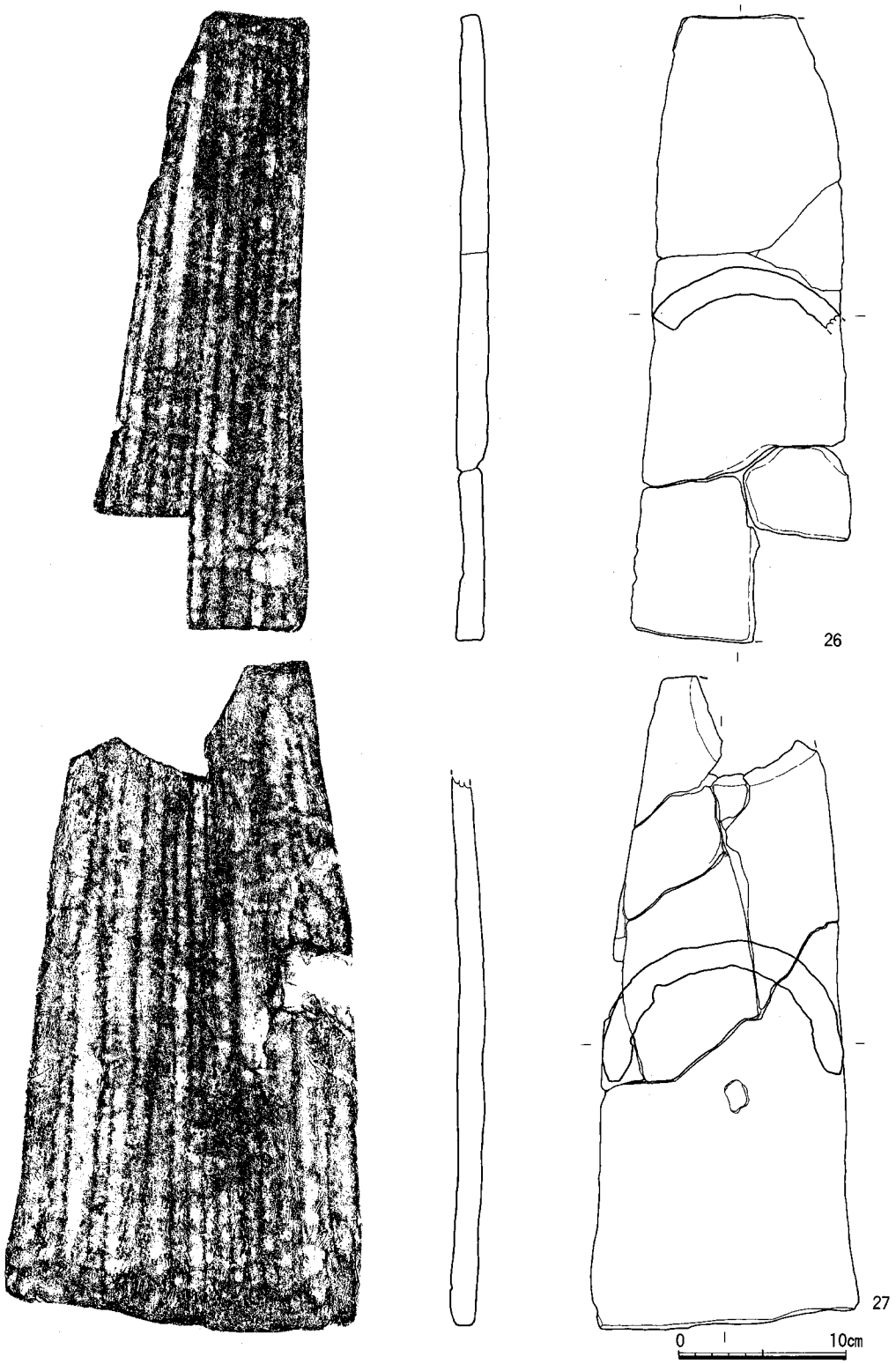


Fig. 10　SC－3014出土遺物実測図（2）（1／4）

25～28は行基式丸瓦である。凸面は平行叩きを縦方向にすり消している。凹面は幅1～1.5cm程の竹状の模骨と布目が残る。また、粘土板の合わせ目の痕跡が観察できるものもある。26は粘土板の接合部で割れている。側面と端面はヘラケズリが施される。焼成は軟質で、色調は淡橙色を呈する。25～28の長さ30.5cm～39.0cmを測る。厚さは1.5cm～1.8cmを測る。

Fig. 11　SC－3014出土遺物実測図（3）（1／4）

3　井戸（SE）

井戸は６基検出した。すべてＩ区に位置する。井戸はいずれも弥生時代後期に位置づけられ、素掘りである。井戸の底は八女粘土層までのものとさらに掘り下げて硬砂層まで達しているものがある。そのうち、SE－1012はＩ区の東端で検出したが、以前あった建物のコンクリート基礎のため、上面から１ｍ掘り下げたのみである。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SE－1002（Fig. 12）

Ｉ区東側に位置する。平面形は円形を呈し、直径105～110cm を測る。底面は八女粘土層のまで達している。深さ240cm、底面の標高6.1ｍを測る。埋土は上面から60cm は暗褐色粘質土が、そこから140cm はローム、八女粘土ブロックまじりの茶褐色粘質土が堆積する。底面から50cm ではローム、八女粘土ブロックまじりの黒褐色粘質土が堆積する。遺物は主に最下層から弥生土器が出土した。

出土遺物には若干の時期差があるが、本井戸は弥生時代後期前半に位置づけられる。

出土遺物（29～38）

29～38は弥生土器である。29のみ最下層で、他は埋土の中層で出土した。29は複合口縁壺である。口縁は内湾気味に立ち上がる。屈曲部の稜は鈍い。30～32は甕口縁である。30、31は鋤先口縁、32はくの字口縁である。33～35は平底の底部である。36は瀬戸内系の高坏の口縁片である。口縁は直立し、端部は面取りする。接合部は段がつく。37は器台の裾部である。端部周辺でやや屈曲し、端部の内側で接地する。38は小型の鉢である。手捏ねによる成形で、器面には指頭痕が残る。底部は丸底である。

SE－1003（Fig. 13）

Ｉ区東側に位置する。平面形は円形を呈し、直径90～97cm を測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ340cm、底面の標高5.3ｍを測る。埋土は上面から60cm は暗褐色粘質土が、そこから20cm は暗褐色粘質土まじりのロームが堆積する。更に100cm は八女粘土ブロックまじりの黒褐色粘質土が堆積する。その下に10cm 程の八女粘土層の間層が入る。それから底面までの100cm は八女粘土ブロックまじりの黒褐色粘質土が堆積する。遺物は主に最下層から弥生土器が出土した。底面で完形の壺が５個体出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代後期前半に位置づけられる。

出土遺物（39～44）

39～44は弥生土器である。39～41は壺で、口縁は外反気味に短く立ち上がる。頸部に稜はつかない。胴部の中位に胴部最大径がある。底部は平底である。外面は縦方向のハケメを施す。器高28.0cm、27.6cm、24.2cm、口径14.6cm、13.0cm、12.8cm を測る。42、43も同様の器形であるが、口縁は欠損している。44は小型の壺で、口縁はくの字に折れ、体部は球形を呈する。

底部は平底である。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はナデである。器高15.0cm、口径10.0cmを測る。

SE－1004（Fig. 14）

Ⅰ区東側に位置する。上面は攪乱をうけている。平面形は円形を呈し、直径100～105cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ340cm、底面の標高5.4mを測る。埋土は上面から120cmはロームまじりの暗褐色粘質土が、そこから100cmは八女粘土ブロックまじりの暗褐色粘質土が堆積する。それから底面までの100cmは八女粘土ブロックまじりの黒褐色粘質土が堆積する。遺物は各層から弥生土器が出土した。底面で小型の手捏ね土器が出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられる。

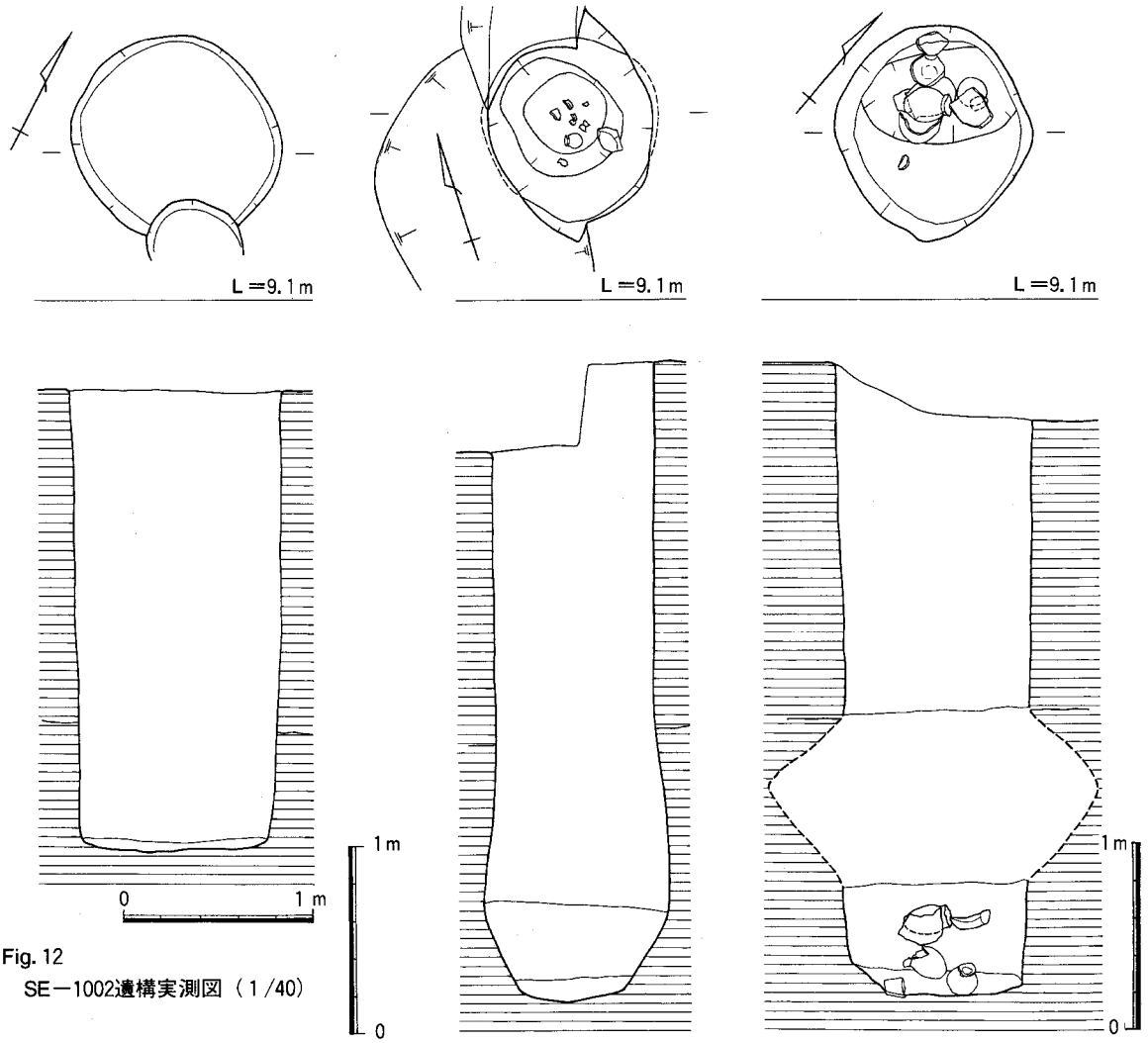


Fig. 12
SE－1002遺構実測図（1/40）

Fig. 13　SE－1003遺構実測図（1/40）

Fig. 14　SE－1004遺構実測図（1/40）

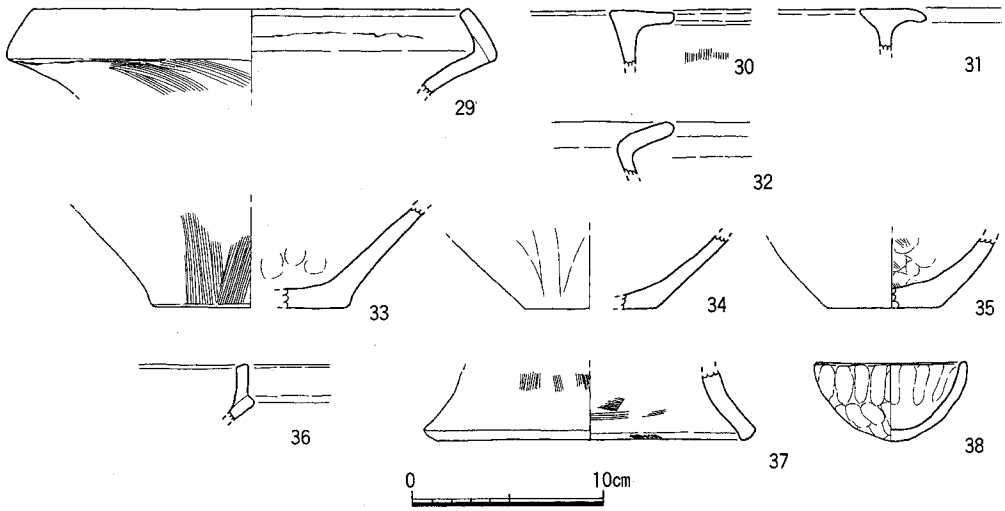


Fig. 15　SE－1002出土遺物実測図（1／4）

出土遺物（45～57）

45～57は弥生土器である。54～57は底面で、それ以外は最下層で出土した。45、46は壺である。45は鋤先口縁の広口壺、46は外反気味に立ち上がる直口壺である。47、48は鋤先口縁の甕である。49～51は甕底部で、平底である。52、53は高坏である。52は坏部で口縁は反転して外反する。53は筒状の脚部で、裾部は緩やかに広がる。外面はハケメを施す。54は小型の壺である。口縁は直立気味に短く立ち上がり、体部は球形である。底部は平底である。外面には粗いハケメ、内面はナデを施す。器高10.0cm、口径5.7cm を測る。55～57は手捏ね土器である。55、56は鉢形で、口縁はわずかに外反する。底部は平底である。57は壺形で、口縁はくの字を呈する。底部は平底である。器面には指頭痕が残る。器高5.0cm、5.0cm、5.3cm、口径5.0cm、4.7cm、3.8cm を測る。

SE－1011（Fig. 18）

Ⅰ区東側に位置する。平面形は円形を呈し、直径90～95cm を測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げて、硬砂層まで達している。深さ420cm、底面の標高4.0mを測る。埋土は上面から80cm はロームまじりの暗褐色粘質土が、そこから150cm は暗褐色粘質土が堆積する。それ以下は八女粘土ブロックまじりの黒褐色粘質土が堆積する。遺物は各層から弥生土器が出土した。また、底面で完形の甕、木製の容器が土器が出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代後期初頭に位置づけられる。

出土遺物（58～62）

58～61は弥生土器である。61のみ底面で出土した。58、59は複合口縁壺である。口縁は直線

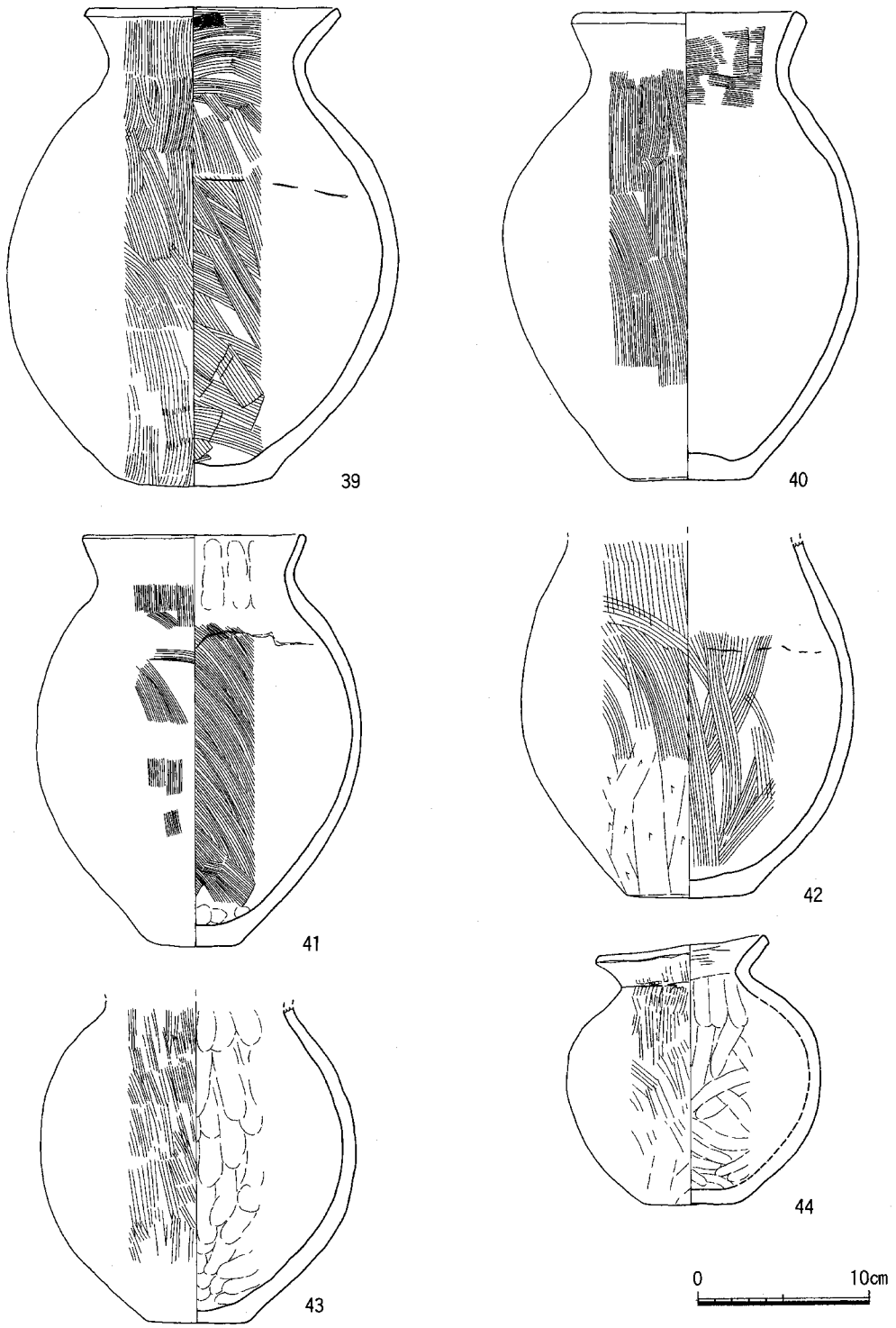


Fig. 16　SE－1003出土遺物実測図（1／4）

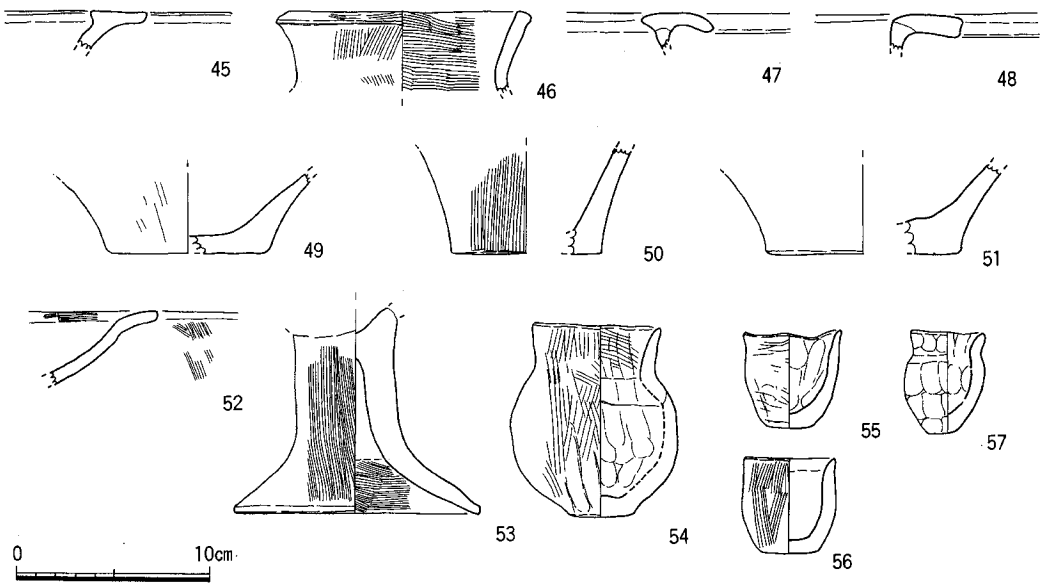


Fig. 17　SE－1004出土遺物実測図（1／4）

的に内傾する。屈強部には稜をもつ。59は端部の上をなでて面取りをする。60は瀬戸内系の甕である。口縁は緩やかに外反し、端部は内側に短く立ち上がり、ヨコナデが施される。頸部は内側には明瞭な稜がつく。肩が張る胴部である。胎土は他の土器と違いは見られない。色調は淡黄灰色を呈する。口径12.0cm を測る。61は甕である。口縁はくの字に折れ、内側には明瞭な稜がつく。胴部は長胴で、底部は丸みを帯びた平底である。調整は内外面とも縦方向のハケメが施される。底部の内側には指頭痕が残る。器高25.4cm、口径16.8cm、底径7.6cm を測る。

62は木製の容器である。端部の一方が欠損しているが、ほぼ完形である。杉の芯持ち材を側面から楕円形にくり抜き、外面も両端を削る。器形は楕円形を呈する。端部の一方に径2cm の穿孔があり、両端に穿孔が施されていたと考えられる。長さ34.5cm、幅28.0cm、高さ13.0cm、厚さ2～2.5cm を測る。

SE－1038（Fig. 19）

Ⅰ区東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、直径75～90cm を測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げて、硬砂層まで達している。深さ370cm、底面の標高4.9mを測る。埋土は上面から100cm はロームまじりの暗茶褐色粘質土が、そこから100cm はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。それそれ以下は八女粘土ブロックまじりの黒褐色粘質土が堆積する。遺物は各層から弥生土器が出土したが、最下層のものが多い。底面で完形の複合口縁壺、長頸壺が出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代後期中頃に位置づけられる。

出土遺物（63～74）

63～74は弥生土器である。63～67、69は最下層、それ以外は上、中層から出土した。63は複合口縁壺である。口縁は直線的に立ち上がり、端部と屈曲部はなでて面取る。頸部と体部の境には低い断面三角形の突帯が1条巡る。胴部は中位に最大径があり、刻目突帯が1条巡る。底部はやや丸みを帯びた平底である。調整は内外面ともハケメを施す。口縁は横方向のハケメを

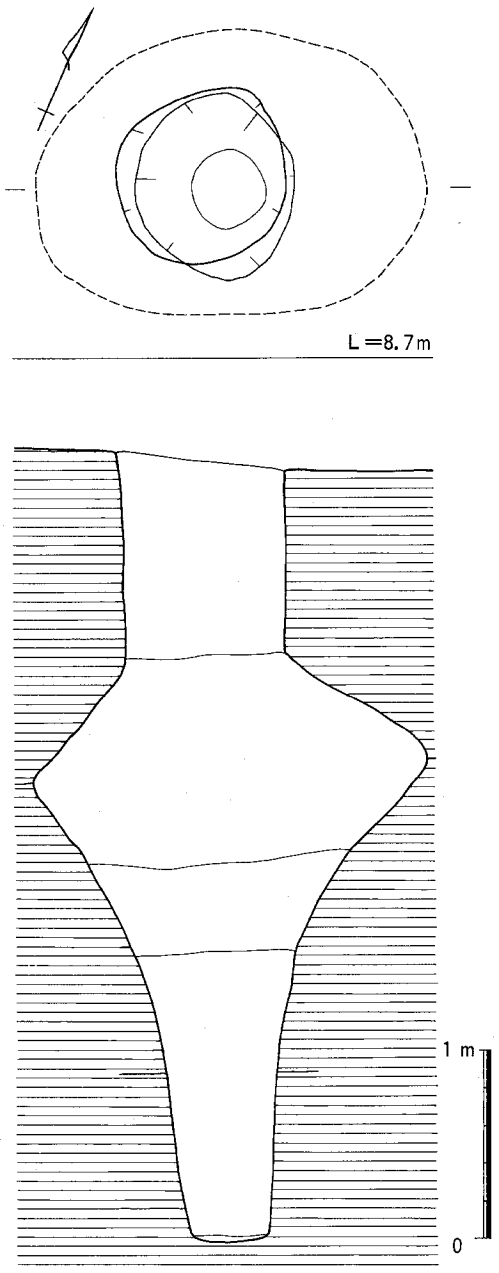


Fig. 18　SE－1011遺構実測図（1/40）

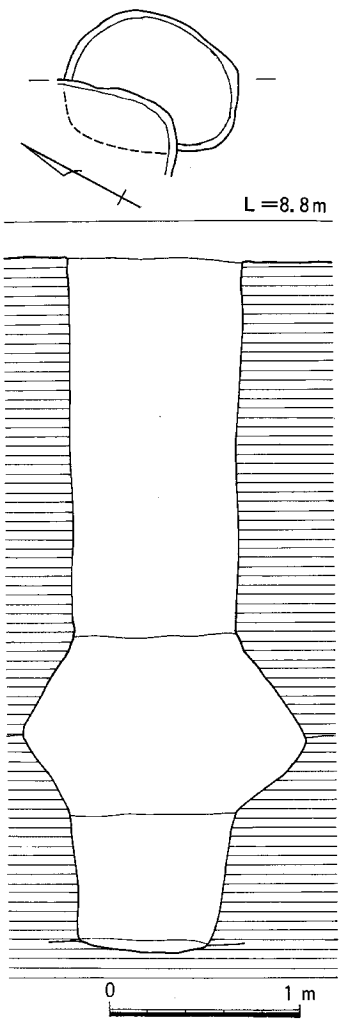


Fig. 19　SE-1038遺物実測図（1/40）

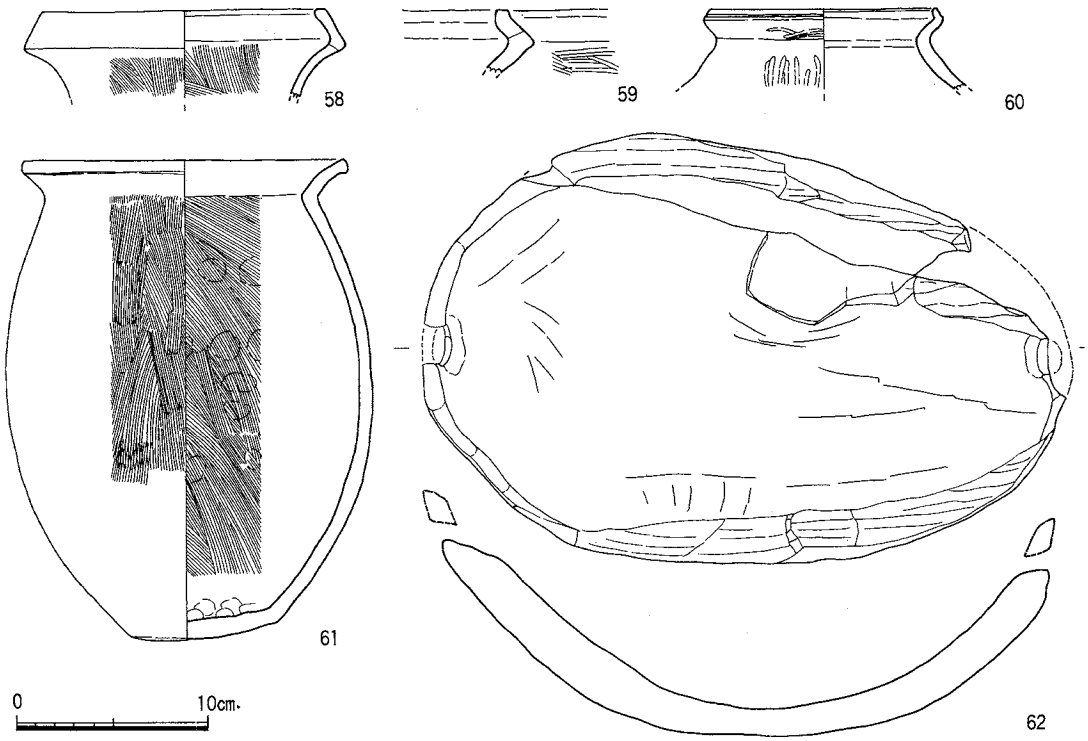


Fig. 20　SE－1011出土遺物実測図（1／4）

ナデ消す。器高39.0cm、口径18.0cm、底8.5cmを測る。64は複合口縁壺と考えられるが、口縁は欠損している。頸部と胴部の境には断面三角形の突帯が1条巡る。胴部最大径は中位にあり、1条の断面コの字形の突帯が巡る。底部はやや丸みをおびた平底である。内外面ともハケメを施す。65は壺で、口縁は欠損している。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。頸部と胴部の境は明確ではない。底部は平底である。調整は内外面ともハケメを施す。66は長頸壺である。頸部は直立して立ち上がり、口縁端部はなでて面取りする。体部は偏球形を呈する。底部はやや丸みを帯びた平底である。調整は内外面ともハケメを施す。口縁はヨコナデする。器高21.0cm、口径8.8cm、底径5.5cmを測る。67は甕である。口縁は緩やかに外反し、頸部の稜は不明瞭である。胴部最大径は口径を上回る。底部はやや丸みを帯びた平底である。器高19.6cm、口径13.0cm、底径5.6cmを測る。68はくの字口縁の甕である。頸部の稜は不明瞭である。69は甕で、口縁は欠損している。体部はやや歪んでおり、胴部中位に最大径がある。底部は丸みを帯びた平底である。70は鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は反転して外反する。底部は平底である。器高11.0cm、口径18.5cm、底径7.0cmを測る。71、72は器台の脚部である。器壁は厚く、裾は緩やかに広がる。調整は外面はハケメ、内面はナデ

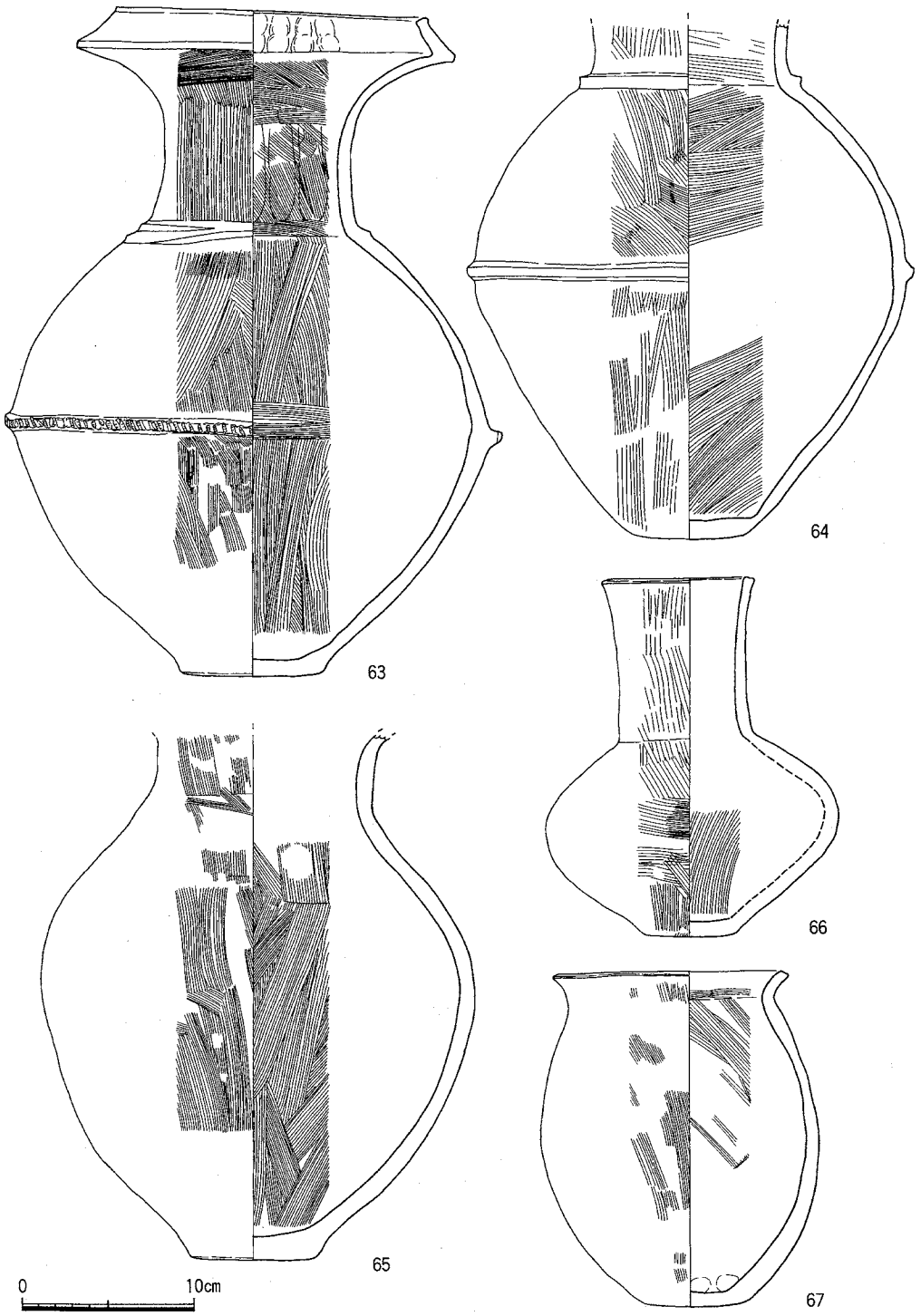


Fig. 21　SE－1038出土遺物実測図（1）（1／4）

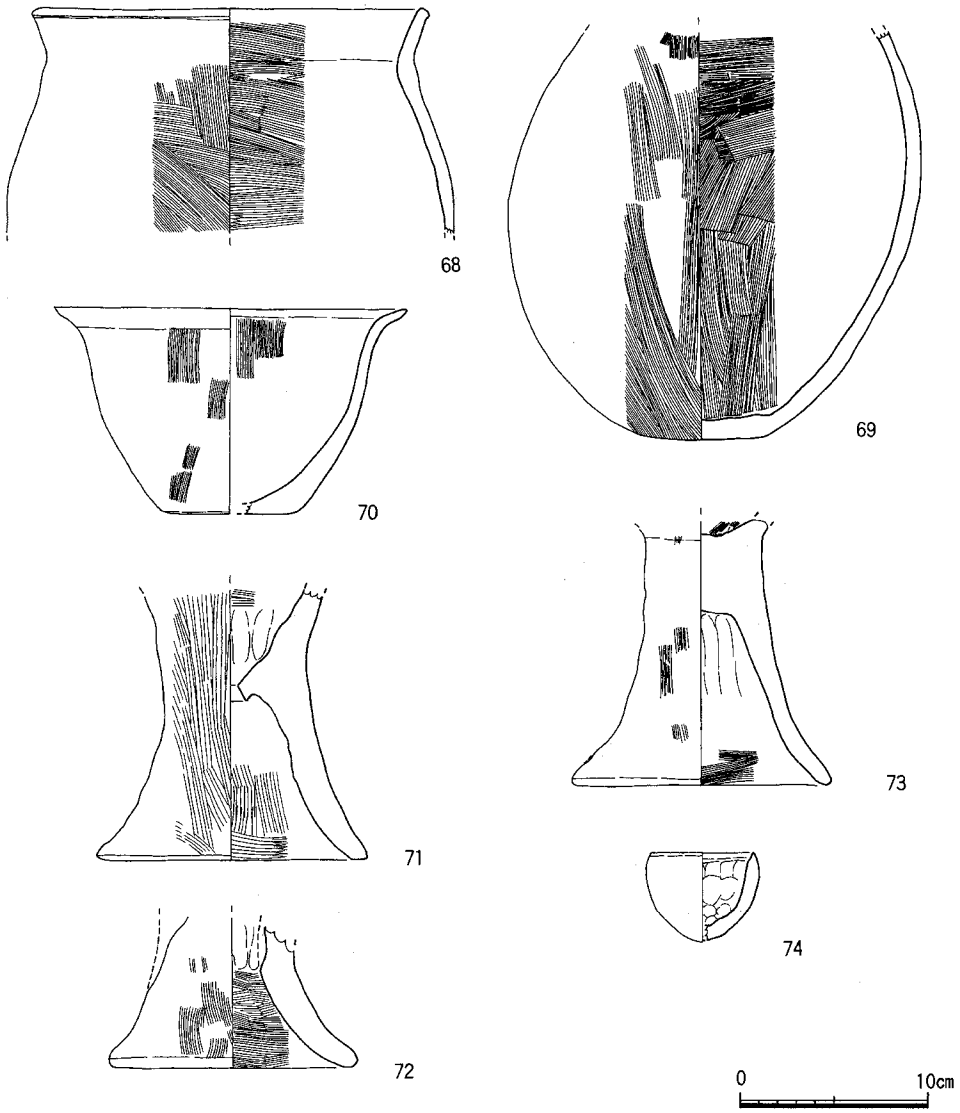


Fig. 22　SE－1038出土遺物実測図（2）（1／4）

を施す。73は高坏の脚部である。裾は緩やかに広がる。調整は外面はハケメ、内面は指頭痕が残る。74は手捏ね土器で、鉢形を呈する。端部はなでて尖る。内面には指頭痕が残る。

4　溝　（SD）

溝はⅠ～Ⅲ区で10条検出した。遺構の時期は弥生時代後期から中世まで至る。ここでは時期毎に記述していく。

SD－1009（Fig. 23）

Ⅰ区の西側に位置する。N－70°－Eの方位をとる。長さ６ｍ、幅50～150cm、深さ60cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は埋土から弥生土器が出土した。

出土遺物が少ないため、時期は不明確だが、弥生時代後期に位置づけられる。

SD－2005、3004（Fig. 23）

2005、3004は既存道路のため、寸断されているが、規模や方向から一連の溝と考える。Ⅱ、Ⅲ区の東端に位置し、N—23°—Wの方位をとる。検出できた長さは１４ｍ、幅５０cm、深さ７０cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は弥生土器が少量出土した。

出土遺物が少ないため、時期は不明確だが、弥生時代後期に位置づけられる。

SD－1009、2005・3004は方向は直行し、規模も類似している。時期的にも同時期と考えられ、鉤形に折れる区画の溝と考えられる。溝の内側は攪乱が多いため、性格は確定できない。

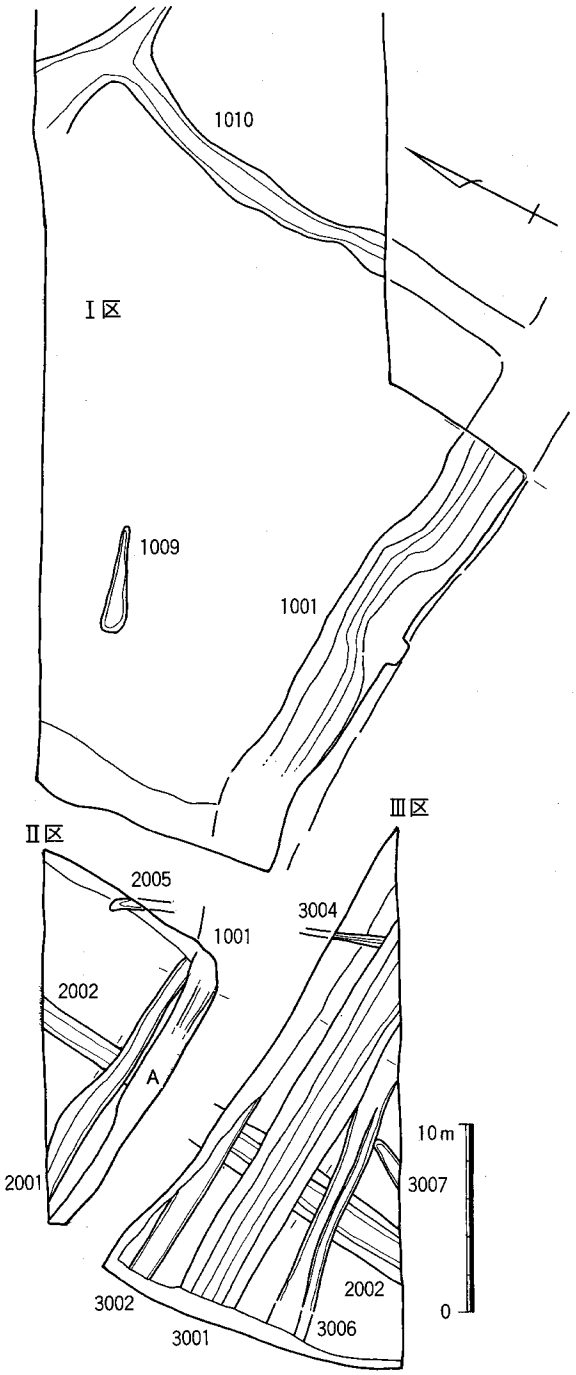
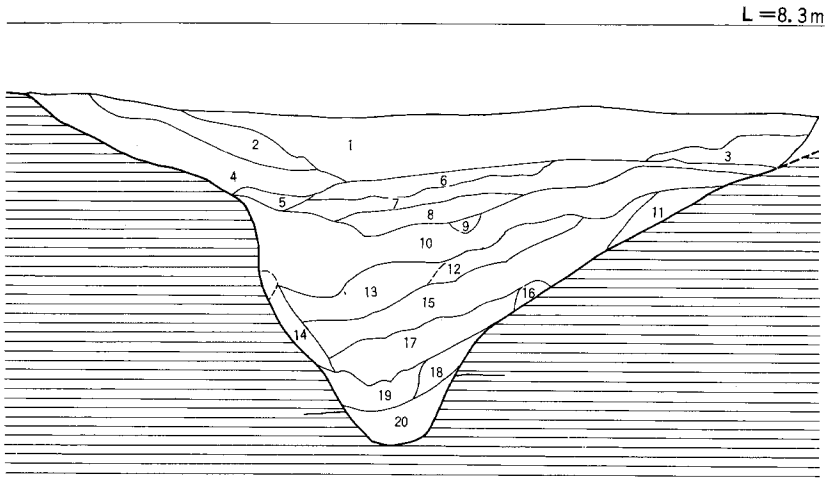
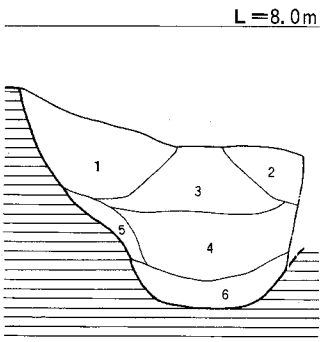


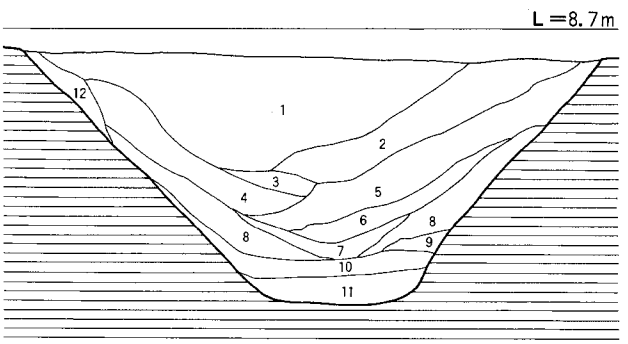
Fig. 23　溝（SD）遺構配置図（1/400）



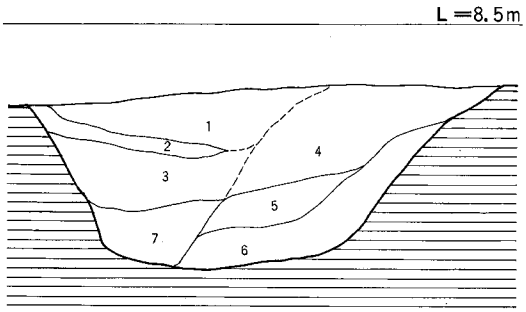
Ⅰ区SD－1001土層
1．淡黄褐色粘土(灰褐色粘土混る)
2　淡黄褐色粘土(やや暗い灰褐色粘土混る)
3．淡黄褐色粘土(炭化物混る)
4．やや暗い灰褐色粘土(しまっている)
5．4と同じ
6．灰褐色粘土(炭化物混る)
7．4＋(炭化物混る)
8．暗黄褐色粘土
9．灰褐色粘土
10．淡黄橙色粘土
11．鳥栖ローム(ブロック状)
12．八女粘土(ブロック状)
13．10＋(八女粘土ブロック混る)
14．淡黄橙色粘土(しまりがない)
15．10と同じ
16．11と同じ
17．明淡黄橙色粘土
18．やや暗い灰褐色粘土
19．暗灰褐色粘土
20．灰褐色粘土(八女粘土混る)



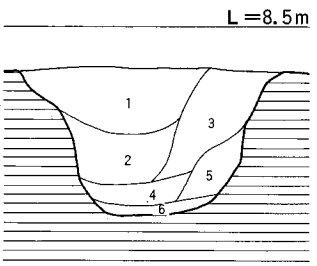
Ⅱ区SD－1001土層
1．茶褐色粘土(ロームブロック混る)
2．やや暗い茶褐色粘土
3．茶褐色粘土
4．灰褐色粘土（炭化物混る）
5．灰褐色粘土（八女粘土混る）
6．5と同じ



SD－3001土層
1．茶褐色粘土(炭化物混る)
2．暗褐色粘土(黄褐色粘土ブロック混る)
3．黄褐色粘土(暗褐色粘土ブロック混る)
4．暗褐色粘土(黒褐色粘土ブロック混る)
5．4＋(炭化物混る)
6．暗褐色粘土
7．暗茶褐色粘土
8．7＋(黒褐色＋褐色粘土ブロック混る)
9．7＋(黒褐色粘土ブロック混る)
10．7＋(褐色粘土ブロック混る)
11．黄褐色粘土(ローム混る)
12．茶褐色粘土



Ⅲ区SD－2002土層
1．淡暗茶褐色粘土
2．暗褐色粘土(ローム混る)
3．暗茶褐色粘土(ローム、炭化物混る)
4．やや淡い暗茶褐色粘土
5．暗黄褐色粘土(ローム粒子混る)
6．暗黄褐色粘土(ローム、炭化物混る)
7．暗褐色粘土(ローム粒子混る)



Ⅱ区SD－2002土層
1．暗茶褐色粘質土(炭化物混る)
2．暗茶褐色粘土(ローム粒子、瓦混る)
3．茶褐色粘土(ローム粒子混る)
4．やや暗い茶褐色粘土(炭化物混る)
5．3＋(ローム粒子多く混る)
6．茶褐色粘土(ロームブロック混る)

0　2m

Fig. 24　SD－1001、2002、3001土層断面図（1/40）

SD－2001（Fig. 23）

Ⅱ区、Ⅲ区に連なる南北溝である。SC－3014を切り、SD－2002、3006等に切られる。N－3°－Eの方位をとる。検出できた長さは22mを測る。断面形は逆台形を呈する。幅、深さはⅡ区とⅢ区では差があり、Fig. 23のポイントAで溝の底に段差が見られる。Ⅱ区は幅150cm、深さ70cmを、Ⅲ区は幅250cm、深さ130cmを測る。土層を観察すると、掘り直しが行われていることがわかる。Ⅱ区で検出した部分はⅢ区より後出する。出土遺物には大きな時期差は見られない。遺物は主に土師器、須恵器等が出土した。また、瓦もコンテナ箱で3箱出土した。SC－3014との関係から、掘削の時期は7世紀中葉以後、埋没の時期はSD－3006との関係から9世紀まで下がらないものと考えられる。また、出土遺物から溝の存続時期を7世紀末から8世紀中頃に位置づけたい。

出土遺物（75～137）

75～81は下層、82～106は上層から出土した。75～79は須恵器、80、81は土師器である。75～77は坏蓋である。天井部には偏平の撮みがつく。口縁端部は屈曲して下垂する。77は焼歪んでいる。器高2.7cm、2.9cm、1.7cm、口径15.0cm、15.5cm、15.2cmを測る。78、79は高台付の坏である。体部は直線的に立ち上がり、底部には断面方形の高台がつく。器高4.2cm、6.2cm、口径15.6cm、17.8cmを測る。80は甕口縁である。口縁はくの字形を呈し、外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。81は甑の把手である。断面円形である。

82～100は須恵器、101～106は土師器である。82～84は坏蓋で、天井部は丸く、口縁との境は不明瞭である。82は口径12.0cmを測る。83は天井部はヘラ切り未調整である。ヘラ記号がある。器高3.7cm、口径11.0cmを測る。84は天井部に回転ヘラケズリを施す。口縁は欠損している。ヘラ記号がある。85は坏身で、短く立ち上がる受け部がつく。底部はヘラ切り未調整である。器高3.4cm、口径10.0cmを測る。底部にはヘラ記号がある。86～89は坏蓋である。天井部に偏平の撮みがつく。口縁端部は屈曲して下垂する。86は器高3.1cm、口径16.0cm、87は口径16.5cm、88は器高2.2cm、口径16.6cm、89は器高3.5cm、口径19.8cmを測る。90～95は高台付の坏である。90はハの字形を呈する高台がつく。底部にはヘラ記号がある。器高4.1cm、口径13.0cmを測る。91～95は断面方形の高台がつく。体部は直線的に立ち上がる。器高3.7cm、3.5cm、3.7cm、4.6cm、5.5cm、口径14.0cm、13.5cm、16.6cm、14.7cm、18.0cmを測る。96は高坏の脚部である。裾は緩やかに開き、端部は僅かに下垂する。97は長頸壺の底部である。底部には高い方形の高台がつく。98、99は甕口縁である。98は口縁下に突帯がつく。100は短頸壺である。口縁は直立し、体部は偏球形を呈する。体部は回転ヘラケズリを施す。器高9.5cm、口径12.0cmを施す。101～104は甑の把手である。断面は円形を呈する。105は壺で、口縁は直立する。体部は球形を呈する。106は高坏の脚部で、裾部で折れる。外面にはヘラミガキを施す。107は土製の玉である。手捏ねによる成形で、器面には指頭痕が残る。径1.5cmを測る。

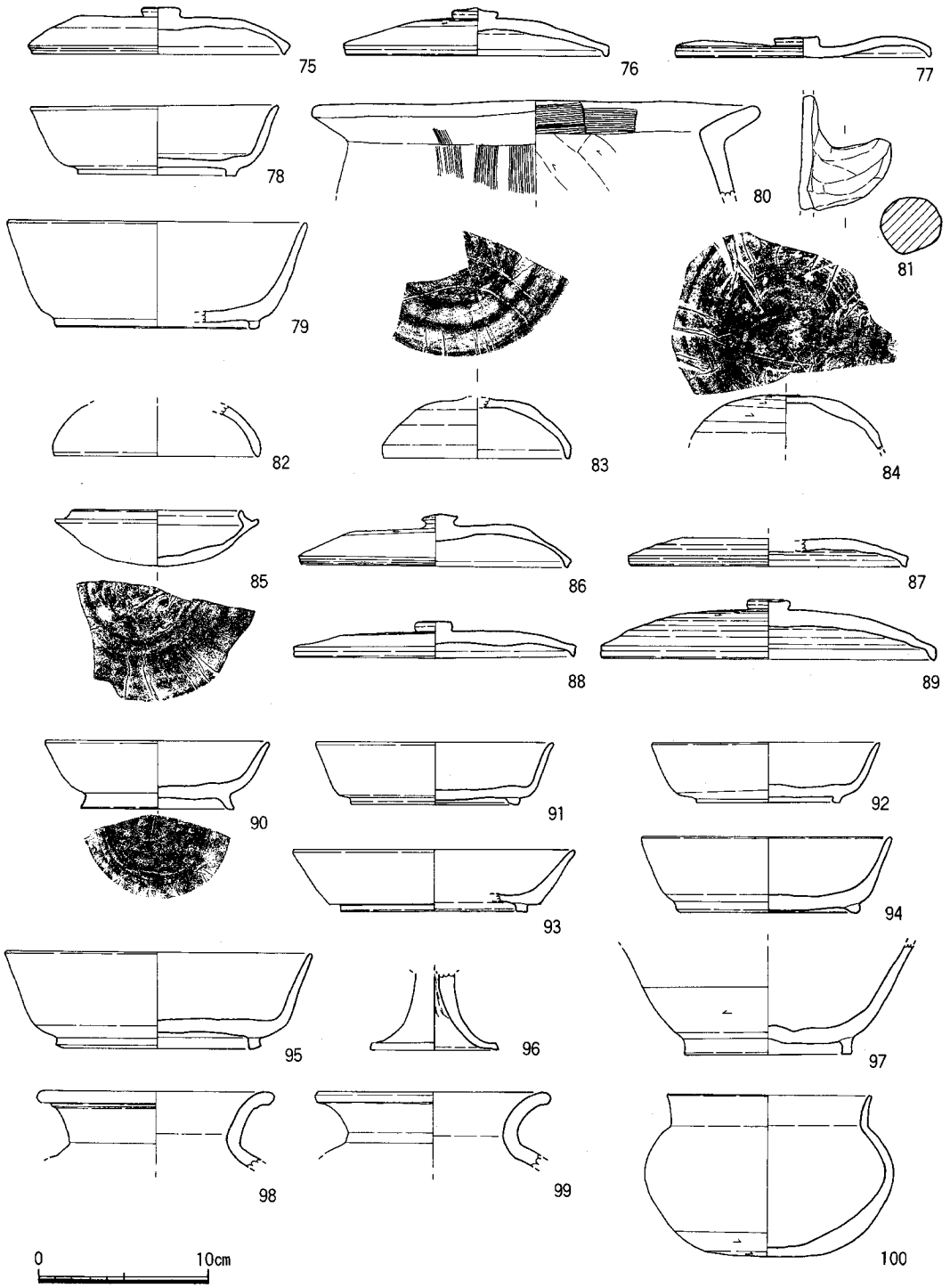


Fig. 25　SD－2002出土遺物実測図（1）（1／4）

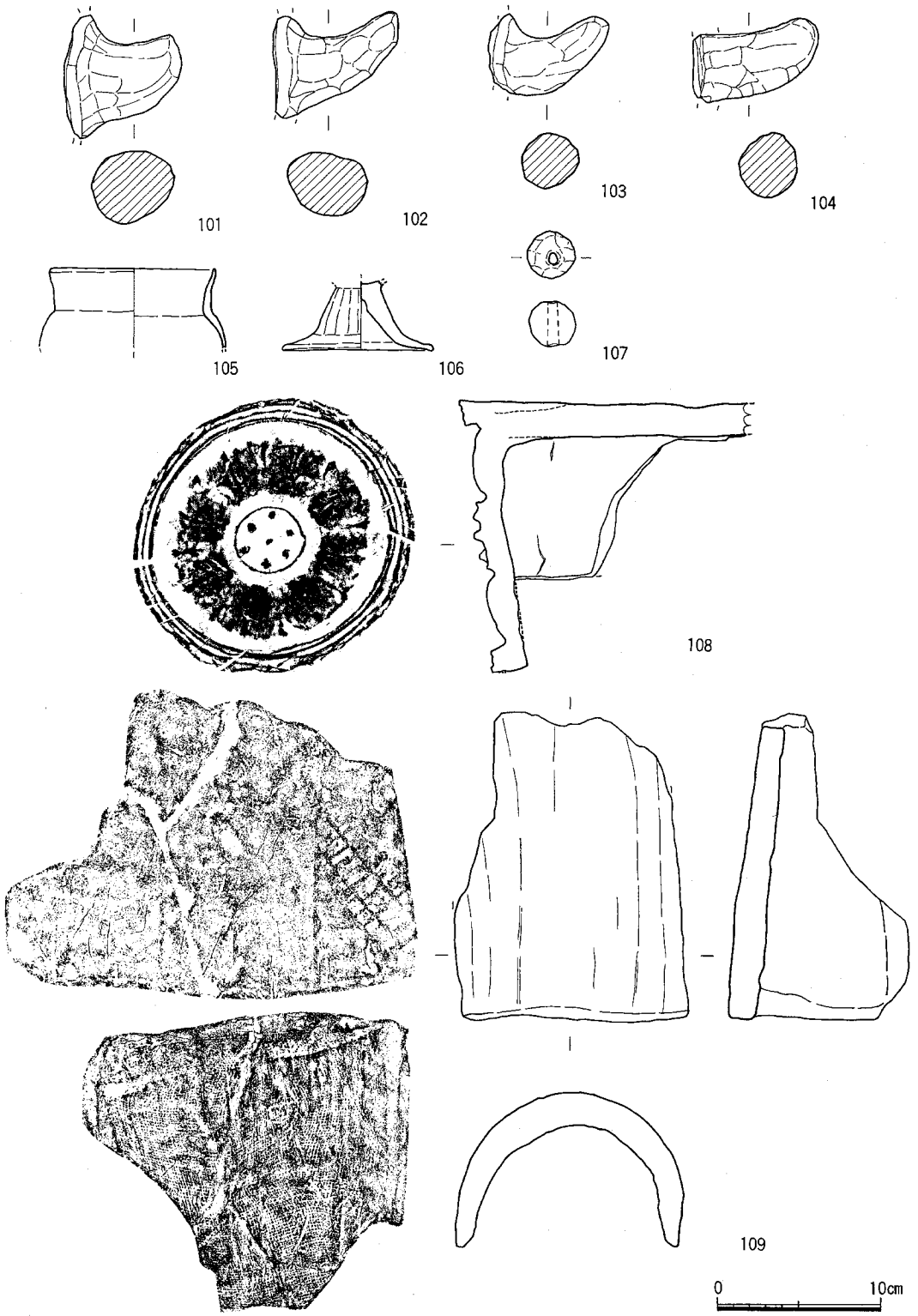


Fig. 26　SD－2002出土遺物実測図（2）（1／4）

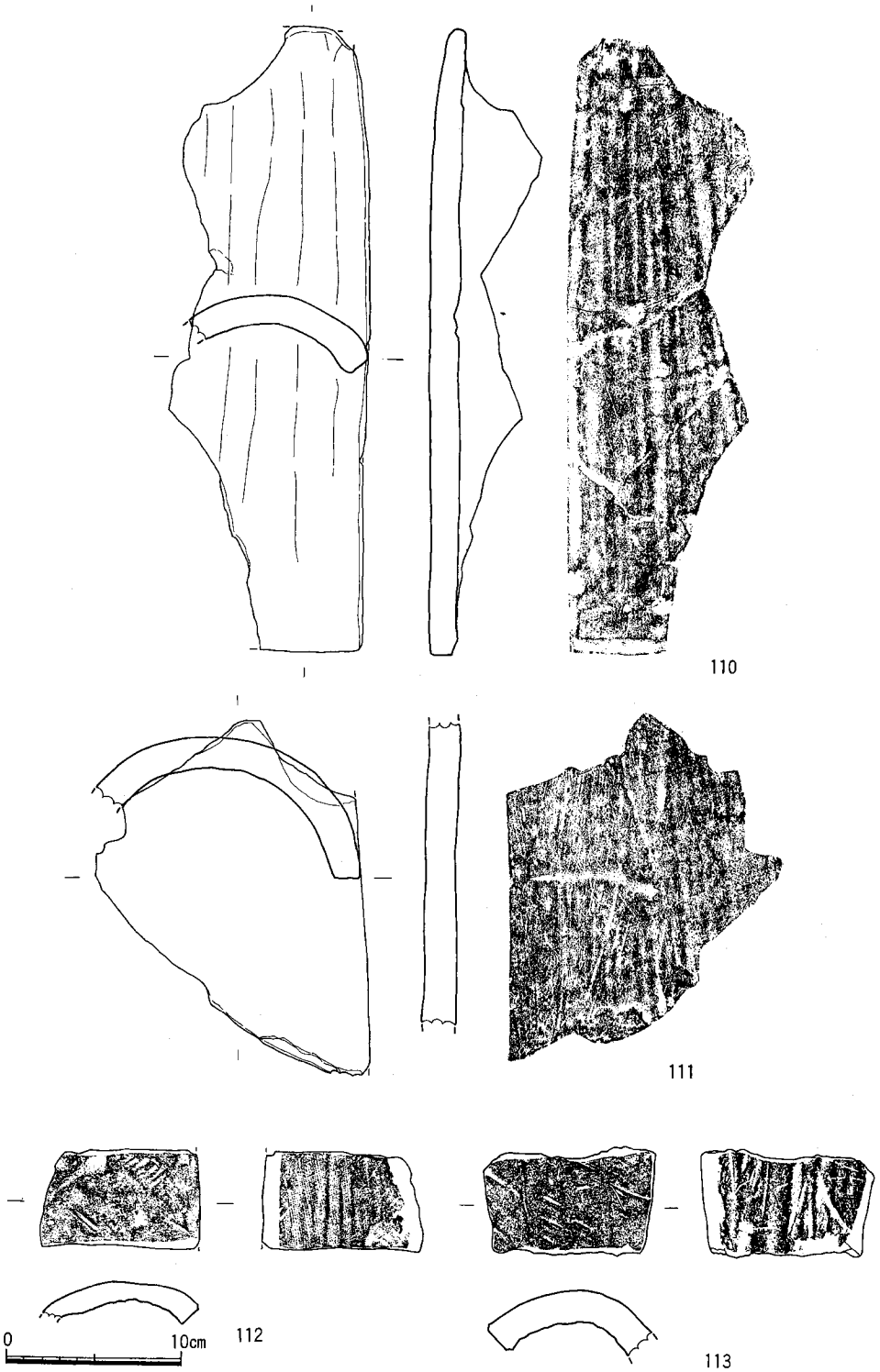


Fig. 27　SD－2002出土遺物実測図（3）（1／4）

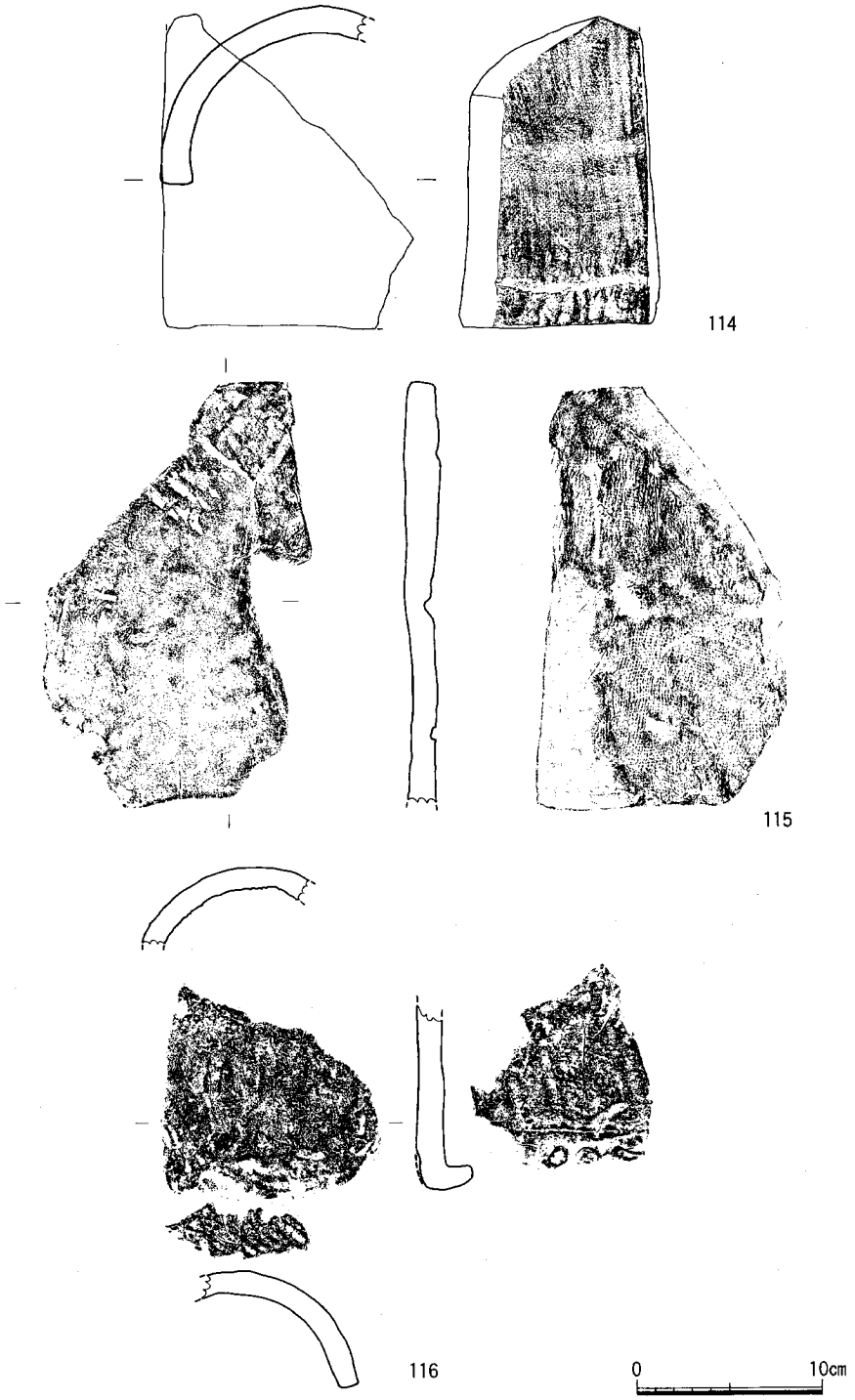


Fig. 28　SD－2002出土遺物実測図（4）（1／4）

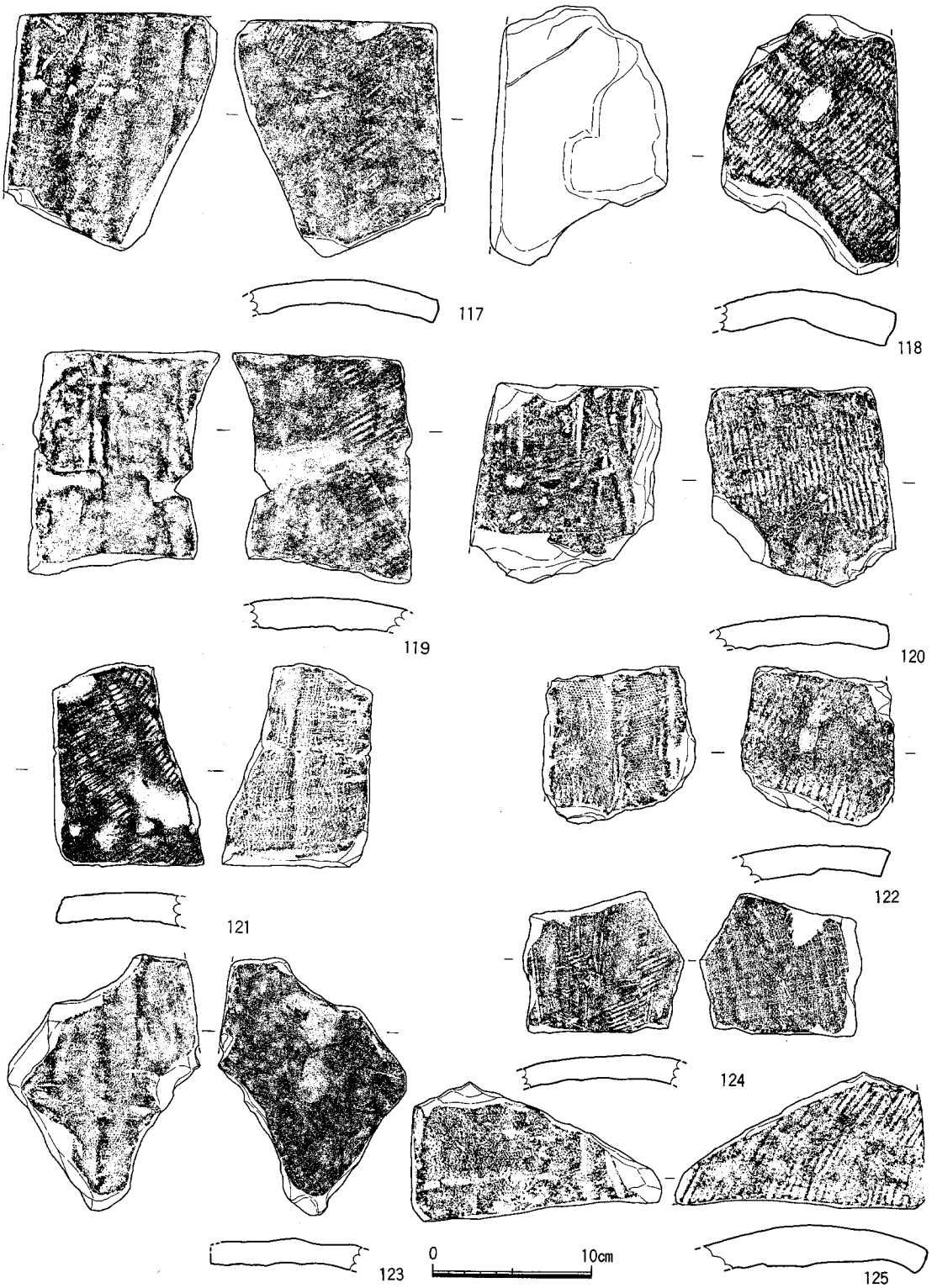


Fig. 29　SD－2002出土遺物実測図（5）（1／4）

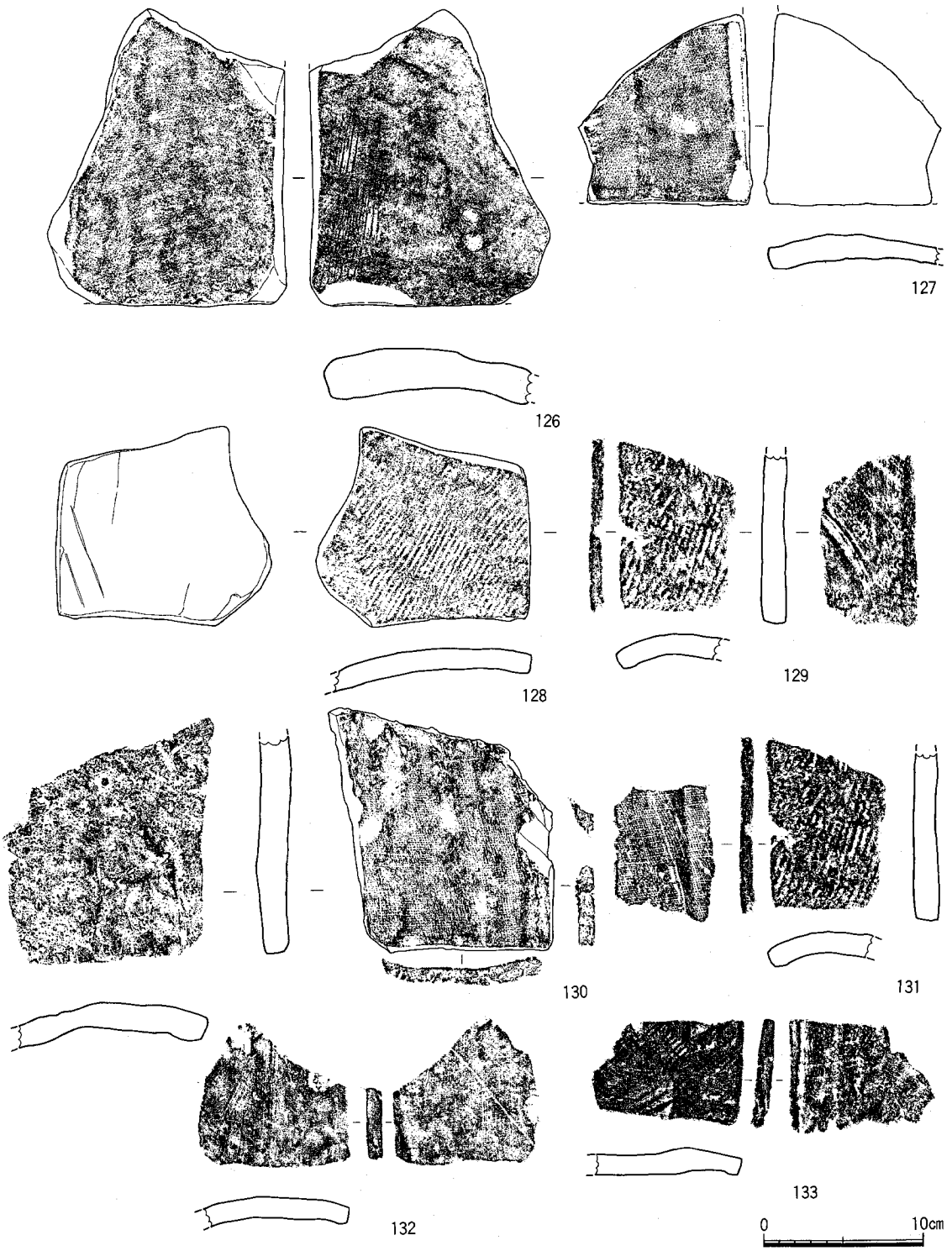


Fig. 30　SD－2002出土遺物実測図（6）（1／4）

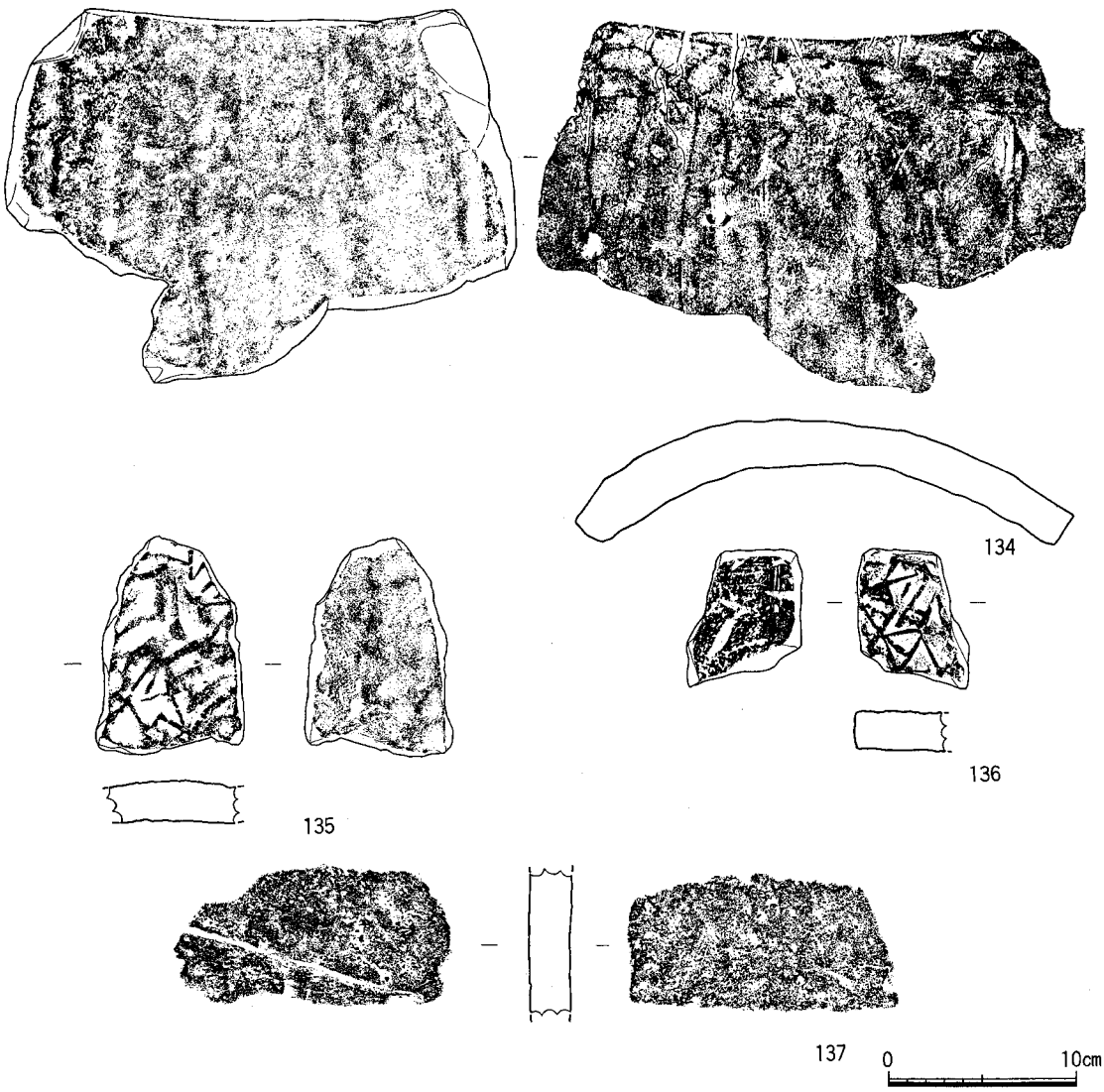


Fig. 31　SD－2002出土遺物実測図（7）（1／4）

2002からは総数で約200片の丸瓦、平瓦等が出土した。108は軒丸瓦、109～116は丸瓦、117～136は平瓦である。

108は百済系単弁軒丸瓦である。中房は小さく、蓮子は1－6の配置である。蓮弁は8弁で、花弁の中央の稜は鋭いが、弁端、間弁は不明瞭である。外縁には4条の圏線が巡る。外区径17.0cm、内区径14.0cm、中房径4.2cm、厚さ2.0cmを測る。丸瓦部は凸面は叩きをすり消している。凹面は布目が残る。磨滅のため、模骨痕は不明瞭だが、竹状の模骨である。瓦当との接合部の粘土が一部剥落しており、その部分を観察すると、瓦当との接合は裏面の上端に刻みをい

れた丸瓦端部をあて、粘土で補強するという方法をとっている。焼成は軟質で、淡黄橙色を呈する。

109～116は丸瓦である。111、114は須恵質、それ以外は土師質である。111、114は凸面は叩きをすり消す。凹面は布目と模骨痕が残る。模骨は竹状模骨である。109は布の合わせ目の痕跡が見られる。114は端面付近に布の綴じ合わせの痕跡が見られる。端面、側面はヘラケズリが施される。109、110、112、113、115は前述のものと比べるとやや薄手である。凸面は平行叩きの後、縦方向にすり消す。内面は布目と竹状模骨痕が残る。112は粘土板の継ぎ目が観察できる。これらはSC－3014出土の丸瓦に類似する。116は丸瓦の端部である。端部は凹面側に折り返す。凸面の端から折り返し部分にかけて粘土の剥離がみられ、瓦当が接合していた可能性がある。凸面はすり消し、凹面には布目が残る。

117～136は平瓦である。130以外は土師質である。117～133は凸面は平行叩き、または平行叩きをすり消す。凹面は布目と模骨痕を残す。側面と端面はヘラケズリを施す。大半が器壁は1.2～1.5cm程度の薄手のものである。134は両側面と端面の一方が残るものである。凸面はヘラケズリを施し、叩き目は残らない。凹面は布目と模骨痕が残る。側面と端面はヘラケズリが施される。135、136は凸面は大きめの格子目叩きで、凹面は布目と模骨痕が残る。

137は鴟尾の鰭部と考える。表面は磨滅しているが、器面の一方に沈線状の段が見られる。器面の調整はナデと考えられる。土師質で、色調は灰白色を呈する。厚さは2cmを測る。34次調査地点でも鴟尾の鰭部が出土している。

SD－3007（Fig. 23）

Ⅲ区の中央に位置する。SD－3006を切られる、N－26°－Eの南北溝である。幅80cm、深さ30cmを測る。遺物は土師器、須恵器等(147、148)が出土した。時期は7世紀前半代と考える。

SD－3006（Fig. 23）

Ⅲ区の中央に位置する。SD－2002を切る、N－77°－Eの東西溝である。2条の溝の切りあいである。幅150cm、深さ30cmを測る。遺物は土師器、須恵器等が出土した。時期は9世紀代と考える。

SD－2001、3002（Fig. 23）

SD－2001はⅡ区の南側で検出した。SD－2002を切る、N－90°－Eの東西溝である。幅・100cm、深さ20cmを測る。SD－3002はⅢ区の北側に位置する。N－90°－Eの東西溝である。幅100m、深さ20cmを測る。遺物は中国製白磁、土師器等が出土した。両者の溝は規模、方向とも類似しており、併存していたと考えれる。溝の間は既存道路のため、削平されているが、道路の側溝の可能性がある。時期は出土遺物から12世紀代と考える。

出土遺物（141～146）

138はSD－2001、142～144はSD－3002から出土した。141は玉縁口縁の白磁碗である。142、143は土師器皿である。底部の切離しは糸切りである。144は白磁碗である。

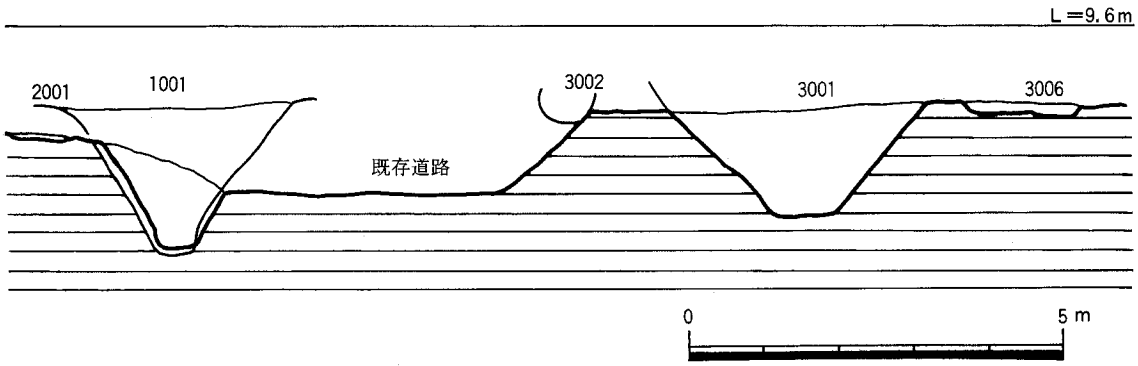


Fig. 32　溝南北断面図（1/100）

SD－3001（Fig. 23）

SD－3001はⅢ区の中央で検出した。SD－2002を切る、N－90°－Eの東西溝である。幅300cm、深さ130cmを測る。断面形は逆台形である。土層を観察すると、埋土は南側から流れ込んだ様子が見られる。遺物は非常に少なく、土師器、口禿の白磁等が出土した。時期は確定できないが、14世紀以降と考えられる。

SD－1001（Fig. 23）

SD－1001はⅠ、Ⅱ区の南側で検出した。N－90°－Eの東西溝である。幅400cm、深さ180cmを測る。断面形はV字形である。土層を観察すると、埋土は南側から流れ込んだ様子が見られる。溝は直線的に延びるが、Ⅰ区の中央で北側に張り出している。遺物は主に最下層から土師器、李朝の白磁、軒丸瓦、石臼等が出土した。瓦は張出部を中心に出土した。掘削の時期は16世紀代と考える。

出土遺物（150～165）

150～153は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。器高1.0cm～1.7cm、口径6.0cm～7.6cmを測る。154は玉縁口縁の白磁碗である。155は李朝の白磁碗である。釉色は灰白色を呈し、釉には氷裂が入る。高台畳付から内側は露胎である。見込みには目跡が4カ所残る。156は明代の染付である。157は青磁壺で、断面台形の低い高台がつく。高台畳付には目跡が残る。釉は外面のみかかる。畳付から内側は露胎である。釉色は暗青緑色を呈する。158は伊万里系の碗である。159は国産の施釉の陶器蓋である。釉色は青緑色を呈する。160は石臼である。161～163は巴文の軒丸瓦である。巴の尾は長く、反時計回りである。珠文は20個である。164は菱形の文様をもつ軒丸瓦、165は唐草文の軒平瓦である。

SD－1010（Fig. 23）

SD－1010はⅠ区の東側で検出した。N－0°－Eの南北溝である。幅150cm、深さ80cmを測る。断面形はV字形である。この溝は更に北側に延びていき、那珂八幡古墳の周濠に合流す

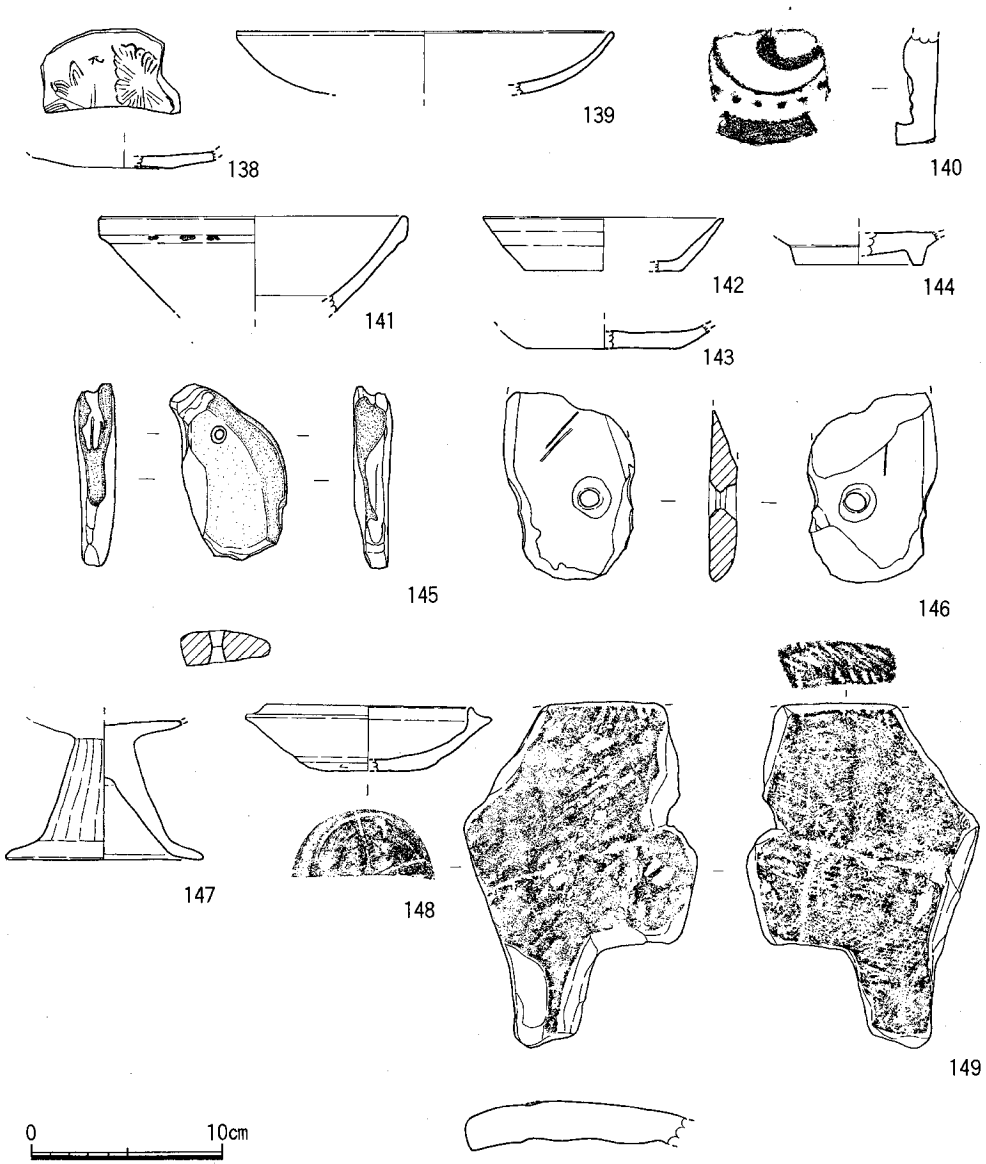


Fig. 33　溝出土遺物実測図（1／4）

る。そして、周濠の外側の肩に沿って、東西に分岐する。遺物は白磁等が出土した。時期は確定できないが、掘削の時期は16世紀代と考える。

SD－1001、SD－1010は同時期の溝であり、両者は一連の溝と考えられる。

出土遺物（138～140）

138は白磁皿である。底部は平底で、見込みにはヘラ描きによる花文が施される。釉色は淡灰褐色を呈する。底部のみ露胎である。139は青白磁碗である。釉は全面にかかり、釉色は淡青灰色を呈する。140は巴文の軒丸瓦である。珠文は小さく、巴の尾は長く、反時計回りである。

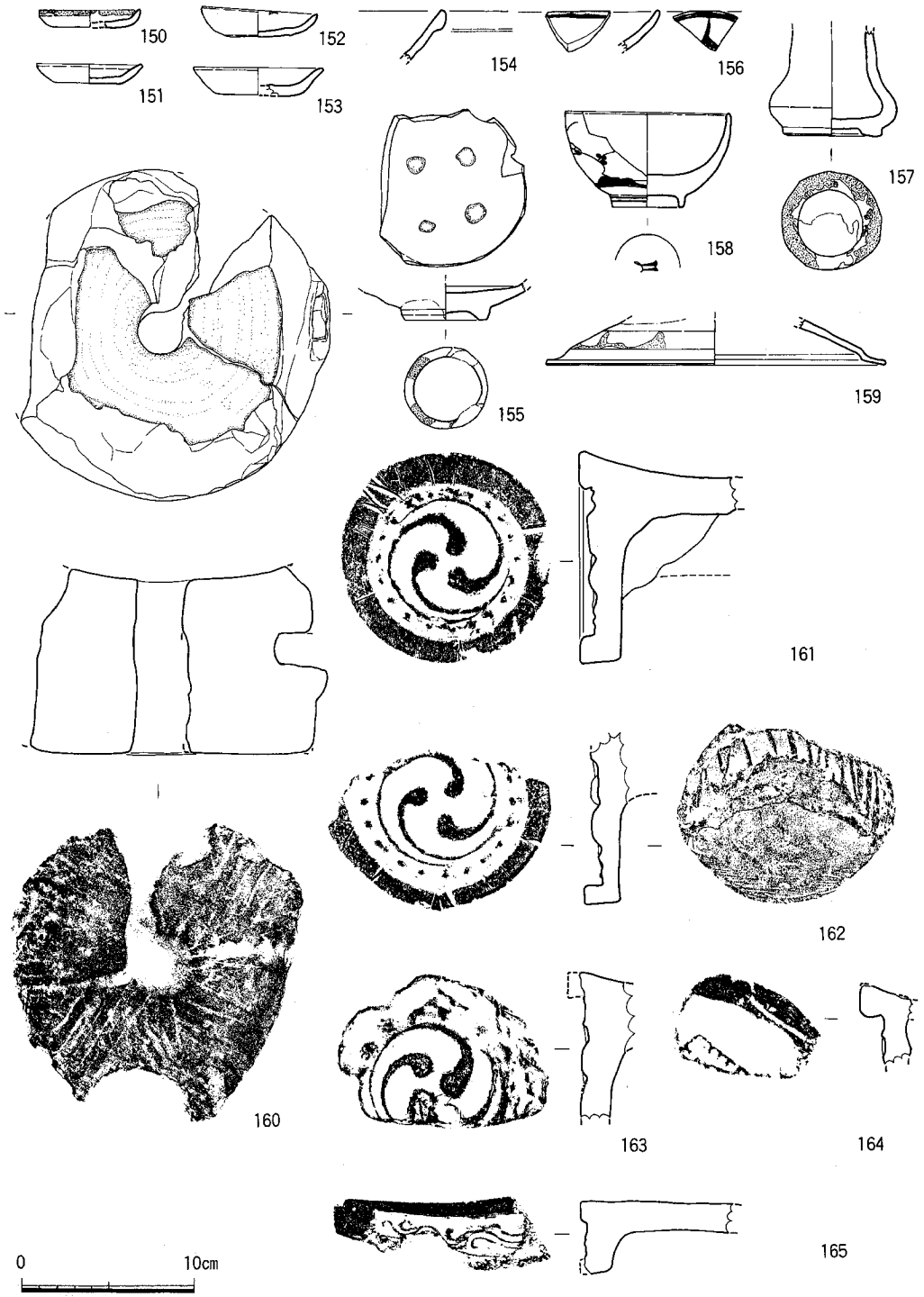


Fig. 34　SD－1001出土遺物実測図（1／4）

5　土坑（SK）

土坑は７基検出した。ここでは主な土坑について述べていく。

SK－1005（Fig. 35）

Ⅰ区の中央で検出した。平面形は楕円形を呈し、長さ135cm、幅100cm、深さ60cm を測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、坑底で土師器甕が出土した。時期は古墳時代後期と考えられる。

SK－1018（Fig. 35）

Ⅰ区の東側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長さ84cm、幅65cm、深さ60cm を測る。坑内に弥生土器の大甕が倒立した状態で出土した。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は弥生土器の甕、壺等が出土した。時期は弥生時代終末と位置づけられる。

出土遺物（166）

166は弥生土器の甕である。口縁はくの字に折れ、長く延びる。頸部には断面三角形の突帯がつく。体部は倒卵形で、胴部最大径は中位にある。胴部中位からやや下がったところに刻みを施した突帯がつく。内外面とも粗いハケメを施す。口径37. 5cm を測る。

SK－2003（Fig. 35）

Ⅰ区の東側で検出した。調査区の北側に遺構は広がる。平面形はＬ字形を呈し、二つの土坑の可能性はあるが、切りあいは確認できなかった。幅約200cm、深さ50cm を測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期中葉に位置づけられる。

出土遺物（167～174）

167～174は弥生土器である。167は鋤先口縁の広口壺である。口縁端部には刻目が入る。168～172は逆Ｌ字形口縁の甕、171はくの字口縁の甕である。172～174は平底の甕底部である。

SK－3003（Fig. 35）

Ⅲ区の北側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長さ70cm、幅60cm、深さ20cm を測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は坑底で完形の須恵器坏が出土した。時期は７世紀末に位置づけられる。

出土遺物（175、176）

175、176は須恵器である。175は坏蓋で、天井部に偏平の宝珠撮みがつく。口縁内側には短いかえりがつく。器高2. 5cm、口径12. 6cm を測る。176は坏身で体部は直線的に立ち上がり、底部に断面台形の高台がつく。器高4. 0cm、口径13. 6cm、高台径9. 5cm を測る。

SK－3005

Ⅲ区の北側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長さ120cm、幅100cm、深さ20cm を測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は須恵器、土師器が出土した。時期は７世紀中葉に位置づけられる。

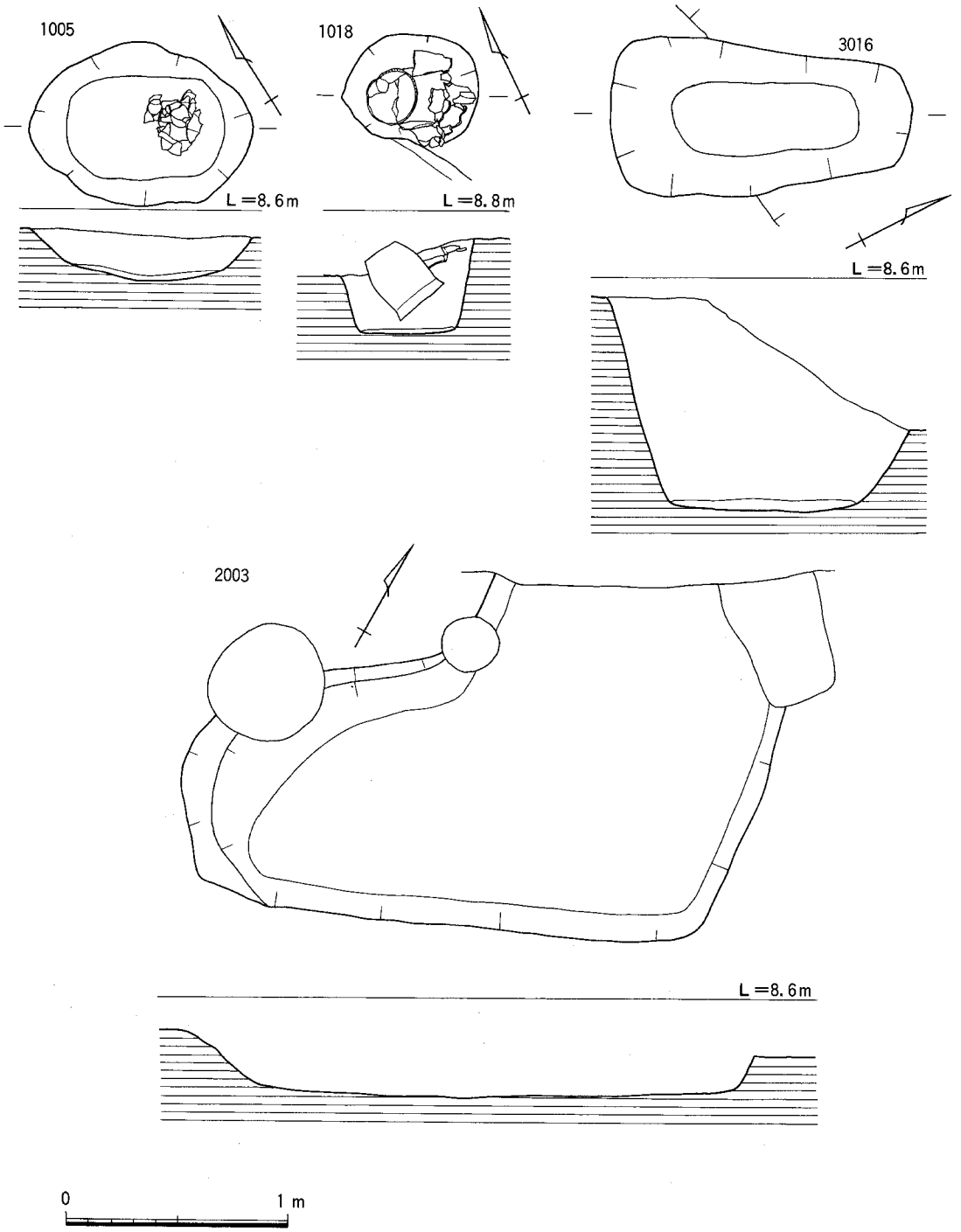


Fig. 35　SK－1005、1018、2003、3016実測図（1/40）

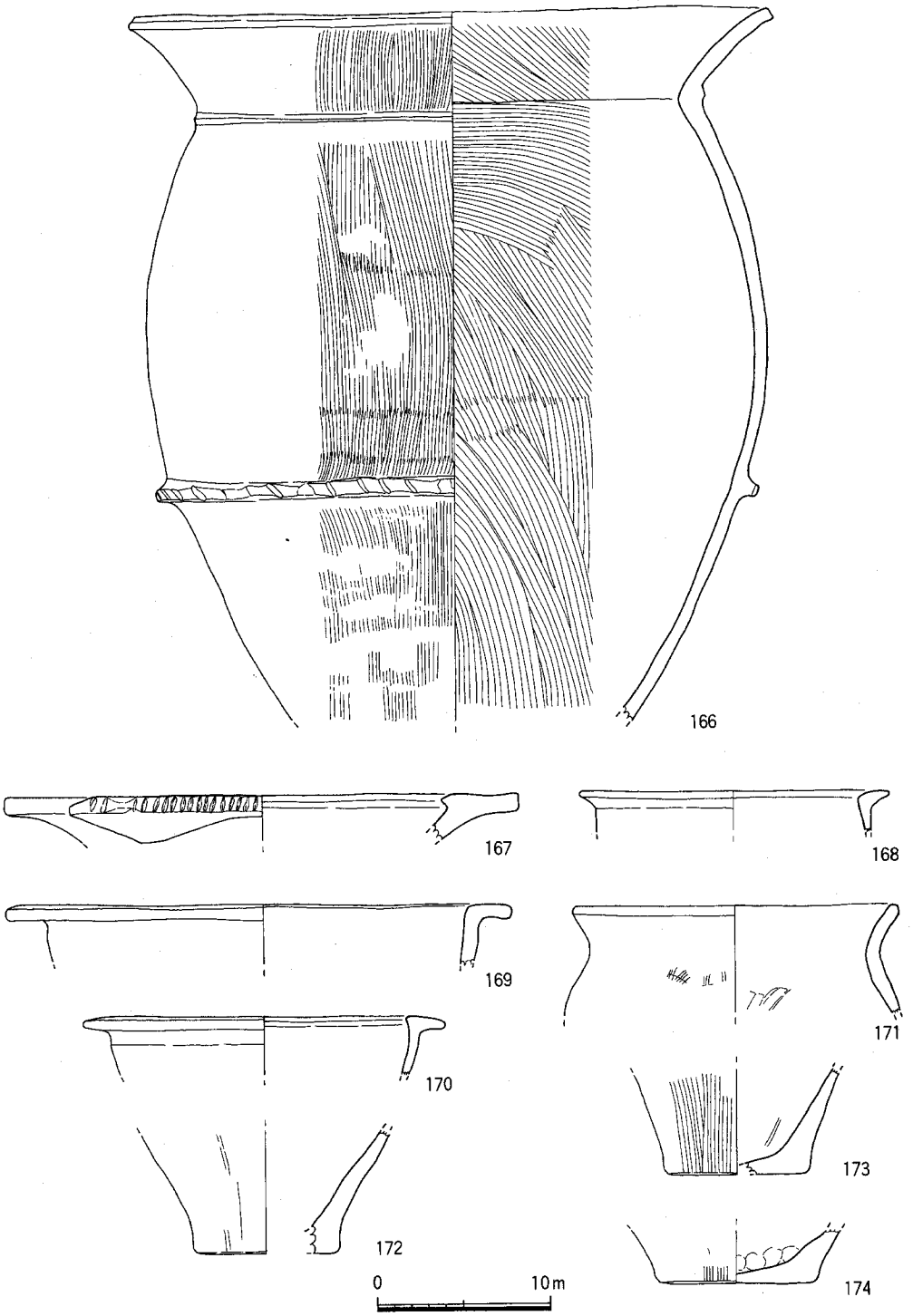


Fig. 36　土坑出土遺物実測図（1）（1／4）

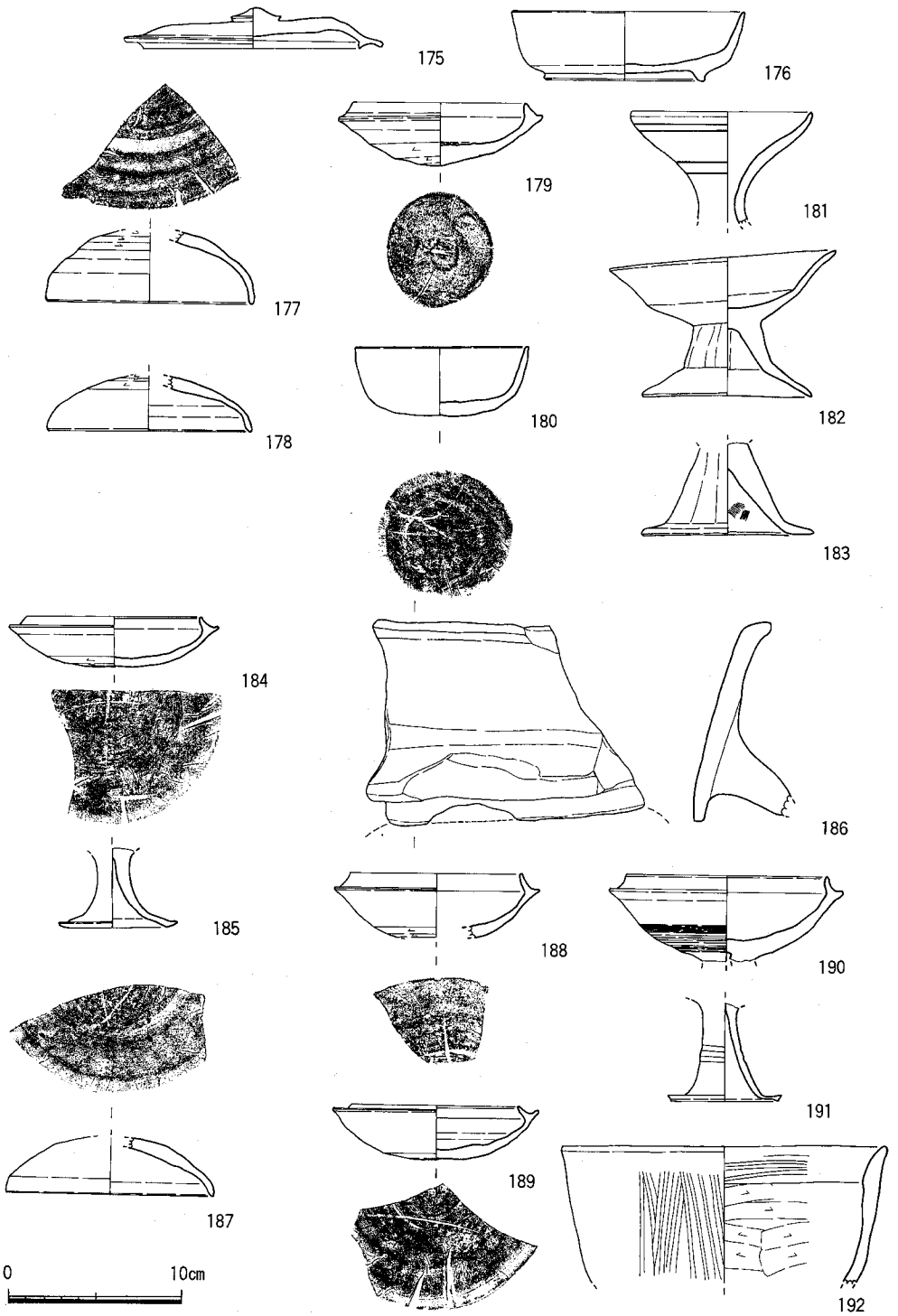


Fig. 37　土坑出土遺物実測図（2）（1／4）

出土遺物（177～183）

177～181は須恵器で、182～183は土師器である。177、178は坏蓋で、天井部に丸みをもち、口縁との境は不明確である。天井部は回転ヘラケズリを施す。口径12.2cm、12.0cmを測る。177は天井部にヘラ記号がつく。179は坏身で、受け部は短く内側に立ち上がる。底部の2/3に回転ヘラケズリを施す。器高3.6cm、口径10.2cmを測る。底部にはヘラ記号がつく。174は坏身で、口縁は直線的に立ち上がる。底部は丸みをもつ。底部には回転ヘラケズリを施す。器高3.8cm、口径10.0cmを測る。底部にはヘラ記号がつく。181は甕である。口縁は大きく広がる。口縁と頸部に沈線がつく。口径10.5cmを測る。182、183は高坏である。182は坏部の下半で屈曲し、口縁は外反する。脚部はハの字形に開き、裾部で折れて、端部で接地する。器高8.4cm、口径13.2cmを測る。183は脚部はハの字形に開き、裾部で折れ、裾部の内側が接地する。外面は縦方向のナデを施す。

SK－3011

Ⅲ区の中央で検出した。SD－3001、3006に両側を切られる。平面形は長方形を呈し、幅50cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は須恵器、土師器等が出土した。時期は7世紀中葉に位置づけられる。

出土遺物（184～186）

184、185は須恵器で、186は土師器である。184は坏身で、短く内側に立ち上がる受け部がつく。底部の1/2に回転ヘラケズリを施す。器高2.8cm、口径10.2cmを測る。底部にはヘラ記号がつく。185は高坏の脚部で、ラッパ形に開く。裾端部はつまみ上げる。186は移動式の竈の掛け口から庇にかけての部分である。内外面ともナデを施す。色調は淡黄褐色を呈する。

SK－3016

Ⅲ区の北側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。長さ184cm、幅96cm、深さ130cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は須恵器、土師器等が出土した。時期は7世紀中葉に位置づけられる。

出土遺物（187～192）

187～191は須恵器、192は土師器である。187は坏蓋で、天井部は丸く、口縁との境は不明確である。天井部はヘラ切り未調整である。口径12.0cmを測る。天井部にはヘラ記号がつく。188、189は坏身である。短く内側に立ち上がる受け部がつく。端部は丸く仕上げる。底部の1/2に回転ヘラケズリを施す。器高3.7cm、3.0cm、口径10.0cm、9.6cmを測る。両者とも底部にはヘラ記号がつく。190は高坏の坏部である。口縁は短く内側に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。底部の1/2にカキメを施す。口径11.6cmを測る。191は高坏の脚部で、ラッパ形に開く。裾端部はつまみ上げる。192は甕で、口縁はわずかに外反する。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。

第４章　第34次調査の記録

１．調査の概要

調査地点は那珂八幡古墳の南側に位置する。那珂八幡古墳は福岡平野で最古式の前方後円墳であり、これまで昭和46年に九州大学考古学研究室が、昭和60年に福岡市教育委員会が調査を行っている。昭和60年の古墳の規模等の確認調査では、後円部の墳頂で２基の主体部を検出している。その内の第２主体部は割竹形木棺墓で、棺内から三角縁五神四獣鏡の他、勾玉、管玉、小玉等が出土している。そして、その調査成果から墳丘長約75m、古墳の周濠は盾形を呈する復元案が報告されている。

調査は1992年（平成４年）１月20日から３月31日までの３カ月間にわたって行った。調査前の現況は駐車場で、標高約8.5mを測る。調査面積は1110m²である。道路の計画線は墳丘の裾に一部かかるが、この部分は歩道の緑地帯として保存することで原局と協議し、その部分は墳丘の構造を把握するためのトレンチを設定するにとどめた。

調査は現地表から約40～100cmの造成土、旧耕作土を重機で掘り下げた後に行った。調査区の南側では約40cmの表土を除去すると、周濠の肩を検出した。周濠は便宜的に５区に分け、埋土は土層を観察しながら人力で掘り下げた。調査区の東側は以前在った住居による削平で、表土剥ぎは行ったが、遺構は遺存していなかったため、そこを残土置き場とした。

今回の調査で検出した遺構は弥生時代後期の井戸を８基、古墳の周濠、中世の井戸３基、溝である。

弥生時代後期の井戸は古墳の周濠の底面や肩の部分で検出した。墳丘に設定したトレンチでも墳丘の下で、弥生時代の遺構を検出しており、弥生時代の集落が在った場所に古墳を造営したと考えられる。

古墳の周濠は東側は削平されて遺存していなかった。周濠は南側の肩と墳丘裾に16世紀代に溝の掘削等が行われ、本来の形状が残っている部分は少ない。土層の堆積状態から、周濠は中世後半の段階は流れ込みによって埋没した、深さ約１mほどの窪みであったと考えられる。16世紀代の溝の掘削以後、ここは埋め立てられ、耕地として利用されたと考えられる。

遺物は井戸、周濠から弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦等が多量に出土した。その中に百済系単弁軒丸瓦や鴟尾等があり、周辺にそれらが使用されていた施設が予想される。

調査終了後、周濠は埋め戻し、墳丘も本来の裾から立ち上げる状態で復旧した。協議の結果、地上に露出する墳丘の裾は歩道の緑地帯として保存し、地下についても下水道等の埋設物はそれを避けるように設計変更して頂いた。

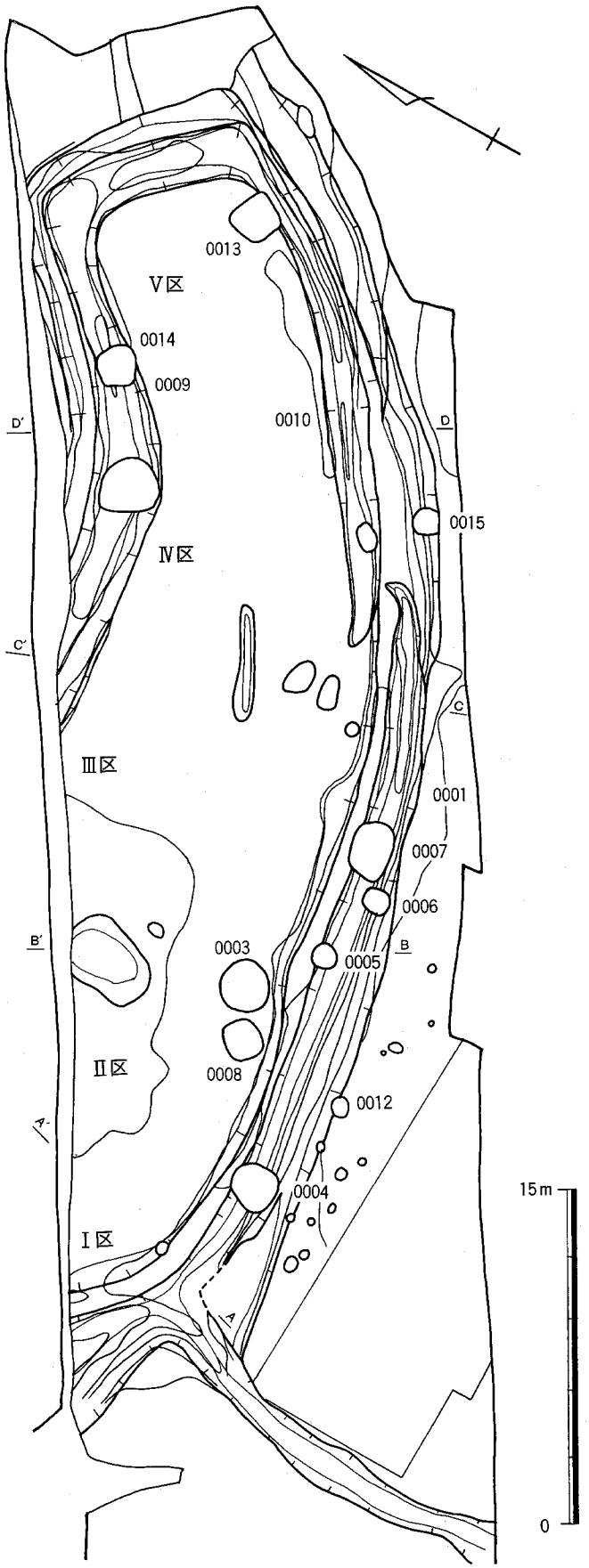


Fig. 38
第34次調査地点遺構
配置図（1/300）

2．井戸（SE）

井戸はⅡ区～Ⅴ区までで11基検出した。SE－0003、0013、0015以外はいずれも弥生時代後期に位置づけられ、素掘りである。井戸の底は八女粘土層までのものとさらに掘り下げて硬砂層まで達しているものがある。そのうち、Ⅳ区の北側にある井戸は昭和60年度の調査で既に調査されたものである。

SE－0003、0013、0015は中世期に位置づけられる。井戸の底は八女粘土層まで掘り下げている。井筒等は検出できなかった。

SE－0003（Fig. 39）

Ⅱ区の周濠の底面で検出した。平面形は円形を呈し、直径215～240cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り込み、硬砂層まで達している。深さ270cm、底面の標高4.2mを測る。埋土は上面から100cmは八女粘土まじりの黒褐色粘質土、150cmは黒色粘質土が堆積する。それ以下、底面まで白色粘質土(崩落した八女粘土）となる。遺物は各層で出土したが、白色粘質土の上面と底面で完形の弥生土器壺、鉢等が出土した。

出土遺物から時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

出土遺物（1～10）

1～10は弥生土器である。4、8は底面で、他は白色粘質土の上面で出土した。1、2は複合口縁壺である。2は口縁は緩やかに内湾し、屈曲部には明瞭な稜はつかない。頸部付け根はあまり窄まらす、胴部最大径は中位にあり、口径を上回る。底部は丸底である。調整は内外面とも粗いハケメを施す。3は広口壺である。口頸部は直線的に開く。胴部は縦長の球形を呈し、底部は尖り気味の丸底である。胴部最大径は口径を上回る。4は長頸壺

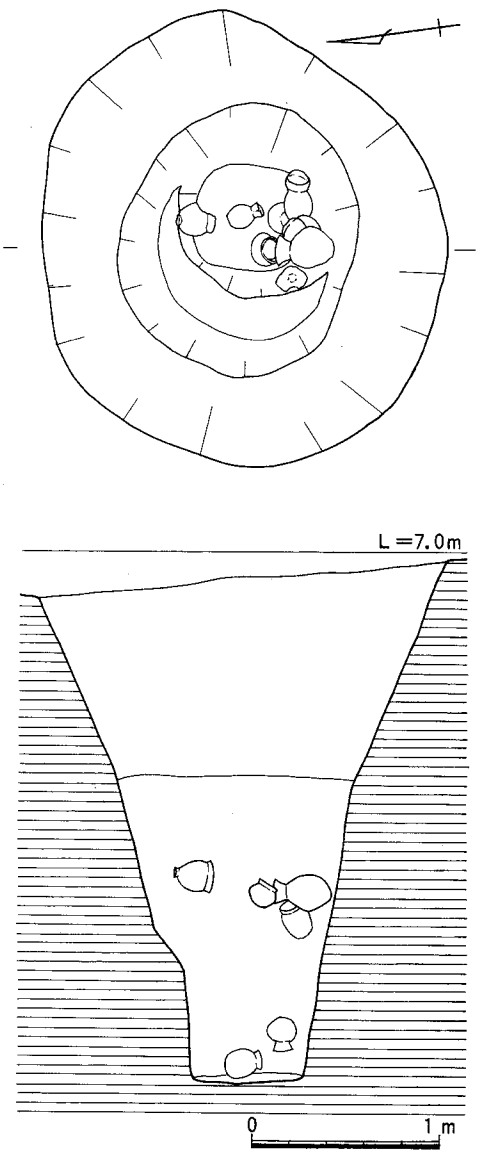


Fig. 39　SE－0003遺構実測図（1/40）

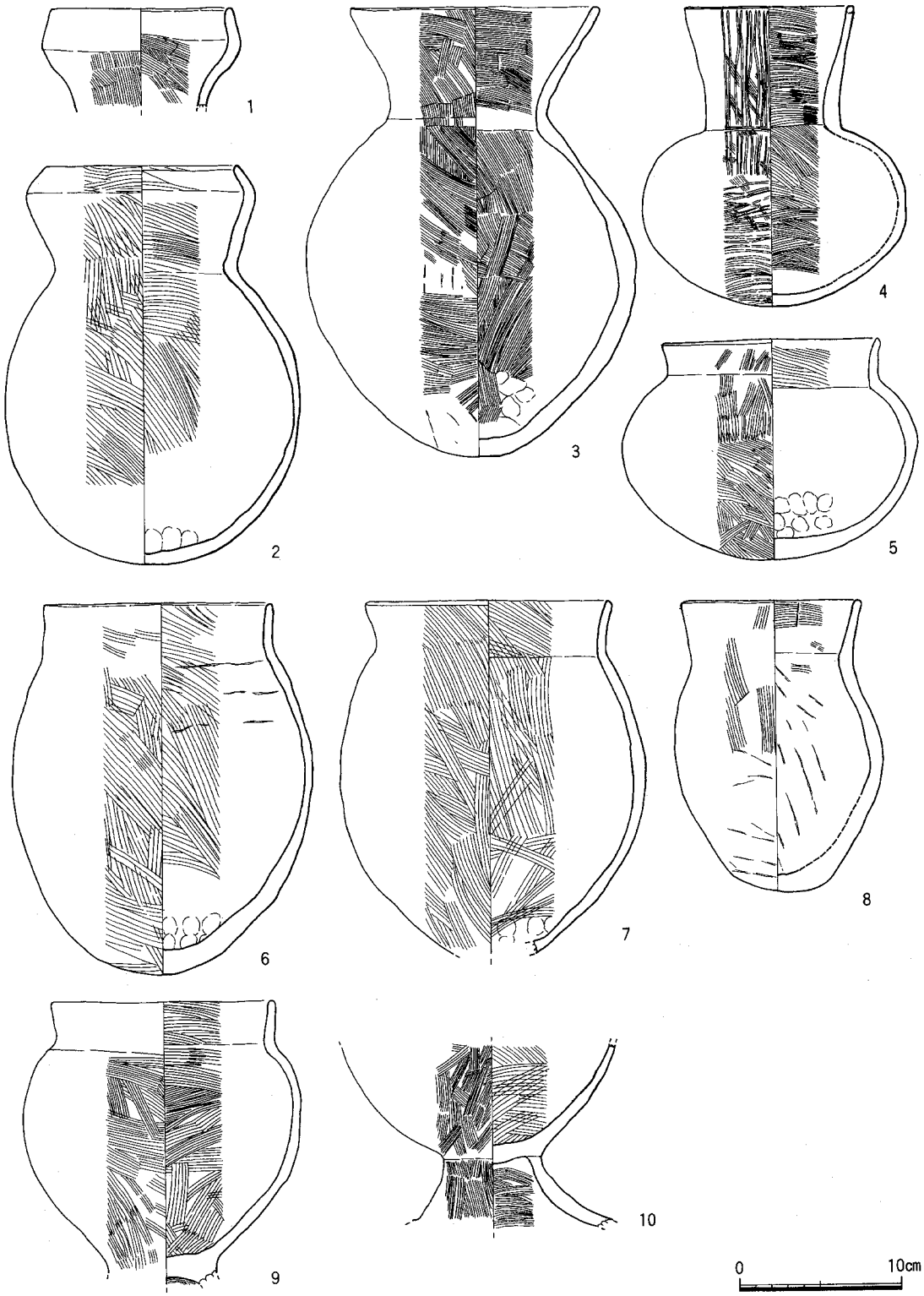


Fig. 40　SE－0003出土遺物実測図（1／4）

である。口縁は若干開き気味にのび、胴部は偏球形を呈する。底部は丸底である。調整は外面はヘラミガキ、内面はハケメを施す。5は短頸壺である。口縁は短く直立し、端部で僅かに外反する。胴部は偏球形を呈する。底部は丸底である。6、7、8は口縁は僅かに外反し、頸部はあまり窄まらず、明瞭な稜はつかない。胴部中位に最大径がある。底部は丸底である。今回の調査ではこのタイプの甕か壺か区別しにくい土器が多く出土した。今回の報告ではこのタイプの土器を短頸壺として記述していく。8は小型の壺で、底部は痕跡的な平底である。9、10は脚付鉢である。9は口縁は直立する。胴部最大径は上位にある。脚部は欠損している。調整は内外面ともハケメを施す。10は胴部上半は欠損している。底部にはハの字形に開く脚部がつく。

SE－0004（Fig. 41）

Ⅱ区の周濠の肩で検出した。上端の北側はSD－0001に切られる。平面形は円形を呈し、直径190～210cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ170cm、底面の標高5.7mを測る。埋土は上面から60cmは茶褐色粘質土が、それ以下は八女粘土まじりの暗褐色粘質土が堆積する。井筒等は検出できなかった。遺物は各層で土師器、須恵器、白磁等が出土したが、底面で花崗岩転石、完形の土師器小皿、瓦器碗が出土した。遺物は主に最下層から弥生土器が出土した。底面で完形の壺が5個体出土した。

出土遺物から、時期は12世紀前半に位置づけられる。

出土遺物（11～26）

13、14は底面で、それ以外は埋土の下層で出土した。11～13は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。器高1.1cm～1.3cm、口径9.0cm～9.4cmを測る。14～16は瓦器碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部には低い断面三角形の高台がつく。内外面は粗いヘラミガキを施す。14、15は器高5.2cm、5.3cm、口径17.2cm、16.8cmを測る。17～20は白磁碗である。17、18は玉縁の口縁、19は口縁の内側に沈線をもつ。21、22は白

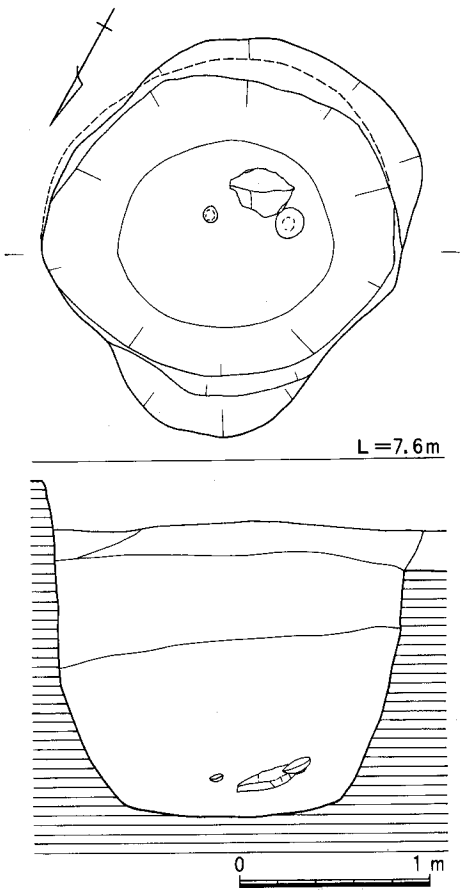


Fig. 41　SE－0004遺構実測図（1/40）

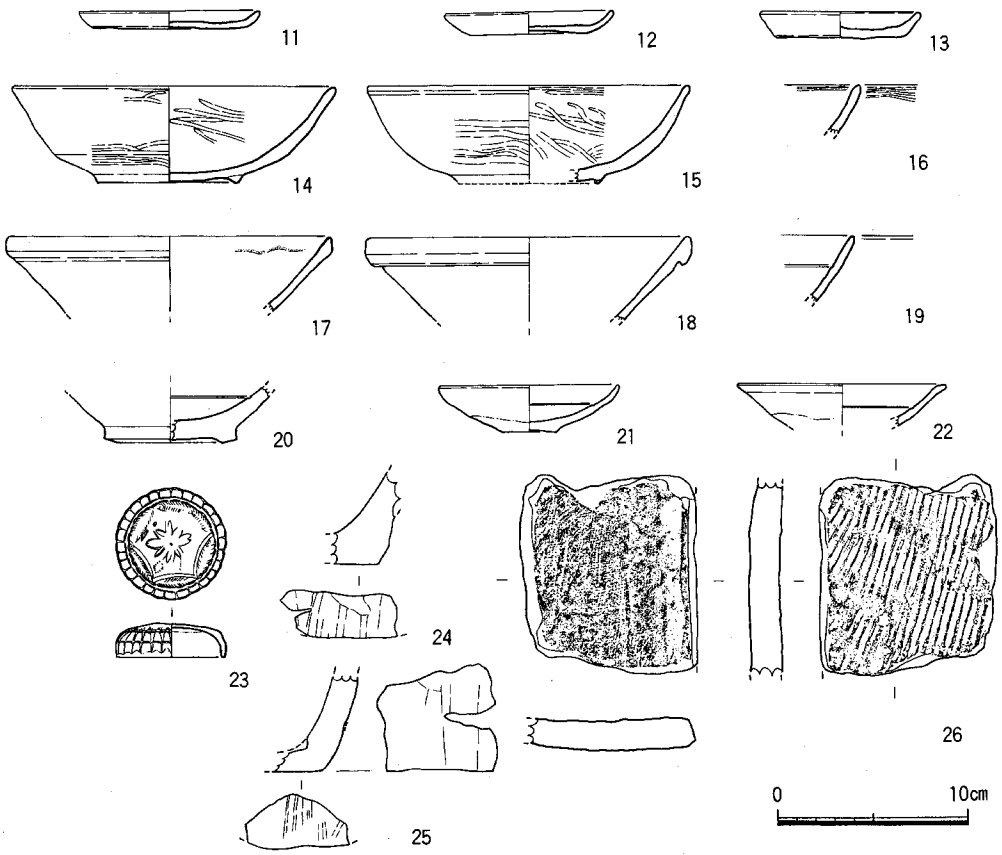


Fig. 42　SE－0004出土遺物実測図（1／4）

磁皿である。23は青白磁の合子の蓋である。天井部には花文を型押しする。内面は露胎である。24、25は滑石製の石鍋の底部である。26は平瓦で、凸面は平行叩き、凹面は布目と模骨痕が残る。焼成は須恵質である。

SE－0005（Fig. 43）

Ⅲ区の周濠の外側で検出した。平面形は円形を呈し、直径88～100cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り込み、硬砂層まで達している。深さ290cm、底面の標高4.0mを測る。埋土は上面から30cmは暗茶褐色粘質土で、割れた複合口縁壺等が出土した（1群)。それから100cmは黒褐色粘質土で、割れた甕、器台等が出土した（2群)。更に80cm下は八女粘土まじりの黒褐色粘質土で、完形の壺、甕等が出土した(3群)。それ以下、底面までは白色粘質土で、底面で完形の甕、壺が出土した（4群)。遺物は大きく4つのまとまりが見られた。

出土遺物から時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

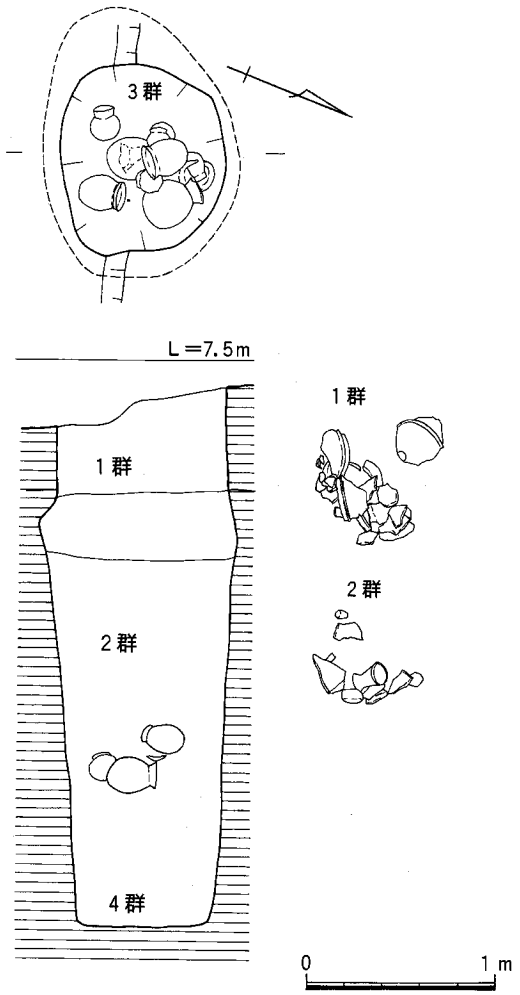


Fig. 43　SE－0005遺構実測図（1/40)

出土遺物（27～62）

27～61は弥生土器である。27、30、48、56は1群、28、60、61は2群、31、37、38、39、40、41、43、54、55は3群、32、33、42、44、49は4群の土器である。27～30は複合口縁壺である。27は口縁は直立する。屈曲部の外側には竹管文が施される。頸部はあまりすぼまらず、胴部との境には低い突帯を施す。突帯にはハケ目工具による刻目がある。肩部はあまり張らない。28は口縁は直線的に内傾し、端部は面取りする。屈曲部は明瞭な稜をもつ。29は口縁は内湾気味に立ち上がる。30は口縁は外湾気味の立ち上がり、外側に大きく開く。口縁端部、屈曲部は面取りする。頸部はすぼまり、胴部との境には2条の突帯がつく。胴部最大径は中位より上にある。底部は尖り気味の丸底である。内外面とも粗いハケメを施す。31、32は広口壺である。31は口頸部は緩やかに外反し、胴部との境には突帯がつく。突帯にはハケメ工具による刻目がある。胴部は縦長の球形で、底部は痕跡的な平底である。32は口縁は欠損している。胴部中位に最大径があり、底部は痕跡的な平底である。33は長頸壺である。口縁は直立して長く延び、体部は偏球形を呈する。調整は内外面ともハケメを施す。34

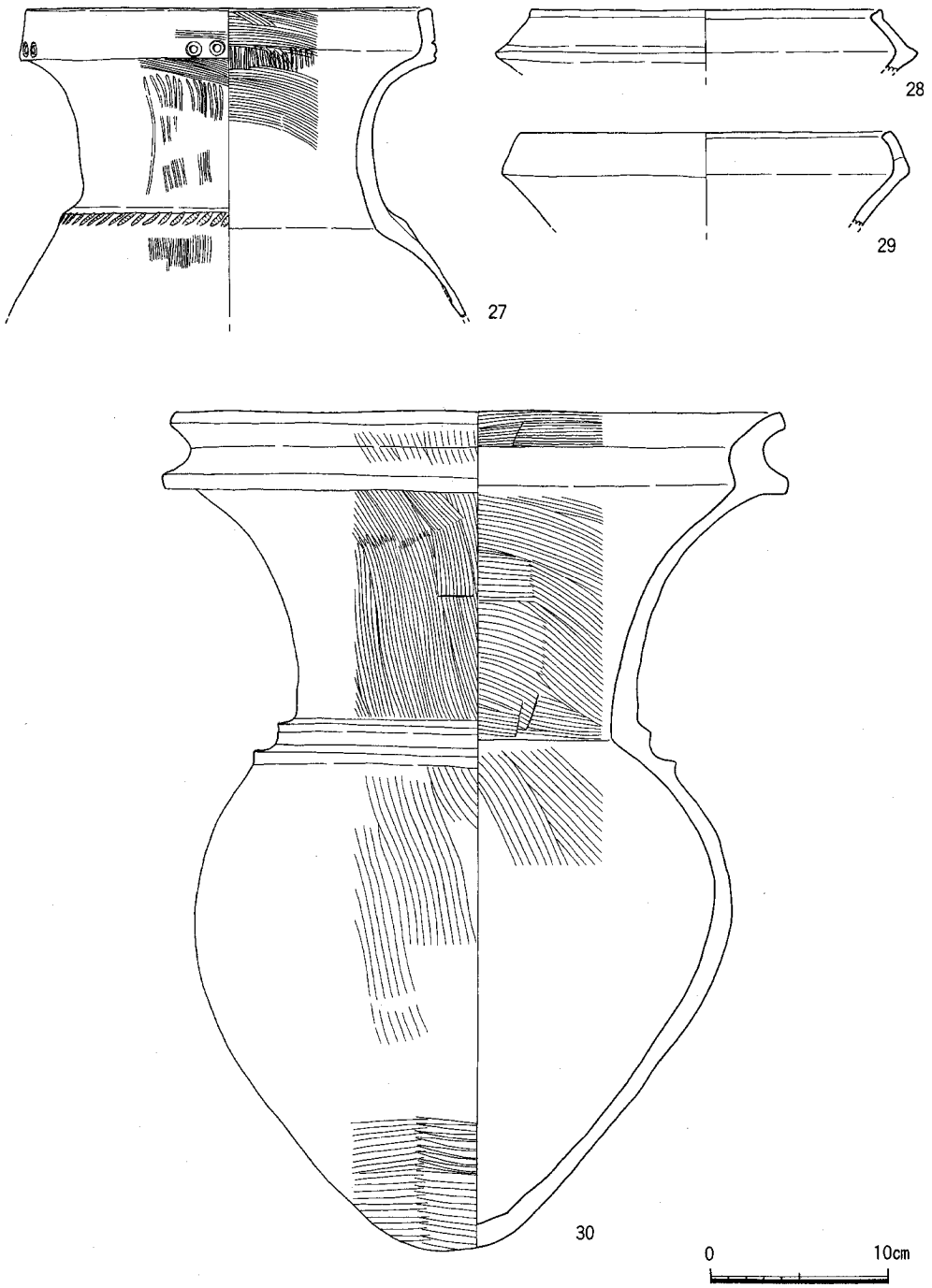


Fig. 44　SE－0005出土遺物実測図（1）（1／4）

～39は直口壺である。36、38は口縁は短く直立する。胴部との境は明瞭である。体部は球形を呈する。口縁外面にはヘラミガキを施す。37は胴部との境が不明瞭である。体部は偏球形を呈する。40～44は壺、甕の区別がつきにくいものでここでは壺として報告する。40は口縁はわずかに外反する。頸部には明瞭な稜はつかない。胴部は寸胴で、底部は丸底である。42は口縁はわずかに外反し、頸部には明瞭な稜はつかないが、ヨコナデを施している。胴部中位に最大径がある。底部は丸みを帯びた平底である。42は口縁は緩やかに外反し、胴部中位に最大径がある。底部は痕跡的な平底である。調整は外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリを施す。43、44は口縁はくの字形を呈し、胴部は縦長の球形を呈する。中位に最大径がある。底部は丸底である。調整は内外面ともハケメを施す。45は小型品で、口縁はわずかに外反し、胴部は寸胴である。底部は痕跡的な平底である。外面にはハケメ、内面には指頭痕が残る。46、47は口縁を欠いているが、広口壺の類と考えられる。丸底である。48は大型の甕で、口縁は欠いている。胴部は長胴で、底部は丸みを帯びた平底である。頸部と胴部下半に断面台形の突帯が付く。調整は内外面ともハケメを施す。49～51は中型の甕である。49は口縁はくの字形を折れる。胴部は長胴で、底部は尖り気味の底である。調整は外面は叩きの後、ハケメを、内面はハケメを施す。底部には指頭痕が残る。50、51は口縁は欠いている。51は底部外面にヘラケズリを施し、尖り気味の底を呈する。52、53は小型の甕である。口縁はくの字に折れる。52は丸底で、底部にはヘラケズリを施す。胴部上半はヨコナデを施す。54、55は脚付の鉢である。口縁は直線的に開き、体部は偏球形を呈する。底部にはハの字形に開く脚がつく。55は外面にヘラミガキが見られる。56～60は大型の甕である。口縁はくの字形におれて、大きく開く。口径は胴部最大径を上回る。頸部には刻目を施した突帯がつく。60は頸部と胴部中位に突帯がつく。底部は尖り気味の平底となる。調整は内外面ともハケメの後、ナデを施す。61は器台である。体部の上位で折れて、受け部となる。脚は直線的に開き、端部で接地する。調整は外面はハケメ、内面は受け部はハケメ、脚部は指頭痕が残る。62は砥石である。3面に研面が見られる。

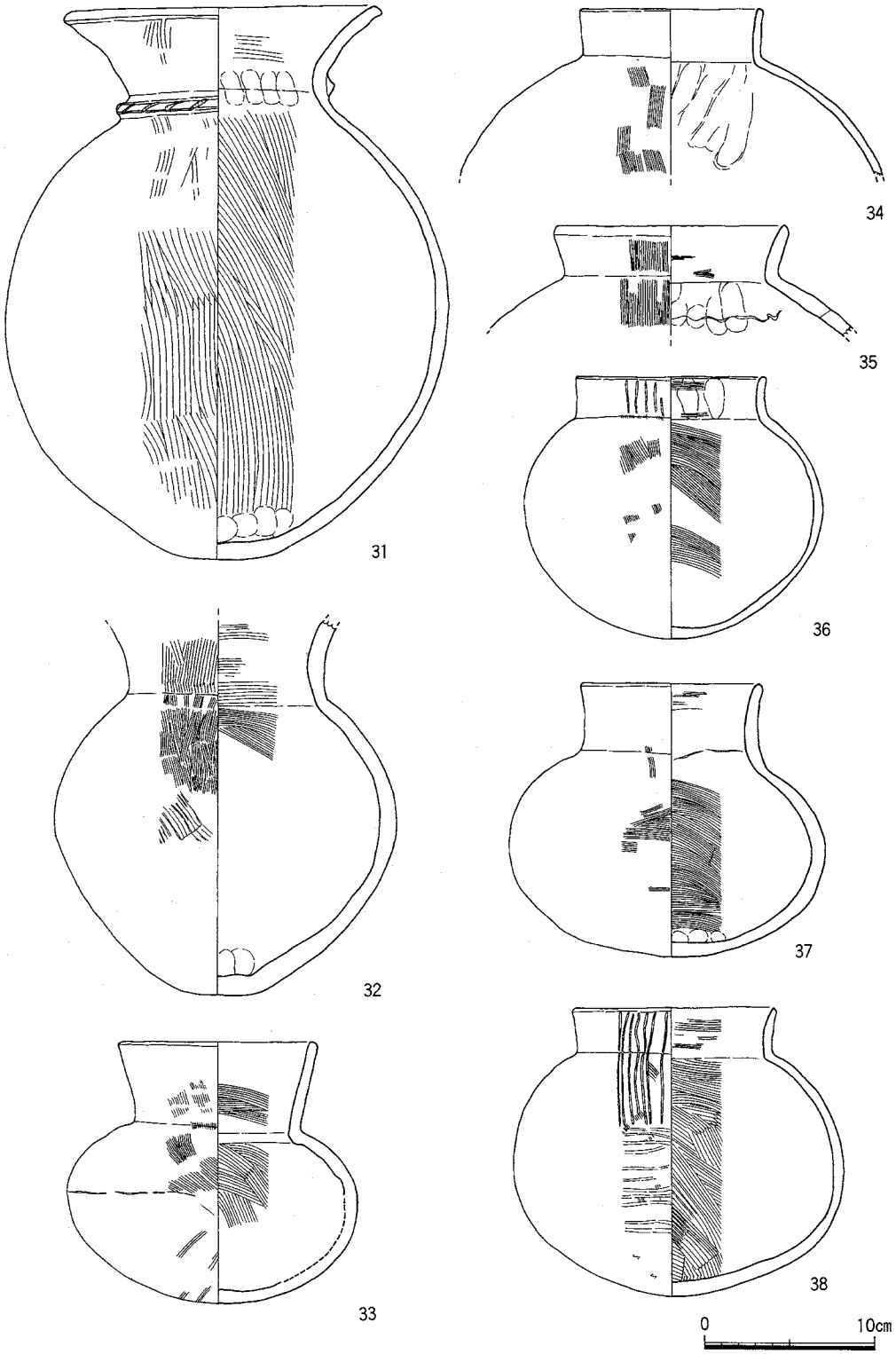


Fig. 45　SE－0005出土遺物実測図（2）（1／4）

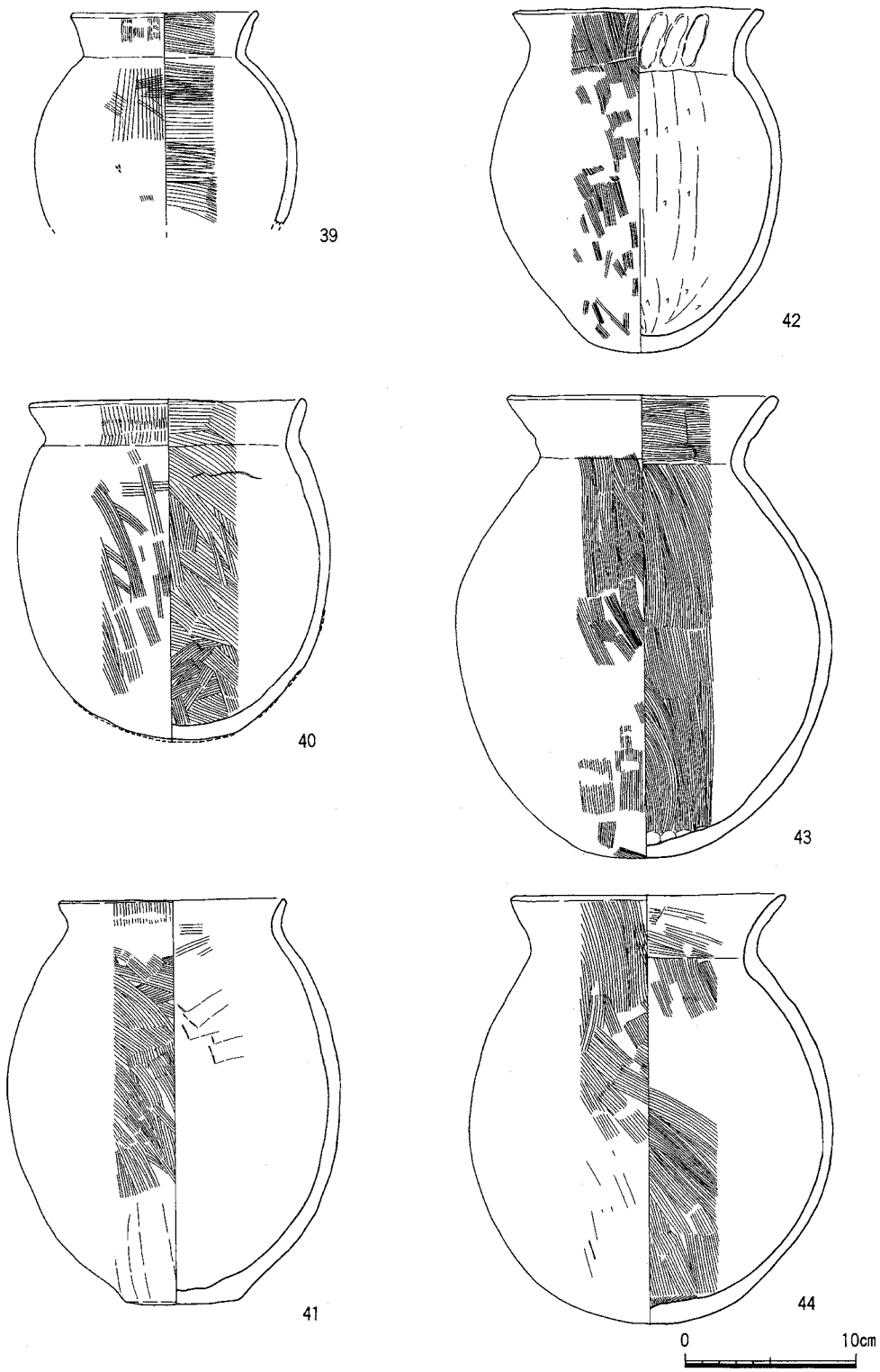


Fig. 46　SE－0005出土遺物実測図（3）（1／4）

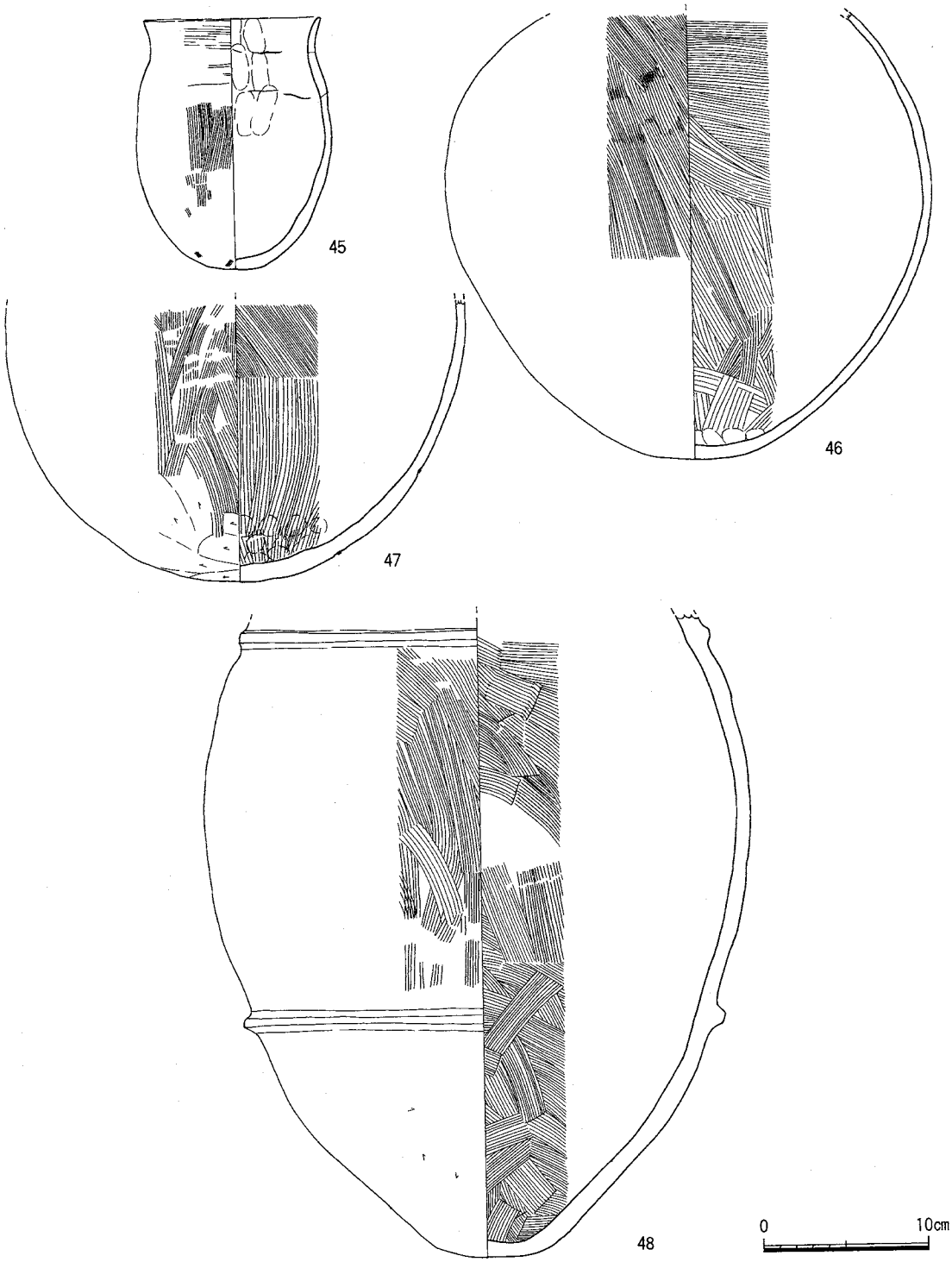


Fig. 47　SE－0005出土遺物実測図（4）（1／4）

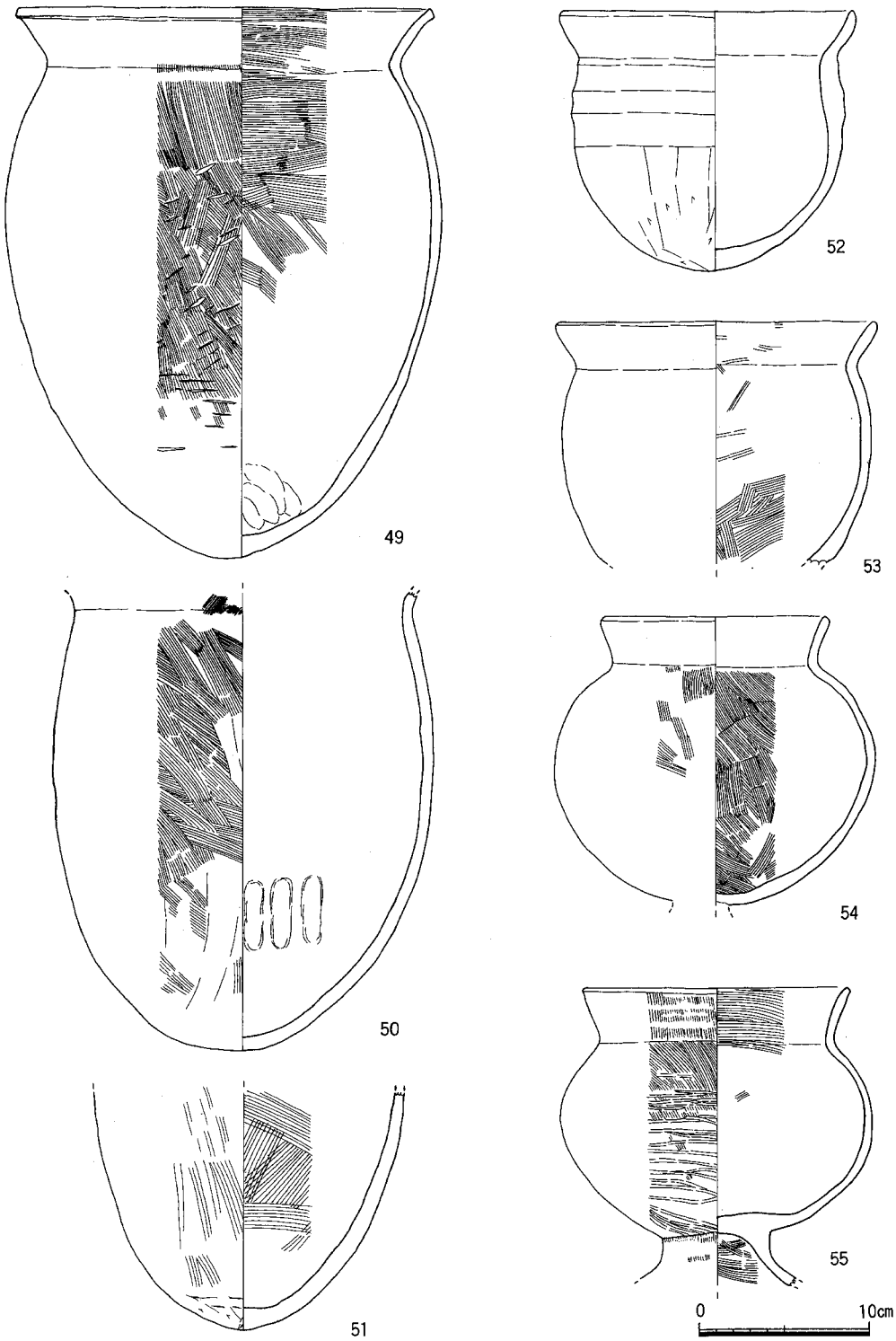


Fig. 48　SE－0005出土遺物実測図（5）（1／4）

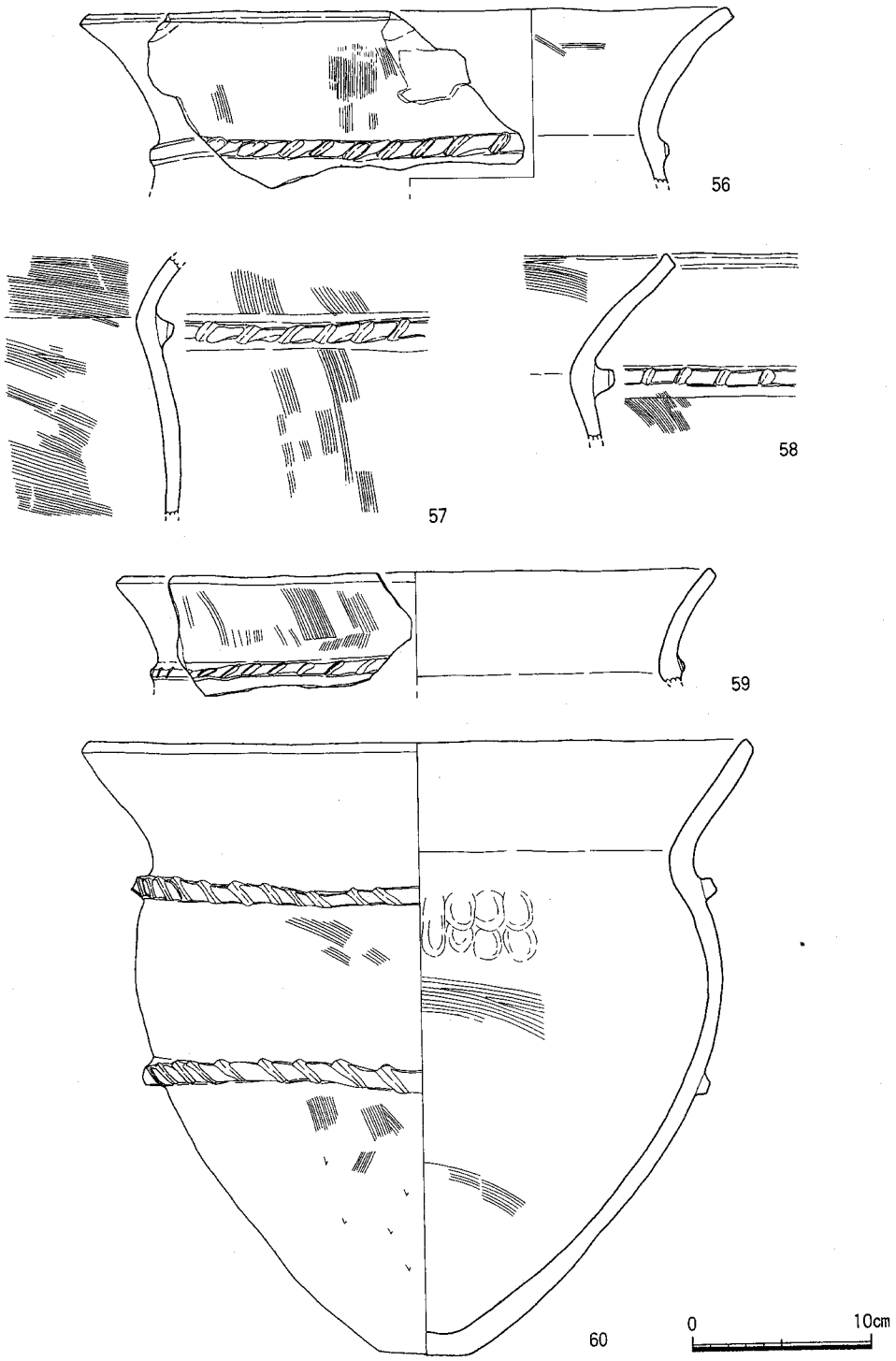


Fig. 49　SE－0005出土遺物実測図（6）（1／4）

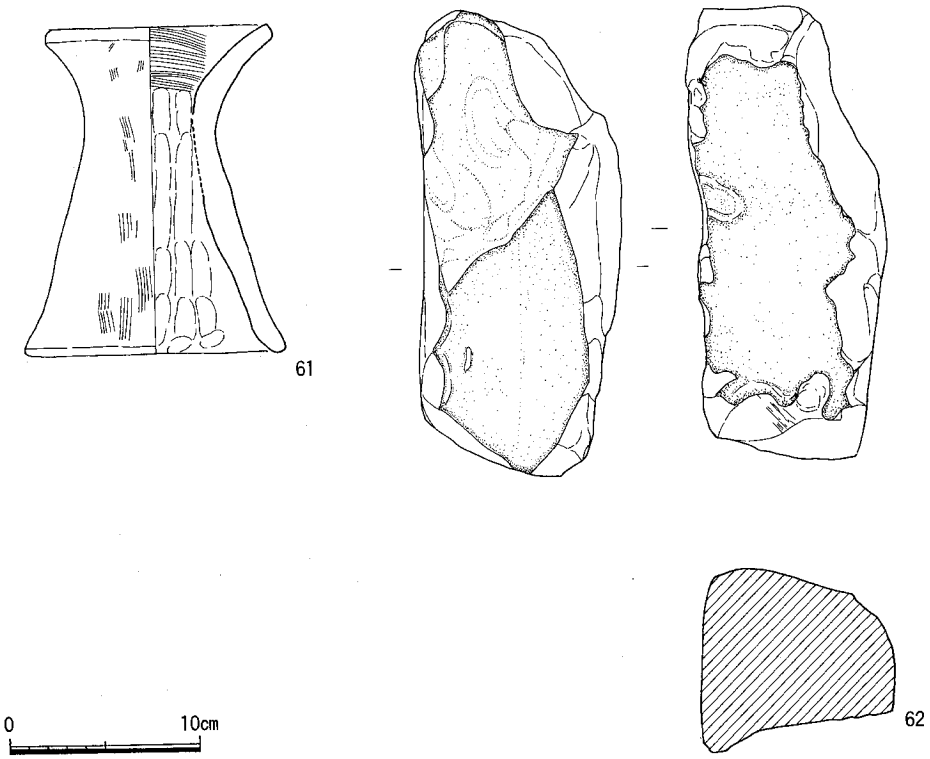


Fig. 50　SE－0005出土遺物実測図（7）（1／4）

SE－0006（Fig. 51）

Ⅲ区の周濠の外側で検出した。上端の北側はSD－0001に切られる。平面形は円形を呈し、直径110～115cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ370cm、底面の標高4.3mを測る。埋土は上面から100cmは八女粘土まじりの黒褐色粘質土が、そこから80cmは崩れ落ちた鳥栖ローム、八女粘土が堆積する。それ以下は80cmの黒褐色粘質土で、その下面で潰れた壺を検出した（1群)。それから底面までは暗褐色粘質土まじりのロームで、完形の甕、壺が出土した（2群)。また、底面で壺、木製容器等が出土した（3群)。遺物は大きく3つのまとまりが見られた。

出土遺物から時期は弥生時代後期中頃に位置づけられる。

出土遺物（64～99）

64～98は弥生土器である。76、77、78、91は1群、74、75、84、94は2群、70、71、72、80、81、83、88は3群の土器である。64～70は複合口縁壺である。64は口縁は直立する。端部は面取りする。頸部はあまり窄まらない。65、66、68は内湾気味に短く立ち上がる。屈曲部の稜は明瞭ではない。67、69は口縁は直線的に内傾し、端部と屈曲部は面取りする。67は口縁外面にはへら描きによる複合鋸歯文を施す。70は口縁は内湾気味に立ち上がり、頸部はすぼまる。胴部との境には断面三角形の突帯が付く。また、胴部中位からやや下がった位置に断面方形の突帯がつく。底部はやや丸みを帯びた平底である。調整は内外面ともハケメを施す。71は長頸壺である。頸部は直立し、体部は球形を呈する。底部は平底である。調整は内外面ともハケメを施す。72～75は短頸壺である。口縁は短く外反する。頸部にはヨコナデを施す。体部は長胴を呈し、底部は平底である。73は頸部と胴部との境は不明瞭である。口縁外面と胴部下半にヘラミガキを施す。74は口縁はあまり外反せず、ほぼ直立する。調整は内外面ともハケメを施す。76、77は口縁を欠いているが、同様の器形と考えられる。78～84は前述の壺と比べると、頸部が長く延びる壺である。口縁は緩やかに外反する。体部は縦長の球形で、頸部との境は不明瞭である。底部は丸みを帯びた平底である。調整は内外面ともハケメを施す。85は口縁は緩やかに外反し、胴部最大径を上回る。端部は玉縁状に肥厚する。底部は平底である。調整は内外面とも

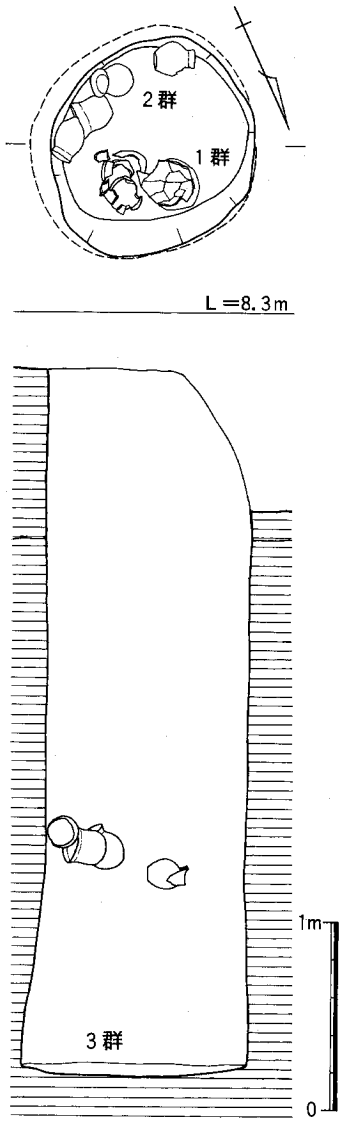


Fig. 51
SE－0006遺構実測図（1/40）

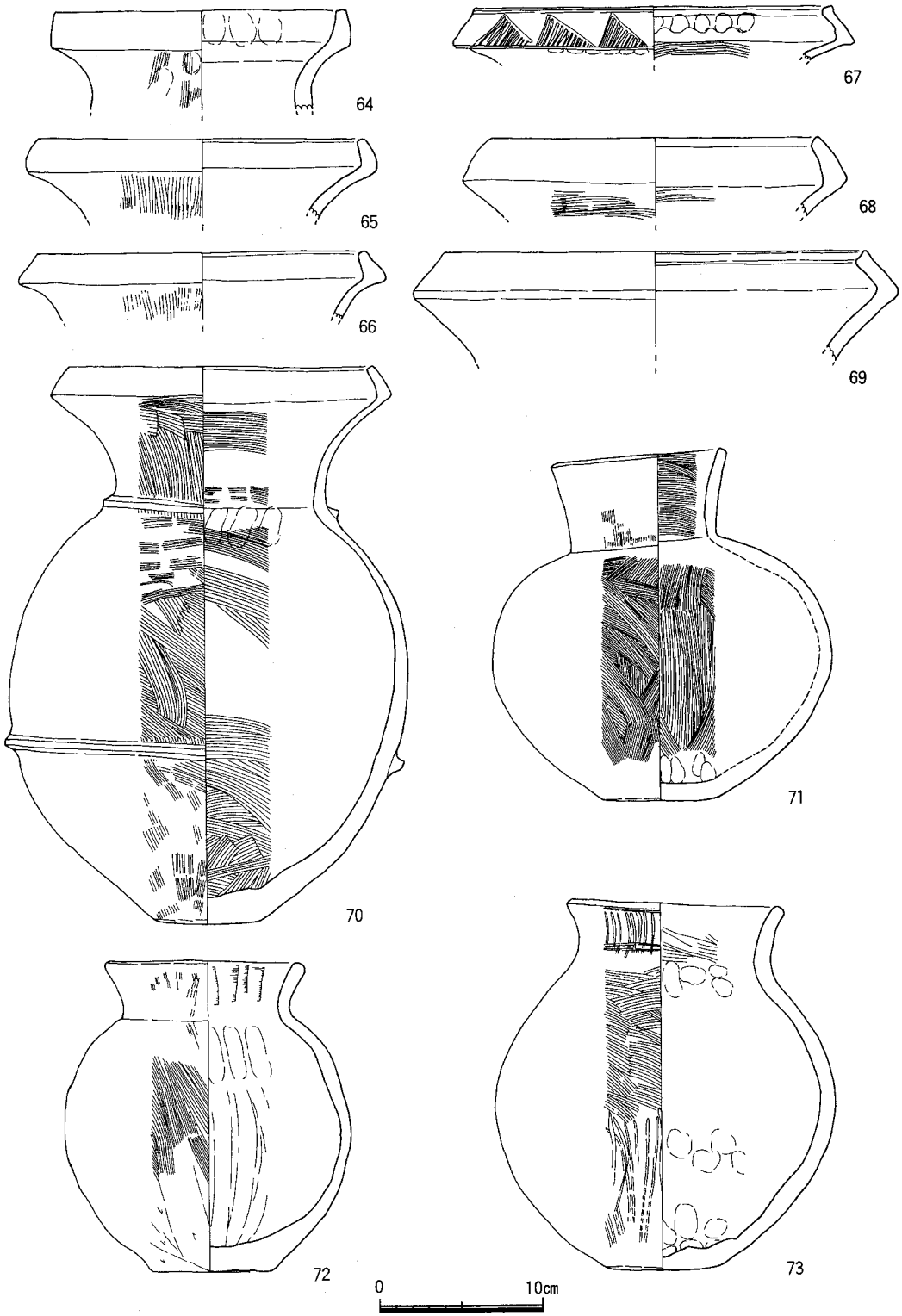


Fig. 52　SE－0006出土遺物実測図（1）（1／4）

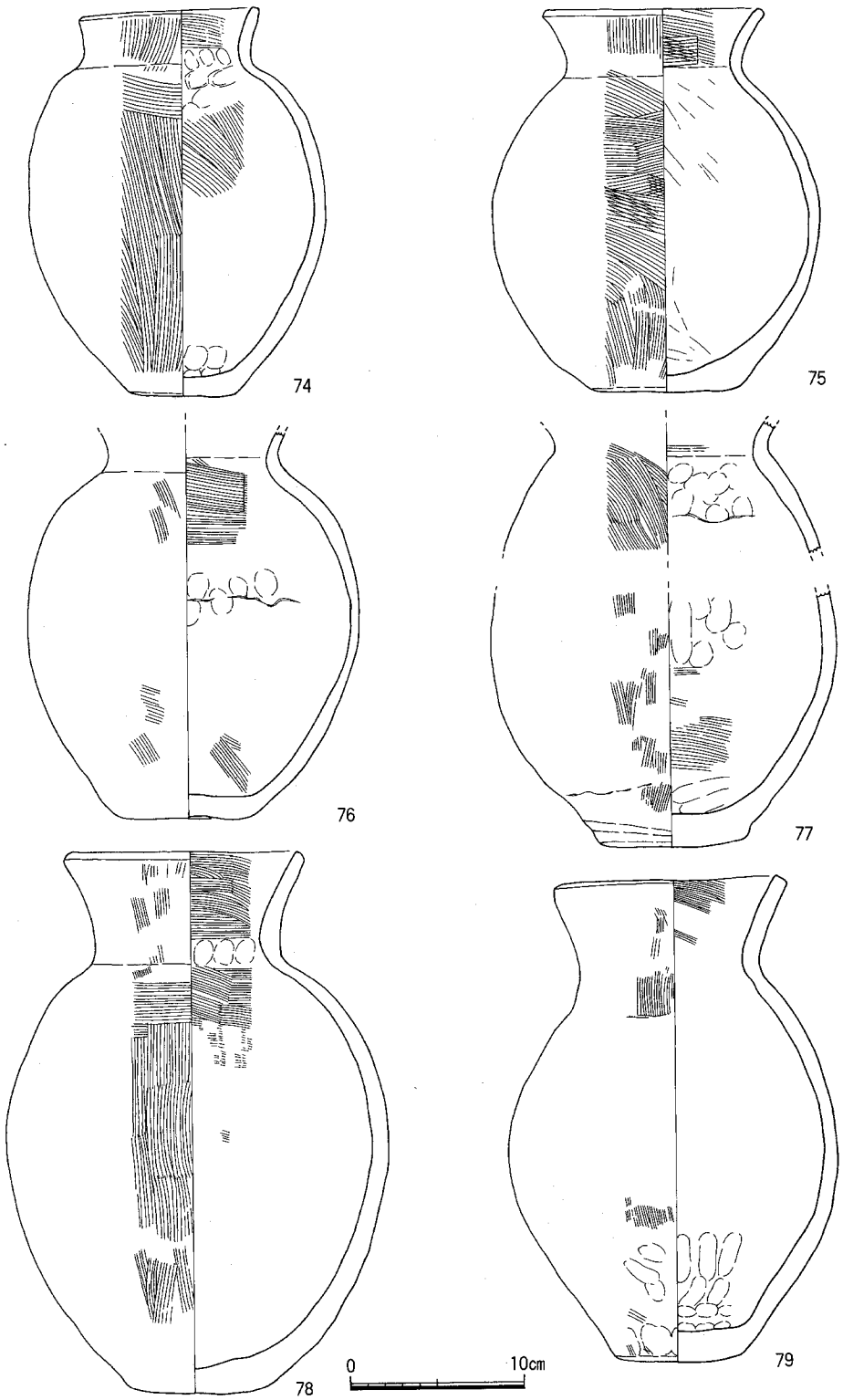


Fig. 53　SE－0006出土遺物実測図（2）（1／4）

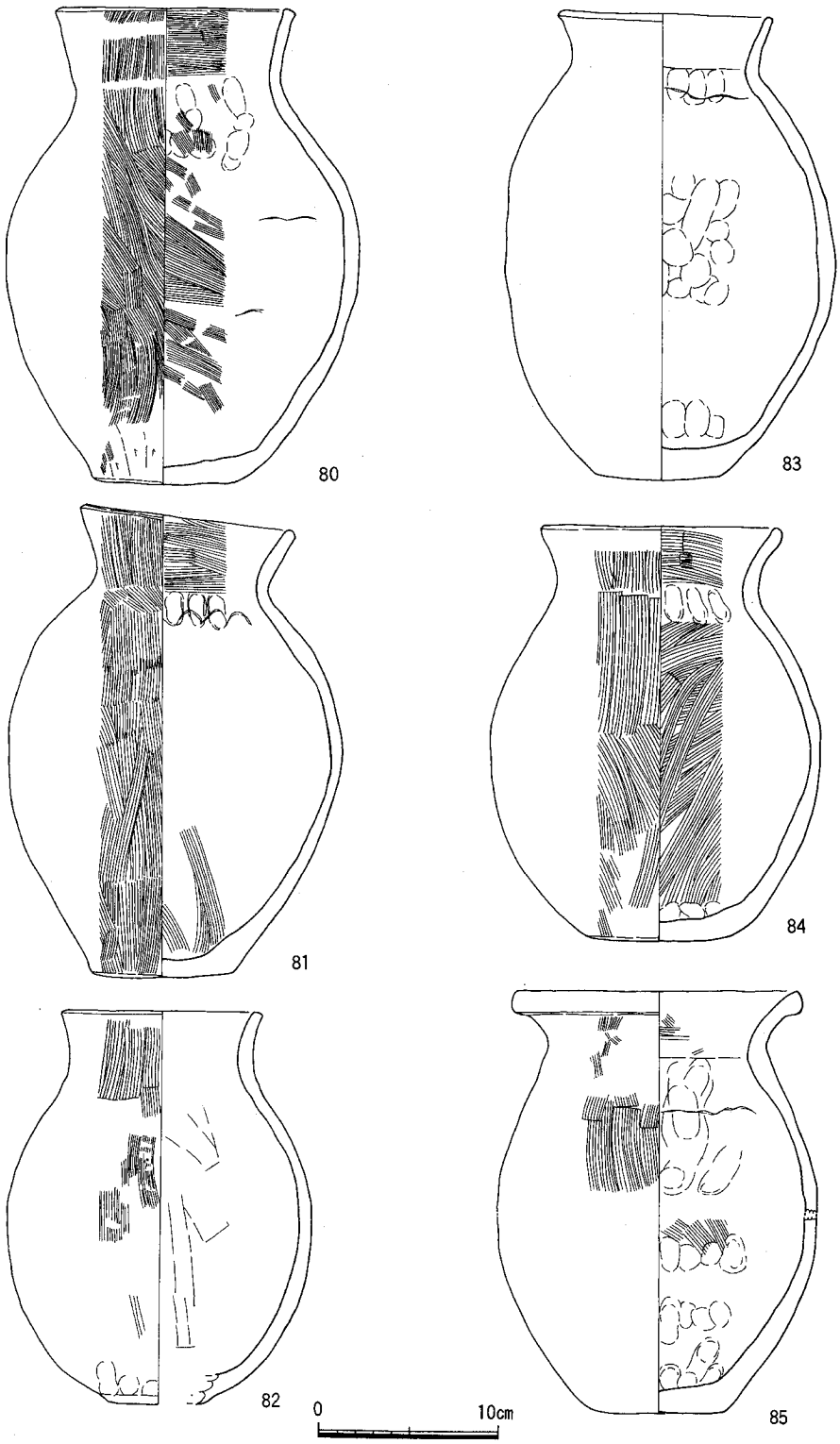


Fig. 54　SE－0006出土遺物実測図（3）（1／4）

ハケメを施す。86は口縁は外反し、ほぼ水平に開く。最大径は胴部中位にある。胴部は縦長の球形で、底部は丸みを帯びた平底である。87は胴部下半を欠いている。口縁は緩やかに外反し、端部は玉縁状に肥厚する。88～92は底部片である。下膨れの体部で、底部は平底である。外面下半にヘラケズリが施される。

93は甕である。口縁はくの字形に折れ、胴部は長胴である。胴部最大径は口径を上回る。底部は丸底である。胴部外面下半にはヘラケズリを施す。94は歪んだ甕で、口縁は波状を呈する。口縁は緩やかに外反し、胴は長胴である。底部は丸みを帯びた平底である。調整は内外面ともハケメを施す。95、96は器台である。受け部は欠損している。96は器面に横方向の叩き目を残す。97、98は高坏である。97は東九州系の高坏の坏部で、口縁は内湾する。98は脚部で、ハの字形に開く。外面にはハケメを施す。

99は木製の容器である。スギの芯持ち材を側面からくり抜き、両側に有孔の把手を作りだす。底部は平底である。胴部の中位に２個の孔が施される。器面には削り痕がみられる。長さ26.0cm、幅13.0cm、厚さ2.0cm を測る。

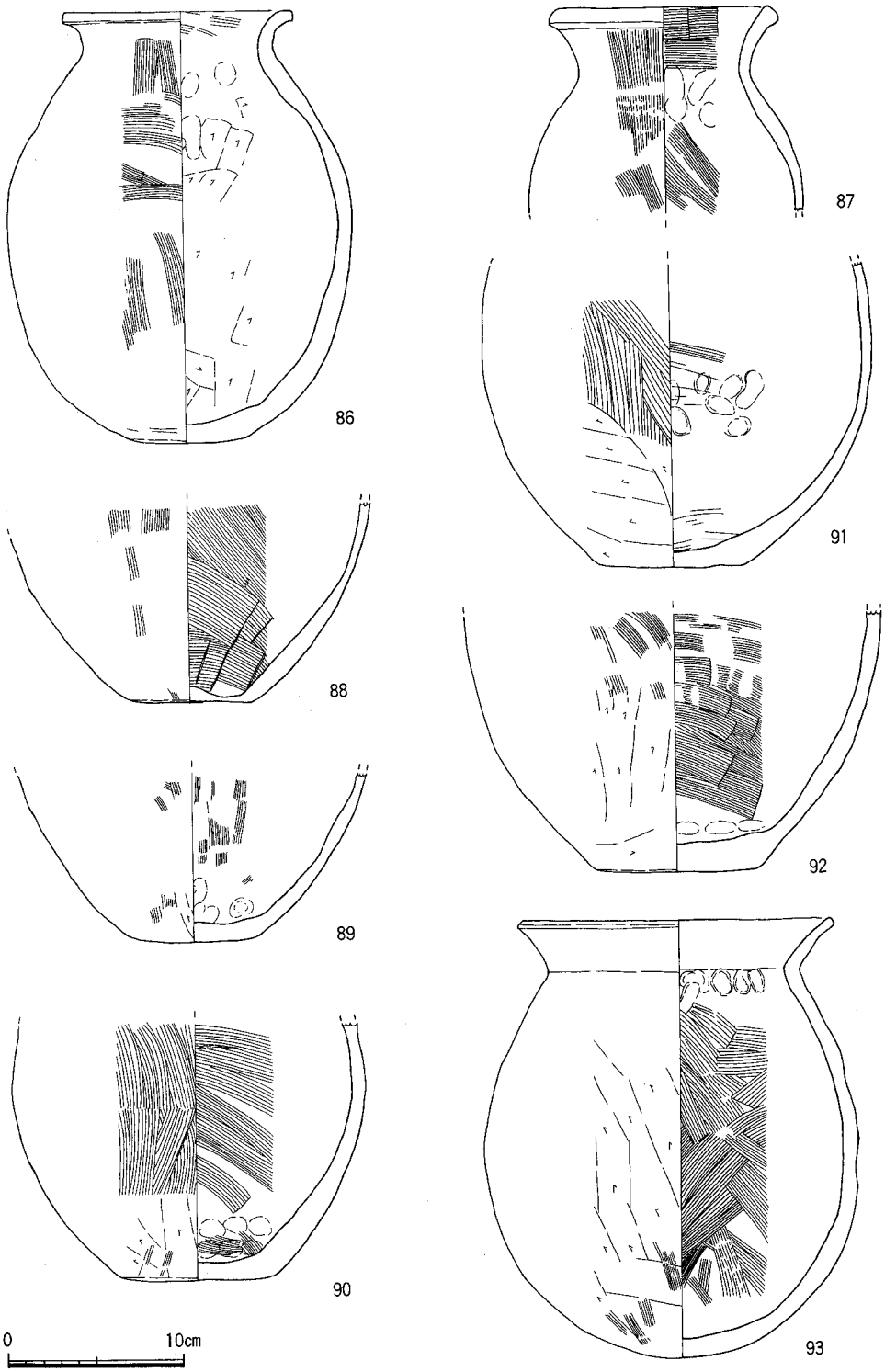


Fig. 55　SE－0006出土遺物実測図（4）（1／4）

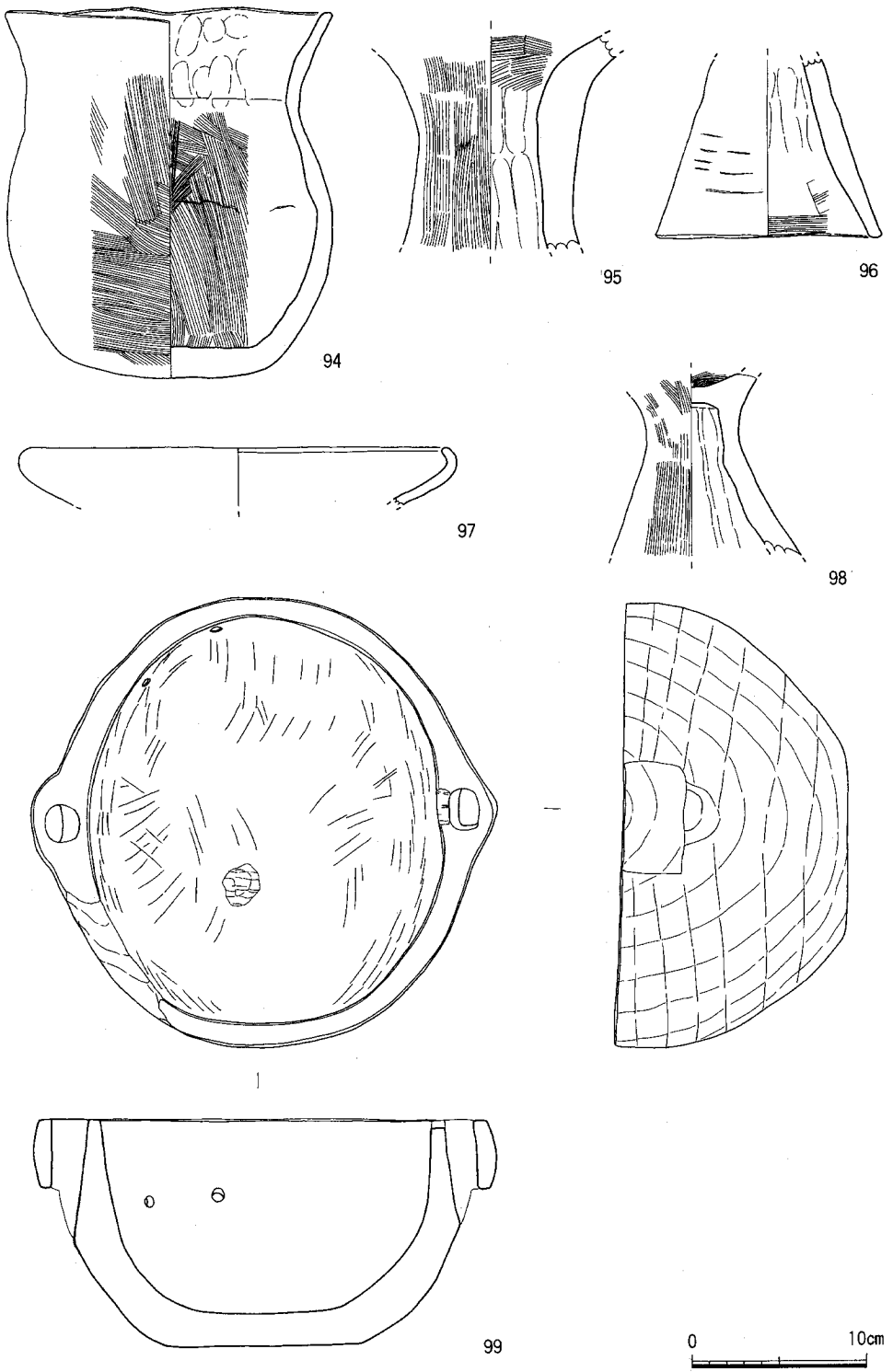


Fig. 56　SE－0006出土遺物実測図（5）（1／4）

SE－0007（Fig. 57）

Ⅲ区の周濠の外側で検出した。上端の北側はSD－0001に切られる。平面形は円形で、直径235～245cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げて、硬砂層まで達している。深さ290cm、底面の標高4.4mを測る。埋土は上面から200cmはロームまじりの黒褐色粘質土で、それ以下は底面まで白色粘質土が堆積する。遺物は各層から弥生土器が出土したが、黒褐色粘質土の下層で完形の壺が出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代後期中頃に位置づけられる。

出土遺物（100～103）

103は埋土の上層、外は下層で出土した。100～103は弥生土器である。100、101は壺である。口縁は緩やかに外反し、頸部はすぼまる。胴部の最大径は中位にあり、口径を上回る。底部は平底である。調整は内外面ともハケメを施す。102は小型品で、口縁は緩やかに外反して開く。頸部と胴部との境は明瞭ではない。胴部の中位に最大径がある。底部は平底である。調整は内外面ともハケメを施す。103は器台である。体部の上位で折れて受け部となる。脚部は直線的に開き、短部で接地する。調整は外面はハケメ、内面は受け部はハケメ、脚部は指頭痕が残る。

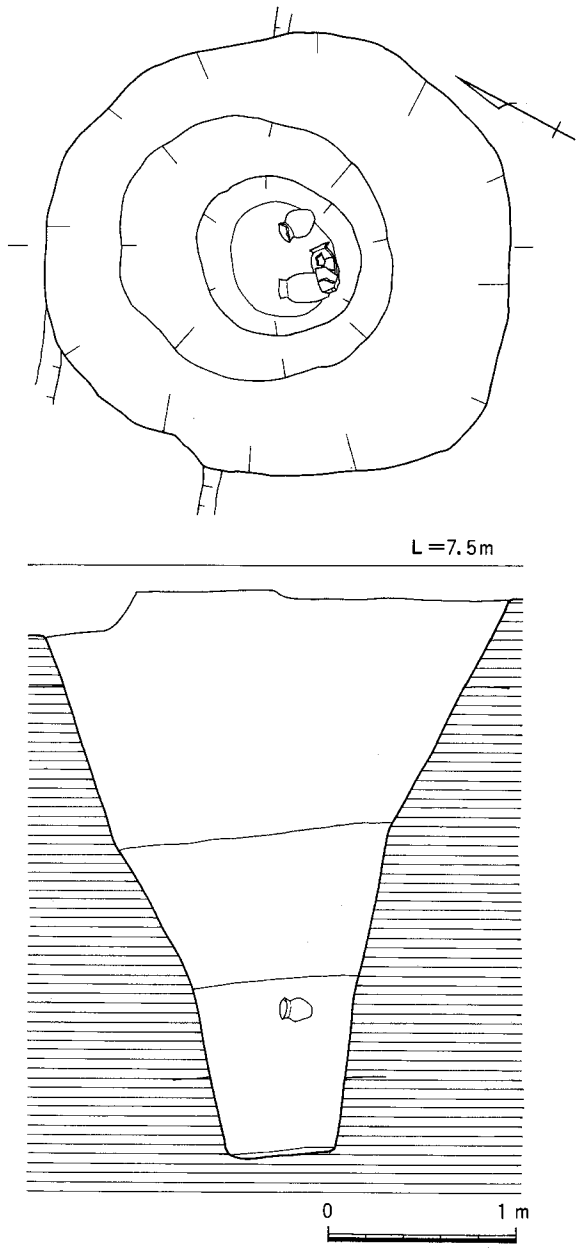


Fig. 57　SE－0007遺構実測図（1/40）

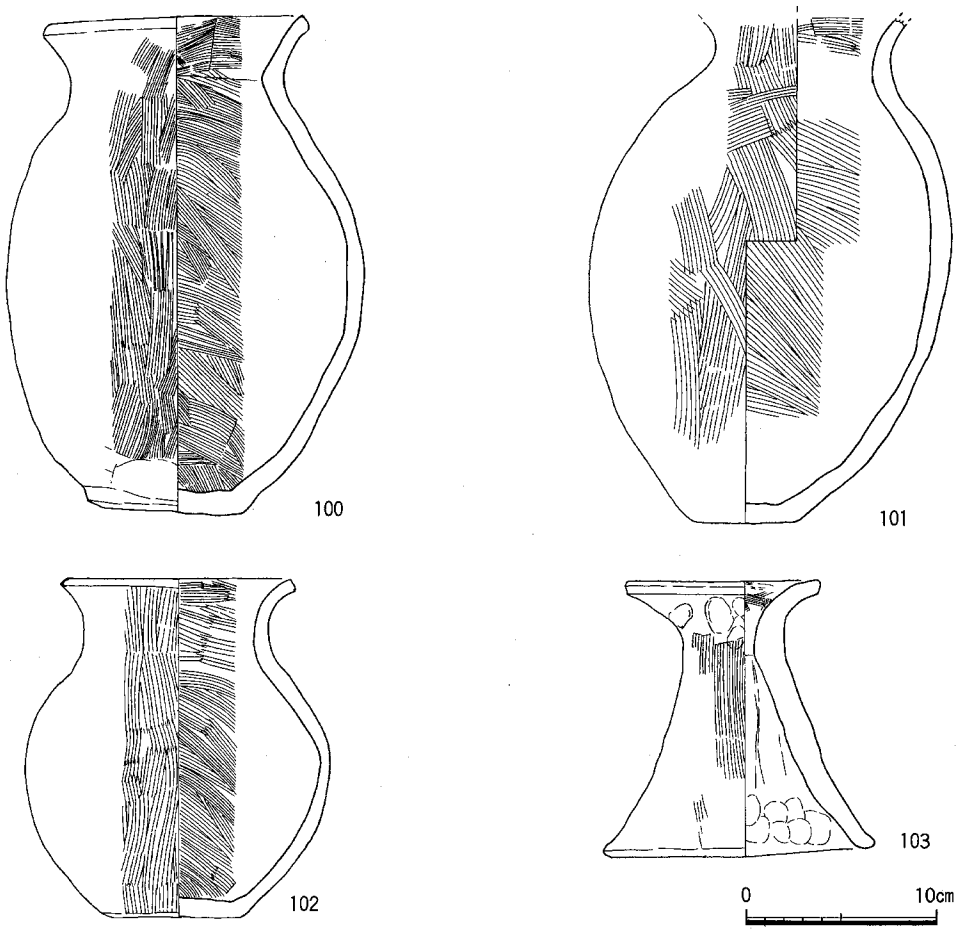


Fig. 58　SE－0007出土遺物実測図（1／4）

SE－0008（Fig. 59）

Ⅱ区の周濠の底面で検出した。平面形は楕円形を呈し、直径155～190cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げて、硬砂層まで達している。深さ260cm、底面の標高4.2mを測る。埋土は上面から140cmはロームまじりの黒褐色粘質土が、それ以下は底面まで、白色粘質土が堆積する。遺物は黒褐色粘質土の下層で、完形の壺が出土した（1群）。また、底面で小型の壺が出土した（2群）。遺物は大きく2つのまとまりが見られた。

出土遺物から、本井戸は弥生時代後期後半に位置づけられる。

出土遺物（104～106）

104、105は1群、106は2群の土器である。104～106は弥生土器である。104、105は壺で、104は口縁はわずかに外反する。胴部は長胴で、最大径は中位にある。底部は平底である。胴部の下半にヘラ状工具によるナデが見られる。105は口縁は緩やかに外反し長く延びる。胴部は長胴で、頸部との境は不明瞭である。底部は丸底である。調整は内外面ともハケメを施す。106は小型の壺で、口縁はくの字形におれ、体部は偏球形を呈する。底部は丸みを帯びた平底である。胴部との境は明瞭ではない。

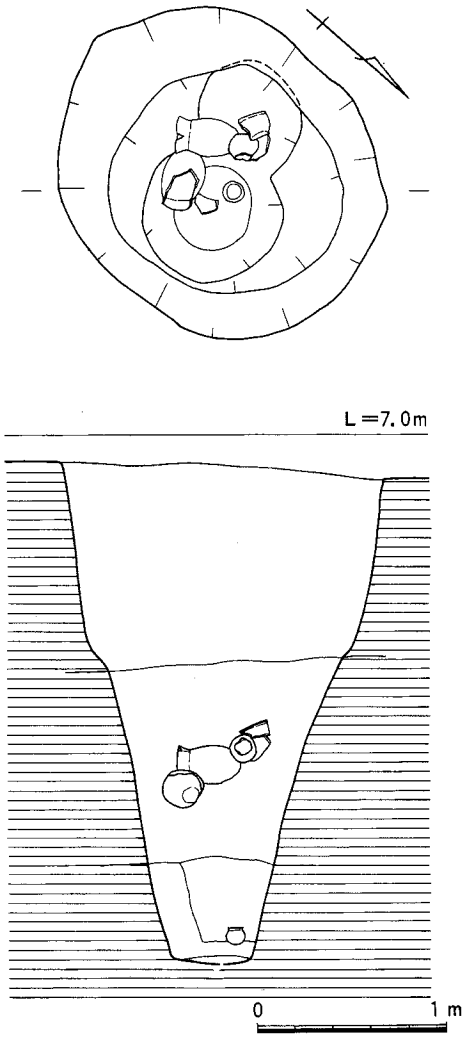


Fig. 59　SE－0008遺構実測図（1/40）

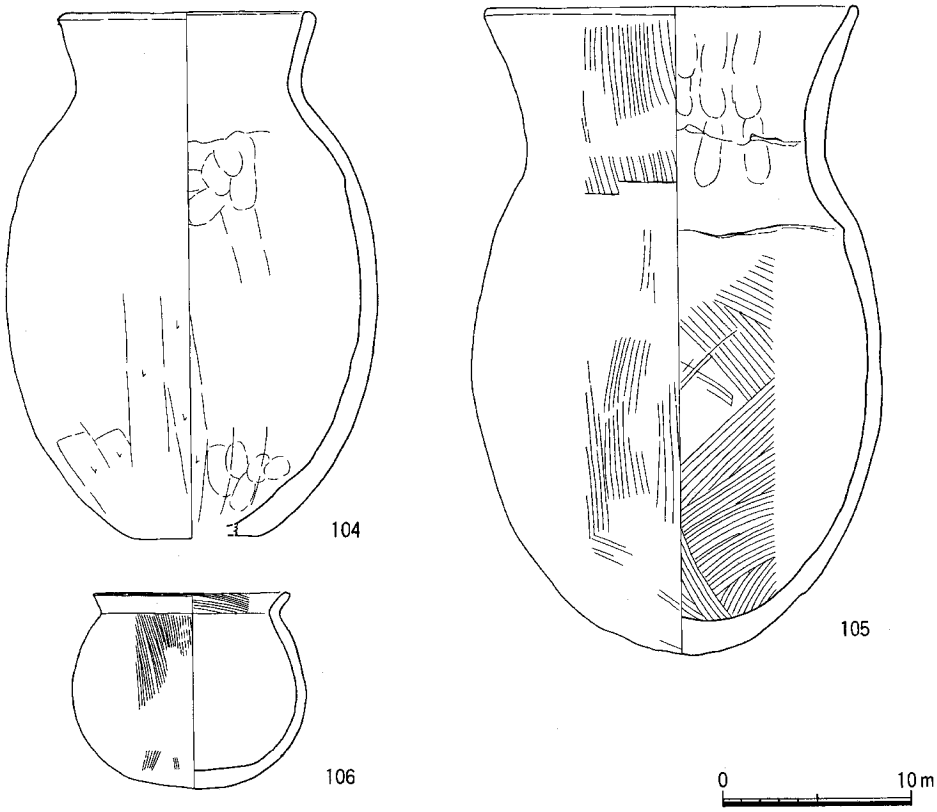


Fig. 60　SE－0008出土遺物実測図（1／4）

SE－0012（Fig. 61）

Ⅱ区の周濠の外側で検出した。平面形は円形を呈し、直径約115cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げいる。深さ290cm、底面の標高5.3mを測る。埋土は上面から200cmはロームまじりの暗褐色粘質土が、そこから40cmは黒色粘質土が堆積する。それ以下は底面まで黒色粘質土まじりの白色粘質土である。遺物は各層で出土したが、第2層で完形に近い甕が出土した以外はまとまりは見られなかった。

出土遺物から、本井戸は弥生時代後期後半に位置づけられる。

出土遺物（107～113）

110は第2層、それ以外は第1層から出土した。107～113は弥生土器である。107は複合口縁壺である。口縁は屈曲部から欠損している。108は長頸壺である。口縁はわずかに外反する。109、110は甕である。口縁はくの字形に折れる。頸部の稜は明瞭である。胴部は長胴で、底部は丸底である。111は大型の壺の底部と考えられる。やや丸みをおびた平底である。112は大型の甕である。口縁はくの字形に折れ、頸部には刻目を施した突帯が付く。刻目はハケメ工具で行う。113は高坏の脚部である。裾で緩やかに開く。

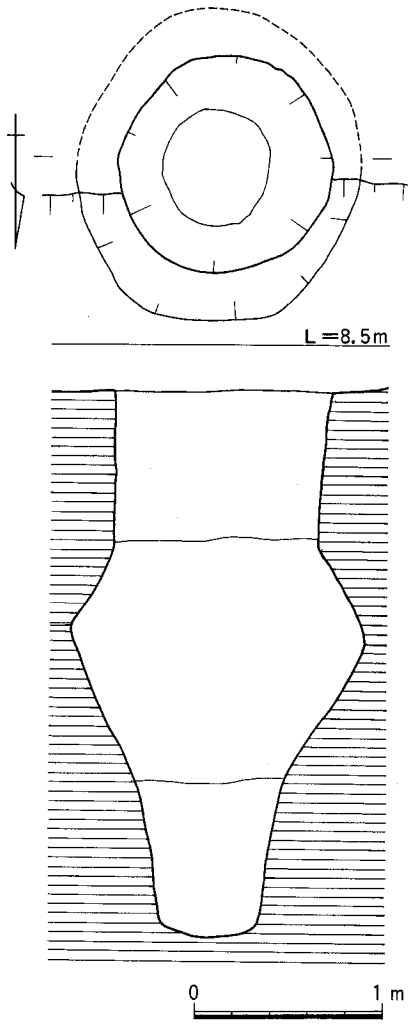


Fig. 61　SE－0012遺構実測図（1/40）

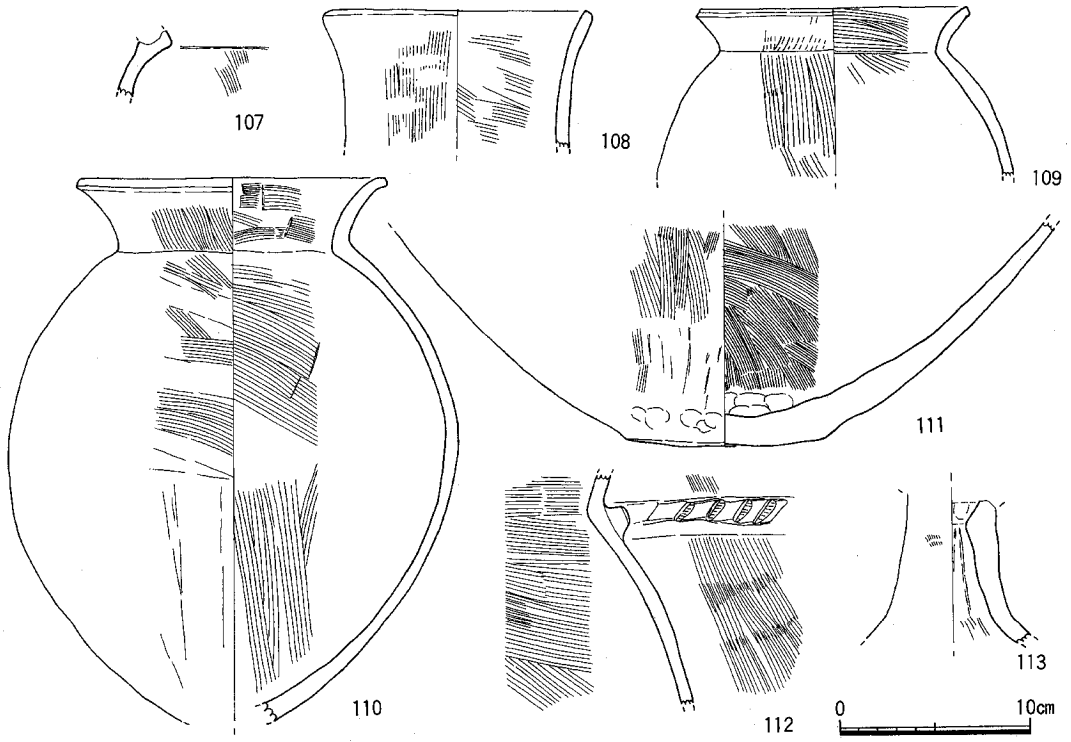


Fig. 62　SE－0012出土遺物実測図（1／4）

SE－0013（Fig. 63）

Ⅴ区の周濠の底面で検出した。上端の南側をSD－0010で切られている。平面形は隅丸方形を呈し、長さ170～180cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げて、硬砂層まで達している。深さ250cm、底面の標高4.5mを測る。埋土は褐色粘質土が堆積する。井筒等は検出できなかった。遺物は埋土から高麗青磁、滑石製石鍋が出土した。

時期は確定できないが、出土遺物から13世紀代以降に位置づけられる。

出土遺物（114～118）

114は高麗青磁碗である。高台は断面方形を呈しする。畳付から内側が露胎となる。115は須恵質のすり鉢である。116は滑石製の石鍋である。口縁は直行する。117は平瓦である。焼成は須恵質である。凹面は布目と摸骨痕を、凸面は格子目叩きを残す。118は叩き石である。両面に敲打痕がある。

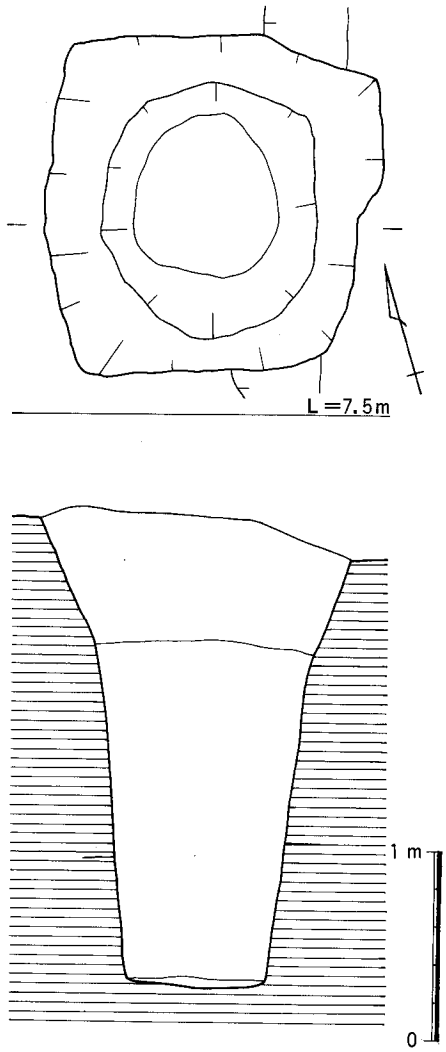


Fig. 63　SE－0013遺構実測図（1/40）

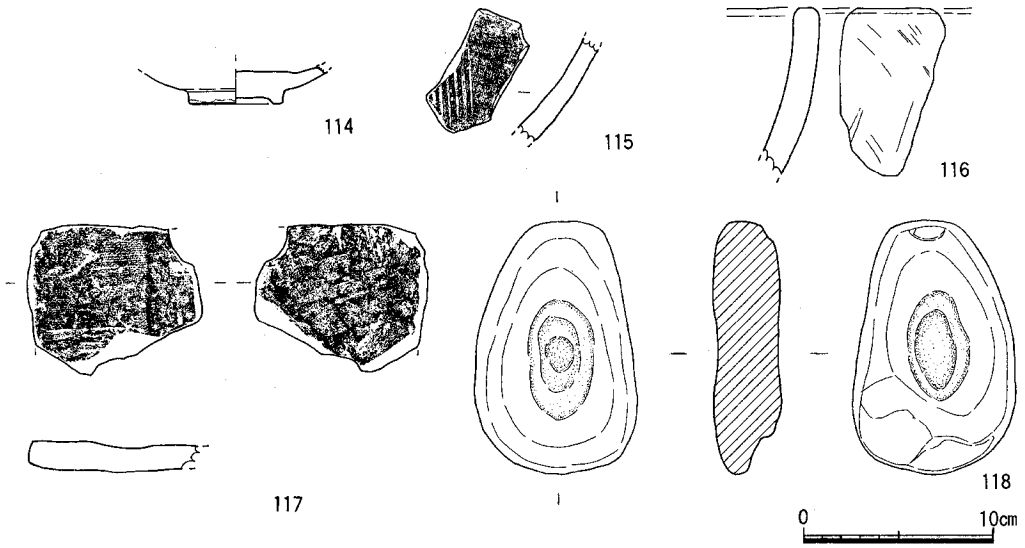


Fig. 64　SE－0013出土遺物実測図（1／4）

SE－0014（Fig. 65）

V区の周濠の底面で検出した。上端はSD－0009に切られている。平面形は円形を呈し、直径160～170cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げて、硬砂層まで達している。深さ220cm、底面の標高5.1mを測る。埋土は上面から100cmはロームまじりの暗褐色粘質土が、それ以下は底面まで暗褐色粘質土まじりの白色粘質土となる。遺物は暗褐色粘質土の下面で完形の複合口縁壺、長頸壺等が多量に出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代後期中頃に位置づけられる。

出土遺物（119～140）

119～140は弥生土器である。119は畿内系の壺である。口縁はほぼ水平に開き、口縁端部には竹管文の施した浮文を施す。浮文の間にはハケメ原体による刻目を施す。120は大型の壺で

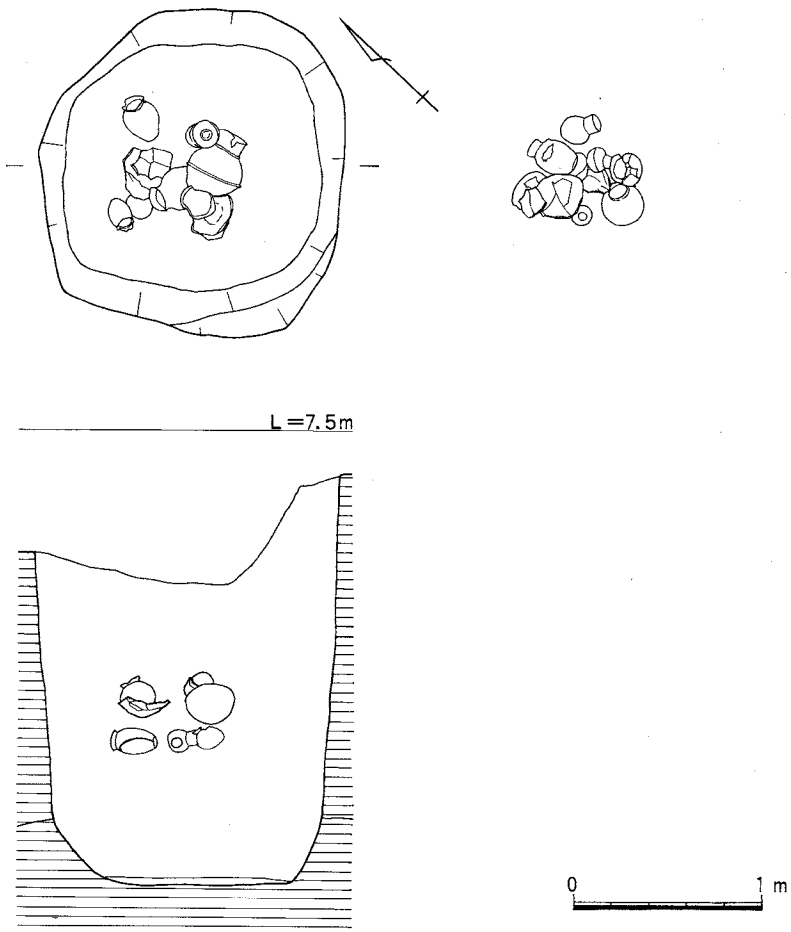


Fig. 65　SE－0014遺構実測図（1/40）

ある。口頸部は欠けている。体部は球形で、底部は平底を呈する。調整は内外面ともハケメを施す。121～124は複合口縁壺である。121は口縁はくの字に折れ、屈曲部の稜は明瞭である。122は口縁は直線的に内傾するが、屈曲部の稜は不明瞭である。頸部は短く、肩はあまり張らない。底部は平底である。調整は外面はハケメ、内面はナデである。123は口縁は欠けている。頸部は直立し、口縁付近で緩やかに外反する。頸部と胴部の境には低い断面三角形の突帯がつく。突帯の下には押圧による円文が見られる。また、胴部中位からやや下がったところに刻目を施した断面台形の突帯がつく。底部はやや丸みを帯びた平底である。胴部下半に穿孔が施される。124は123に比べるとなで肩で、頸部と胴部との境は明瞭ではない。その境には断面三角形の突帯が付く。また、胴部の中位からやや下がったところにも同様の突帯が付く。底部は丸みを帯びた平底である。125～129は長頸壺である。125、126は口頸部を欠いている。体部は算盤玉形を呈し、底部は小さな平底である。127は口縁を欠いている。頸部は直立する。体部は算盤玉形を呈する。底部は平底を呈する。128は前者と比べると、口頸部は短く、太い。頸部は直立し、口縁はわずかに外反する。胴部は球形を呈し、底部は平底を呈する。129は頸部は直立し、口縁はわずかに外反する。頸部と胴部の境は不明瞭で、体部は縦長の球形を呈する。底部は丸みを帯びた平底である。130は無頸壺である。口縁はくの字形に折れ、体部は偏球形を呈する。最大径は中位よりやや下がった位置にある。底部は平底である。131～136は口頸部は緩やかに外反する。胴部との境は明瞭ではない。肩はあまり張らず、胴部は縦長の球形である。胴部最大径は口径を僅かに上回る。底部はやや丸みを帯びた平底（131、132、134、135）や痕跡的な平底（133）のものがある。調整はハケメを施す。139、140も同様の器形になるものと考えられる。137は口縁はわずかに外反し、短く立ち上がる。肩はあまり張らない。底部は丸みを帯びた平底である。138は小型の甕である。口縁はくの字形に折れ、胴部の上位に最大径がある。底部は丸みを帯びた平底である。

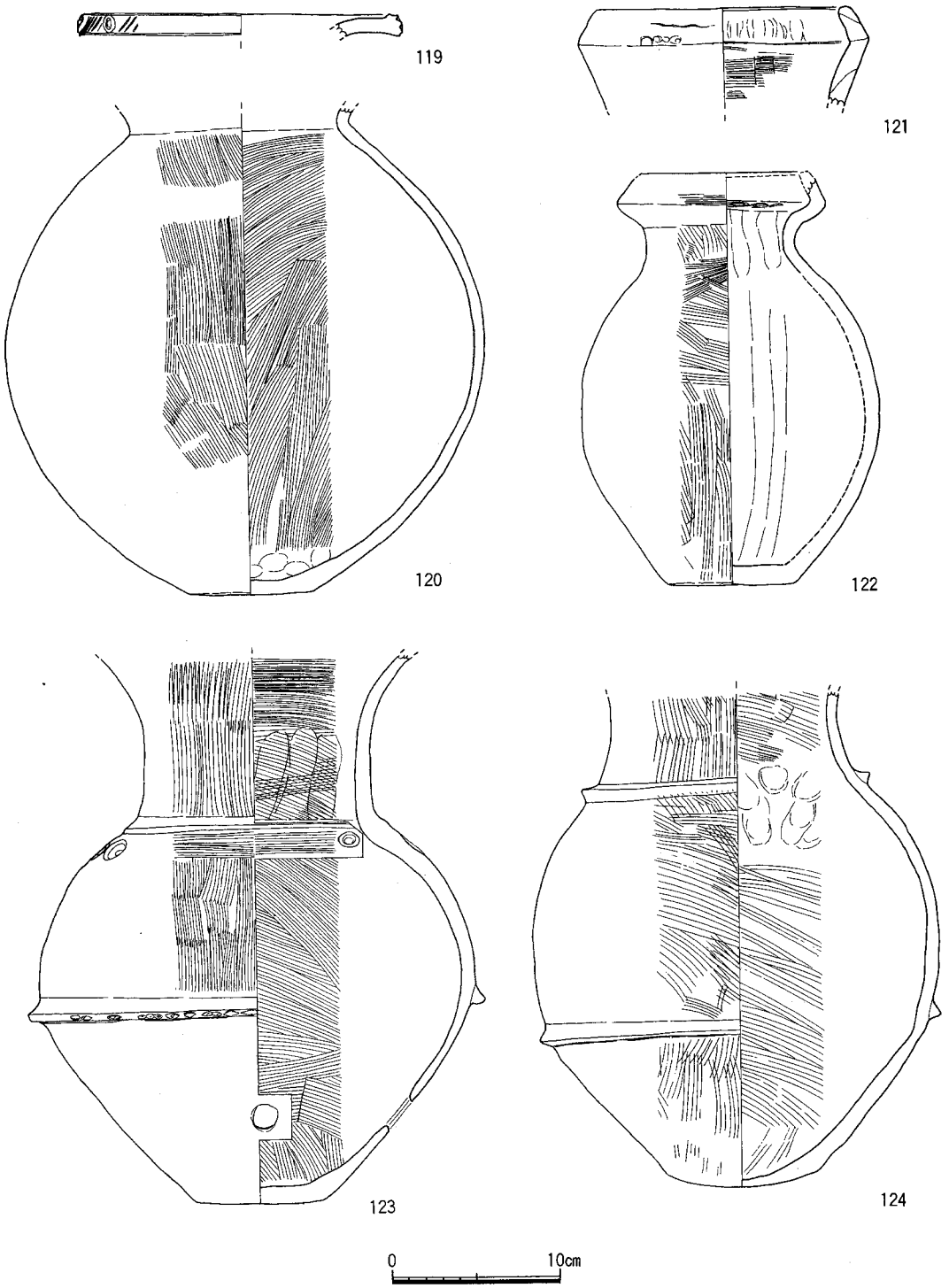


Fig. 66　SE－0014出土遺物実測図（1）（1／4）

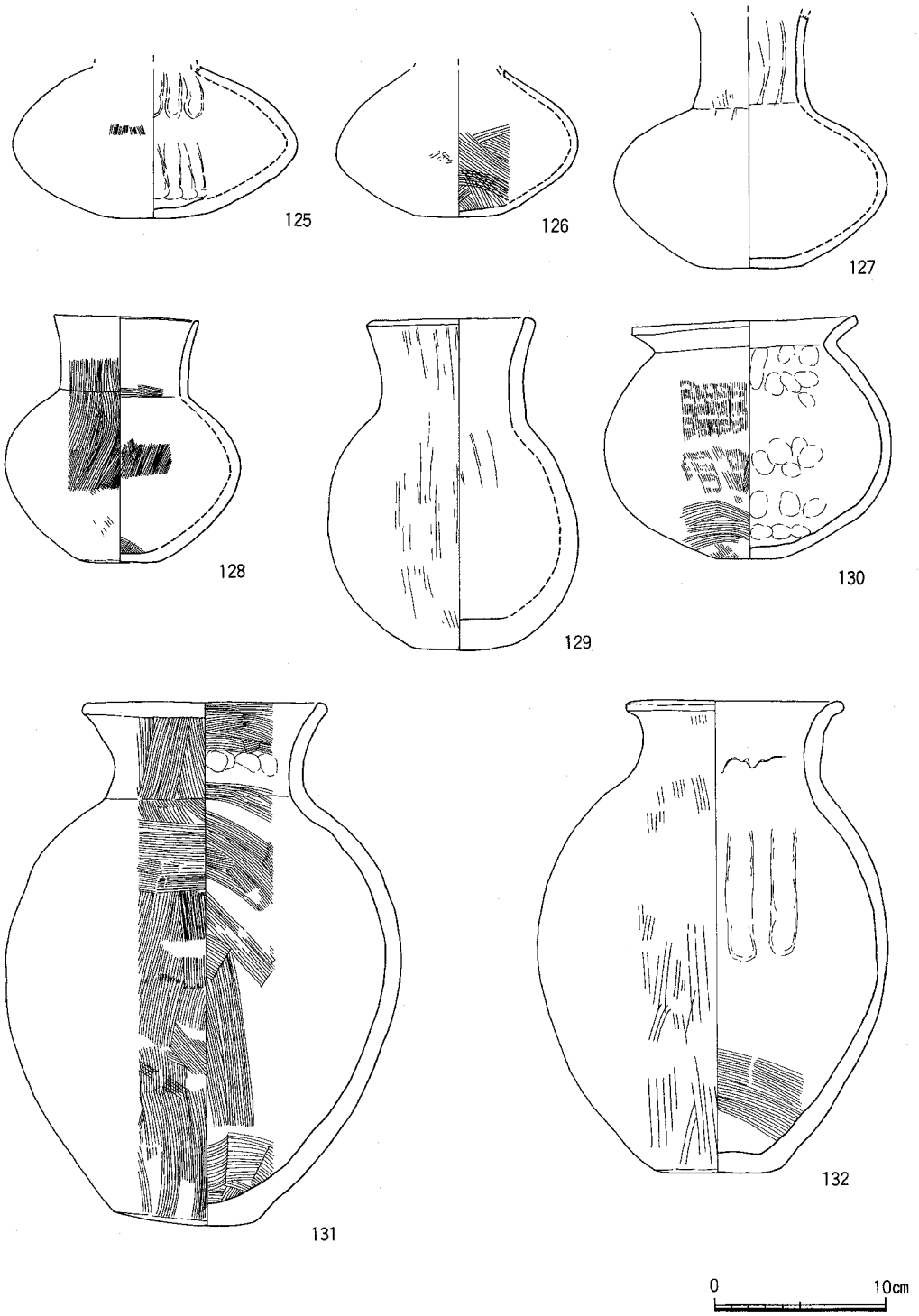


Fig. 67　SE－0014出土遺物実測図（2）（1／4）

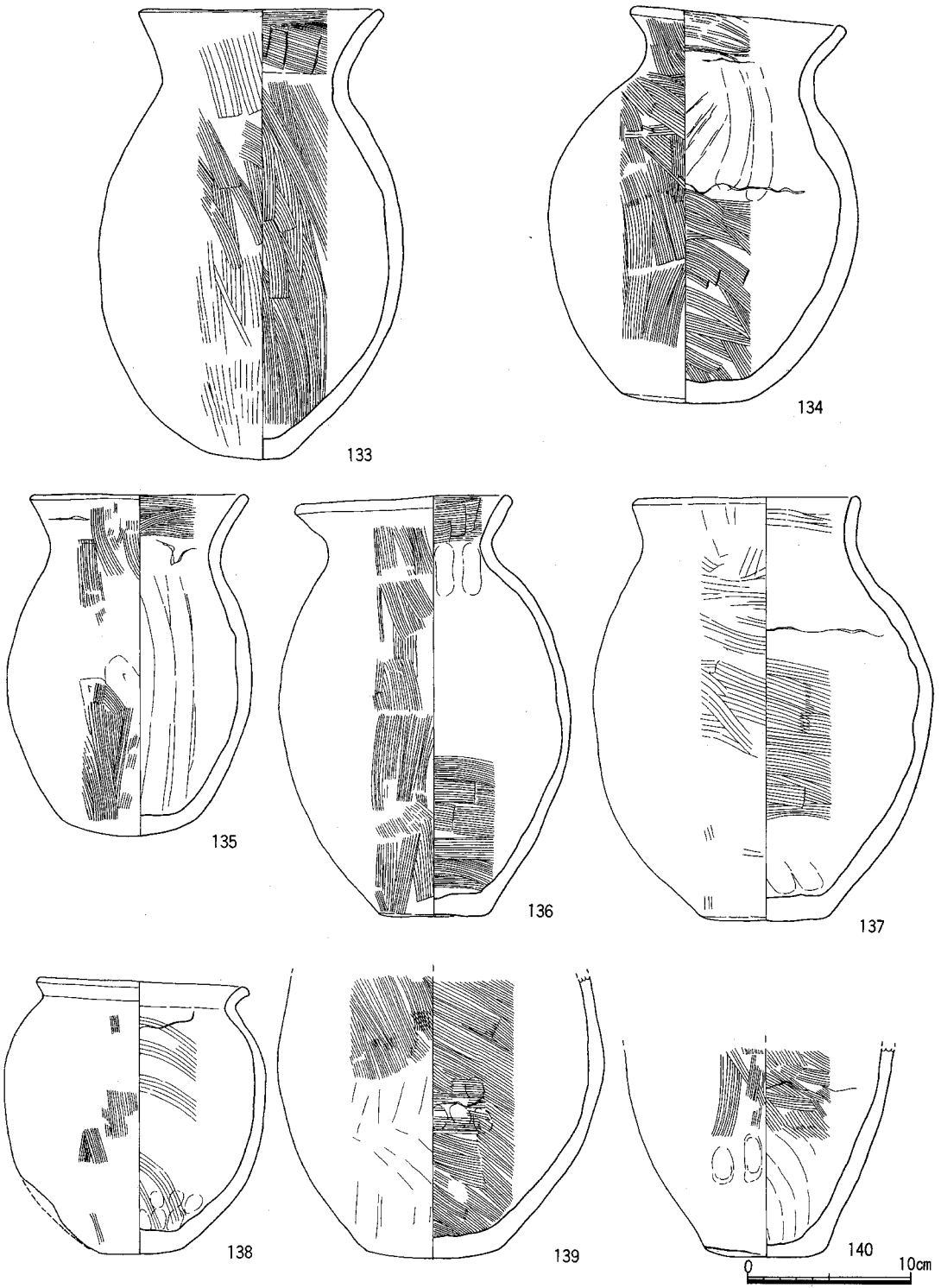


Fig. 68　SE－0014出土遺物実測図（3）（1／4）

SE－0015（Fig. 69）

Ⅳ区の周濠の外側で検出した。上端はSD－0010に切られている。平面形は歪な隅丸方形を呈し、一辺150～175cmを測る。底面は八女粘土層まで掘り下げ、中央をさらに径65cm、深さ60cmで掘り下げる。井戸桶は残存していなかったが、この部分に桶が据えられたと考えられる。深さ200cm、底面の標高6.3mを測る。埋土は褐色粘質土が堆積する。遺物は土師器、同安窯系青磁、滑石製石鍋等が出土した。

出土遺物から、本井戸は12世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（141～148）

141は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。器高2.7cm、口径13.0cmを測る。142、143は同安窯系青磁碗である。143は内面には櫛描きによる施文が見られる。144、145は白磁碗である。145は見込みの釉を掻き取る。146、147は石鍋である。146は鍔の部分、147は底部である。148は砥石である。

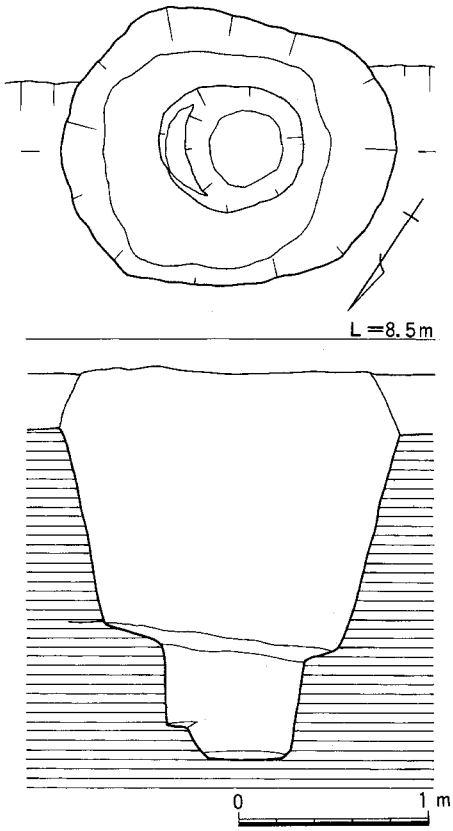


Fig. 69　SE－0015遺構実測図（1/40）

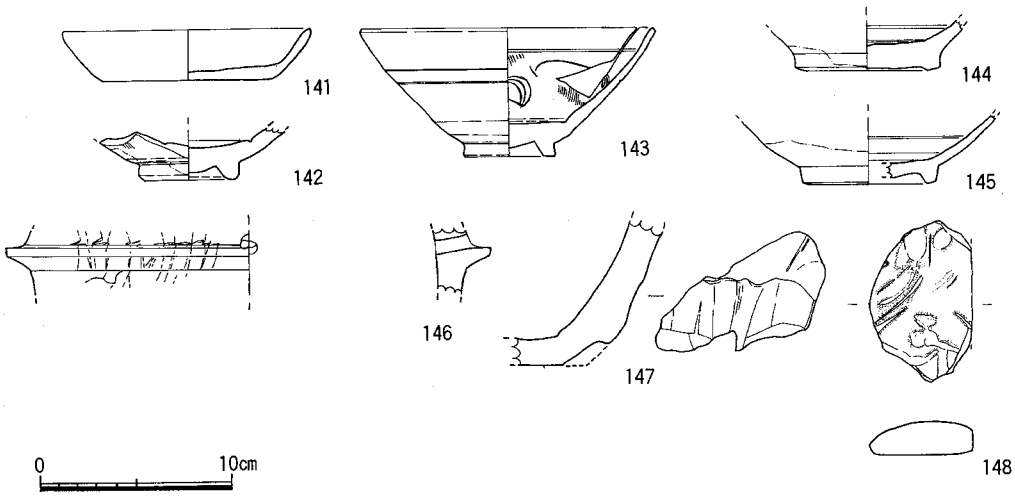


Fig. 70　SE－0015出土遺物実測図（1/4）

3．溝（SD）

今回の調査では周濠の肩と墳丘の裾に沿う溝を検出した（SD－0001、0009、0010）。

溝は周濠の肩に沿って掘りこまれ、Ⅰ区で第32次調査の SD－0010と合流し、南側に延びる。更に、溝はⅤ区で北側に折れて、墳丘の裾に沿って前方部に延びていく。昭和60年度の調査でこの溝は検出されている。幅150cm～300cm、深さは最大で60cm を測る。Ⅱ～Ⅲ区ではこれらの溝に先行する SD－0002を検出した。溝は周濠の肩に沿って、埋土の下層１の上から掘りこまれている。

SD－0001、0009、0010は周濠がある程度埋没した段階に周濠の肩と墳丘に沿って掘りこまれている。深さは周濠の底まで達しており、周濠の排水の性格があるのではないかと考える。また、南側では第32次調査の SD－0001、0010と合流しており、関連する溝と考えられる。第32次調査の SD－0010は周濠側に傾斜しており、周濠に水が流れる構造になっている。

溝の掘削の時期は出土遺物から16世紀代と考えられる。

出土遺物（149～160）

149、150は SD－0001、151は SD－0002、152～156は SD－0009、157～160は SD－0010から出土した。149は土師器坏である。底部の切離しは糸切りである。器高2.0cm、口径14.0cm を測る。150は滑石製の石鍋である。鍔の部分の破片である。151は白磁の皿である。高台から内側は露胎である。又、見込みは輪状に釉を掻き取る。釉色は淡灰色を呈する。152は土師器蓋である。天井部には回転ヘラケズリを施す。口縁には煤が付着する。153は粉青沙器の碗であ

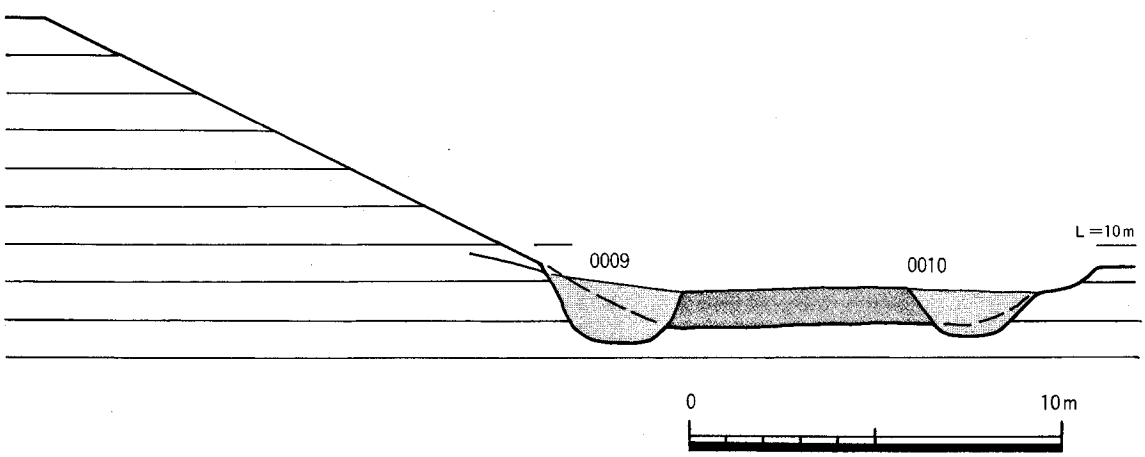


Fig. 71　溝南北断面図（１/200）

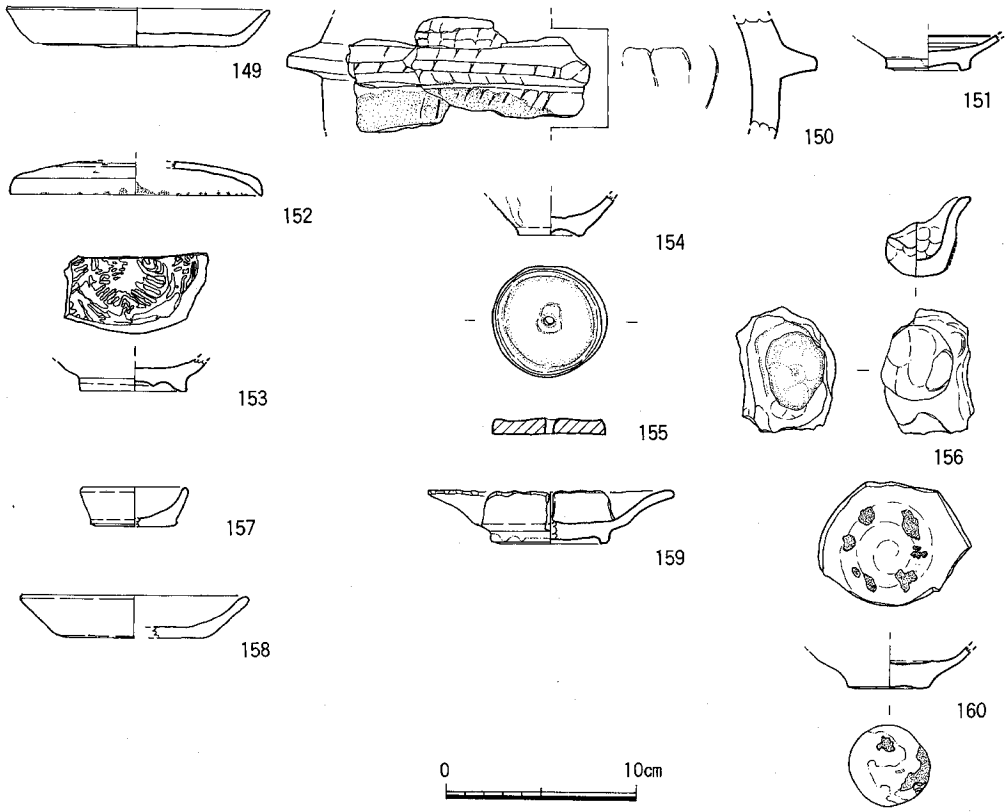


Fig. 72　溝出土遺物実測図（1／4）

る。釉は全面にかかる。釉色は青緑色を呈し、見込みには象嵌を施す。154は施釉陶器の小碗である。外面は露胎で、内面に淡褐色の釉がかかる。155は有孔の円盤である。径6.0cm、厚さ0.9cm を測る。156は匙形の土製品である。把手の部分は欠損している。157は土師器小皿である。体部は直立気味に立ち上がる。底部の切離しは糸切りである。器高2.0cm、口径5.5cm を測る。158は土師器坏で、底部の切離しは糸切りである。器高2.3cm、口径12.0cm を測る。159は青磁の皿である。体部の下半で折れて、口縁は外反する。口縁は輪花状を呈する。高台畳付から内側は露胎となる。釉色は青緑色を呈する。160は李朝の施釉陶器碗である。釉色は灰緑色を呈する。見込みと畳付には目跡が残る。

4．周濠

今回の調査では那珂八幡古墳の後円部南側の周濠を検出した。墳丘の裾はほとんど中世の溝によって削平されているが、Ⅲ区で墳裾の地山成形一部を検出した。それから推定される地山成形の際に掘られた周濠の深さは約1.6mを測る。現存の後円部の高さは8mとなる。また、周濠底の幅は最大で13m、上端の幅15mを測る。

周濠の南側の肩も中世の溝によって削平されているが、周濠は後円部形に沿って、くびれ部側に延びていく。従来の那珂八幡古墳の周濠の形状については盾形の復元案が示されていたが、第32次調査では周濠は検出できなかった。今回検出した周濠の状況から形状は墳丘形に沿った、鍵形を呈するものと推測される。この調査に先立って行われた前方部側の試掘調査では前方部の側面と前面の周濠が検出され、墳丘の全長も更に10m大きくなることが確認されている。これらのことから古墳の周濠は後円部側が幅広く、前方部側が狭い、鍵形の形状が復元される。墳丘形の復元については報告を待って行いたい。

周濠の覆土は流れ込みの状態で堆積していることが観察される。周濠の掘り下げは土層を観察しながら、大きく6層にわけて掘り下げた。

上層1－現地表から60cm、近世以降

上層2－現地表から100cm、近世

上層3－現地表から110cm、～16世

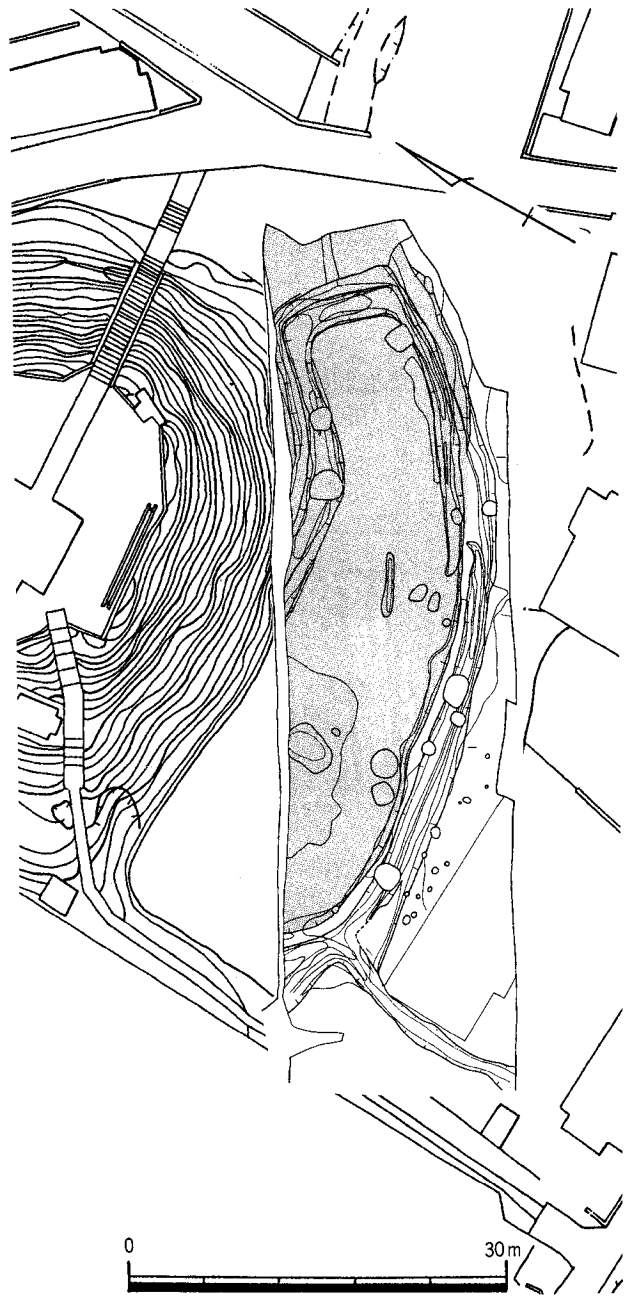
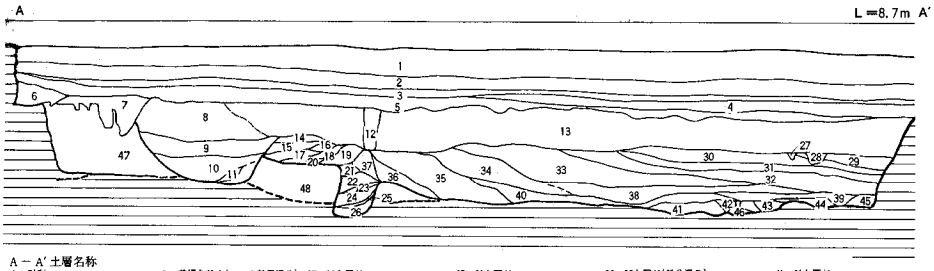
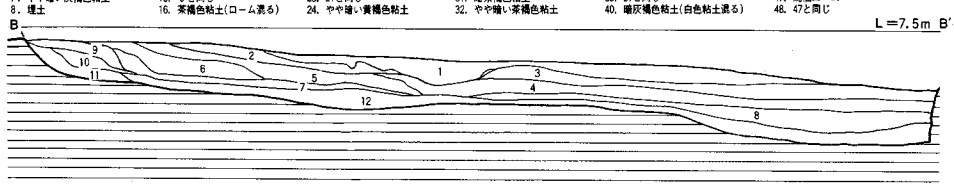


Fig. 73　那珂八幡古墳周濠測量図（1/600）



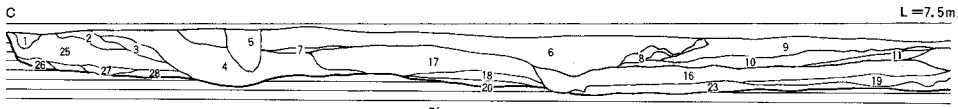
A－A′土層名称

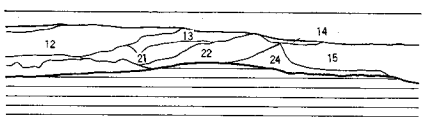
1. 砂利
2. コンクリート
3. 旧耕土
4. 灰褐色粘土(旧耕土？)
5. 4と同じ
6. 灰褐色粘土(炭化物混る)
7. やや暗い灰褐色粘土
8. 畦土
9. 茶褐色粘土(ローム粒子混る)
10. 暗灰褐色粘土
11. ロームブロック
12. 灰褐色粘土
13. 淡茶褐色粘土
14. 10と同じ
15. 9と同じ
16. 茶褐色粘土(ローム混る)
17. 16と同じ
18. ローム(黒色粘土混る)
19. 淡茶褐色粘土(ローム混る)
20. 茶褐色粘土
21. 黒色粘土
22. 7＋黄褐色粘土
23. 21と同じ
24. やや暗い黄褐色粘土
25. 21と同じ
26. 24と同じ
27. 12と同じ
28. 12と同じ
29. 灰褐色粘土(ローム混る)
30. やや暗い茶褐色粘土
31. 暗茶褐色粘土
32. やや暗い茶褐色粘土
33. 32と同じ(鉄分混る)
34. 31と同じ
35. 暗褐色粘土(ローム、炭化物混る)
36. やや暗い暗褐色粘土
37. 21と同じ
38. やや濃い暗茶褐色粘土
39. 21と同じ
40. 暗灰褐色粘土(白色粘土混る)
41. 31と同じ
42. ローム
43. 42と同じ
44. 40と同じ
45. 40と同じ
46. 31と同じ
47. 鳥栖ローム
48. 47と同じ



B－B′土層名称

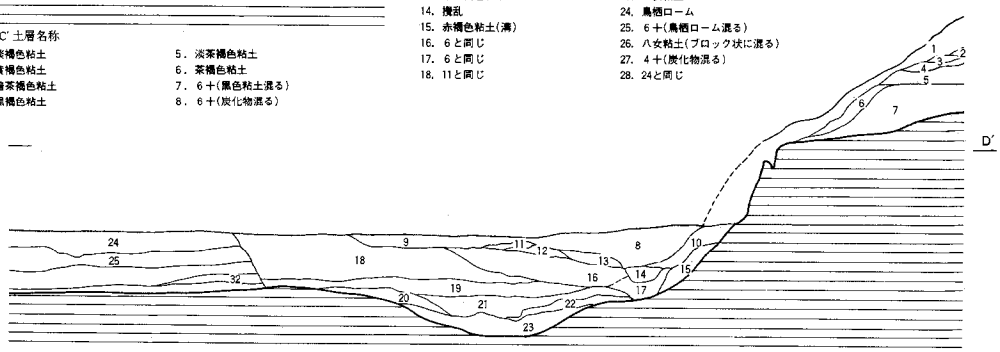
1. 茶褐色粘土
2. 暗茶褐色粘土
3. 2と同じ
4. やや暗い茶褐色粘土
5. 4と同じ
6. 4＋(鉄分混る)
7. 黒褐色粘土
8. 7と同じ
9. 暗褐色粘土
10. 9＋(ロームブロック混る)
11. 鳥栖ローム
12. 暗灰褐色粘土(白色粘土混る)

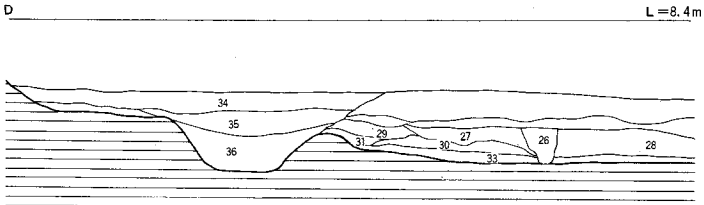




C－C′土層名称

1. 淡褐色粘土
2. 黄褐色粘土
3. 暗茶褐色粘土
4. 黒褐色粘土
5. 淡茶褐色粘土
6. 茶褐色粘土
7. 6＋(黒色粘土混る)
8. 6＋(炭化物混る)
9. 6と同じ
10. 6＋(鉄分混る)
11. 黒色粘土＋茶褐色粘土
12. 暗褐色粘土
13. 暗茶褐色粘土
14. 攪乱
15. 赤褐色粘土(溝)
16. 6と同じ
17. 6と同じ
18. 11と同じ
19. 黒褐色粘土＋暗褐色粘土
20. 八女粘土＋(暗褐色粘土混る)
21. 4と同じ
22. 6＋(粗砂混る)
23. 八女粘土
24. 鳥栖ローム
25. 6＋(鳥栖ローム混る)
26. 八女粘土(ブロック状に混る)
27. 4＋(炭化物混る)
28. 24と同じ





25. 15と同じ
26. やや暗い茶褐色粘土
27. 暗褐色粘土
28. 暗茶褐色粘土(鉄分沈着)
29. 黒褐色粘土
30. やや黒い暗茶褐色粘土
31. 23と同じ
32. 3と同じ
33. 23と同じ
34. 15と同じ
35. 15＋(やや鉄分多く混る)
36. 15＋(鉄分多く混る)

D－D′土層名称

1. 表土
2. ロームブロック
3. 黒色粘土
4. 3＋(八女粘土ブロック混る)
5. 鳥栖ローム(黒色土混る)
6. 旧表土
7. 暗茶褐色粘土
8. 鳥栖ロームブロック
9. 暗灰色粘土
10. 暗灰色粘土(しまりがない)
11. ロームブロック
12. 3と同じ
13. 鳥栖ローム
14. ローム
15. 茶褐色粘土
16. 10と同じ
17. やや暗い灰褐色粘土
18. 15と同じ
19. やや暗い淡褐色粘土
20. 淡褐色粘土(ローム粒子多く混る)
21. 淡褐色粘土(ローム粒子混る)
22. 八女粘土
23. 淡褐色粘土
24. 茶褐色粘土(ローム粒子混る)

0　2 m

Fig. 74　周濠土層図（1/80）

紀、上層３には前代の輸入陶磁器等も含むが、明代の青磁、李朝の陶磁器等を含む。

下層１－現地表から130cm、～12世紀、下層１には弥生土器、須恵器などの前代の遺物も含むが、12世紀を中心とした時期の輸入陶磁器、瓦器、土師器等が含まれる。

下層２－現地表から150cm、～８世紀、下層２には輸入陶磁器は含まれず、６世紀、７世紀の土師器、須恵器を中心に出土した。これらの他、軒丸瓦、鴟尾等が出土した。

下層３－現地表から160cm、～古墳時代初頭、下層３には須恵器は全く含まれず、ほとんどが弥生土器である。Ⅰ区～Ⅲ区では検出できたが、Ⅳ区より東では見られない。わずかに古式土師器を含み、古墳の造営直後の時期を示すものと考えられる。

各層の遺物の状況を見ると、古墳の周辺の遺構の状況を対応していることが分かる。

出土遺物（161～268）

161～166は下層３で出土した。161は二重口縁壺である。口縁は屈曲して緩やかに外反する。端部は丸く仕上げる。屈曲部の稜は明瞭である。頸部は直立気味に立ち上がる。器面は風化のため、調整は不明である。色調は淡黄褐色を呈する。162、163は甕口縁である。口縁はくの字に屈曲する。164は高坏の坏部である。口縁は外反して大きく開く。165は小型丸底壺である。口縁は直線的に外傾し、頸部は窄まる。胴部は偏球形を呈する。器面にはヘラミガキを施す。底面にはハケメが残る。内面はハケメである。色調は赤褐色を呈する。166は手捏ねの椀である。器面には指頭痕を残す。

167～189は下層２から出土した。167、168は甕底部である。168は上底で、畿内系の甕と考えられる。調整は外面はナデ、内面はハケメである。169、170は高坏である。169は脚部はハの字形に開く。調整は外面はハケメ、内面はナデで、指頭痕が残る。170は脚部はハの字形に開く。器面には縦方向のヘラミガキを施す。171は小型の器台である。脚部はハの字形に開く。裾部付近には円形の孔を穿つ。172は器台である。受け部はほぼ水平に折れる。173は把手状の土製品である。174～189は須恵器である。174～178は坏蓋である。174は天井部と口縁の境に明瞭な稜をもつ。口縁端部は面取りする。天井部の１/２に回転ヘラケズリを施す。器高5.4cm、口径12.8cm を測る。175は天井部と口縁の境に鈍い稜をもつ。天井部の１/２に回転ヘラケズリを施す。器高4.0cm、口径12.8cm を測る。176～178は天井部と口縁の境は不明瞭である。天井部は丸みを帯びている。天井部の１/３に回転ヘラケズリを施す。器高3.5cm、3.2cm、5.3cm、口径12.4cm、12.7cm、12.7cm、を測る。178は天井部にヘラ記号がある。179は坏身で、口縁は内側に短く立ち上がる。底部の１/２に回転ヘラケズリを施す。180は高台付の坏である。体部は直線的に立ち上がる。底部には断面台形の高台がつく。181は口縁は内湾気味に立ち上がり、端部はわずかに外反する。底部は平らで、ヘラケズリを施す。182は瓶である。口頸部の基部は細く、頸部は外反して開き、口縁は内湾する。口縁外面には突帯状の段がつく。底部

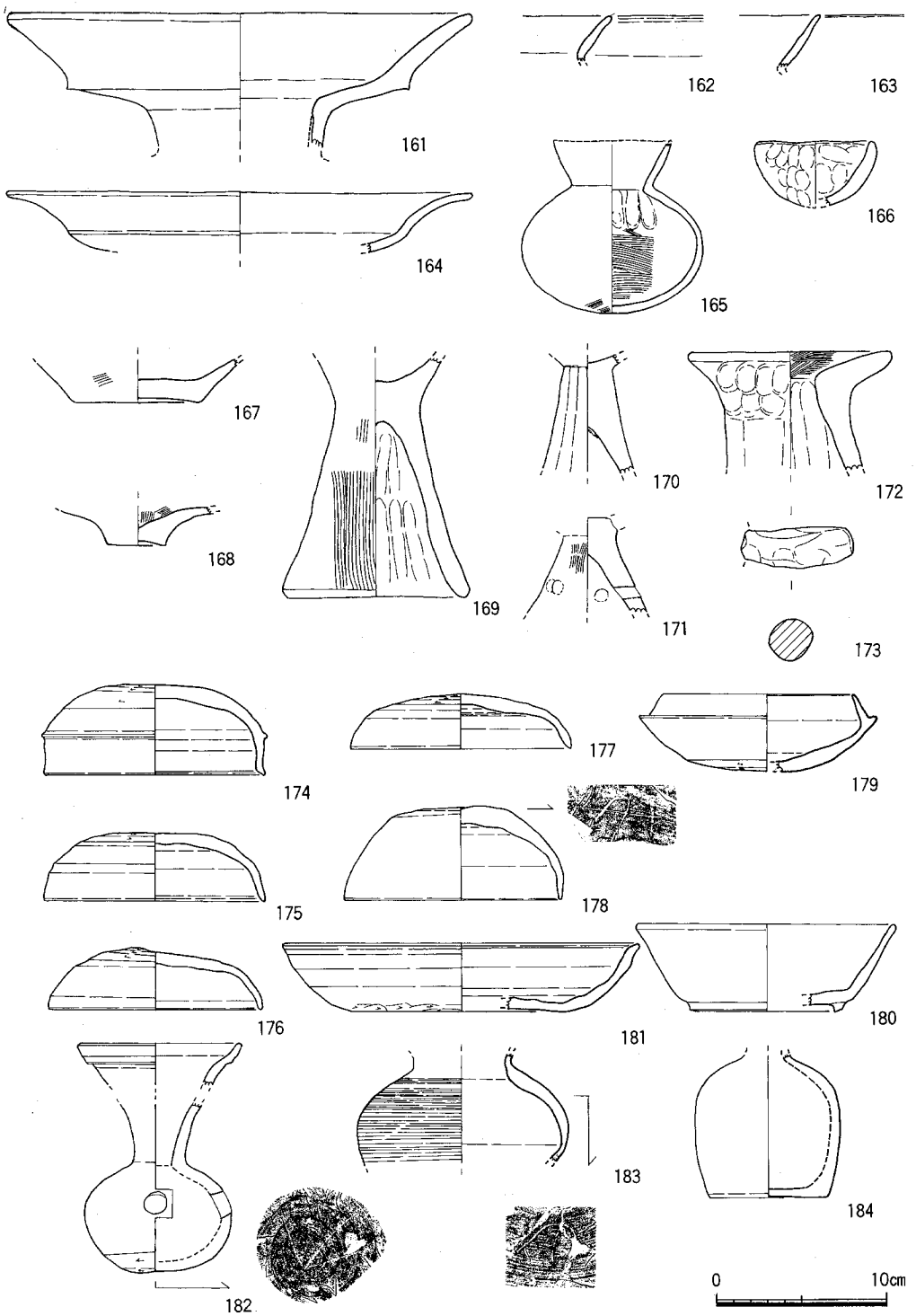


Fig. 75　周濠出土遺物実測図（1）（1／4）

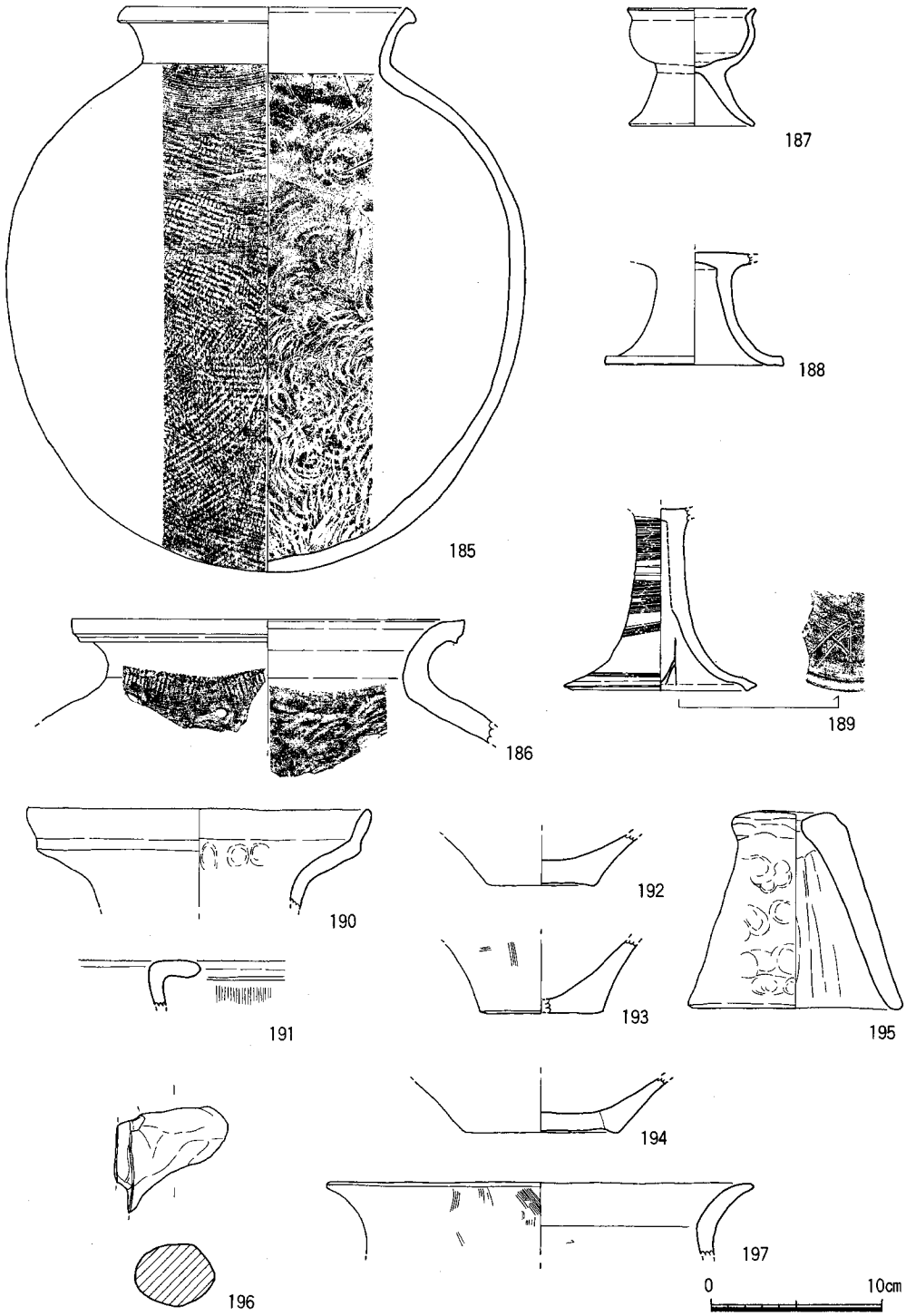


Fig. 76　周濠出土遺物実測図（2）（1／4）

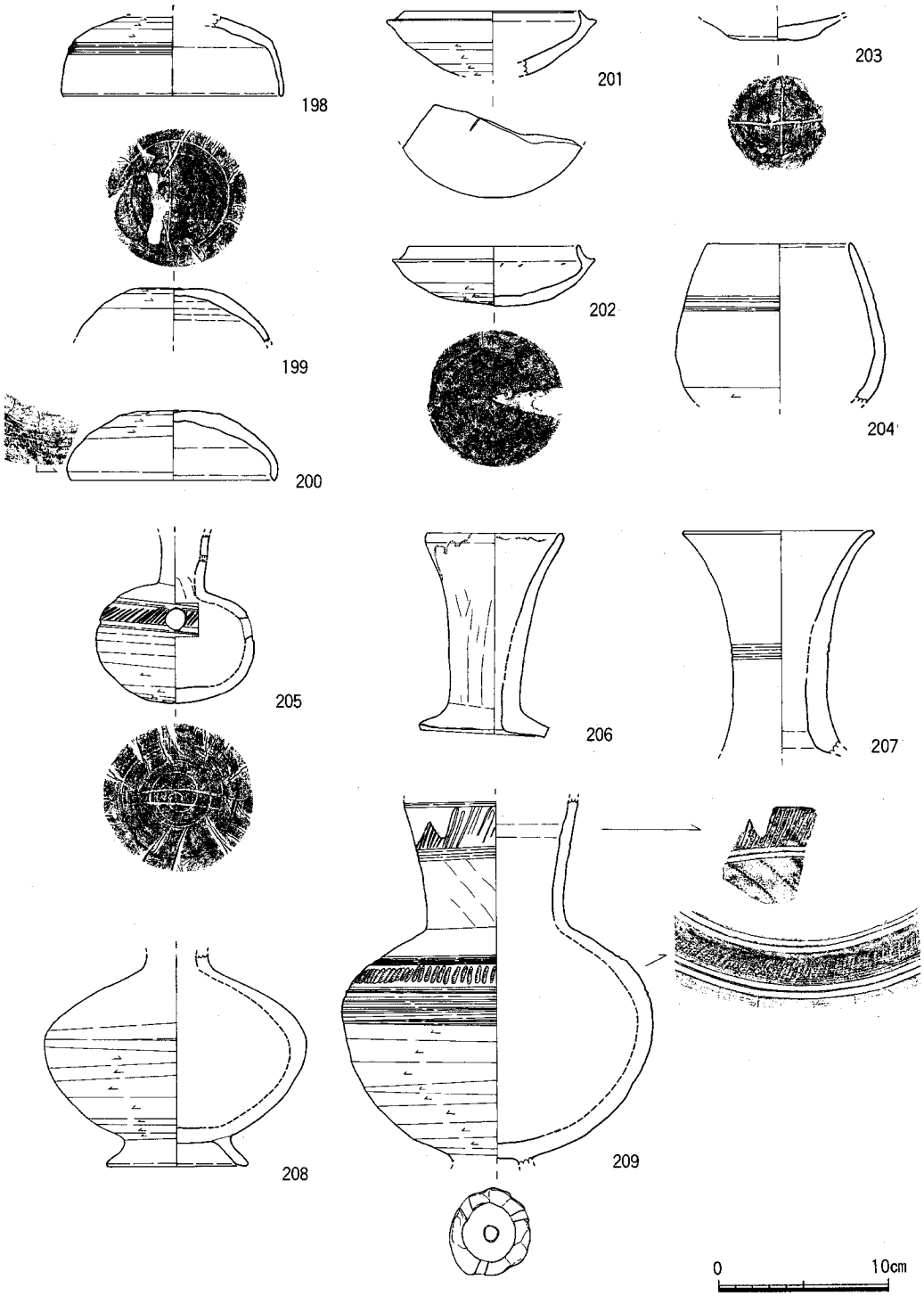


Fig. 77　周濠出土遺物実測図（3）（1／4）

には回転ヘラケズリを施す。底部にヘラ記号がある。183は短頸壺である。口縁は欠けている。体部にはカキメを施す。184は壺である。口頸部は欠損している。体部は肩が張る。底部は平底である。185は甕である。頸部は緩やかに外反し、口縁は玉縁を呈する。体部は球形を呈する。調整は外面は格子目叩きで、肩部にはカキメを施す。内面は同心円文の当て具痕が残る。186は口頸部は緩やかに外反する。口縁下に突帯がつく。外面には平行叩き、内面は同心円文の当て具痕が残る。187は小型の高坏である。坏部は内湾気味に立ち上がり、口縁は折れてくの字形を呈する。脚部はハの字形に開く。色調は灰白色を呈する。器高3.5cm、口径7.4cmを測る。188、189は高坏の脚部である。188は脚部は緩やかに開き、裾部の内側が接地する。189は長脚で、中央に二条の凹線が巡る。筒状の脚で、裾は緩やかに開く。裾端部の内側には突帯が巡り、その部分が接地する。外面にはカキメを施す。裾部の内側にはヘラ記号がある。

190～224は下層1から出土した。190～195は弥生土器である。190は複合口縁壺である。口縁は直線的に外傾する。屈曲部には稜をもつ。191は逆L字形の甕口縁である。192～194は平底の甕底部である。195は器台である。受け部は平坦で、脚部はハの字形に開く。器面には指頭痕が残る。196、197は土師器である。196は甑の把手である。197は甕で、口縁は緩やかに外反する。内面にはヘラケズリを施す。198～213は須恵器である。198～200は坏蓋である。198は天井部と口縁の境に突線状の稜をもつ。天井部の2/3に回転ヘラケズリを施す。口縁端部は丸く仕上げる。口径12.8cmを測る。199、200は天井部は丸みを帯び、口縁との境は不明瞭である。天井部には回転ヘラケズリを施す。199は天井部にはヘラ記号がある。200は器高3.2cm、口径12.0cmを測る。口縁部にはシダの葉の圧痕が見られる。201～203は坏身である。201、202は口縁は短く内側に立ち上がる。底部の2/3に回転ヘラケズリを施す。底部にはヘラ記号がある。口径3.6cm、10.0cmを測る。203は底部はヘラ切り未調整である。底部にはヘラ記号がある。204は鉢形の土器で、体部下半で折れて、口縁は内傾する。体部の中央には二条の凹線が巡る。把手がつく鉢と考えられる。205は甑である。頸部の基部は細く、肩部には2条の沈線からなる文様帯があり、刺突文を施す。底部は回転ヘラケズリを施す。底部にはヘラ記号がある。206～208は長頸壺である。口頸部は外反気味に長く延びる。206は頸部の基部で打ち欠いており、器台として最利用したものと考えられる。207は中央に2条の凹線が巡る。208は口頸部は欠いている。肩部は張り、底部にはハの字形に開く高台がつく。胴部下半には回転ヘラケズリを施す。209は脚付の長頸壺である。口頸部は直線的に外傾する。頸部には沈線からなる文様帯がある。肩部はあまり張らず、沈線からなる文様帯には刺突文を施す。胴部中位にはカキメを施す。胴部下半は回転ヘラケズリを施す。脚部は欠損しているが、3方に透かしがあったと考えられる。210～213は甕である。210は口頸部は緩やかに外反し、口縁下には突帯がつく。211は口頸部は緩やかに外反し、口縁外面は肥厚する。胴部の外面には平行叩き、内面には同心円文の当て具痕が残る。212は緩やかに外反し、口縁は玉縁になる。胴部の上位に

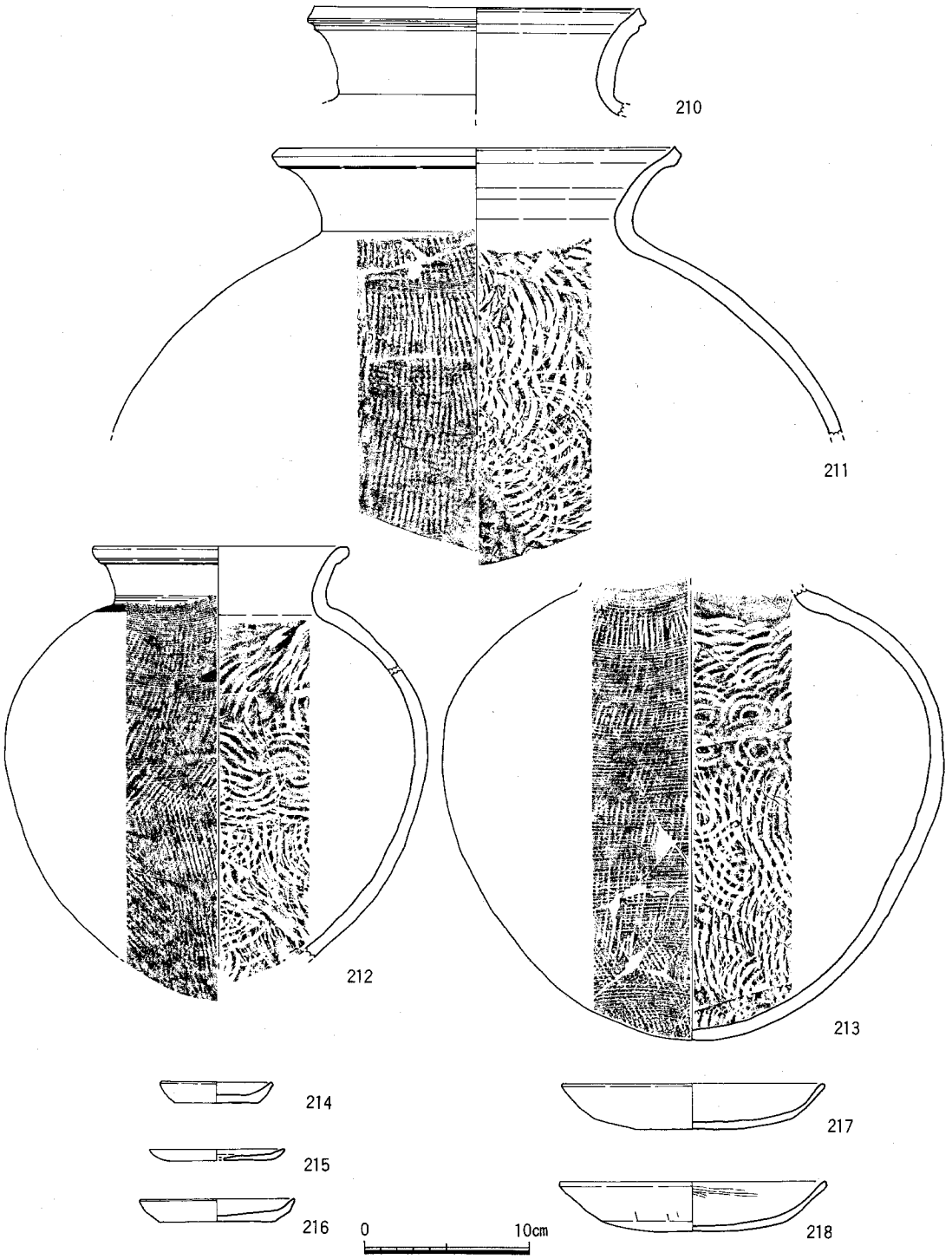


Fig. 78　周濠出土遺物実測図（4）（1／4）

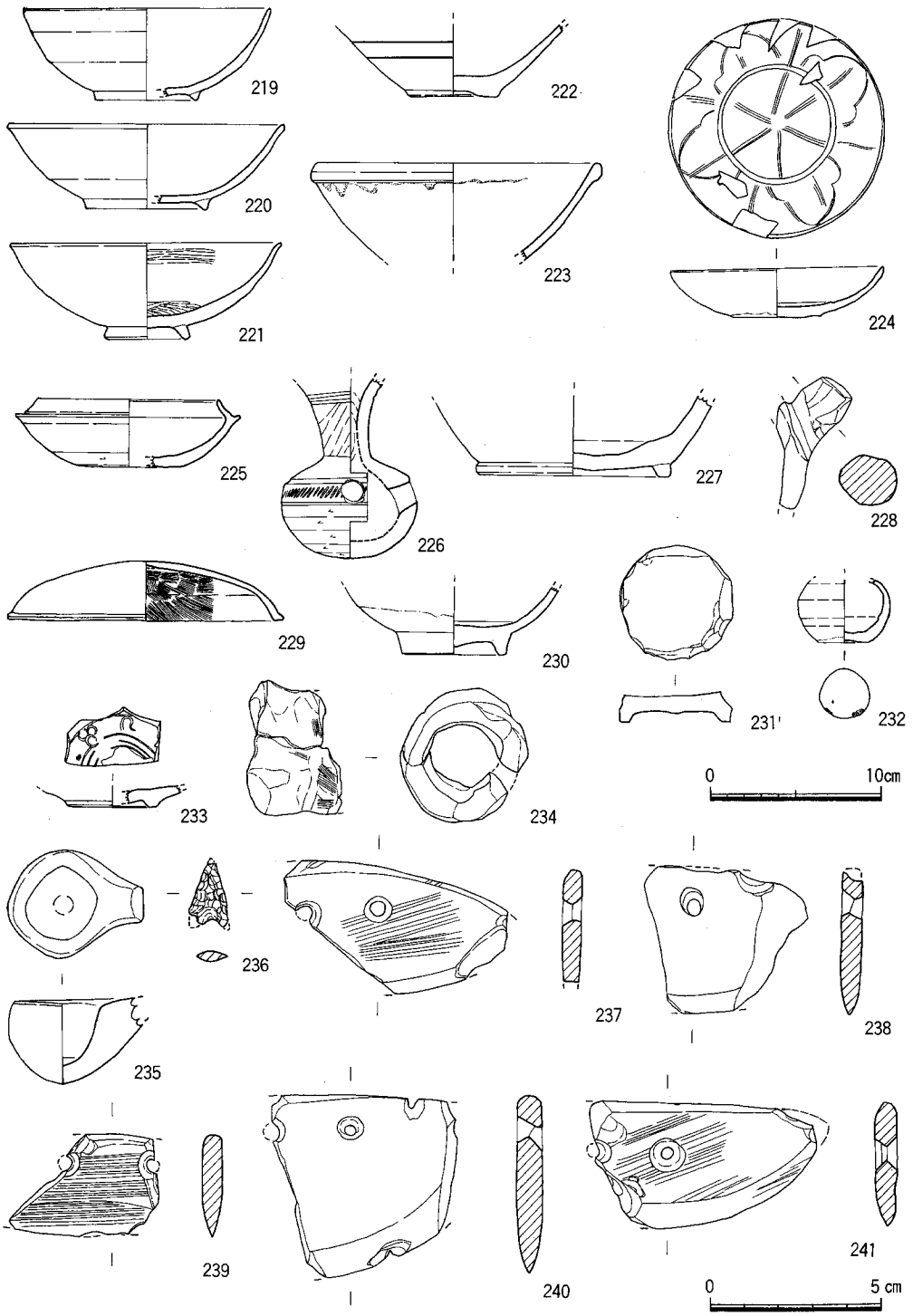


Fig. 79　周濠出土遺物実測図（5）（1／4、1／2）

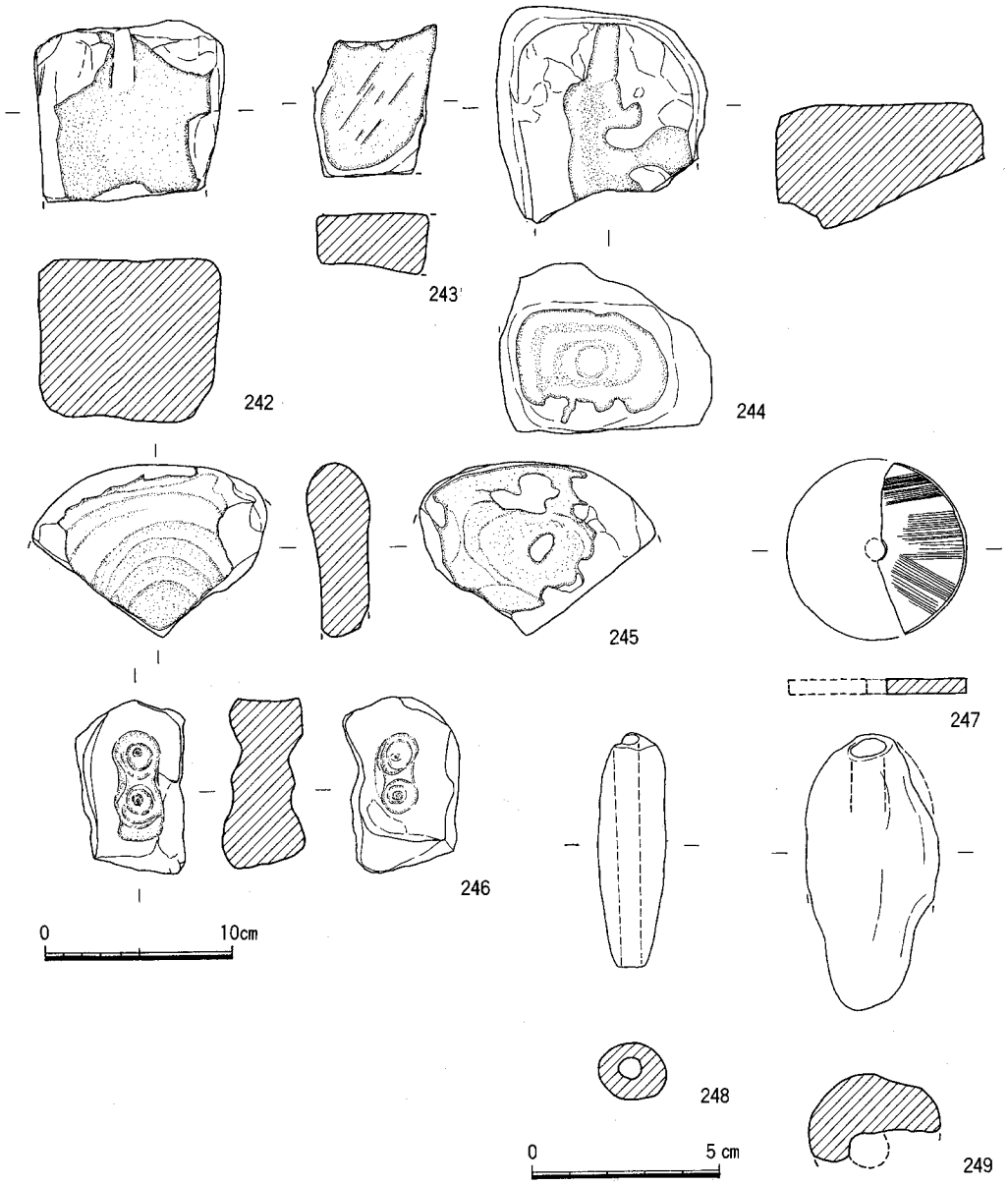


Fig. 80　周濠出土遺物実測図（6）（1／4、1／2）

最大径がある。外面には平行叩きの後、カキメを施す。内面には同心円文の当て具痕が残る。213は口頸部は欠けている。胴部の上位に最大径がある。外面は平行叩きのあと、カキメを施す。内面は同心円文の当て具痕が残る。

214～216は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。器高1.2cm、0.6cm、1.2cm、口径6.8cm、8.0cm、9.4cmを測る。217、218は土師器坏である。底部の切離しはヘラ切りである。器高5.2cm、5.0cm、口径14.5cm、16.0cmを測る。219～220は土師器椀である。219、220は底部に断面三角形の高台がつく。器高5.4cm、5.0cm、口径14.4cm、16.0cmを測る。221は瓦器である。底部中央にハの字に開く高台がつく。器面にはヘラミガキを施す。器高5.5cm、口径16.5cmを測る。222は越州窯系青磁碗である。底部は蛇の目高台で、体部は直線的に延びる。高台から内側は露胎である。釉色は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰色を呈する。223は玉縁の白磁碗である。釉色は灰白色を呈する。224は平底の白磁皿である。見込みには花文を施す。底部は露胎である。

225～232は上層3で出土した。225～228は須恵器である。225は坏身で、口縁は内側に短く立ち上がる。底部は回転ヘラケズリを施す。器高4.0cm、口径10.5cmを測る。226は甕である。頸部の基部は細く、頸部には2条の沈線が巡る。肩部の文様帯には刺突文を施す。底部には回転ヘラケズリを施す。227は長頸壺の底部である。底部には断面台形の高台がつく。228は甑の把手の部分である。断面は円形である。内面の調整はヘラケズリである。229は土師器の蓋である。天井部は丸く、端部外側は肥厚する。外面はナデ、内面はハケメを施す。器高3.5cm、口径16.0cmを測る。230、231は白磁碗である。231は周囲を打ち欠いている。232は白磁の小壺である。釉色は淡褐色を呈する。底面は露胎である。

233は上層2で出土した。233は粉青沙器である。見込みには象嵌を施す。

234は筒状の土製品である。内外面ともナデを施す。内径は3.4cmを測る。235は匙形の土製品である。236は黒曜石製の石鏃である。基部は欠損している。幅1.1cm、長さ1.9cm、厚さ0.3cmを測る。237～241は石包丁である。いずれも欠損している。杏葉形、半月形のものがある。242～245は砥石である。246は両面に2個の小孔を施した石製品である。孔は貫通していない。247は滑石製の紡錘車である。復元径4.8cm、厚さ0.4cmを測る。248、240は土錘である。249は半分が欠損している。

250～268は下層1、2から出土した瓦である。250～252は軒丸瓦である。250は百済系単弁軒丸瓦である。瓦当は中房の部分は欠損している。蓮弁は3/8が残存する。花弁の稜は鋭いが、弁単、間弁は不明瞭である。外縁には4条の圏線が巡る。丸瓦部は凸面は叩きをすり消している。凹面は布目と竹状の模骨痕が残る。焼成は硬質で、青灰色を呈する。251は32次調査SC－3014出土の軒丸瓦と同様の文様をもつ。瓦当部分は完形であるが、丸瓦部はほとんど欠損している。瓦当には単弁七葉の蓮華文を施している。弁端は丸みをもち、珠点を施す。中房

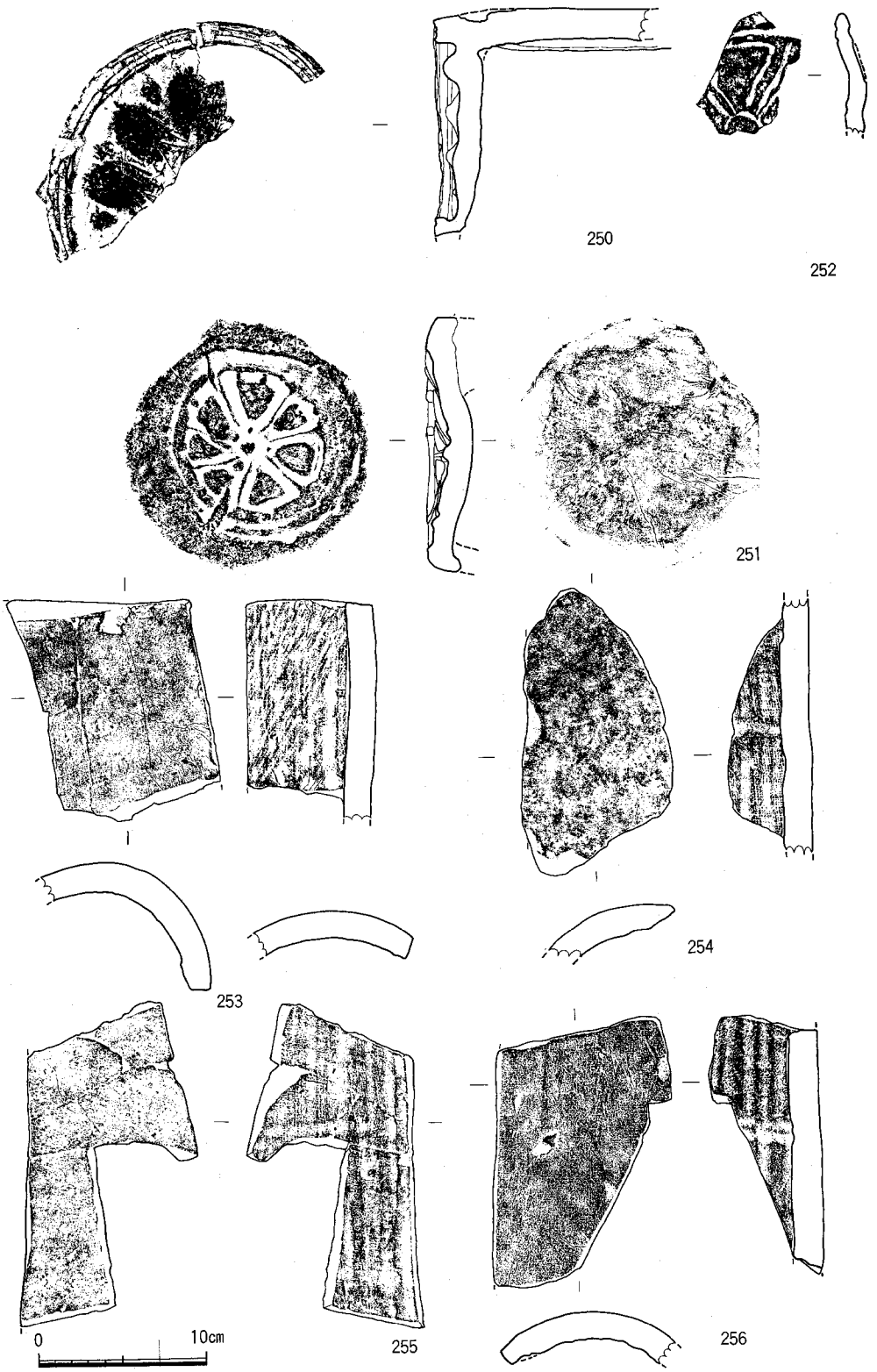


Fig. 81　周濠出土遺物実測図（7）（1／4）

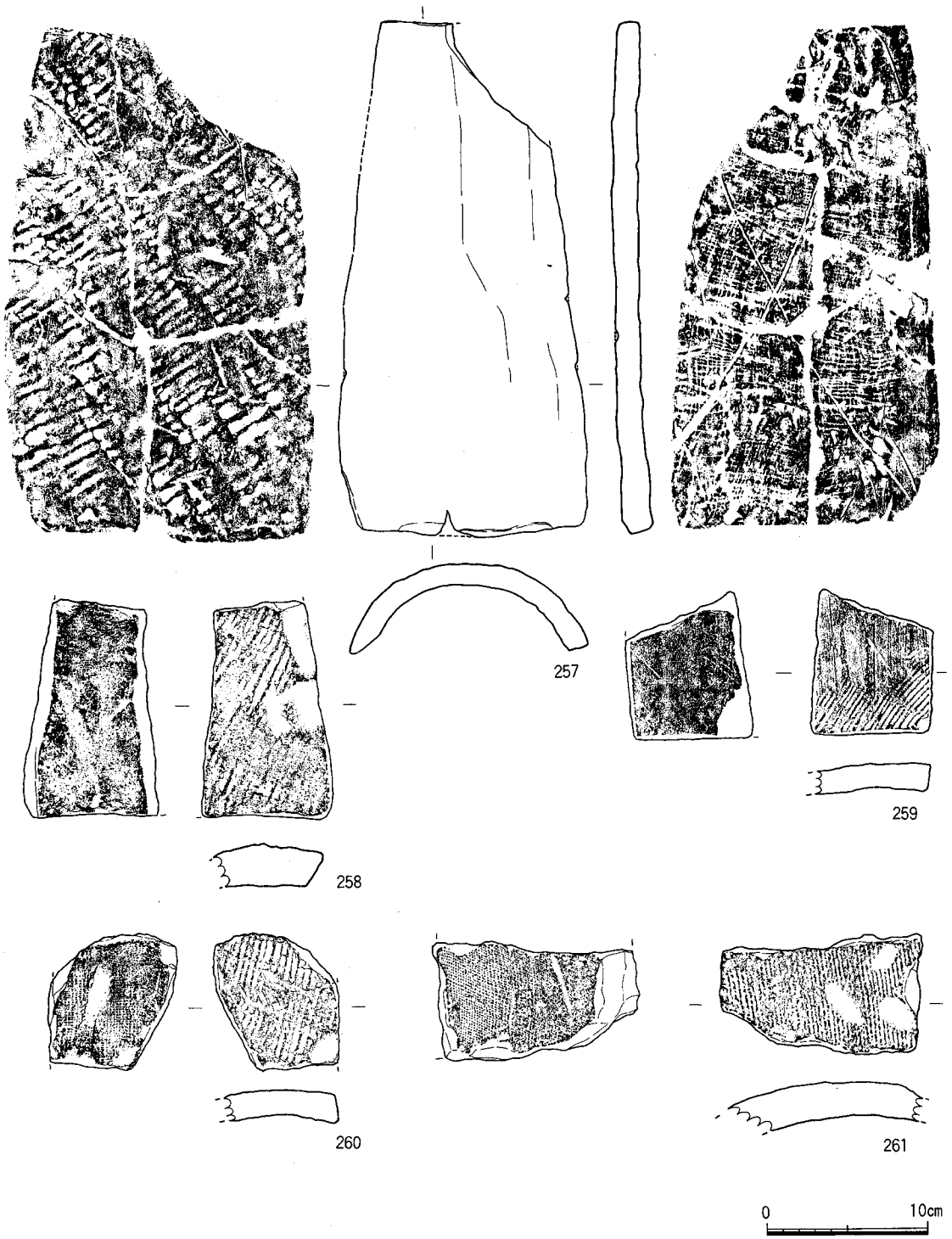


Fig. 82　周濠出土遺物実測図（8）（1／4）

は平坦で蓮弁との境はない。蓮子は１－５の配置である。文様は瓦当の中心からややずれた位置にあり、外区の外縁には笵は当たっていない。瓦当の中央部は凹んでおり、笵が瓦当の内側のみに当たったためと考えられる。内縁は無文である。瓦当径14.5cm、内区径10.5cm、厚さ1.5cmを測る。丸瓦部分はほとんど欠損しているが、32次調査例と同様に「１本作り」によるものと考えられる。焼成は軟質で、淡橙色を呈する。252はヘラ描きによる文様をもつ。文様は単弁の蓮華文である。６～７弁と考えられる。中房は小さく、蓮子の表現はない。厚さ1.1cmを測る。焼成は軟質で、淡黄褐色を呈する。

253～257は丸瓦である。254～257はやや薄手で、凸面は叩き目をナデ消す。凹面には布目と竹状模骨痕が残る。257は行基式の丸瓦で、両端、両側面が残る。凸面は平行叩きが残る。凹面は布目と竹状模骨痕が残る。凹面にはヘラ記号がある。端面、側面にはヘラケズリを施す。長さ32.3cmを測る。焼成は軟質で、淡橙色を呈する。

258～266は平瓦である。258、260、261は凸面に平行叩きが残る。259は叩き目をハケメ工具ですり消す。262は両側面がのこる。凸面には平行叩きを施す。凹面は布目と模骨痕が残る。模骨の幅は2.2cm程である。焼成は軟質で、淡黄灰色を呈する。263は凸面は平行叩きの後、ナデ。264は凸面に格子目叩きを施す。265、266は凸面の叩きをへら状の工具ですり消す。

267、268は鴟尾である。267は鰭の部分で、端部は残存する。鰭は表現は段によって成され、両面にみられる。段は直線である。内側には胴部との接合部が残る。胎土は１～２ｍｍの砂粒を少し含む。焼成は軟質で、灰白色を呈する。268は鰭の部分で、鰭は表現は段によって成され、両面にみられる。段は曲線である。胎土は１～２ｍｍの砂粒を少し含む。焼成は軟質で、暗灰色を呈する。

周濠から出土した瓦は、大半が７世紀後半から８世紀前半に位置づけられると考える。251は、32次調査例から７世紀前半に位置づけられる。鴟尾は小片のため、時期を限定しがたいが、７世紀後半から８世紀前半におさまるものと考える。九州では鴟尾の出土例は９例を数えるが、近隣では大野城市月ノ浦１号窯でこの時期の資料がある。

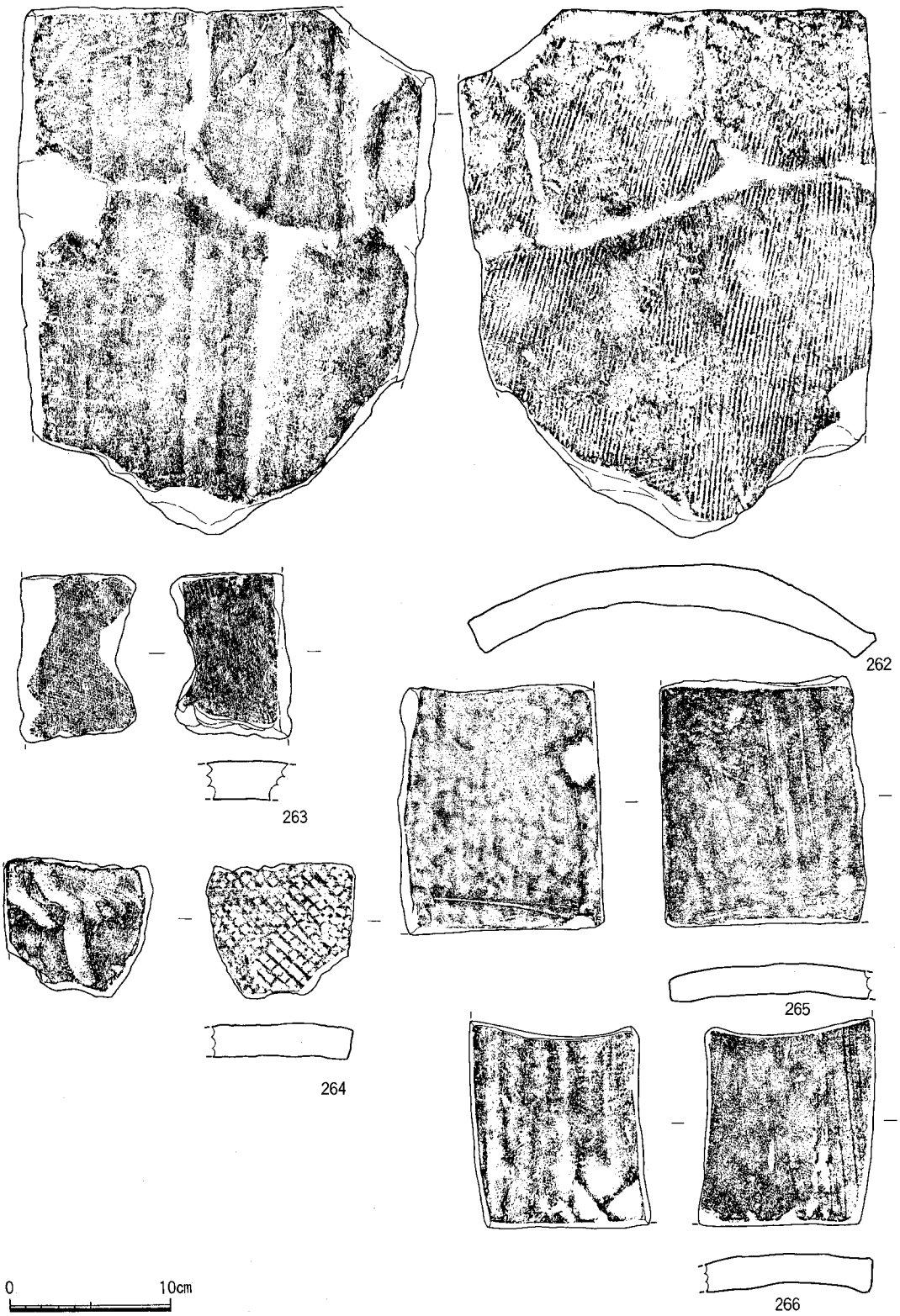


Fig. 83　周濠出土遺物実測図（9）（1／4）

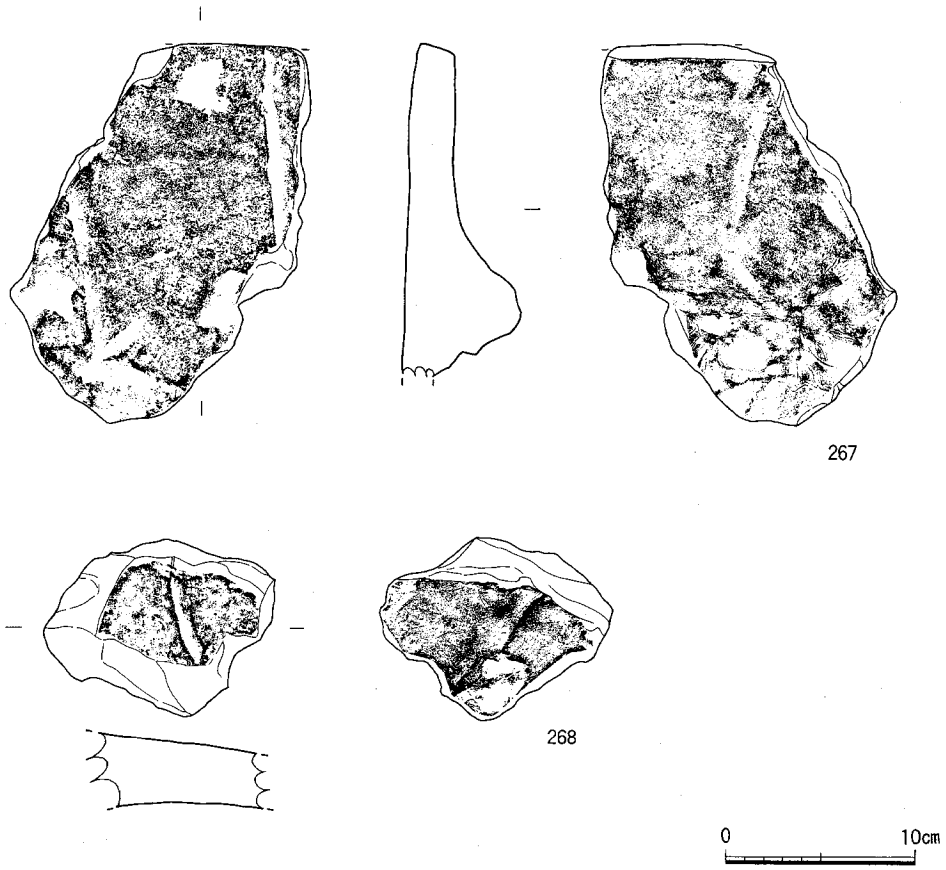


Fig. 84　周濠出土遺物実測図（10）（1／4）

第5章　那珂遺跡34次調査（那珂八幡古墳）自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

那珂八幡古墳（福岡市博多区那珂大字宮ノ脇１－44所在）は、御笠川右岸の洪積台地（那珂台地：標高６～９m)上に築造された前方後円墳である。本古墳の築造時期は、４世紀代と推定されている。

昭和60年に行なわれた発掘調査では、墳丘部において２基の主体部（１号主体部・２号主体部）が確認された。第２主体部からは三角縁神獣鏡・管玉・勾玉などが検出されている。墳丘部は、古墳築造時に地山成形と盛土によって形成されていることが明らかにされている。また、周濠は鎌倉時代以降に改変を受けた痕跡がみとめられている。

福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、本古墳が築造された時期の古環境を復元するために、自然科学的手法を応用した分析調査依頼を当社に要望した。当社では、教育委員会埋蔵文化財課と協議の結果、周濠埋積物を分析試料として、古墳築造時およびそれ以降の各時代・時期の周辺地域の古環境を推定するために、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・土壌理化学分析を行うこととした。珪藻分析では、周濠内の水域環境について検討し、花粉分析および植物珪酸体分析では、周辺地域の古植生について検討した。また、土壌理化学分析では、周濠埋積物の化学的成分を明らかにした。

１．試　　料

試料は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課により、本古墳の調査区北西側壁面から各層位毎に合計８点（試料番号１～８）の土壌試料が採取された（図１)。試料番号１は灰褐色砂質土であり、近代の耕作土とされる。試料番号２～４は淡茶褐色粘土質土であり、近世の客土とされる。試料番号５は茶褐色粘質土であり、中世（12～13世紀）の埋積物とされる。試料番号６・７は暗茶褐色粘質土であり、奈良～平安時代の埋積物とされる。試料番号８は暗灰褐色粘質土であり、古墳時代の埋積物とされる。

採取された試料から、当社において分析目的を考慮して分析試料を選択した。各分析項目の分析点数は、珪藻分析および植物珪酸体分析が合計８点（試料番号１～８)、花粉分析および土壌理化学分析が合計６点（試料番号１・４・５～８）である。

２．分析方法

(1)　珪藻分析

湿重量約７gの試料について、過酸化水素水(H_2O_2)、塩酸(HCL)処理、自然沈降法、傾

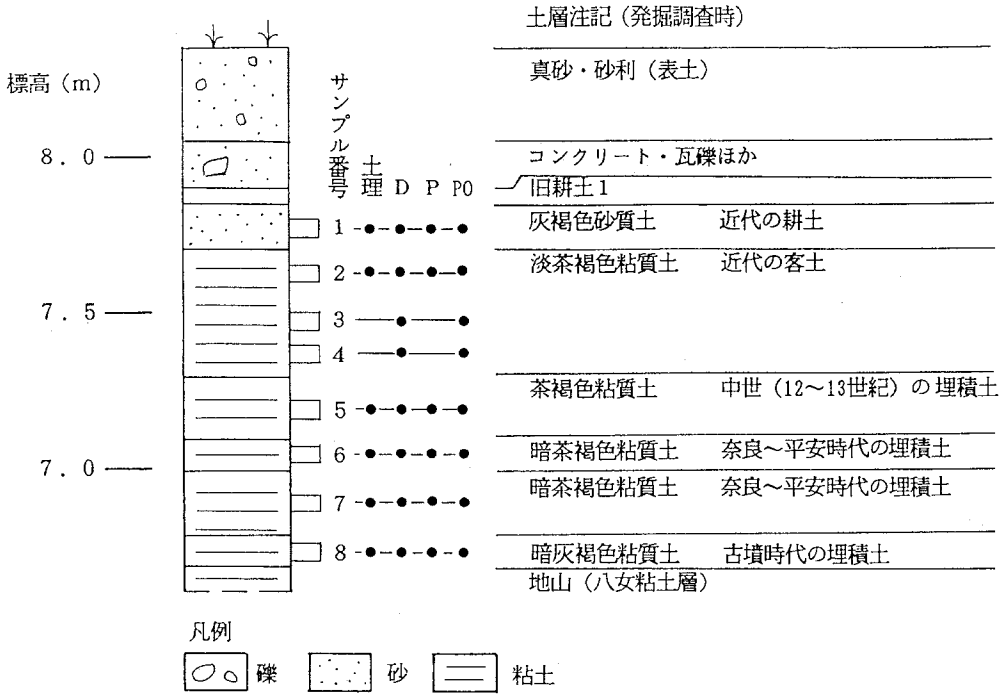


図1　調査区北西側壁面（周濠覆土層断面）の模式柱状図と分析試料採取層準
添付資料をもとに作成.

斜法の順に物理・化学処理を施し、珪藻殻の濃縮を行う。検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。

検鏡は、光学顕微鏡（油浸600倍あるいは1000倍）で、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。同時に完形殻と壊れた殻を区別して計数し、珪藻化石の保存度（完形殻数／総数×100）を求め、考察の際に参考とした。珪藻の種の同定は、K. Krammer & Lange-Bertalot（1986・1988・1991）などを用いた。なお、生態性の解説を表1に示した。

(2)　土壌理化学分析

分析は、土壌標準分析・測定法委員会（1986）、土壌養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）、農林省農林水産技術会議事務局（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）、大羽ほか（1984）を参考にした。以下に、具体的操作行程を分析毎に示す。

a．分析試料の調製

土層断面より採取された試料を風乾し、すべてを軽く粉砕しながら2.0mmφの篩を通過させる。これを風乾細土試料とする。また、風乾細土試料の一部を細かく粉砕し、2.0

表１．珪藻の生態分類

塩分濃度に対する区分		塩分に対する適応性		生育環境（例）
海水生種：	強塩生種（Polyhalobous）	塩分濃度40.0パーミル以上に出現するもの		低緯度熱帯海域、塩水湖など
	真塩生種（Euhalobous）	海産生種、塩分濃度40.0～30.0パーミルに出現するもの		一般海域（ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域）
汽水生種：	中塩生種（Mesohalobous）	汽水生種：塩分濃度30.0～0.5パーミルに出現するもの	強中塩生種（α-Mesohalobous） 弱中塩生種（β-Mesohalobous）	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種：	貧塩生種（Oligohalobous）	淡水生種：塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの		一般陸水域（ex 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉）
塩分・ｐＨ・流水に対する区分		塩分・ｐＨ・流水に対する適応性		
塩分に対する適応性	貧塩－好塩性種（Halophilous）	小量の塩分がある方がよく生育するもの		高塩類域（塩水遡上域・温泉・耕作土壌）
	貧塩－不定性種（Indifferent）	小量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの		一般陸水域（湖沼・池・沼・河川・沼沢地など）
	貧塩－嫌塩性種（Halophobous）	小量の塩分にも耐えることができないもの		湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種（Euryhalinous）	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの		一般淡水～汽水域
pHに対する適応性	真酸性種（Acidobiontic）	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・火口湖（酸性水域）
	好酸性種（Acidophilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・沼沢地
	ｐＨ-不定性種（Indifferent）	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの		一般陸水（ex 湖沼・池沼・河川）
	好アルカリ性種（Alkaliphilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの		
	真アルカリ性種（Alkalibiontic）	特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く出現するもの		アルカリ性水域（少ない）
流水に対する適応性	真止水性種（Limnobiontic）	止水にのみ出現するもの		流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種（Limnophilous）	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの		湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種（Indifferent）	止水にも流水にも普通に出現するもの		河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種（Rheophilous）	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの		河川・川・小川・上流域
	真流水性種（Rheobiontic）	流水域にのみ出現するもの		河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸生珪藻	好気性種（Aerophilous）	好気的環境（Aerial habitats） 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中やコケの表面に生育可能特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という		・土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 ・木の根元や幹に生えたコケに付着 ・濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 ・洞窟入口や内部の照明の当った所に生えたコケに付着

註　塩分に対する区分は、Lowe(1974)、pHと流水に対する区分は、Hustedt(1937-38)による。

mmφの篩を全通させる。これを微粉砕試料とする。

b．水分測定

風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5.0時間）により測定する。

c．腐植含量の測定（CNコーダー法）

微粉砕試料100～1,000mgを正確にはかり、助燃剤（酸化コバルト）5gと混合する。これをサンプルボードに乗せて、CNコーダー（柳本制作所製）に挿入する。挿入した試料をキャリアガス(He)気流中で950℃に加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを鈍化させ、CO_2およびN_2の組成にする。次いで、希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの炭素量（T-C%）を求める。求められた炭素量に1.724を乗じて腐植含量を算出する。

d．NaOH抽出腐植の光学性

炭素量100mgに相当する量の微粉砕試料を精秤し、100mℓ三角フラスコに入れる。これに0.5%NaOH溶液50mℓ（炭素：液＝1：500）を加え、小型ロートをかぶせて沸騰している湯浴中に浸漬し、時々振り混ぜながら30分間加温する。湯浴から取り出した三角スラスコを流水中で冷却させた後、3,000回転／分（約15,000×g：gは重力加速度）で10分間遠心分離し、透明な腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液10mℓを50mℓメスフラスコにとり、水で定溶する。この希釈液について610、600、400nmの吸光度を測定する。この測定値から、⊿logK（log K400－log K600）CD（color density：抽出腐植原液の600nmの吸光度)、K610／K600（600nmの吸光度に対する610nmの吸光度の比）を求める。

e．リン酸吸収係数

乾土換算で10.00gになるように分析試料を秤量し、2.5%リン酸アンモニウム液（pH 7.0）を正確に20mℓ加え、時々振とうしながら室温で24時間放置する。これを乾燥ろ紙でろ過し、そのろ液0.1mℓを50mℓのメスフラスコに正確に採取し、蒸留水約35mℓとリン酸発色a液10mℓを加えて50mℓに定容する。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液（pH7.0）のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

(3) 花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重10mgの試料についてKOH処理、篩別(250μm)、重液分離($ZnBr_2$：比重2.2)、HF処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

(4) 植物珪酸体分析

分析は、近藤・佐藤（1986）の方法を参考にした*1。試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水（H_2O_2）・塩酸(HCL)処理、超音波処理（70W、250KHz、1分間)、沈定法、重液分離法（臭化亜鉛、比重2.3）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを制作する。400倍の光学顕微鏡下で全面走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を示した。各種類(Taxa)の出現率は、短細胞体と機動細胞体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞体で100個未満の試料は組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を＋で示すにとどめた。

＊1：近藤・佐藤（1986）の方法は、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、種類毎の出現率から過去の植生から栽培植物の有無を推定するものである。特に栽培植物の有無について検討する場合には、短細胞珪酸体について注目する必要がある。これは、イネ科植物の各種類における植物珪酸体の組成および生産量が異なる（近藤、1983）ためである。例えば、イネ（イネ属）では短細胞珪酸体よりも機動細胞珪酸体の割合が高いが、コムギ（イチゴツナギ亜科オオムギ族）などでは機動細胞珪酸体がほとんど形成されないことがしられている。

3．結　果

(1) 珪藻化石の産状

各試料から産出した珪藻化石は、アルファベット順に並べて産出固体数を表示する（表2）。

表中には個々の種の生態性（塩分、水素イオン濃度、水の流動性に体する適応性）についても併記する。さらに、各種類の出現傾向から水域の有無やその状態を推定するために、出現率2.5%以上の主要な分類群については、主要珪藻化石群集図を作成する（図2）。

珪藻化石の産状は、試料番号1・2・6・8の4試料から良好に産出するが、これ以外の4試料からは51個体以下の産出で少ない。産出種は、全て淡水生種よりなり、産出分類群数は18属81分類群（61種・14変種・未同定6）である。また、完形殻の出現率は、約50%である。以下に各試料毎に産出種の特徴を述べる。

表2　珪藻分析結果

Species Name	Ecology			1	2	3	4	5	6	7	8
	H.R.	pH	C.R.								
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	-	1	1	-	-	-	-	-
[·A]*Amphora montana* Krasske	Ogh-ind	ind	ind	4	-	-	-	-	-	-	-
[O]*Anomoeoneis brachysira* (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-
[N]*Aulacosira ambigua* (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	-	-	-	-	-	1	1
Aulacosira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-	-	-	25	15	31
[·A]*Caloneis aerophila* Bock	Ogh-ind	al-il	ind	3	3	-	-	-	-	-	-
[·]*Caloneis hyalina* Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	-	-	-
[·B]*Caloneis leptosoma Krammer* & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	5	-	-	-	1
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	1	-
##[O]*Cymbella aspera* (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	13
##[K]*Cymbella minuta* Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	1
##*Cymbella silesiaca* Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	-	1	9
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	1	-	1	8
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	-	-	-
Diploneis spp.	OGh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-	-	-	-
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	1
Eunotia arcus var. *bidens* Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-
[·A]*Eunotia fallax* A.Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	-	1	-	-	-	-	-	-
[O]*Eunotia flexuosa* (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	-	-	-	-	-	1	1	1
[O]*Eunotia incisa W.Smith ex* Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia lunaris (Ehr.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	1
Eunotia lunaris var. *subarcuata* (Naeg.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	2
[O]*Eunotia monodon* var. *tropica* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia monodon var. *undulata* Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	4	1	-
[O]*Eunotia pectinalis* (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
[O]*Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	2	1	5
[O]*Eunotia pectinolis* var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	3	-	-	58	13	3
Eunotia pectinalis var. *ventralis* (Ehr.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
[·B][O]*Eunotia praerupta* Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	8	-	-
[·B][O]*Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	1	-	-	14	1	2
[·]*Eunotia praerupta* var. *inflata* Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	1
[O]*Gomphonema acuminatum* Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	5
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	2
[O]*Gomphonema gracile* Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	-	-	1	-	-	1	3	5
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	2	-	3
[·A]*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	42	25	16	11	4	3	-	-
[·A]*Melosira roeseana* Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula americana Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
#[·B]*Navicula confervacea* (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	3	1	-	-	1	2	6
##[·A]*Navicula contenta* Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	10	7	-	-	-	-	-	-
#*Navicula cuspidata* Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula elginensis var. *cuneata* H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	1	-
[·]*Navicula gibbula* Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula gastrum (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula laevissima Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	2	-	-
#[·A]*Navicula mutica* Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	32	9	2	4	-	2	-	3
[·B]*Navicula paramutica* Bock	Ogh-ind	ind	ind	-	1	1	-	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	1	1	-	-	-	-	-
#[·B]*Navicula seminulum* Grunow	Ogh-ind	ind	ind	-	2	-	-	-	-	-	-
[·]*Nitzschia perminuta (Grun.)*Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	-	-	-
[·A]*Neidium alpinum* Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	14	4	2	-	-	-	-	-
*Neidium ampliatum (Ehr.)*Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	1	-	-	-	-
[·]*Neidium bisulcatum* (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	2	-	-
Neidium productum (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	-	-	-	-
[O]*Pinnularia acrosphaeria* W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-	-	-	-	1	-
Pinnularia appendiculata (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	63	16	1	1	-	1	-	-
[·A]*Pinnularia borealis* Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	9	6	4	2	-	-	-	-
[·A]*Pinnularia borealis* var. *rectangularis* Carlson	Ogh-ind	ind	ind	-	3	-	-	-	1	-	-
#*Pinnularia braunii* var. *amphicephala* (A.Mayer)Hustedt	Ogh-hob	ac-bi	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	1	1	-	-	1	1	1
[O]*Pinnularia gibba* Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	-	1	1	1	-	4	-	1
Pinnularia gibba var. *mesogongyla* (Ehr.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia gibba var. *parva* (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	3	-	-
[·A]*Pinnularia intermedia* (Largerst.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-	-	-	-	-	-
#*Pinnularia interrupta* W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia maior Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	1

Pinularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ac-il	-	1	-	-	-	-	-	-
#*Pinnularia microstauron* (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	1
[·B]*Pinnularia subcapitata* Gregory	Ogh-ind	ind	ind	14	5	-	-	-	1	1	-
[O]*Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-
[O]*Pinnularia viridis* (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	1	1	-	9	1	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	6	-	20
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-hil	al-bi	ind	-	1	7	7	-	-	-	2
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	1
[·B]*Stauroneis obtusa* Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	4	3	-	-	-	-	-	-
[O]*Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	1	1	-	-	1	-
[O]*Stauroneis phoenicenteron* var. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-	-	-	4
##[O]*Tabellaria fenestrata* (Lyngb.)Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi	-	-	-	-	-	-	-	1
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				200	102	49	39	5	161	51	139
Total Number of Diatoms				200	102	49	39	5	161	51	139

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
- Ogh-hil:貧塩好塩性種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi:真アルカリ性種
- al-il:好アルカリ性種
- ind :pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- ac-bi:真酸性種
- unk :pH不明種

C.R.:流水に対する適応性
- l-bi:真止水性種
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- r-bi:真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種群

[K]:中～下流性河川指標種群,[N]湖沼沼沢湿地指標種,[O]:沼沢湿地付着生種（以上は、安藤,1990による）,#:好汚濁性種,##:好清水性種（以上は、渡辺ほか, 1986による）,[·]:陸生珪藻（[·A]:A群,[·B]:B群、伊藤・堀内, 1991による）

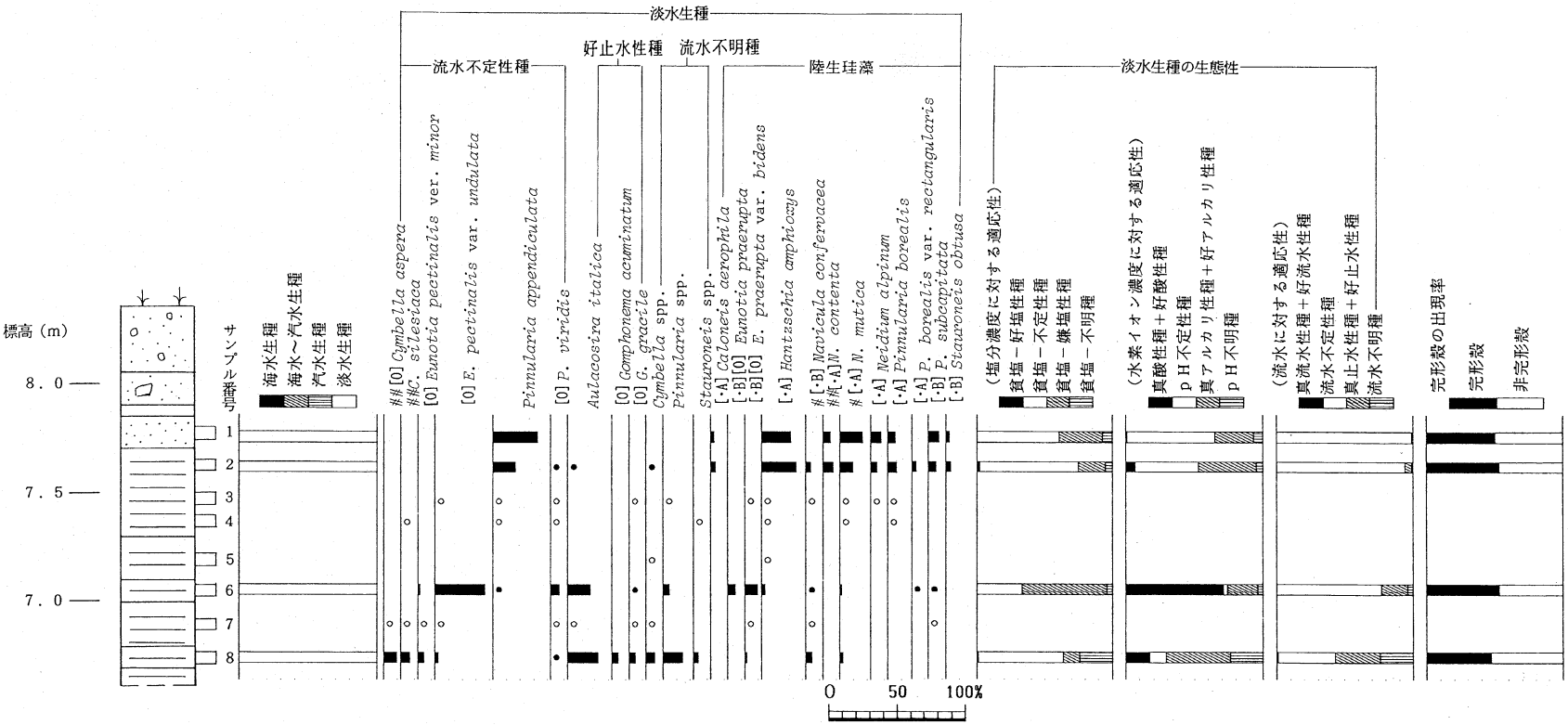


図2　珪藻化石群集の層位的変化

海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は１％未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。環境指標種;[0]:沼沢湿地付着生種（安藤，1990による）,#:好汚濁性種,##:好清水性種（以上は、渡辺ほか，1986による）,陸生珪藻（[·A]:A群,[·B]:B群、伊藤・堀内，1991による）

試料番号８で検出される淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、好アルカリ性種、流水不定性種・好止水性種が優占あるいは多産する。本試料では、好止水性の *Aulacosira italica*、*Gomphonema acuminatum*、*G. Gracile*、流水不定性の *Cymbella aspera*、*C. silesiaca* が多産することが特徴である。これらの種の中には、水深が浅く一面に水性植物が繁茂する沼沢やこれよりも水深の浅い湿地で優占する沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）の主要構成種とされるものが多い。

試料番号６では、流水不定性の *Eunotia pectinalis var. undulata* が優占し、好止水性の *Aulacosira italica*、水域にも上陸の好気的環境にも生育する陸生珪藻のＢ群（伊藤・堀内、1991）の *Eunotia pectinalis var. bidens* が多産することが特徴である。これらの種群は、*Aulacosira italica* を除いて沼沢湿地付着生種群の主要構成種でもある。

試料番号２・１では、ともに水中に生育する水生珪藻が下位試料と比較して急減し、陸生珪藻の中でも特に耐乾性の強いＡ群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が優占し、同じくＡ群の *N. contenta*、*Neidium alpinum*、*Pinnularia borealis* などを伴う。また、流水不定性種として *Pinnularia appendiculata* が多産する。本種は、湿った岩の表面に生えたコケやジャガイモ畑の土壌表面に生育する（Petersen, J. B., 1928）ことが報告されていることから、乾いた環境にも耐性があると考えられる。

(2) 土壌の理化学性

ここでは、腐植含量、NaOH 抽出腐植の光学性、リン酸吸収係数の測定意義と今回の結果について述べる。測定結果を表３に示す。

ａ．腐植含量

土壌中の腐植含量は、動植物遺体などに由来した有機物質と腐植の分解量に左右され、土壌型によってほぼ決まる。通常は泥炭土で20％以上、黒泥土で10％以上、火山灰表土で５～20％、無機質土壌で５％以下とされている。また、腐植は気温・地温や水分条件によって集積のし易さが変動する。

今回の測定結果は、いずれも無機質土程度の含量であり、著しい腐植の集積には認められない。ただし、相対的に奈良～平安時代の埋積土あるいは古墳時代の埋積土でやや高い傾向がみとめられる。

ｂ．NaOH 抽出腐植の光学性

同じ腐植含量でも腐植の生成過程が異なる場合には、腐植の光学性が異なる。今回はその光学性の違いが表れる Δ logK、CD、K610／K600の値を測定した。Δ logK は、腐植（特に腐植酸）の腐植化度をみるひとつの指標じあり、その値が高ければ腐植度は低く、低ければ腐植化度は高いとされている。例えば、腐植含量の高い土壌として前述３種類の土壌があげられる。これら土壌の Δ logK は、火山灰表土（いわゆる火山性黒ボ

ク土）が最も低く、ほとんどが0.650以下を示し、腐植化度が高いといわれている。CD値は、腐植の黒味を数値であらわしたものであり、腐植の抽出割合の多い土壌ではこの値が高く、埋没土などで相対的高い傾向が認められる。K610／K600は、腐植の型を判定する目安である。

今回の結果では、いずれも腐植化度は比較的高い値を示し、特に試料番号6では⊿ logK が黒ボク土の分類規準とされる0.650以下の値を示す。また、CD 値についても試料番号6では相対的に高い値を示す。したがって、奈良～平安時代の埋積土の上位層（試料番号6）は他の層位よりも腐植化度が高く、腐植の抽出割合の高い土壌といえるが、腐植含量やK610／K600が1を越えない点から、黒ボク土の再堆積した層位として捉えることは判断できる。

c．リン酸吸収係数

土壌リン酸固定力の強さを表す係数であり、一般には2,000以上は火山灰土壌、1,500～2,000は火山灰の影響の強い土壌といわれ、1,000以下の場合には非火山灰土壌とされている。わが国では、火山灰土壌の分布が広く、この係数は土壌の分類において火山灰土壌と非火山灰土壌を区別する有効な目安とされている。

今回の結果では、試料番号8まで2,000近い値を示し、埋積土が火山灰土壌といえる。試料番号2～7では、火山灰土壌と非火山灰土壌の中間的値であり、両者の混合層のようにみられる。試料番号1は、1,000を越えているが、土質などから非火山土壌とみられる。

表3　土壌理化学分析結果

試料番号	腐植*1 %	NaOH抽出腐植の光学性 ⊿log$K$*2	CD*3	K_{610}／K_{600}*4	リン酸吸収係数
1	1.58	0.695	1.36	0.934	1,160
2	1.97	0.667	3.00	0.942	1,300
5	2.31	0.659	3.05	0.943	1,350
6	2.62	0.646	4.03	0.932	1,370
7	2.70	0.680	3.05	0.926	1,400
8	2.41	0.709	1.65	0.932	1,800

＊1：腐植，全炭素量×1.724で算出

＊2：⊿log$K$＝logK400－logK600

＊3：抽出腐植原液の600nmの吸光度＝600nmの吸光度×希釈度。

＊4：600nmの吸光度に対する610nmの吸光度の比。

表4　花粉分析結果

種類（Taxa）　　層位	1	2	5	6	7	8
木本花粉						
マキ属	1	-	-	-	-	-
モミ属	-	-	-	-	-	1
ツガ属	-	-	-	2	1	1
マツ属	11	-	-	2	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	1
クマシデ属－アサダ属	-	-	-	1	2	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	1	1	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	4	11	3
ツタ属	-	-	-	-	-	1
ハイノキ属	-	-	-	-	-	1
草本花粉						
ガマ属	-	-	-	-	2	70
サジオモダカ属	-	-	-	1	-	-
イネ科	1	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	-	-	10	3	4
ソバ属	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	-	-	-	1	-	1
他のキク亜科	-	-	-	1	-	-
不明花粉	-	-	-	2	-	3
シダ類胞子						
シダ類胞子	51	150	10	739	207	178
合計						
木本花粉	12	0	0	10	15	8
草本花粉	2	0	0	15	5	75
不明花粉	0	0	0	2	0	3
シダ類胞子	51	150	10	739	207	178
総花粉・胞子	65	150	10	766	227	264

(3)　花粉化石の産状

結果は表4に示す。花粉化石は、6試料とも保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたりする。また、検出固体数も全体的に少ない。ただし、8層で水性植物のガマ属が多産する傾向がみとめられる。

(4)　植物珪酸体の産状

計数結果および各地点の植物珪酸体組成の層組成の層位的変化を表4と図3に示す。イネ葉部起源の植物珪酸体は各層試料で多く検出される。その保存状態は、短細胞珪酸体で良好であるが、機動細胞珪酸体では不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が生じてい

表5　植物珪酸体分析結果

種　類(Taxa)　　試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	51	17	4	9	11	6	6	1
キビ族キビ属	-	-	-	-	-	2	-	1
キビ族エノコログサ属	-	-	-	-	-	1	1	2
キビ族(その他)	10	6	-	6	3	8	-	4
タケ亜科ネザサ節	1	2	-	1	2	2	2	3
タケ亜科(その他)	69	87	84	80	101	76	37	117
ヨシ属	1	2	1	1	-	2	1	1
ウシクサ族コブナグサ属	1	2	2	-	2	3	3	2
ウシクサ族ススキ属	1	1	-	-	2	7	1	7
イチゴツナギ亜科(その他)	41	64	87	65	59	90	58	37
不明キビ型	18	17	19	21	12	36	17	26
不明ヒゲシバ型	16	21	10	9	14	14	10	14
不明ダンチク型	6	7	6	16	8	14	9	14
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	44	64	59	36	56	32	31	42
キビ族	9	14	9	14	22	10	23	34
タケ亜科ネザサ節	3	7	4	6	7	4	1	4
タケ亜科(その他)	93	118	75	58	106	53	44	90
ヨシ属	1	1	-	1	1	2	3	2
ウシクサ族	14	13	6	12	14	17	22	34
シバ属	1	-	1	-	5	1	2	-
不明	28	32	19	39	39	54	55	46
合　計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	215	226	213	208	214	261	145	229
イネ科葉身機動細胞珪酸体	193	249	173	166	250	173	181	252
検　出　個　数	408	475	386	374	464	434	326	481
組　織　片								
イネ属顆珪酸体	10	-	-	1	-	-	-	1
イネ属短細胞列	4	2	-	-	1	-	1	1
キビ族機動細胞列	-	-	-	1	-	-	-	1
キビ型短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	1
海綿骨針	-	-	-	-	-	2	48	74

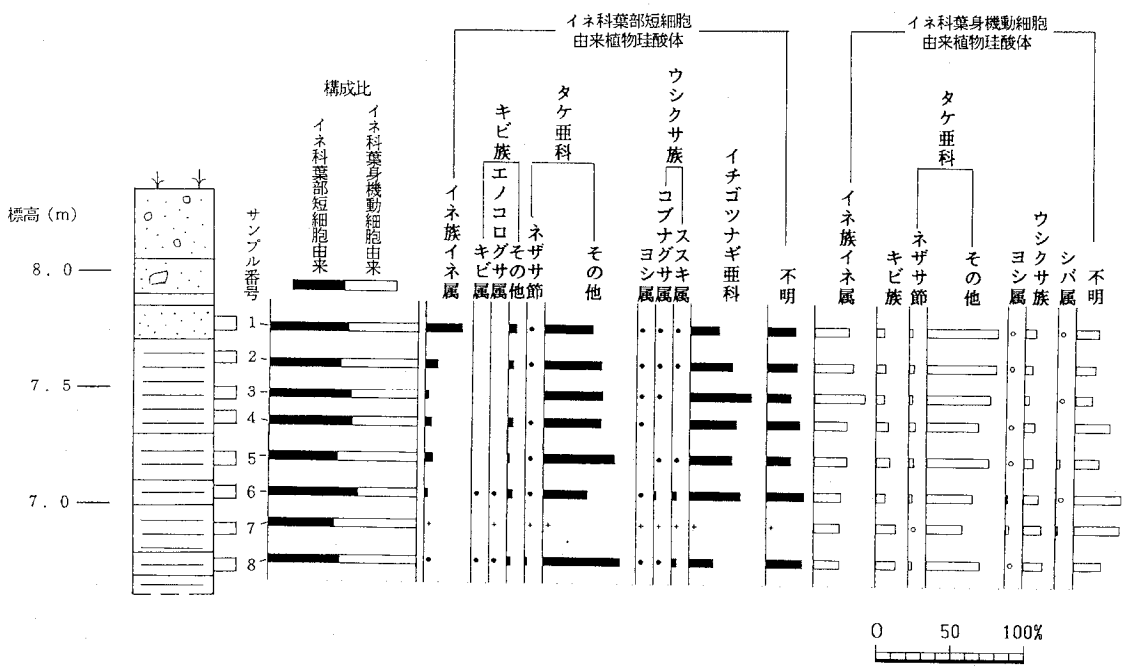


図3　植物珪酸体組成の層位的変化
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類を示す。

るものが認められる。

植物珪酸体組成は、下位から上位にかけてほぼ同様である。すなわち、古墳時代の埋積土とされる試料番号８から近代の耕土とされる試料番号１にかけて、タケ亜科（ネサザ節など）・イチゴツナギ亜科が優占し、キビ属・ヨシ属・ウシクサ族（コブナグサ属・ススキ属など）が伴出する。また、栽培植物とされるイネ族イネ属（以下、イネ属とする）の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。特に、機動細胞珪酸体は20％以上の出現率を見る。イネ属の短細胞珪酸体は、上位にかけて出現率が増加する傾向が認められる。なお、試料番号１では稲籾に形成されるイネ属珪酸体も認められる。

植物珪酸体の他には、試料番号６・７・８で海綿骨針が認められる。この海綿骨針が、海生種のものか淡水生種のものかの判断はつかない。

４．古墳築造時および以降の古墳について

(1) 周濠内の堆積環境

周濠内の埋積土には、いずれも著しい腐植の集積は認められなかったが、腐植化度は比較的高い値を示した。この点については、次の２つの解釈ができる。ひとつは、動植物遺体などの有機物供給量が少ない状態で腐植化が進んだことである。もうひとつは、周濠外から流入した腐植量が多く腐植化の進んだ土壌が周濠内に堆積したものの、腐植の分解が進んだことである。ただし、今回は古墳時代以降の周辺の堆積土層との比較を行っていないので、この点を判別することは困難ある。なお、古墳時代の埋積土とそれ以後の埋積土では、リン酸吸収係数に差が認められることから、土壌の母材の供給源が異なることが推定される。

また、珪藻化石の産状から出現種の半分は現地性を示すものと考えられ、珪藻化石群集は周濠が埋積した過程の堆積環境の変化を反映していると思われる。古墳時代の埋積土からは、沼沢湿地付着生群や好止水性種が多産した。これより、古墳時代の周濠内は水はけが悪く、水が溜っていたと推定される。また、奈良・平安時代の埋積土でも古墳時代のものと同じ水域環境を指標する種群が産出したことから、奈良・平安時代でも周濠内に水が溜まっていたと考えられる。ところが、近世の客土や近代の耕作土からはこれらの水生珪藻は急減し、乾いた環境を指標する陸生珪藻のＡ群が多産した。これは、近世の客土により周濠が埋め立てられ、周濠であった場所が乾き、近代に耕作されていた際も乾いていたことを示唆する。

(2) 古植生について

花粉化石は、全試料で保存状態が悪く、検出固体数も少なくなかった。そのため、古墳時代以降の古植生を検討することは困難である。ただし、各試料でそれぞれ検出された種類は周辺に生育していた可能性がある。なお、試料番号８において水生植物のガマ属の花

粉化石が多産する傾向が認められた。これは、珪藻化石の産状から古墳時代の周濠内に水が溜まっていたと推定される点と調和的である。

一方、植物珪酸体組成から周濠の周辺のイネ科植物相にはあまり変化がなかったと推定される。すなわち、古墳時代に古墳および周濠が構築された後に周濠が埋積し始めた頃から、近代に客土されて耕作に使われていた頃までタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと考えられる。なお、タケ亜科の植物珪酸体は、他のイネ科植物と比較して風化に強く、また生産量が多い点がこれまでの研究から指摘されている（近藤、1982：杉山、1986)。したがって、今回の植物珪酸体組成で優占しているタケ亜科は、過大に評価されている可能性がある。

ところで、周濠内からイネ属の葉部に形成される２形態の植物珪酸体が検出された。特に、機動細胞珪酸体は20％以上の出現率を見た。現在の水田耕土におけるイネ属の出現率としては、近藤（1988）の調査例があり、それによればイナワラ堆肥連用（８年間、500 kg／10a／年）の水田土壌表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率は16％を示すとされている。今回の分析で得られた出現率は現在の水田土壌表層における出現率と比較して高い。これらのことから、古墳時代の頃から周辺地域では、古墳時代の頃から稲作が行われていたと推測される。周濠内のイネ属植物珪酸体は、周辺の稲作耕土が流入したことを反映するものであろう。また、試料番号１は近代の耕土とされるが、イネ属の葉部に形成される植物珪酸体の他に稲籾に形成される珪酸体もみとめられた。これは、発掘時の所見を裏付ける結果と言えよう。

5．成果と今後の課題

今回の自然化学分析調査で得られた結果を以下にまとめる。

周濠内の埋土では、腐植化度は比較的高い値を示したものの、著しい腐植の集積は認められなかった。この点からは、腐植が集積しにくかったことや腐植が分解してしまったことが考えられたが、古墳時代以降の周辺の堆積土層との比較を行っていないので、判別は困難であった。また、古墳時代の埋積土とそれ以降の埋積土では、土壌の母材の供給源が異なることが予想された。

珪藻化石の産状からは、古墳時代や奈良・平安時代の周濠内に水が溜まっていたと推定された。その後、近世に周濠が埋め立てられると周濠であった場所が乾き、近代に耕作されていた歳も乾いていたと考えられる。その間の植生に関しては、十分な情報は得られなかったが、少なくともイネ科植物相には大きな変化は認められなかった。

なお、周濠内からはイネ属の葉部に形成される２形態の植物珪酸体が検出され、古墳時代以降周辺地域で稲作の存在が推測された。近代の耕土からもイネ属の植物珪酸体が検出され、発掘調査時の所見を裏付けられた。

今回の調査では、花粉化石などの微化石の保存状態が良好であることが予想された周濠内の埋土が分析試料として使用された。ただし、今回は花粉化石の産状は悪く、古植生に関する情報が十分に得られなかった。今後、古墳時代以降の那珂八幡古墳周辺の古植生について検討するためには、同時期の低地部の発掘調査や古墳の周濠でも嫌気的環境下で堆積した堆積物を対象として花粉分析を実施する必要があろう。また、今回は埋土の堆積過程を考える上で、土壌理化学的な情報の収集も試みた。ただし、堆積過程を推定するためには周辺の埋積土層との比較が重要であろう。

〈引用文献〉

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42巻，p. 73－88

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社．

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂．

Hustedt, F.（1937－1983）Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java, Bail und Sumatra．Ⅰ～Ⅲ．Arch.Hydrobiol.Suppl.，15p．131－809，16p．1－155，274－394.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用，珪藻学会誌，6号，p. 23－45.

近藤錬三（1982）Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和56年度科学研究費（一般研究C)研究成果報告書，32p.

近藤錬三（1983）植物珪酸体（プラント・オパール）分析の農学および理学への応用．十勝農学談話会誌，24号，p.66－83.

近藤錬三（1988）十二遺跡の植物珪酸体分析．鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書．p.377－383，御代田町教育委員会．

近藤錬三・佐藤隆（1986）植物珪酸体分析，その特徴と応用．第四紀研究，第25巻，p.31－64.

Krammer.K.,and H.Lange-Bertalot.（1986・1988・1991）Bacillariophyceae,Suesswasser flora von Mitteleuropa 2（1・2・3）：p.1－585，p.1－576.

熊田恭一（1977）土壌有機物の化学．220p.,東大出版会.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書　第1巻．411p.,産業図書.

久馬一剛・永塚鎮男（1987）土壌学と考古学．214p.,博友社.

Lowe, R. L.（1974）Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. p. 1－334. in Environmental Monitoring Ser. EPA－670／4－74－005. Nat.Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency. Cincinati.

三好　洋・嶋田永生・石川昌男・伊達　昇（1983）土壌肥料用語辞典．259p.,農文協.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

大羽　裕・本名俊正（1984）：黒ボク土判定のための腐植の分析法．土壌肥料学雑誌，55，55－61.

大羽　裕・永塚鎮男（1988）土壌生成分類学．338p.，養賢堂.

ペドロジスト懇談会編（1984）野外土性の判定．「土壌調査ハンドブック」：39－40，博友社.

Petersen, J. B.（1928）The aerial of Iceland. The Botany of Iceland，2．p.325－447.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎試料として－．考古学と自然科学，19号，p.69－84.

渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視（1988）珪藻群集による有機汚濁指数（DAIpo）の止水域への適用，水質汚濁研究，11巻，12号，p.765－773.

第６章　第35次調査の記録

１．調査にいたる経過

平成３年11月25日、那珂２丁目213―１地内において、地権者である高木章氏、高木久子氏から、専用住宅建設に伴って、埋蔵文化財の有無について事前審査願が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では当該地が那珂遺跡群内に位置していることから試掘調査が必要と判断し、12月11日に試掘調査を行った。その結果申請地には、遺溝、遺物が豊富に遺存していることが判明した。この試掘結果を受けて埋蔵文化財課と高木氏とのあいだで保存についての協議会に入る事になった。協議の結果建築される住宅は堀削が遺溝面まで及ばないように設計することで合意を見た。ただ、道路に面した部分の一部については、車庫建設の為道路高まで削平するとのことであり、この部分については発掘調査を行うことになった。発掘調査は小面積でもあり、当時事前審査を担当していた宮井が、本来の業務と兼務で行うこととした。

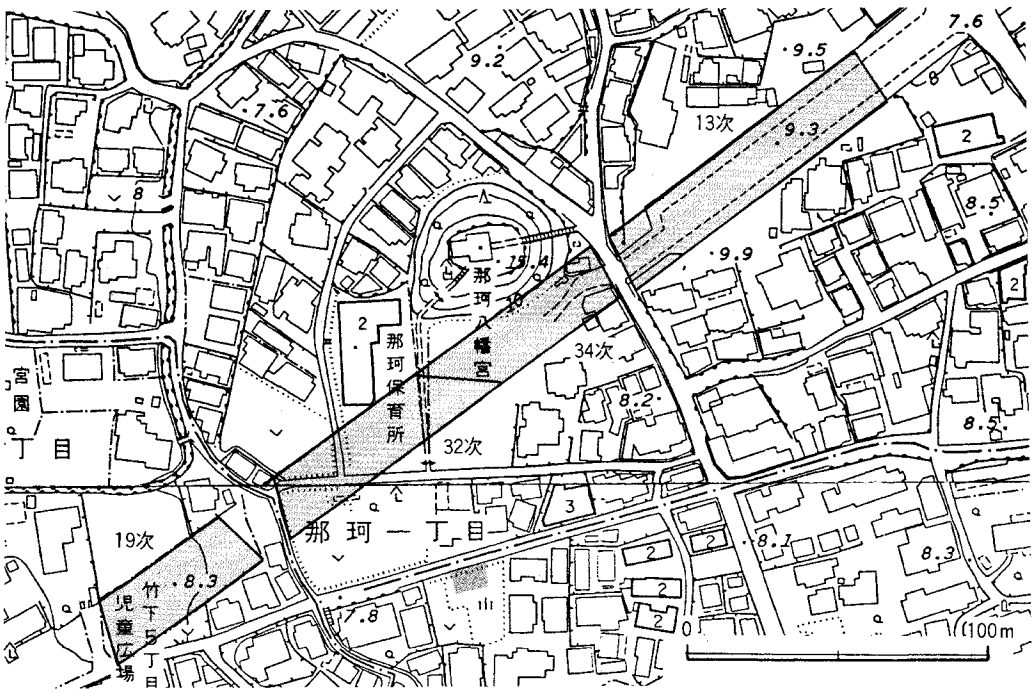
調査委託：高木　章、高木久子

調査主体：福岡市教育委員会

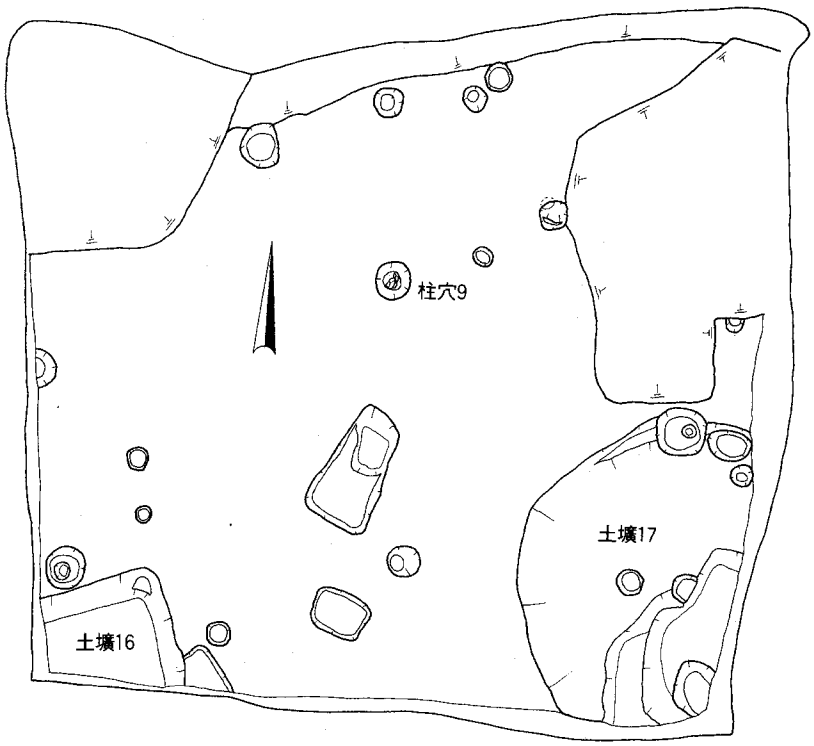
調査総括：埋蔵文化課課長　折尾　学、埋蔵文化財第２係長　塩屋勝利

調査担当：宮井善朗

整理補助：是田　敦



第35次調査地点位置図（１/2500）



調査区全体図

なお、発掘作業は当時那珂34次調査を行っていた菅波正人氏（埋蔵文化財課）の好意により、34次調査に参加していた作業員諸氏の協力を得た。

遺跡調査番号	9145	遺跡略号	NAK−35
調査地地番	福岡市博多区那珂2丁目213—1		
調査面積	57㎡	分布地図番号	38—A—3
調査期間	620203 ～ 920207		

2．検出遺溝

調査区は、位置的には那珂八幡古墳の南側50mほどにあたる。面積が狭い上、道路側を大きく削平されていた。また北東隅と、南東隅には戦時中に防空壕が掘削され、これによっても大きく破壊されていた。したがって、試掘時に考えていた程には遺溝の密度は濃いとはいえな

かった。

検出した遺溝は、土壙２基とピットである。主な遺溝について報告する。

土壙17は南東隅で検出された。ほぼ円形に復元できる土壙である。底部に向かってすり鉢状に狭くなる。径3.5mほどであろうか。床面は段をなし、平坦とは言い難い。後述するように初期瓦を初め遺物は比較的多く、本調査区出土の図化の可能な遺物はことごとく土壙17出土としてもよいほどである。しかし出土状況は一定の箇所に集中するとか、出土レベルがそろうかという特徴を見す出ことはできなかった。つまり、覆土全土から散漫に出土するような状況であった。この遺溝と比較しうる遺溝が那珂遺跡群第22次調査で検出されている。SX―４とされた遺溝は、長径6.6m、短径5.15mの楕円形プランで、床に段を持つ。遺物が多く出土し、初期瓦を出土するところもよく似ている。ただこの遺溝では遺物はほぼ出土レベルがそろっており、短期間の廃棄と考えられる点が、若干異なっている。

土壙16は南西隅で検出さた。ほぼ方形もしくは長方形に復元されよう。その形態から住居跡の可能性が高いと考えられる。弥生土器と思われる破片が少量出土している。

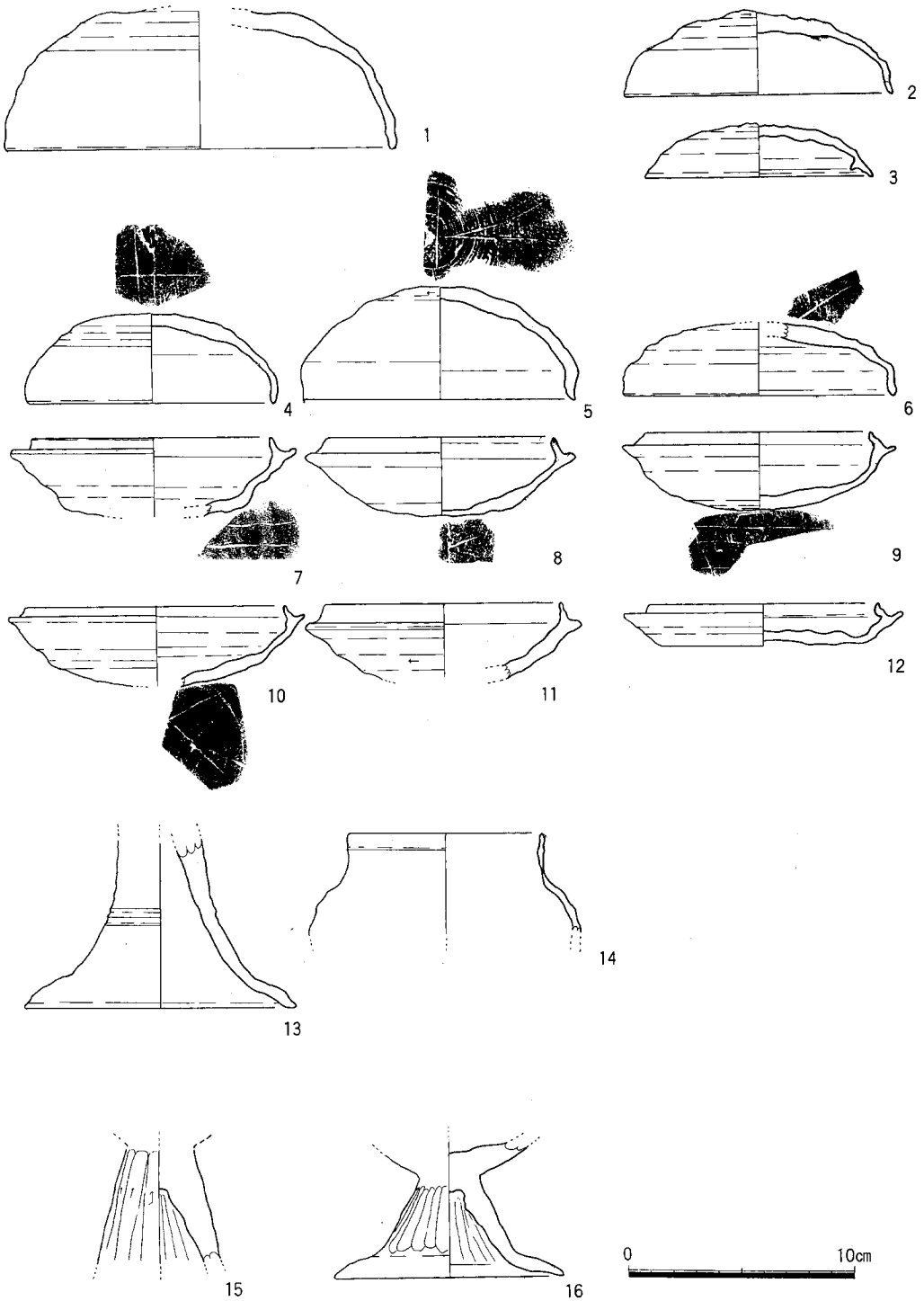
ピット９は調査区ほぼ中央で検出した。出土遺物等は無く時期は不明であるが、根締めと思われる小石を多量に持っていることが特徴的である。調査面積が狭く、どのような建物になるかは不明だが、堀立柱建物の柱穴には間違い無いであろう。

３．出土遺物

図示した遺物はすべて土壙17出土の物である。

１は、口径から見て有蓋高坏の蓋であろう。天井部には内外とも不定方向のナデを施す。口縁端部は丸くおさめる。２は坏蓋である。端部はわずかに外反する。天井部はヘラきりの後雑になでるのみである。復元口径12cmを測る。３はかえりを持つ坏蓋である。かえり端部は口縁より上位にある。天井部に剥離痕があり、つまみが本来ついていたものである。復元口径10cmを測る。４は坏蓋である。端部はわずかに内湾する。天井部はヘラきりの後雑になでるのみである。天井部にヘラ記号を持つ。復元口径10.8cmを測る。５は坏蓋である。端部はわずかに外反する。天井部１/３程に回転ヘラケズリを施す。天井部にヘラ記号を持つ。復元口径12cmを測る。６は坏蓋である。端部は短く屈曲する。天井部はヘラきりの後雑になでるのみである。復元口径は12cmを測る。天井部はヘラ記号を持つ。天井部内面には不定方向のナデを施す。

７は坏身である。かえりは短く直立する。体部は段状の凹凸が著しい。外底部にヘラ記号を持つ。復元口径10.6cmを測る。８は坏身である。かえりは内傾する。内底部は不定方向のナデを施す。復元口径10cmを測る。外底部にヘラ記号を持つ。９は坏身である。かえりは内傾



土壙17出土遺物実測図（1）

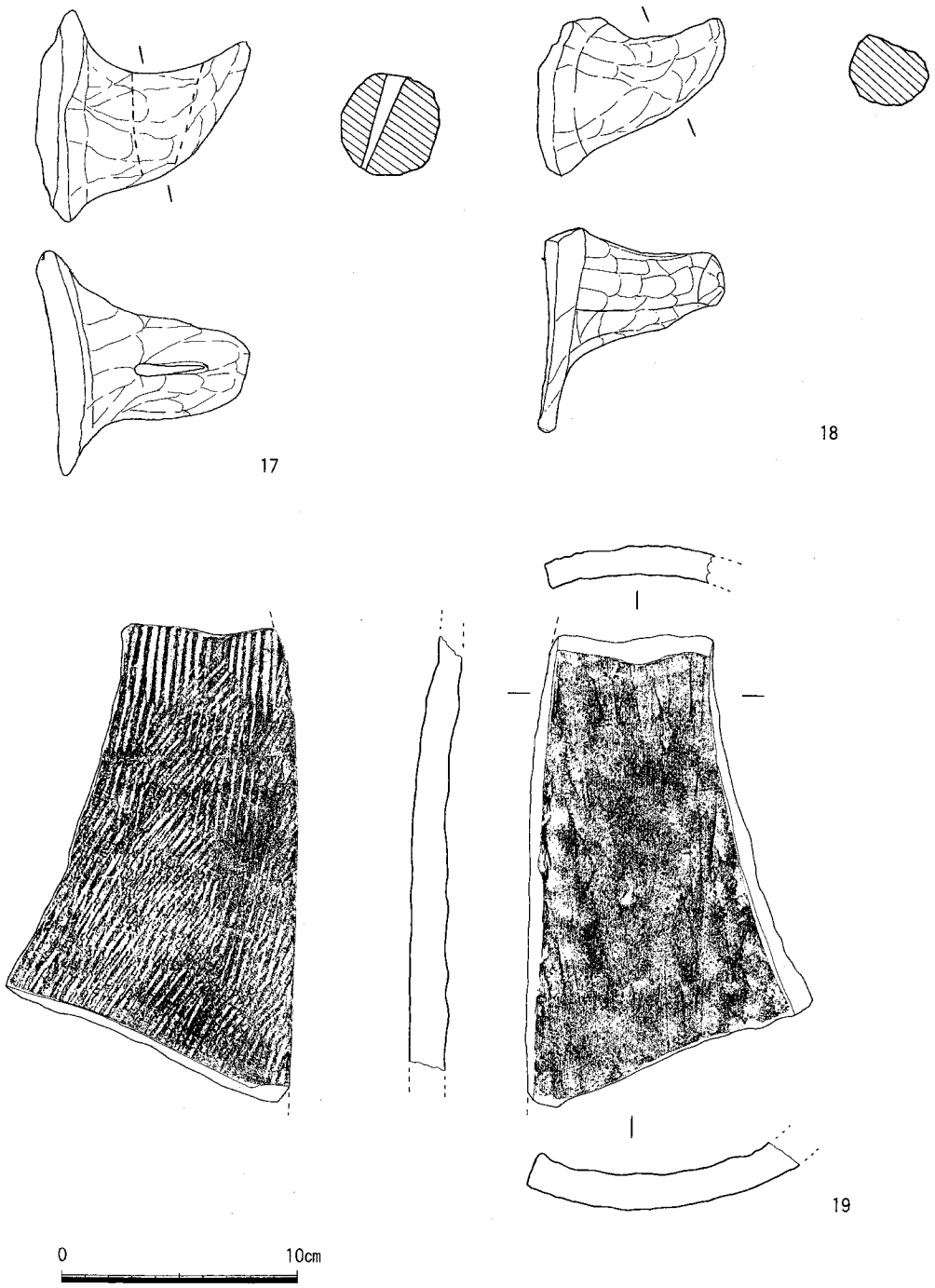
する。体部は丸みを帯びる。外底部1/3ほどに回転ヘラケズリを施す。内底部は不定方向のナデを施す。外底部にヘラ記号を持つ。復元口径10cmを測る。10は坏身である。かえりは短く内傾する。内底部は不定方向のナデを施す。外底部はヘラきりの後雑になでたと思われる。復元口径11.2cmを測る。11は坏身である。かえりは短く直立する。体部が比較的厚く、1/2程まで回転ヘラ削りを施す。復元口径10.4cmを測る。12は坏身である。かえりは短く外反しながら内傾する。底部は平たく、器高が低い。復元口径10cmを測る。　13は高坏脚部である。端部は内湾しつつ広がる。中位に沈線を2条巡らす。14は小型の壷であろう。直立する口縁を持ち、突線状の段を持つ。

15は土師器高坏の脚部である。ヘラ状工具による面取りを施す。16も小型の高坏脚部である。裾部で屈曲して広がる。脚柱部はヘラ状工具で面取りする。

17、18は土師器把手である。17は中央に溝状の穿孔があり、把手の下まで貫通している。

18には穿孔は見られない。

19は平瓦である。凹面は縦方向のナデを施し、凸面は縦方向の平行たたきを施した後、更に斜め方向の叩きを重ねている。色は灰色を呈し、軟質である。この特徴を持つ瓦は、神の前窯と共通し、前述した那珂22次調査SX—4を初め、近年那珂遺跡群で出土例が増えているものである。また時期的にも出土須恵器から見て、那珂22次調査SX—4とほぼ同時期といえよう。また本編の那珂32、34次調査でも類例が増加しており、その意義付けについては本編でも述べられていることと思うので、ここでは措くこととする。



土壙17出土遺物実測図（2）

第7章　ま　と　め

今回の調査では弥生時代中期から中世にわたる遺構、遺物を検出した。ここでは第32次、34次調査地点で得た成果と問題点について記述していく。

1．遺構の時期的変遷

今回の調査で検出した遺構は弥生時代中期から中世にわたるが、大きく6時期に分けられる。Ⅰ期は弥生時代中期後半、Ⅱ期は弥生時代後期、Ⅲ期は古墳時代初頭、Ⅳ期は古墳時代後期から奈良時代、Ⅴ期は中世前期、Ⅵ期は中世末である。以下、時期毎の変遷をみていく。

Ⅰ期

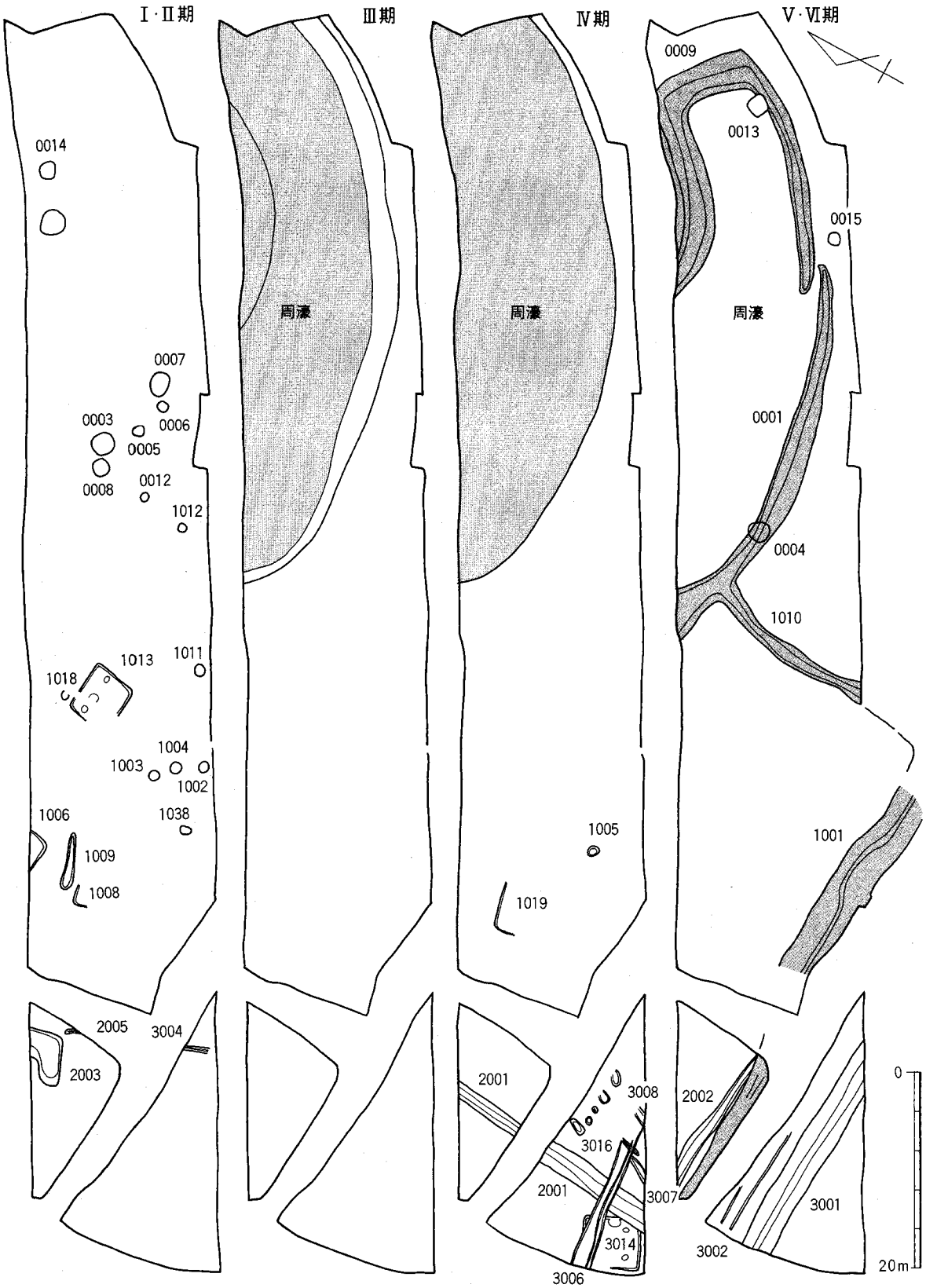
この時期の遺構には、SK-2003やSD-2005、3004、1009がある。後世の攪乱のため、竪穴住居跡などは削平されたと考えられる。しかし、古墳の周濠などからこの時期の遺物は多く出土している。東側の第13次調査地点では竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出されている。これ以前の遺構、遺物はほとんどみられず、集落の開始はこの時期と考えられる。

Ⅱ期

この時期の遺構は後期前半から終末までのものが見られる。SC-1013やSK-1018等がある。今回検出した弥生時代の井戸はすべてこの時期に位置づけられる。井戸は14基検出した。いずれも素掘りである。底面は八女粘土まで掘り下げたものや更に下層の硬砂層まで掘り下げたものがある。調査地点内の分布を見ると、第32次調査地点のⅠ区と第34次調査地点に集中する。井戸は4～5基単位のまとまりが見られ、それらが時期毎に変遷しており、井戸が掘られる位置が継続されていることが分かる。井戸の出土土器は住居跡等から出土するものと、形態的に異なるものが多い。井戸の土器については改めて検討していきたい。

Ⅲ期

この時期は那珂八幡古墳が造営された時期である。今回の調査では古墳の周濠の規模、形態を確認することができた。周濠の規模は幅12m～15m、深さ約120cmを計る。形態はくびれ部付近で墳丘側に曲がっていくことから、鍵形の平面形を呈するものと考えられる。第32次調査では前方部側の周濠は検出できなかったことから、前方部側面の周濠は幅の狭いものと考えられる。周濠の底では弥生時代の井戸を検出した。周濠の底で検出した井戸の最も新しく位置づけられるものはSE-0003である。出土土器は在地土器だけで構成されるが、時期的には庄内式に併行すると考えられる。周濠の最下層からは古式土師器が少量出土した。最下層から出土した二重口縁壺は布留式の古段階に位置づけられる。古墳の造営の時期に近い資料と考えられる。墳丘の下にも遺構を検出しており、直前まで集落があった所に古墳を造営したことが分かる。



第32・34次調査地点遺構変遷図（1/600）

Ⅳ期

この時期の遺構は主に７世紀前半から８世紀前半のものが見られる。今回の調査ではⅢ期以後、５世紀、６世紀前半の遺構、遺物はほとんど見られない。那珂遺跡群全体をみて、５世紀～６世紀の集落の衰退が窺える。７世紀前半の遺構としてはSC-3014がある。ここからは７世紀前半の須恵器、土師器とともに、軒丸瓦、丸瓦が出土した。軒丸瓦は単弁７弁で、この時期の百済系の軒丸瓦の類似点が窺える。丸瓦は竹状模骨を用いたものである。周辺の遺構からも同様の丸瓦が多く出土しており、屋根の一部に葺かれていた可能性が考えられる。遺構の性格として今後の検討課題である。SD-2001は磁北方向の南北溝で、幅1.5～2.5m、深さ70～130cmを計る。出土遺物から７世紀後半から８世紀前半に位置づけられる。ここから300m北側にある第８次調査地点では同時期の溝があり、規模、方向とも一致しており、関連が注目される。

Ⅴ期

この時期の遺構には主に12世紀から13世紀のものが見られる。この時期の遺構にはSE-0004、0013、0015、SD-2002、3002等がある。SE-0004、0013、0015は古墳の周濠内で検出した井戸で、この時期、周濠はかなり埋没していたことが分かる。Ⅱ、Ⅲ区のSD-2002、3002は平行して東西に延びる溝で、道路の側溝の可能性がある。

Ⅵ期

この時期の遺構は主に16世紀後半のものが見られる。SD-1001、1010はこの時期の溝で、屋敷等の区画と考えられる。また、古墳の周濠に沿って掘られた溝もこの時期に位置づけられる。

２．那珂遺跡群出土の古瓦について

今回の調査では第32次調査地点Ⅲ区のSC-3014、SD-2001、那珂八幡古墳周濠から７世紀前半から８世紀前半に位置づけられる瓦、鴟尾等が出土した。那珂遺跡群ではこれまでの調査で神ノ前窯系の軒丸瓦や月ノ浦窯系の軒丸瓦等が出土しており、７世紀代の古瓦の供給先として官衙的施設等の存在が指摘されている。ここではこれまでの出土例を簡単に見ていく。

第８次調査地点

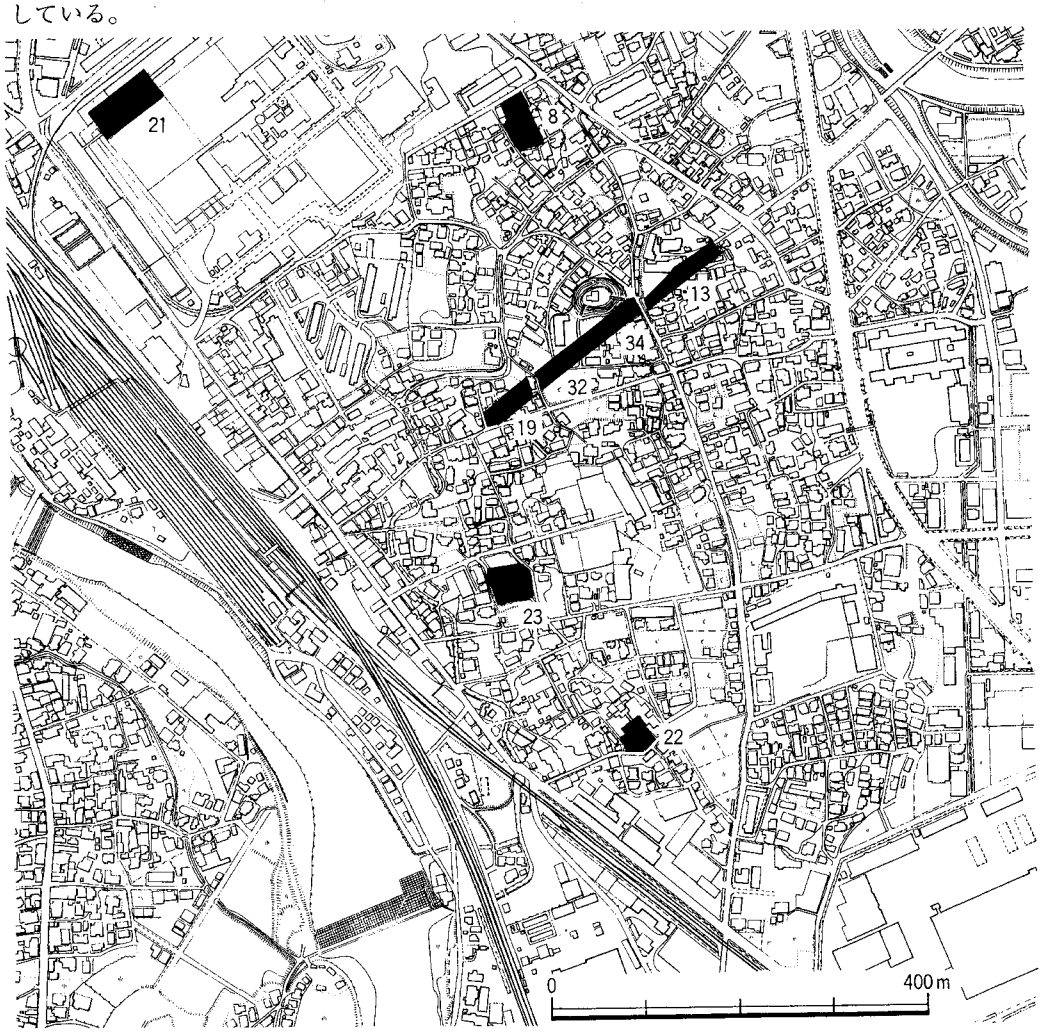
那珂遺跡群の北側に位置する。ここではSD01から丸瓦、平瓦が出土した。SD01は幅約2.3mの磁北方向の南北溝である。出土した丸瓦は凹面に布目、模骨痕が残る。平瓦は凹面には布目、模骨痕が残る。凸面は平行叩き、格子目叩きが残る。７世紀後半を中心とする須恵器、土師器が共伴している。

第13次調査地点

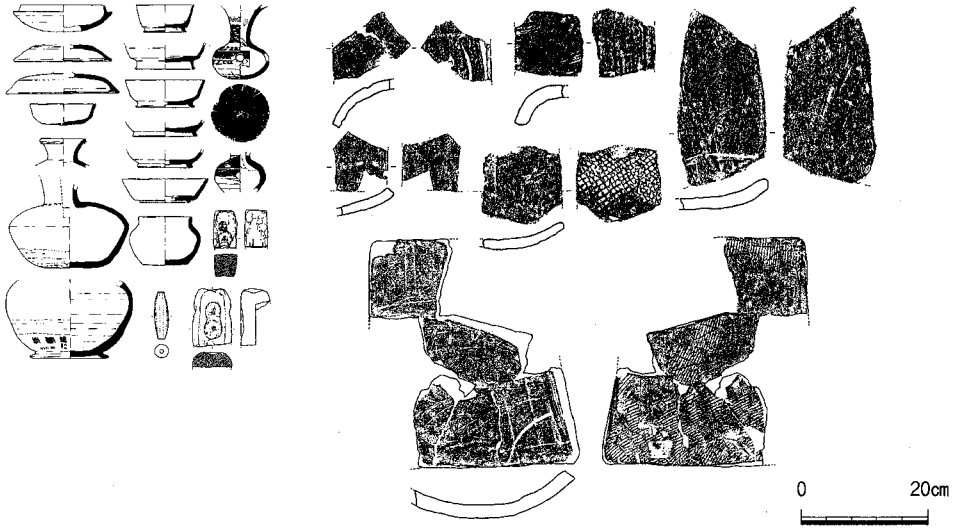
那珂遺跡群の中央に位置し、那珂八幡古墳の東側にあたる。ここでは竪穴住居215と井戸53から軒丸瓦、丸瓦が出土した。

竪穴住居215出土の軒丸瓦は沈線によって花弁と中房が表現されている。1/3が欠損しているが、単弁４弁で、花弁の中央の沈線は鎬の表現と考えられる。間弁は先端が三叉状を呈する。天台寺跡や椿市廃寺出土の高句麗系軒丸瓦に類似点が見られる。丸瓦は凹面に竹状模骨と布目が残る。凸面は格子目叩きの後、ナデを施す。７世紀前半の須恵器、土師器が共伴している。時期的には第32次調査地点 SC-3014と同時期と考えられる。同時期の竪穴住居跡からの出土例には春日市惣利西遺跡４号住居跡がある。

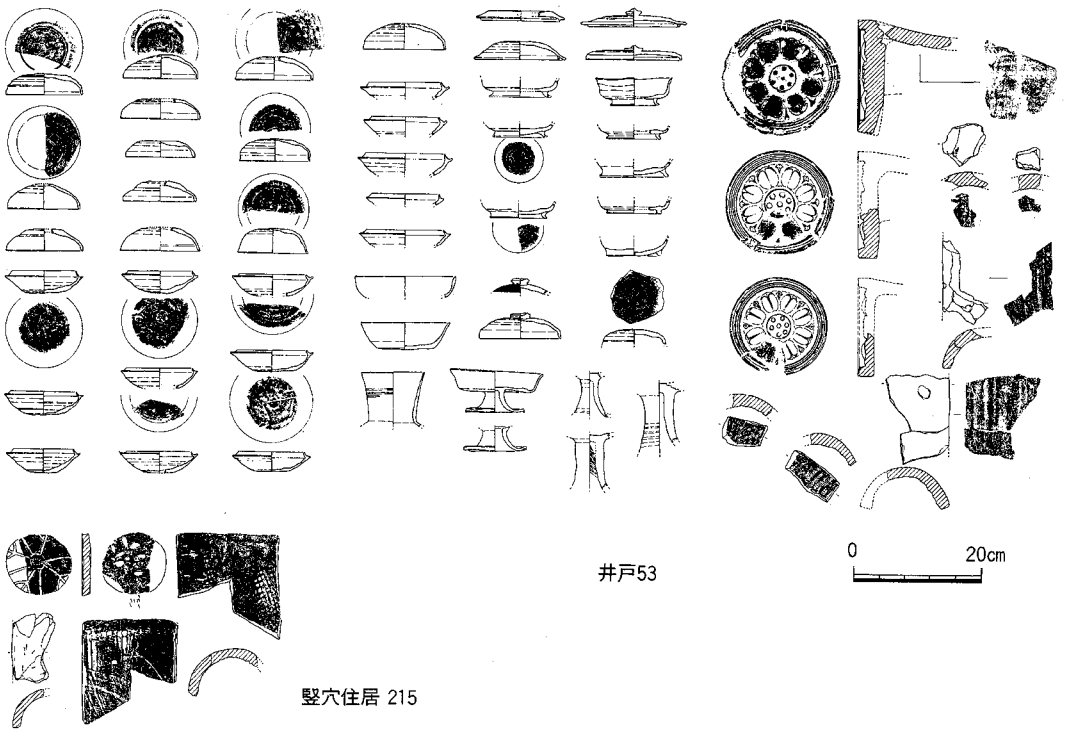
井戸53からは百済系単弁軒丸瓦が３点出土した。瓦当文様は単弁８弁で、外縁には圏線が巡る。中房には1-6の蓮子を配する。焼成は土師質、須恵質のものがある。このほか、凹面に竹状模骨と布目が残る丸瓦が出土している。７世紀後半から８世紀前半の須恵器、土師器が出土している。



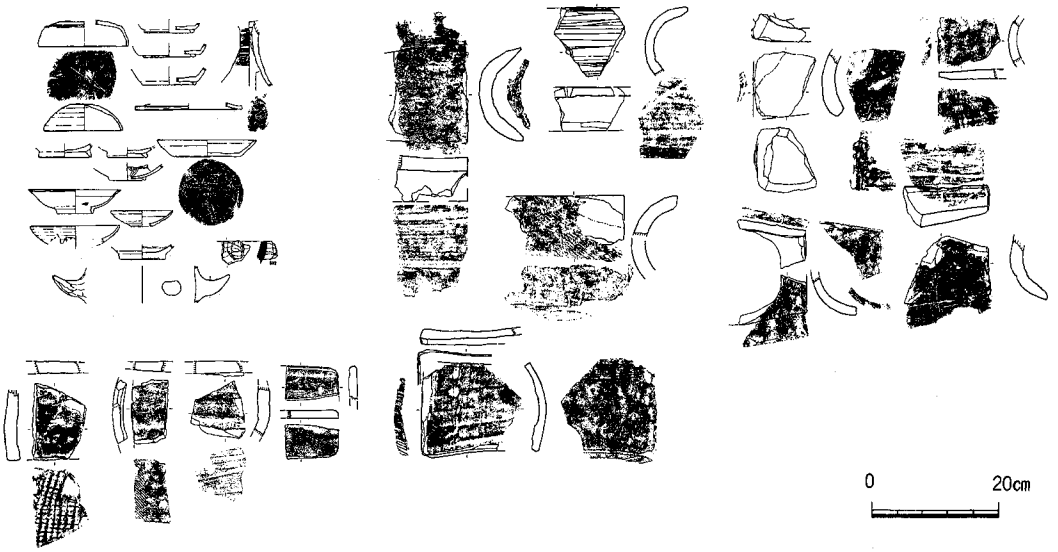
那珂遺跡群古瓦出土地点（１/8,000）



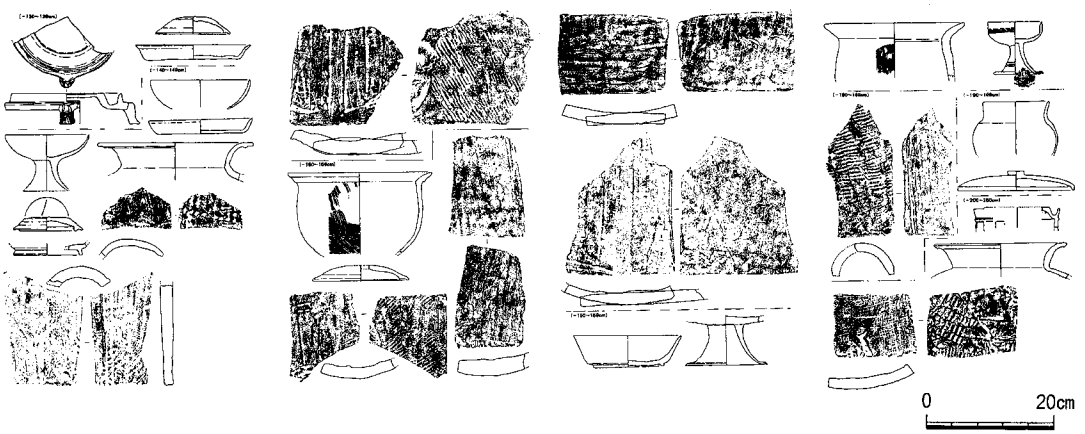
第８次調査　SD01出土遺物実測図（１/12）



第13次調査　竪穴住居215、井戸53出土遺物実測図（１/12）



第19次調査　溝４出土遺物実測図（１/12）

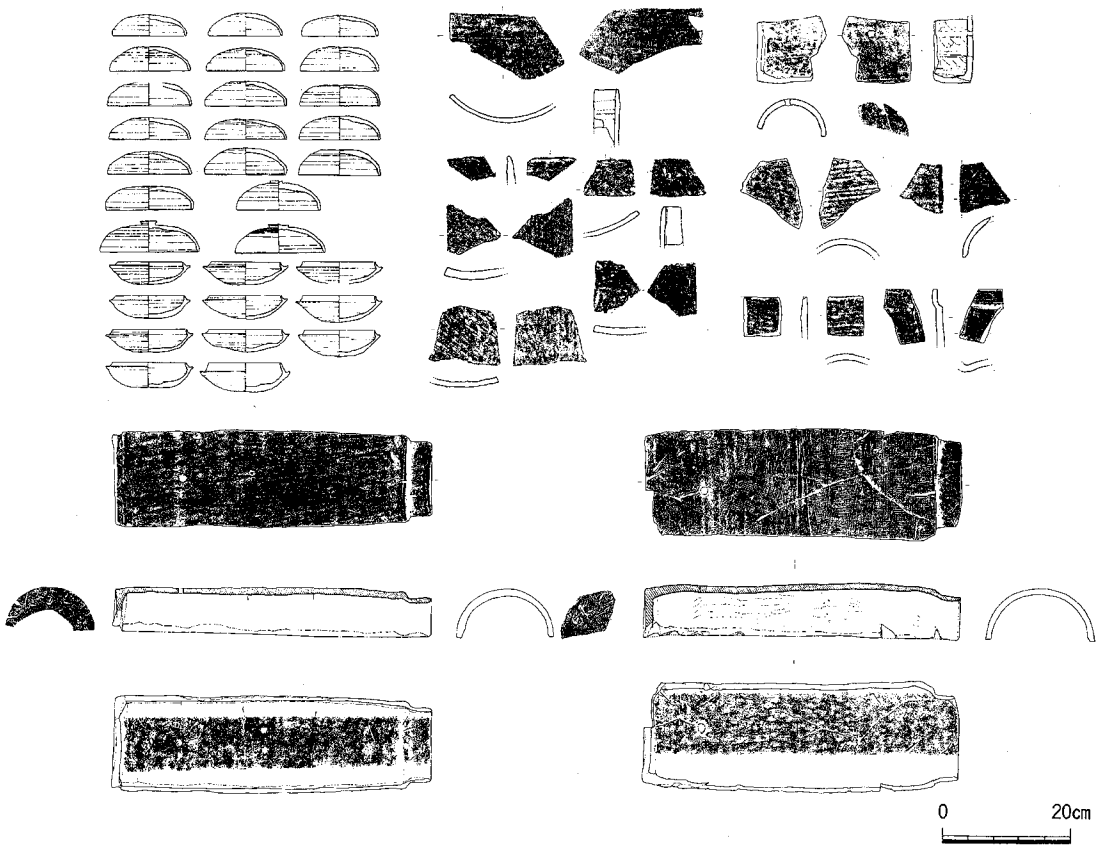


第21次調査　第61号井土出土遺物実測図（１／12）

第19次調査地点

那珂遺跡群の中央西側に位置し、第32次調査地点の西側に隣接する。ここでは溝４から軒丸瓦、丸瓦、平瓦が出土した。溝４は幅2.7mの南北溝である。出土した軒丸瓦は瓦当は欠損している。丸瓦部は凹面に竹状模骨と布目が残る。丸瓦は凸面は平行叩きの後、ナデを施す。凹面は布目と模骨痕が残る。竹状模骨のものもある。平瓦は凸面は格子目叩き、平行叩きの後、ナデを施す。凹面は布目と模骨痕が残る。７世紀後半以降の須恵器、土師器の他、輸入陶磁器、瓦器等が共伴している。

第21次調査地点



第22次調査　SX04出土遺物実測図（1/12）

那珂遺跡群の北側に位置する。ここでは第61号井戸から丸瓦、平瓦が出土した。丸瓦は凹面は布目と竹状模骨痕が残る。凸面は平行叩きの後、ナデを施す。平瓦は凹面は布目と模骨痕が残る。凸面は平行叩きの後、ナデを施す。7世紀後半から8世紀前半の須恵器、土師器と共伴している。また、この遺構からは獣脚円面硯も出土している。

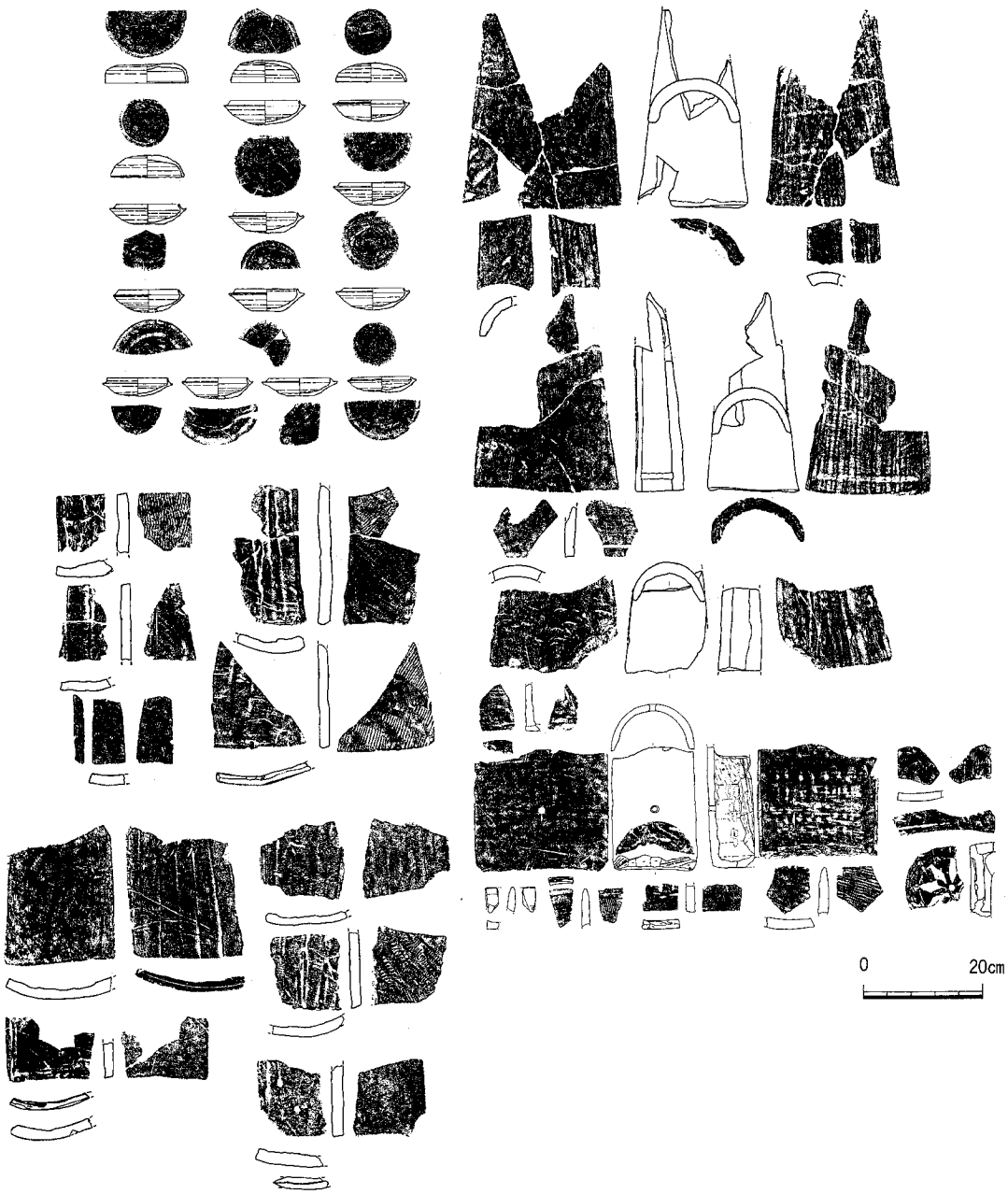
第22次調査地点

那珂遺跡群の南端に位置する。ここではSX02から軒丸瓦、丸瓦、平瓦が出土した。SX02は須恵器、土師器、瓦等を多量に廃棄した土坑である。出土した軒丸瓦は神ノ前2号窯出土の軒丸瓦と同様のものである。瓦当は無文で、丸瓦部は玉縁式である。粘土紐巻き上げによる成形で、凸面は叩きの後、ナデやカキメを施す。凹面はナデを施す。瓦当に近い部分に釘穴が見られる。丸瓦は凹面には布目、模骨痕は見られず、粘土紐巻き上げによる成形である。凹面はナデ、凸面は叩きの後、ナデやカキメを施す。平瓦も丸瓦同様、布目、模骨痕は見られない。凹面にはナデを施す。凸面は叩きの後、縦方向の強いナデを施す。端面を丸く仕上げる特徴があ

る。軒丸瓦同様、丸瓦、平瓦とも神ノ前２号窯出土瓦に類似する。６世紀末から７世紀初頭の須恵器、土師器と共伴している。

第23次調査地点

那珂遺跡群の南西に位置する。ここでは SD89から軒丸瓦、丸瓦、平瓦が出土した。SD89は



第23次調査　SD89出土遺物実測図（１/12）

幅約2.1mの磁北方向の南北溝である。軒丸瓦は神ノ前窯系の軒丸瓦がある。丸瓦は竹状模骨を用いたもので、凹面は布目と竹状模骨痕が残る。凸面は平行叩きの後、ナデを施す。平瓦は凹面に布目、模骨痕が残る。凸面は平行叩きの後、ナデを施す。端面に沈線を施した平瓦もある。7世紀前半から末の須恵器、土師器と共伴している。瓦は上層と下層に分けられるが、下層の神ノ前窯系の軒丸瓦、平瓦は7世紀前半代に、上層の布目の丸瓦、平瓦は7世紀後半から末に位置づけられている。これ以外に包含層から月ノ浦1号窯出土の軒丸瓦と同様のものが出土している。瓦当は単弁8弁で、花弁は菱形の窪みで表現する。中房も円形の窪みで表現する。時期的には7世紀前半に位置づけられている。

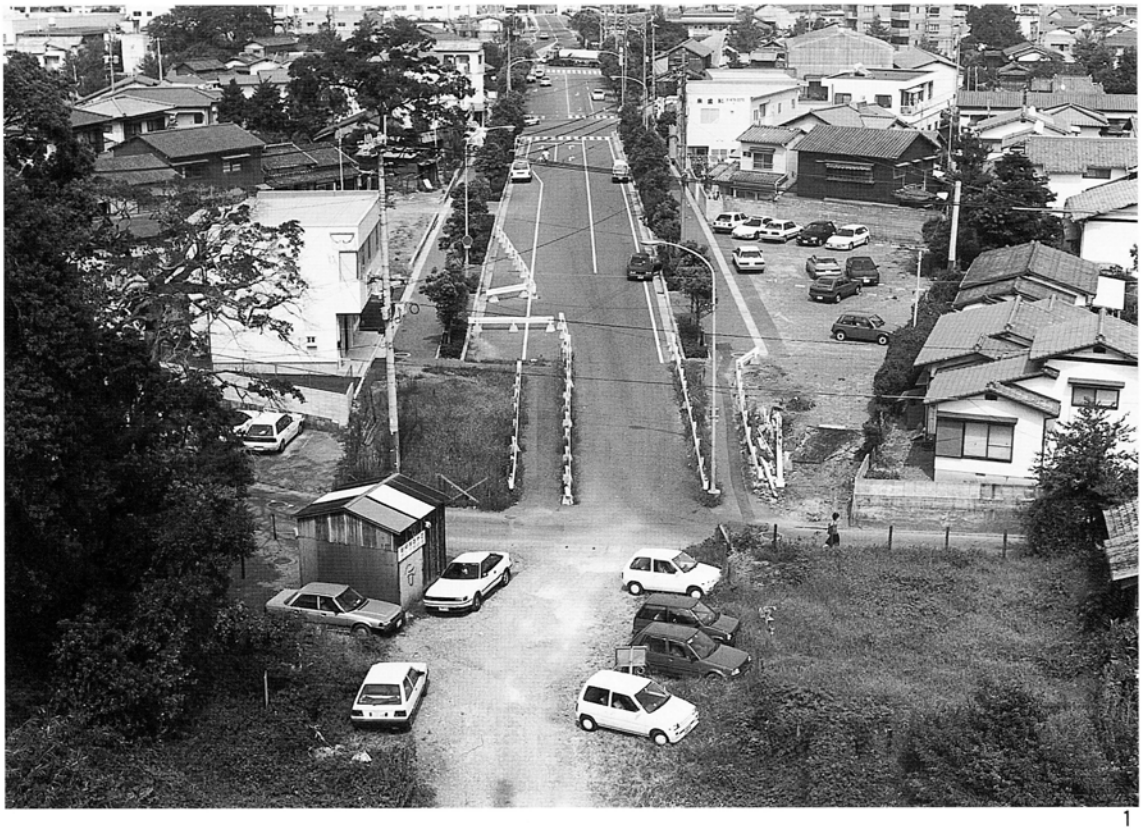
以上、7世紀代のこれまでの出土例を簡単に見てきた。これら以外にも未報告のものも幾つかあるが、6世紀末の神ノ前窯系の瓦に始まり、7世紀後半から8世紀前半の百済系軒丸瓦まで7世紀代には多様な瓦が供給されているのが分かる。出土例は那珂八幡古墳の周辺、第23次調査地点で多く見られるが、これまでの調査で瓦が葺かれていた考えられる建物跡は確認されていない。時期毎の瓦の様相を見ていくと、大きく3時期に分けられる。1期は6世紀末から7世紀初頭の時期で、神ノ前窯系の軒丸瓦、平瓦等に代表される。この時期は那珂遺跡群が集落として再び拡大する時期で、竪穴住居跡等が増加しはじめる。2期は7世紀前半から中葉の時期で、月ノ浦窯系の軒丸瓦、第32次調査SC-3014出土瓦等に代表される。軒丸瓦の瓦当に文様を施したものが見られるようになる。また、竹状模骨を使用した丸瓦も見られるようになる。この時期は集落としても継続されていくが、それ以外に第18次調査地点や第23次調査地点で検出された大型の倉庫群が出現する。3期は7世紀後半から8世紀前半の時期で、百済系軒丸瓦に代表される。第34次調査で出土した鴟尾もこの時期と考えられる。この時期は瓦の出土量も増えるが、遺構としては東西、南北方向の大溝が見られるようになる。これらの溝はそれまで集落が存在していた所に造られる。台地上に溝に区画された施設が出現したと考えられる。瓦はそれらの施設に葺かれたものと考えられる。

おわりに

7世紀代の那珂遺跡群は一般の集落とは異なり、官衙的様相を持っている。6世紀後半に北側に位置する比恵遺跡で「那津官家」に関連すると考えられる大型建物の出現以後、那珂遺跡群では集落の再開発とともに、官衙的施設の設置が行われている。今回、古瓦について概観したが、これらが使用された建物については今後の検討課題としたい。なお、今回掲載した瓦の実測図は各報告書から転載した。詳細は報告書を参照されたい。

最後に、今回の調査、整理にあたって多くの方々に御教示いただいた。特に瓦に関しては栗原和彦氏、瀧本正志氏には多くの御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

PLATES



1

2

1．第13次調査地点（西から）　　2．第19次調査地点（東から）

1

2

1．第32次調査地点全景（東から）　　2．第32次調査地点Ⅰ区全景（北から）

1

2

1．第32次調査地点Ⅱ、Ⅲ区全景（西から）　　2．第32次調査地点Ⅱ区全景（西から）

1

2

1．Ⅰ区 SC－1013完掘（北から）　　2．Ⅲ区 SC－3014完掘（西から）

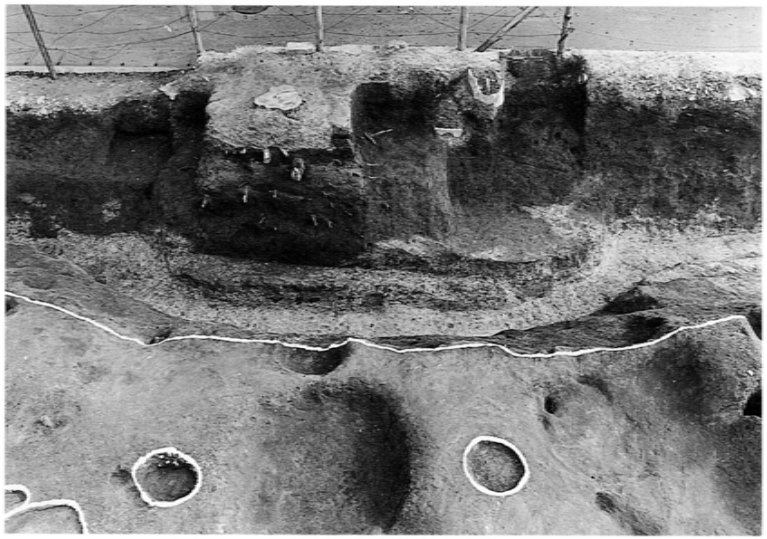
1

2

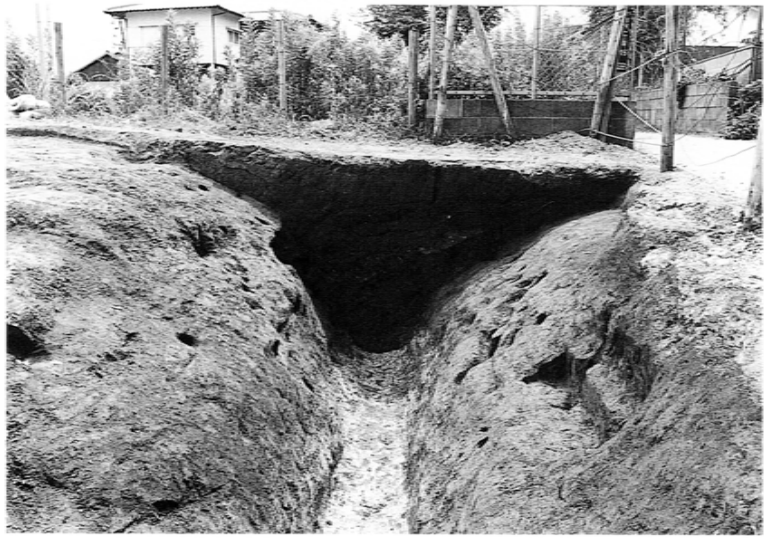
1．Ⅲ区 SC－3014遺物出土状況（西から）　　2．Ⅲ区 SC－3014遺物出土状況（南から）

1

2



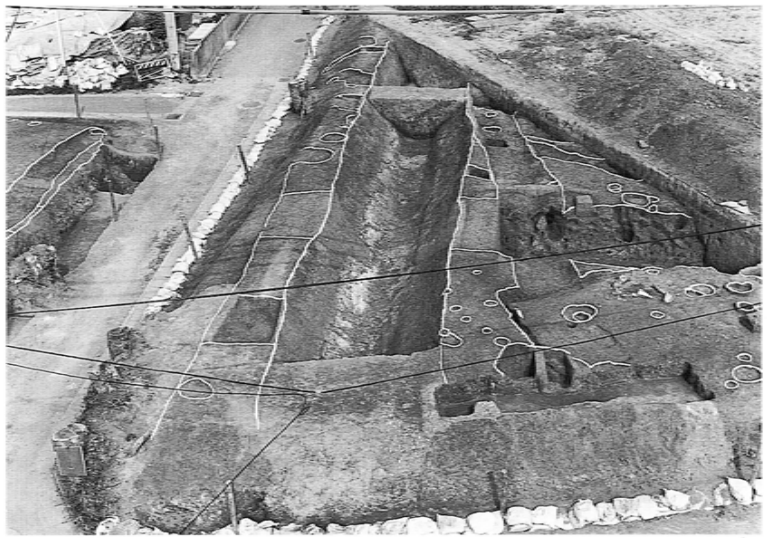
3



4

1．Ⅰ区 SD－1001完掘（北から）
3．Ⅰ区 SD－1001張り出し部（北から）

2．Ⅰ区 SD－1001完掘（西から）
4．Ⅰ区 SD－1001土層堆積（西から）



1

2

3

4

1．Ⅲ区 SD－3001完掘（西から）　2．Ⅲ区 SD－3001土層堆積（西から）
3．Ⅱ、Ⅲ区 SD－2002完掘（南から）4．Ⅲ区 SD－2002土層堆積（南から）

1

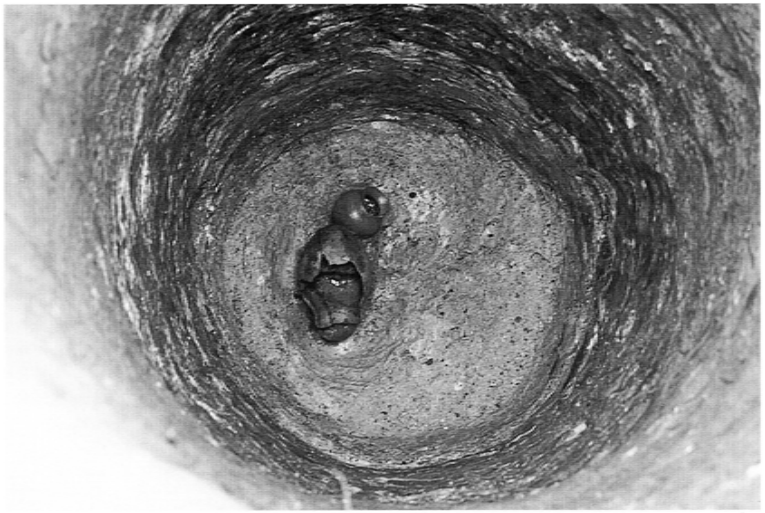
2

3

4

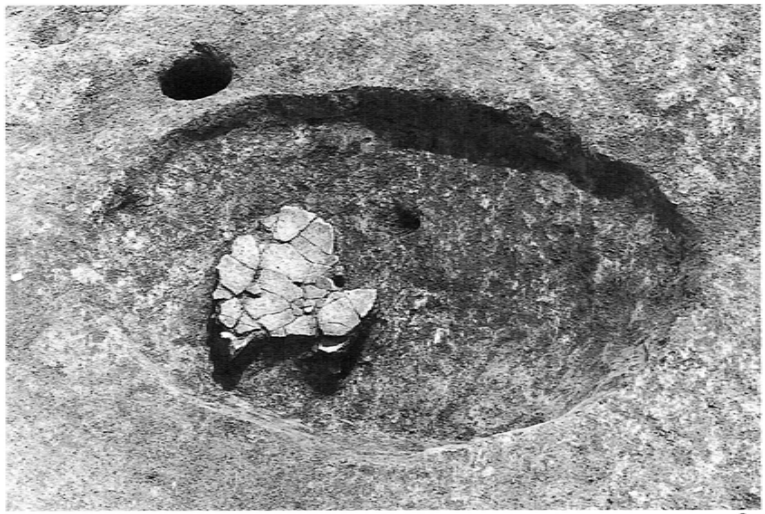
1．Ⅰ区 SE－1002完掘（西から）
3．Ⅰ区 SE－1004遺物出土状況（南から）

2．Ⅰ区 SE－1004遺物出土状況（南から）
4．Ⅰ区 SE－1003上層遺物出土状況（南から）

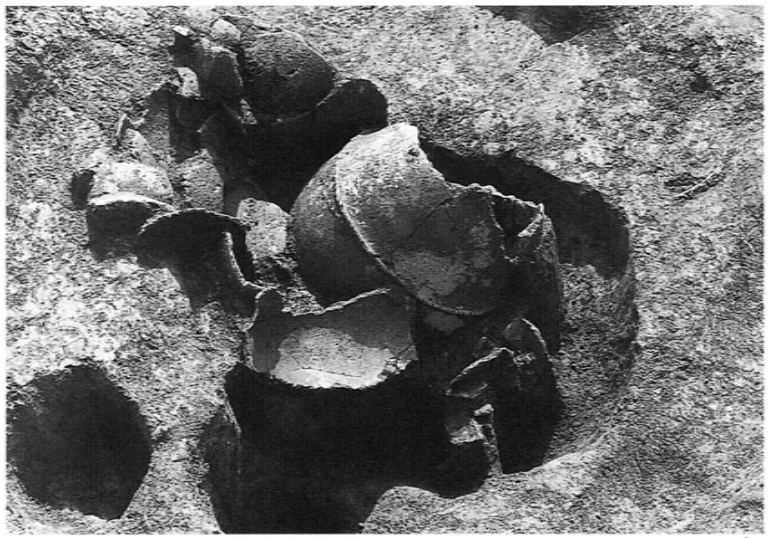


1

2



3



4

1．Ⅰ区 SE－1003下層遺物出土状況（南から）
3．Ⅰ区 SK－1005遺物出土状況（西から）

2．Ⅰ区 SE－1011完掘（東から）
4．Ⅰ区 SE－1018遺物出土状況（東から）

1

2

1．那珂八幡古墳全景（南から）　　2．第34次調査全景（南から）

1

2

1．那珂八幡古墳全景（西から）　　2．第34次調査地点全景（西から）

1

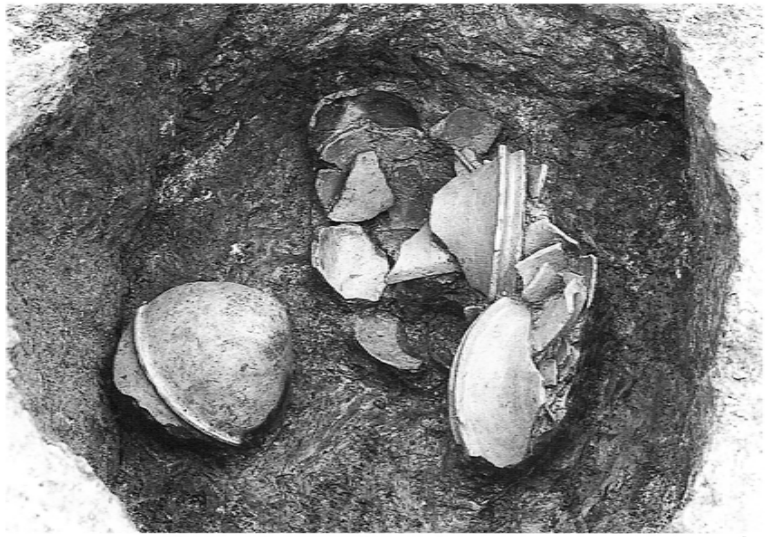
2

3

4

1．SE－0003上層遺物出土状況（西から）
3．SE－0004完掘（南から）

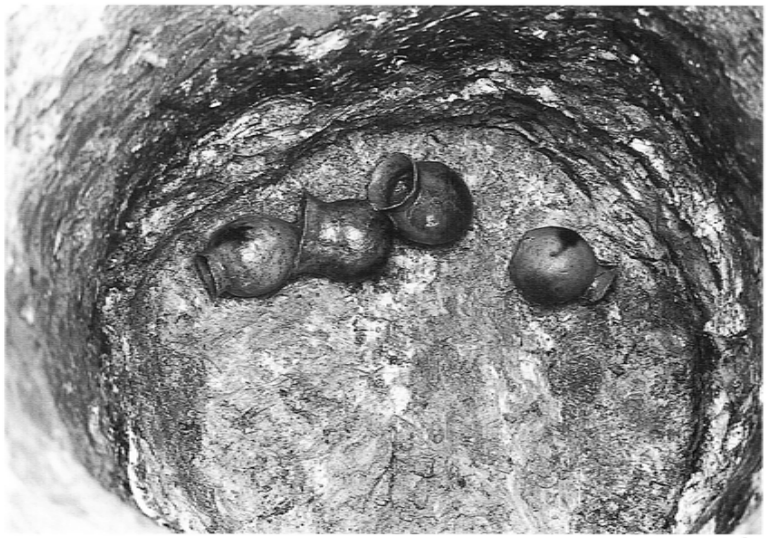
2．SE－0003下層遺物出土状況（東から）
4．SE－0004遺物出土状況（北から）



1

2

3

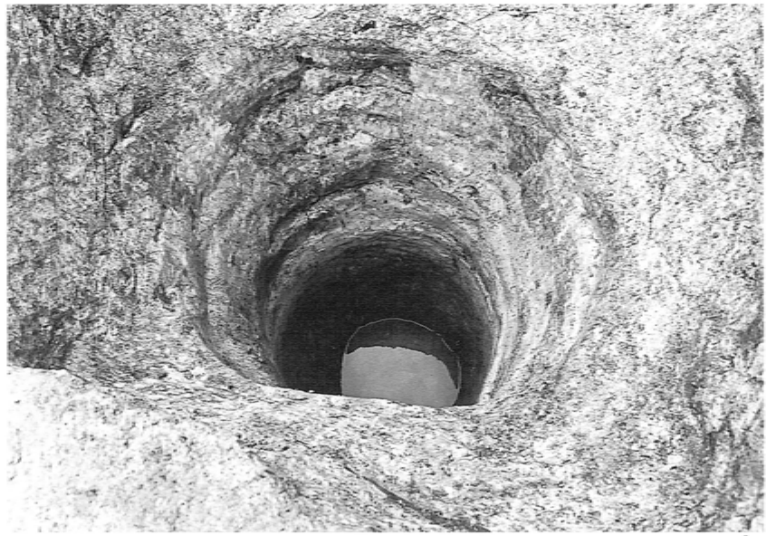


4

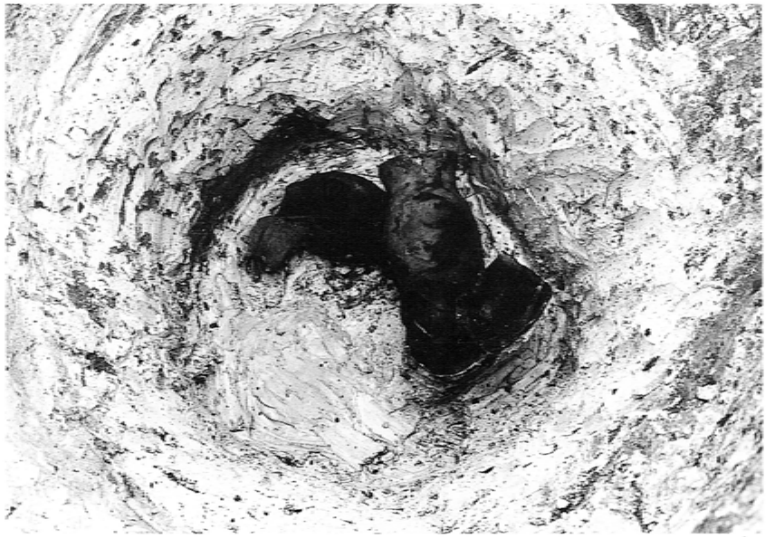
1．SE－0005上層遺物出土状況（西から）
3．SE－0005下層遺物出土状況（南から）

2．SE－0005中層遺物出土状況（東から）
4．SE－0006上層遺物出土状況（北から）

1



2



3

4

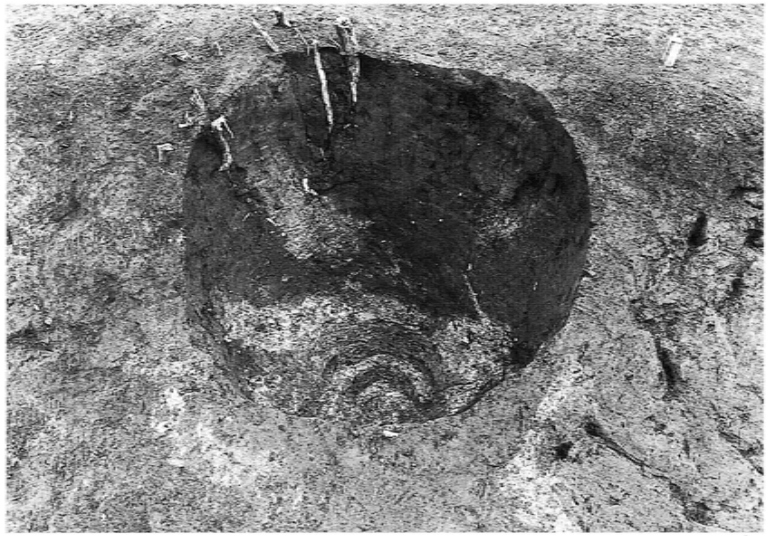
1．SE－0006下層遺物出土状況（北から）
3．SE－0008遺物出土状況（西から）

2．SE－0007完掘（南から）
4．SE－0012完掘（北から）

1

2

3



4

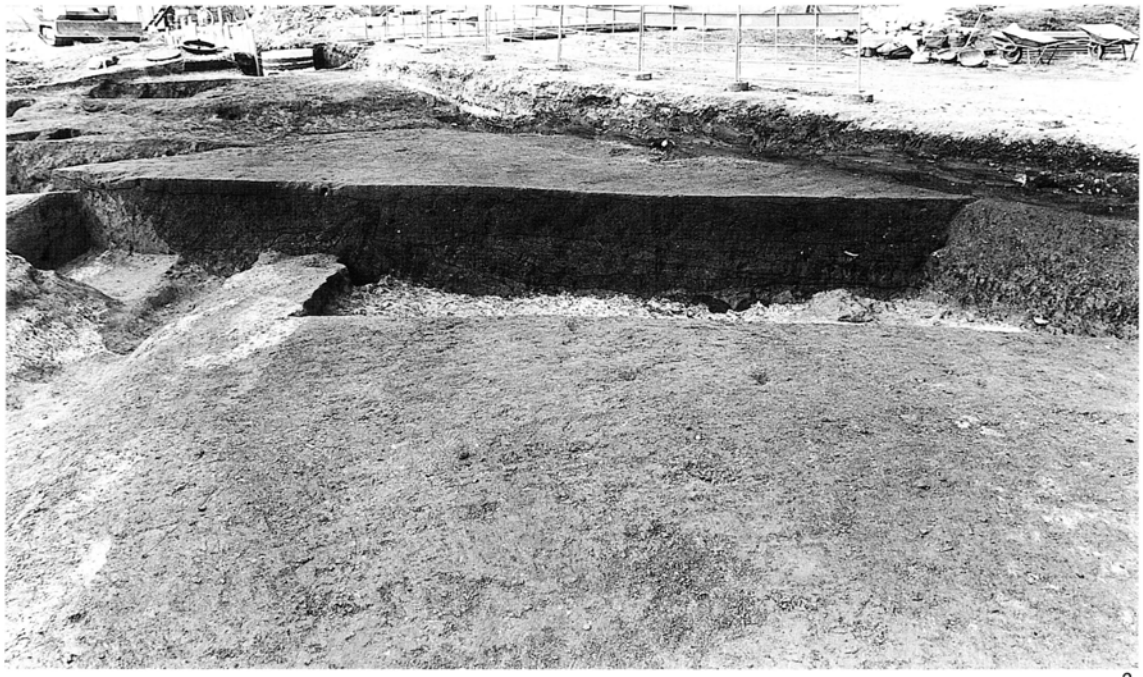
1．SE－0013完掘（南から）

2．SE－0014上層遺物出土状況（南から）

3．SE－0014下層遺物出土状況（南から）

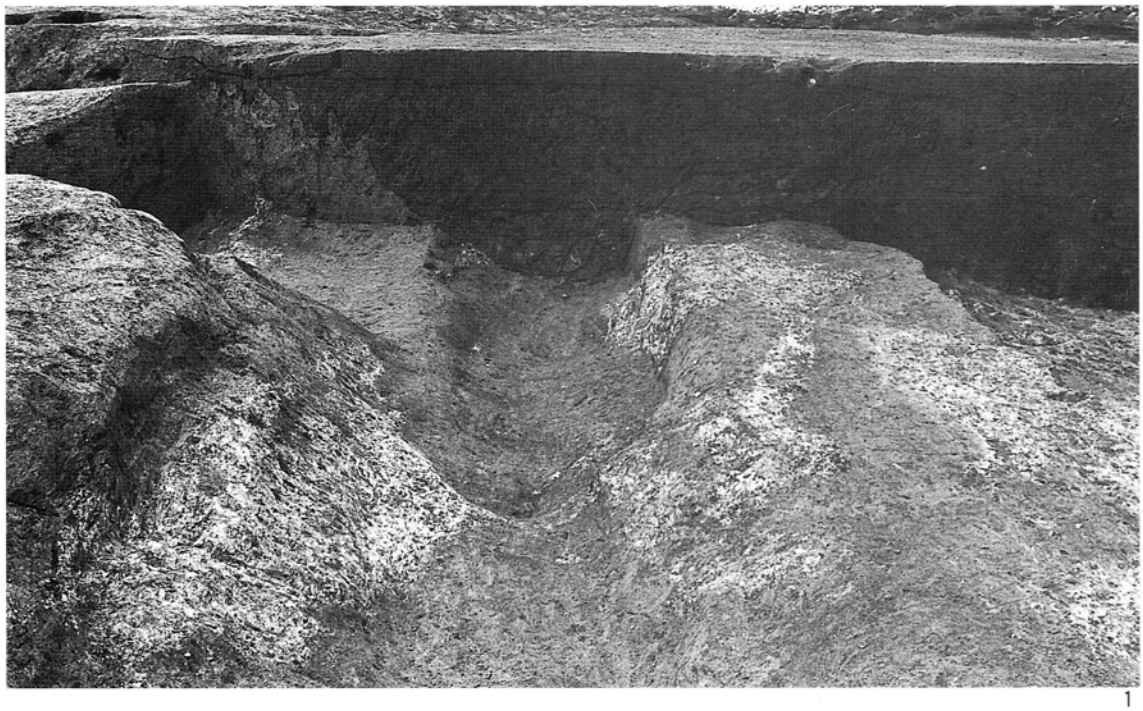
4．SE－0015完掘（北から）

1



2

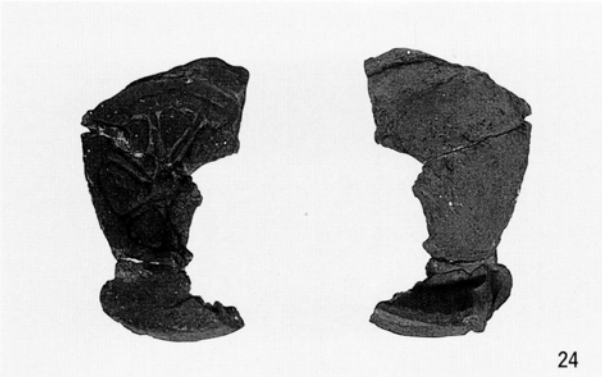
1．那珂八幡古墳周濠完掘（西から）　　2．Ｉ区周濠土層（東から）



1

2

1．Ⅰ区周濠土層（東から）　　2．Ⅰ区周濠土層（東から）



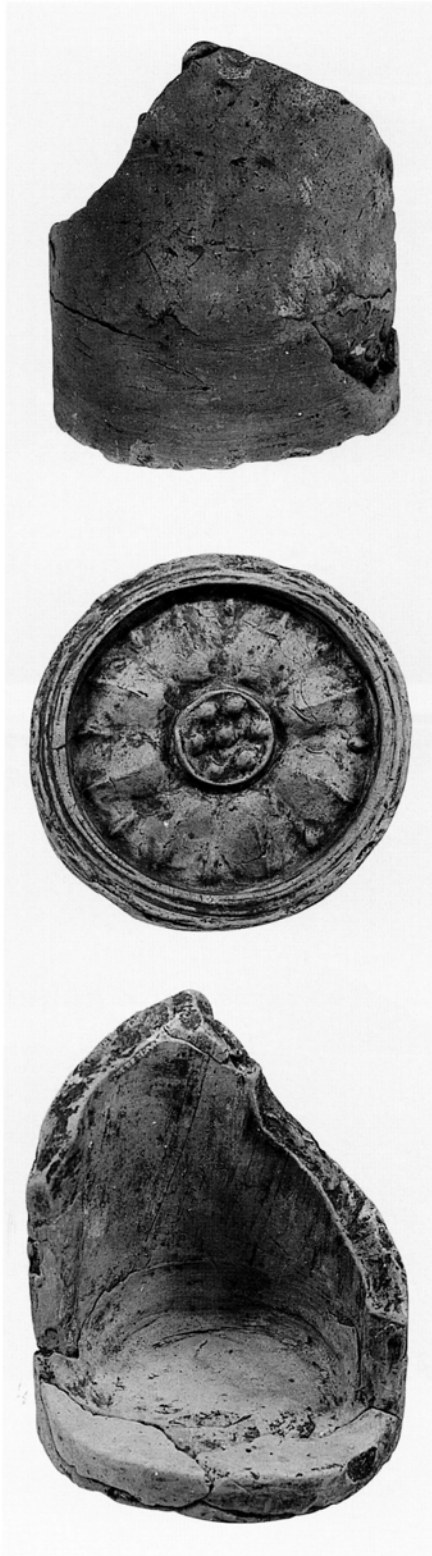
24

25

26

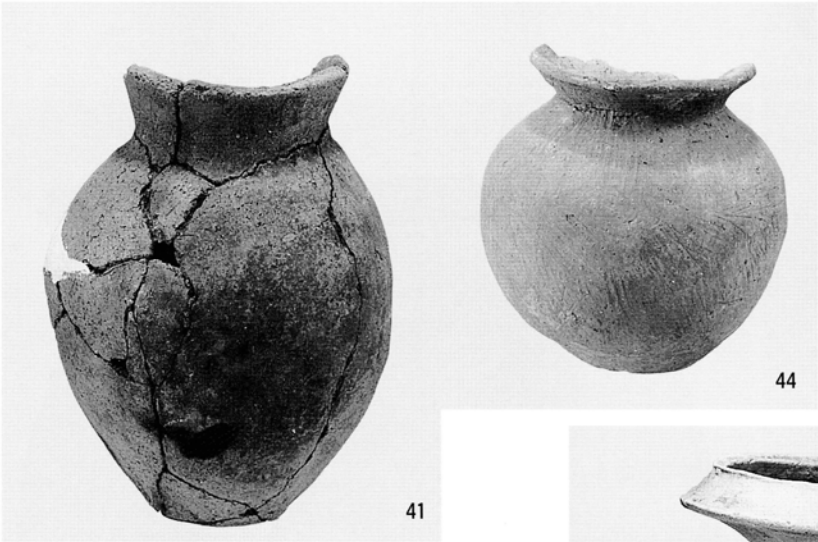
27

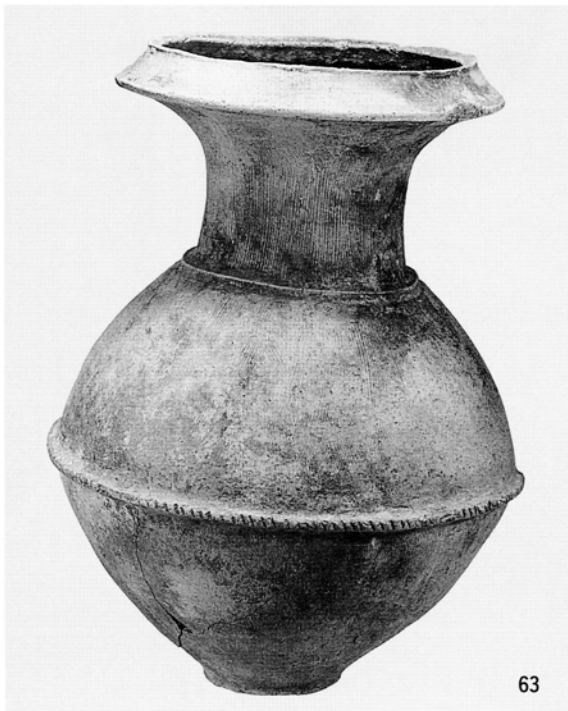
28



108

32次調査出土遺物（1）





32次調査出土遺物（2）

65

66

67

166

32次調査出土遺物（３）

2

3

4

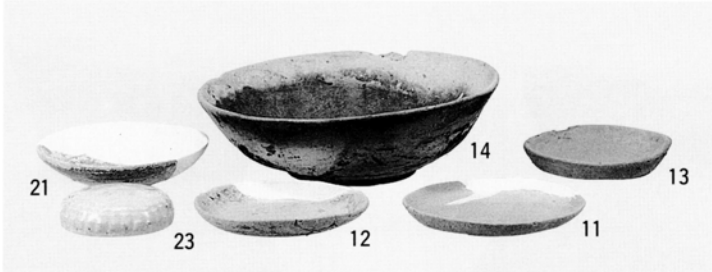
5

8

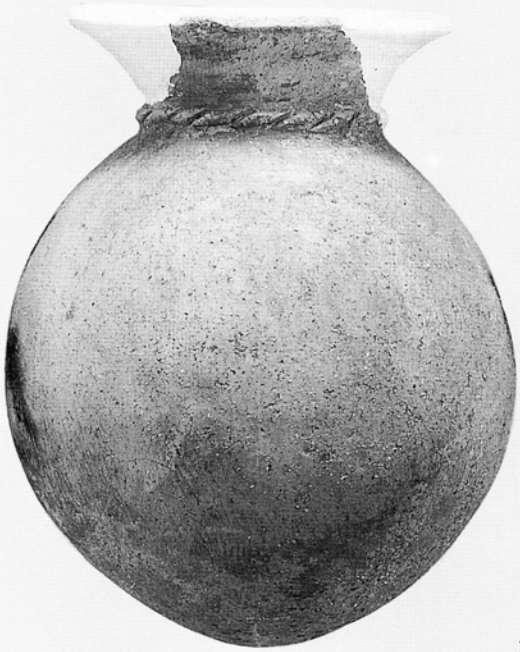
7

9

34次調査出土遺物（1）



34次調査出土遺物（2）



31

36

37

43

42

45

55

34次調査出土遺物（3）

48

60

34次調査出土遺物（4）

70

71

72

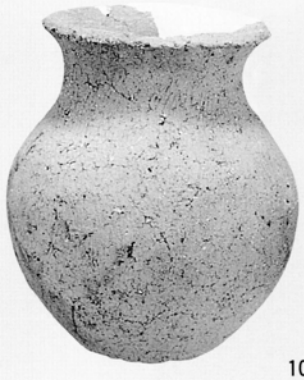
81

93

94

34次調査出土遺物（5）

100



102

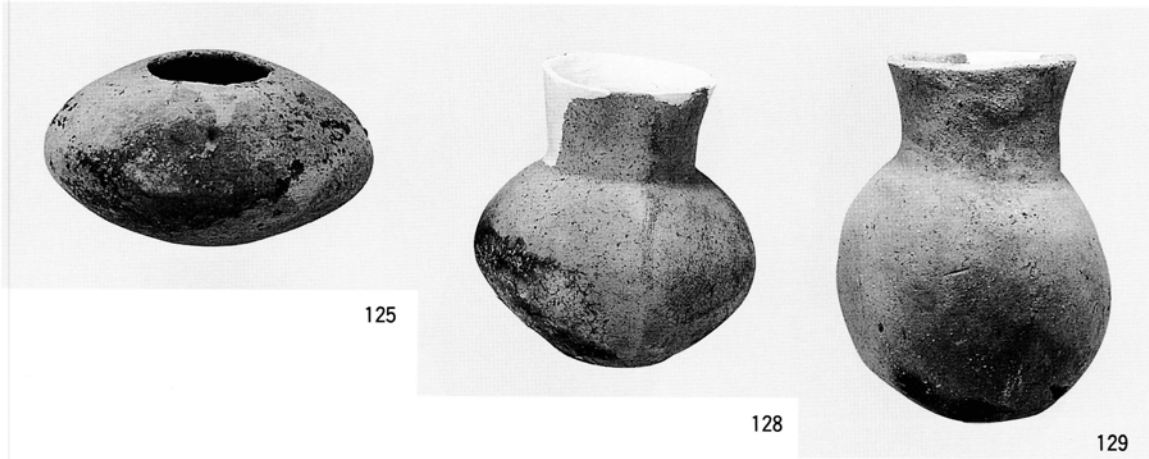
103

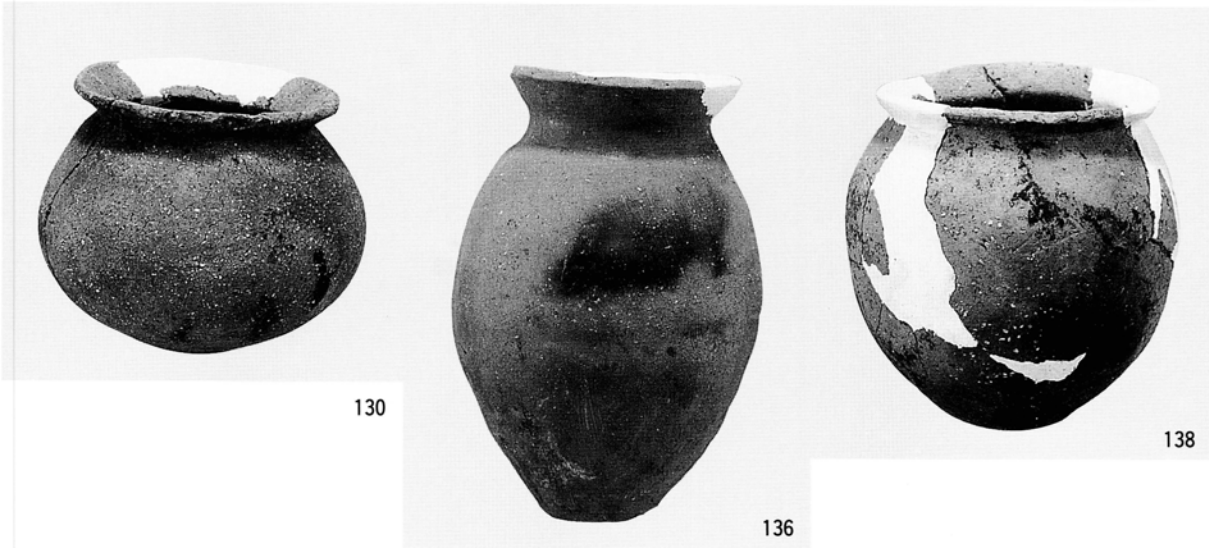
105

106

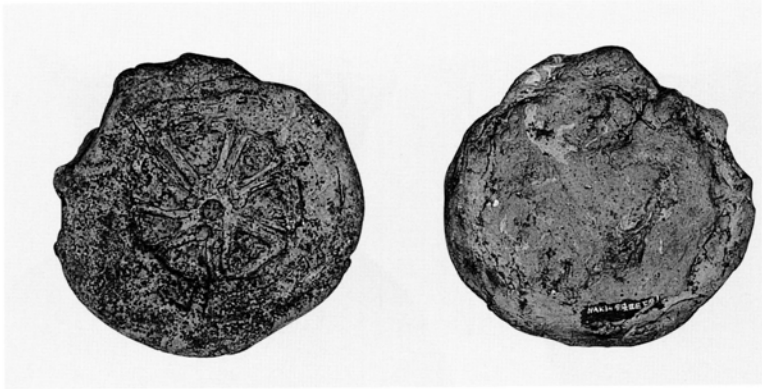
110

34次調査出土遺物（6）



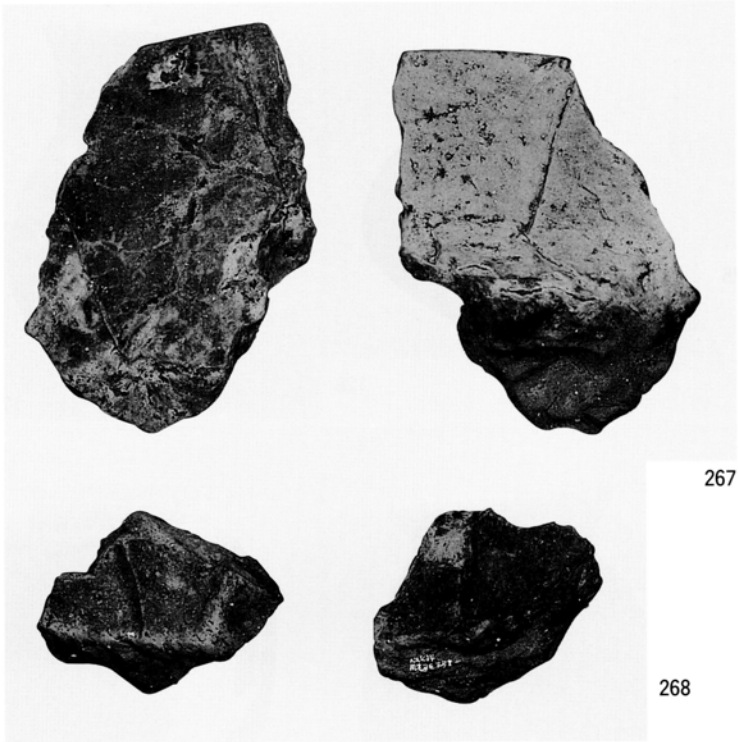


34次調査出土遺物（7）



251

250



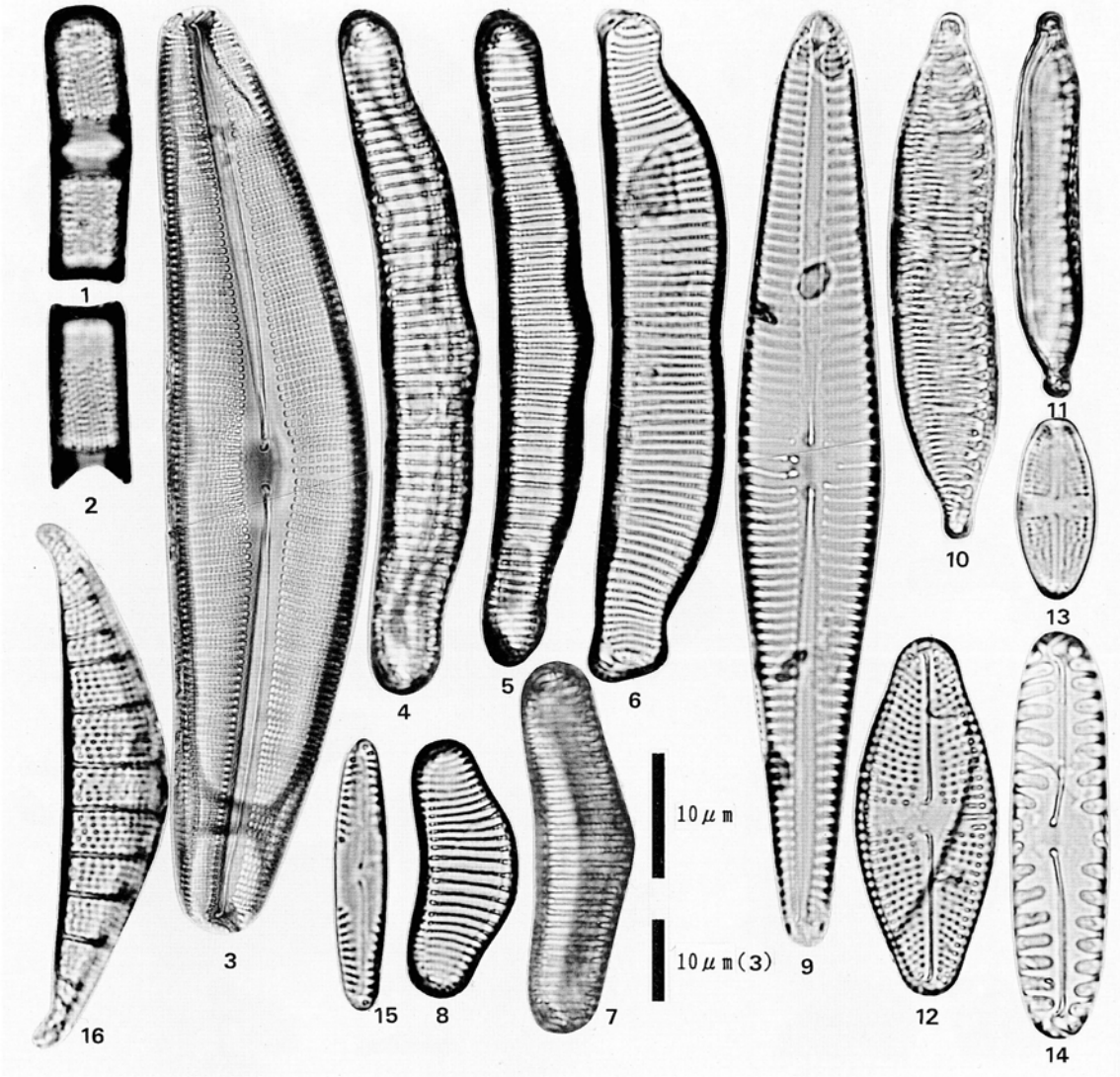
267

268

187

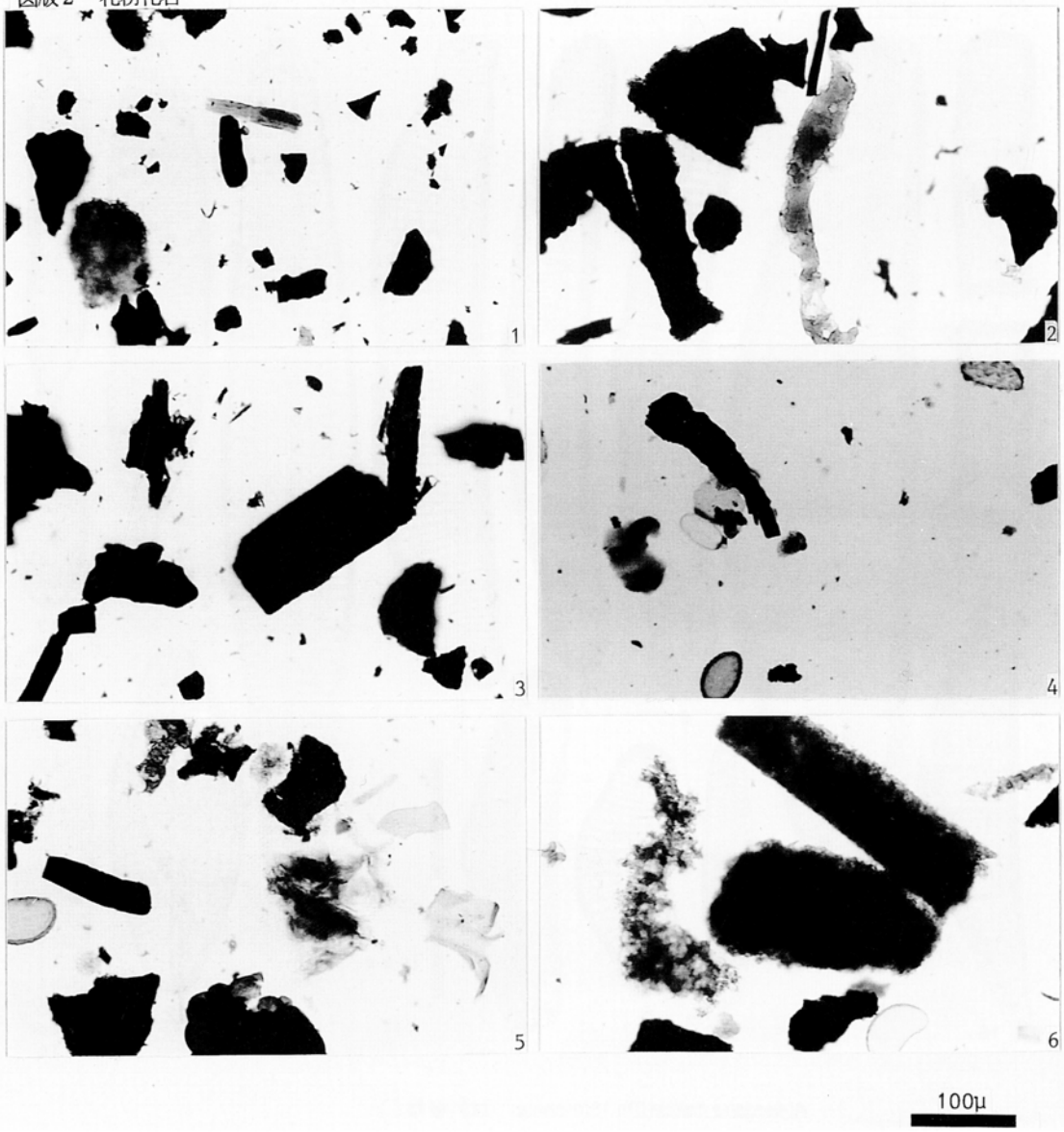
34次調査出土遺物（８）

図版1　珪藻化石



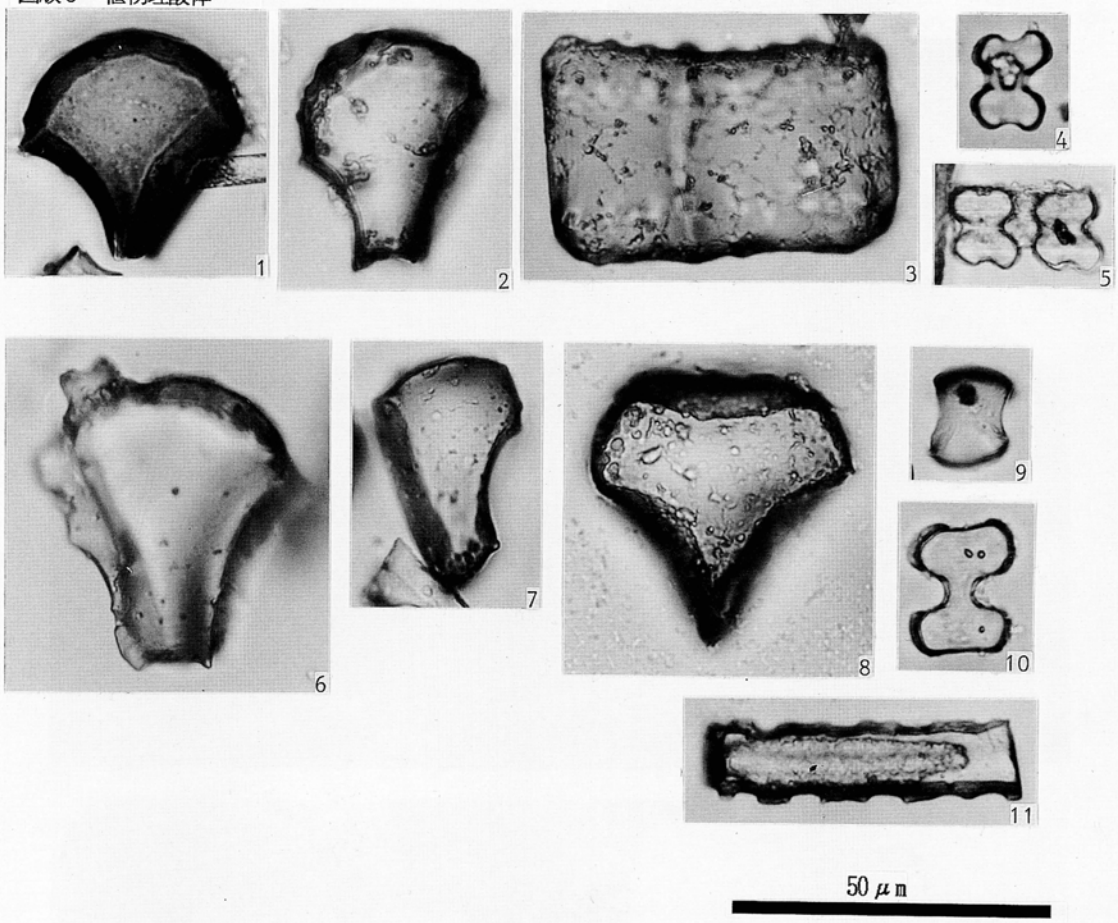
1．*Aulacosira italica*(Ehr.)Simonsen（試料番号６）
2．*Aulacosira italica*(Ehr.)Simonsen（試料番号６）
3．*Cymbella aspera*(Ehr.)Cleve（試料番号８）
4．*Eunotia pectinalis var. undulate*(Ralfs)Rabenhorst（試料番号６）
5．*Eunotia pectinalis var. undulate*(Ralfs)Rabenhorst（試料番号６）
6．*Eunotia praerupta var. bidens Grunw*（試料番号６）
7．*Eunotia monodon var. undulata Cleve*（試料番号６）
8．*Eunotia praerupta var. inflata Grunow*（試料番号６）
9．*Gomphonema gracile* Ehrenberg（試料番号８）
10．*Hantzchia amphioxys*(Ehr.)Grunow（試料番号３）
11．*Hantzchia amphioxys*(Ehr.)Grunow（試料番号１）
12．*Navicula plausibilis* Hustedt（試料番号２）
13．*Navicula mutica* Kuetzing（試料番号１）
14．*Pinnularia borealis* Ehrenberg（試料番号３）
15．*Pinnularia appendiculata*(Ag.)Cleve（試料番号１）
16．*Rhopalodia gibberula*(Ehr.)O.Mullew（試料番号３）

図版２　花粉化石



１．状況写真（試料番号１）　２．状況写真（試料番号２）
３．状況写真（試料番号５）　４．状況写真（試料番号６）
５．状況写真（試料番号７）　６．状況写真（試料番号８）

図版3　植物珪酸体



1．イネ属：機動細胞珪酸体由来（試料番号1）
2．イネ属：機動細胞珪酸体由来（試料番号8）
3．キビ族：機動細胞珪酸体由来（試料番号8）
4．イネ属：短細胞珪酸体由来（試料番号7）
5．イネ属：短細胞珪酸体列由来（試料番号2）
6．タケ亜科：機動細胞珪酸体由来（試料番号1）
7．ウシクサ族：短細胞珪酸体列由来（試料番号1）
8．シバ属：機動細胞珪酸体由来（試料番号5）
9．タケ亜科：短細胞珪酸体由来（試料番号1）
10．ススキ属：短細胞珪酸体由来（試料番号1）
11．イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体由来(試料番号7)

1

2

1．35次調査地点全景（西から）　　2．土壙11完掘（南から）

NA KA
那 珂 10

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第365集

1994（平成６年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
(092) 771－4667

印　刷　株式会社ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目６－１
(092) 431－4061